

奇譚クラブ

1956年 5月号

連載小説「赤い花は泣いている」松井 籟子
 女人散華「悲風」鷹上 原「瀬川 泰子」



傑作小説特集号

5月号

奇譚クラブ

昭和三十一年五月号

5

昭和三十一年四月三十日印刷
 昭和三十一年五月一日発行
 (第二号 通代第八十四号)

昭和三十一年四月三十日印刷
 昭和三十一年五月一日発行
 五月号(第十卷第二号)
 (毎月一回一日発行)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



定価二百円

(送料十六円)

IBM. 2805

美しき縛しめ

十六巻
第二集
三十二巻

内容
猿ぐつわ 紅と口 燭燭
雁字欄 観 念 芋 虫
横性台 床の置物 観 打
目の線 滑車吊 高き小手
荒 福 くらさり エビ責

九人の緊縛モデルを駆使して完成した
緊縛フオットの匠、未発表の秘作集
代表的な縛りポーズ三十二態

32態
○責め写真はほしいが、印刷紙に焼付けたものは高くて困ると、おっしゃる方はよく鮮明なコロタイプ印刷のアルバムをお求め下さい。
○三十二枚の変わったフオットがぎっしりと並んできつと皆さまの胸をわくわくさせることでしょう。全く素晴らしいです。

美術コロタイプ印刷、アルバム装訂
定価 一部 五百円 (送料金三十円)

晴雨「美人乱舞」

伊藤晴雨先生著並面菊版和装
美本 定価 四〇〇円 二四

図版目次

△人体時計△天国の女△美人燈
△島田留のこわれる△丸雷のこわれる
△△美女のなやみ△△△△△△△△△
にされる女△△△△△△△△△△△△
た美女△△△△△△△△△△△△△△
△△△△△△△△△△△△△△△△△
て先人未発表の貴重な春画文庫五巻十九項
に亘って詳説す。晴雨フアンに薦む。

貴重なる文庫としてその真価を
極めて高く評価される文庫誌

奇譚クラブのバックナンバー

今後この種文庫は、この値段では絶対に入手不可能です。発行部数が比較的多かった為、極めて安価な値段でお譲り出来るわけです。未入手の方々はどうぞこの際品切にならぬうちに早くお申込み下さい。
奇譚クラブ 旧号の在庫手持は、極めて僅少ですので品切の恐れがあります。品切の際の代品を必ずお書き添え願います。八円切手封入の上、お申込下さい。在庫品の目録をお送りします。品切になりました分は補充がつかねます。故、悪しからずお許し下さい。

時代物責絵巻

一、山法師と静御前 二、女スリと岡引
き 三、淀君と千姫 四、大公方と侍女
五、八百屋お七の最後 六、新撰組と芸妓
七、十郎左門と腰元 八、小紫と悪旗本

○御申込みは迅速と確実を誇る天
星社代理部へ
○御申込次第早速厳重荷造の上急
送申上げます
○代金引替は送料が高くなります
ので、必ず前金でお願いします
大阪市阿倍野区
晴明通一ノ八五
天星社代理部

アリスの人生学校

一冊 一百円 (送料共)
美少女に対する折檻と浸透の世界を描く
愛々五百枚に垂んとする傑作、口絵、挿
絵力ツト多数挿入

読者原稿募集 (皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】 アブノーマルに関する研
究や発案、小説文等、平易にして本誌の読
者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採
用稿には本誌三分を贈呈いたします。

【創作】 異色ある題材を現れて立つ野
心ある新人の出現を期待します。枚数は三
十枚迄、未発表の作品に限る。採用稿には
掲載後相当稿料支払います。

【体験告白手記】 皆さまの偏らざる
現実の叫びを募ります。枚数は三十枚迄、
掲載後には一冊につき千四百乃至三千円の賞
金を呈します。誰でも人権は一篇位は直ぐ
書けるものです。生々しい体験や告白は是
非お寄せ下さい。

【ホケット告白】 文休や用紙などは
一切問いません。十枚以内の短い告白物を
気軽に書き下し。採用稿には本誌三分
分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】 映画や雑誌
の中で特に興味をお持ちになった事項につ
いての通信をお待ちします。出処は必ず明
記して下さい。掲載の分には本誌二分乃至
至三分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】 画材はサド、マゾ
流、性的な御自由です。優秀なる作者に
は積極的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】
編集者執筆者或はモデル等に対しての
読者の皆様からの公開状を募ります。適当
なものには本誌上に掲載の上、回答を求め
ることにします。本誌三分贈呈。

【私のイメージ】 熱烈奔放なイメ
ジをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒
唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です
採用分には本誌半年分贈呈します。

【実写真】 御自身写真されたものに
限ります。表面又は別紙に説明とデータをお
忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】 将来本誌にて企画すべき
ものの全般的に出来るだけ詳細に、掲載の
如何に拘らず優秀なものには千四百迄の謝礼
を呈上いたします。

【私は訴える】 皆さまの胸に持つてお
られる誰にも云えない諸々の悩みや御意見
主張等を発表して下さい。本誌ならでは取
り上げないような内容のもの。採用のもの
には本誌半年分贈呈。

【レポート】 新聞記事の切り抜き或は
見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件
等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌
二分分贈呈。

【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者
等への便り、前号の批評、希望、或は編集
や雑誌のあり方等に關して忌憚なきお便り
をお寄せ下さい。ハガキにても結構です。
つとめて誌上に紹介いたします。

【読者交歓室】 読者相互間の文通呼び
掛け応答等の頁を新設いたします。御遠
慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単
明瞭にお願いいたします。

○掲載は別に定まりません。到着順に最近号
に掲載します。原稿の第一頁には応募の種
目を明記して下さい。

○本誌月極購読料○

一月分一冊 (送料十六円) 二 百 円
三月分三冊 (送料共) 六 百 円
半年分六冊 (送料共) 千 二 百 円
一年分十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購
読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さ
い。一月分一冊お申込みの方は必ず送料十六
円の御加算を願います。半年分御申込みの方
は景品として手札写真三枚、一年分お申込
の方は景品としてヤヤビ木型写真三枚を贈
呈いたします。

奇譚クラブ 第十巻第一号

復刊第四号 定価二百円
五月号 (送料十六円)
昭和三十一年四月三十日印刷
昭和三十一年五月一日発行

編集者 人 實 田 京 二
印刷者 人 吉 田 隆
大阪府阿倍野区晴明通一丁目八番五番地
発行所 天 星 社
最寄口座大阪五〇〇四二番
電話天下茶屋三六〇七番

本社に対する御送金は振込みの振替用紙を
御利用の上、受領証をお送り下さい。確実
で早く大変便利です。振替用紙御入用の方
はお申込次第お送りいたします。

(開放した誌面を御利用下さい)

奇譚クラブ編集部

告白	手記	体験	入選
動物嗜好者の手記 号泣(私の腋窩遍歴)	夫婦の倒錯遊戲 綿ネルの妄想	男色秘話「集る人々」 「色惚けのページ」 眼帯ケニアの妻の日記	「残虐なる女性達」画集解説 女灸点師 繩と足の遍歴
佐次 浩介	山田美智子 麻耶	菅野 房江 鷹巢 千芳 福本 時三	幾山 疑迷 青葉 稔一 藤訪 俊昭 藤像保・記
			長谷川 清 森本愛造 伊藤 晴雨



奇譚クラゲ

復刊第四号
五月月号

目次

◎傑作小説特集号◎

素晴しいシヨール

四馬孝・画

モデル嬢の表情

佐賀美智子 須川令子 加賀利江子 萩千恵子

アメリカ雑誌「ビザール」より

淑やかな令嬢、メイドの拘束服

スチユアーデスの晒し 宮崎昭平・画

巻頭口絵

連載小説

赤い花は泣いている (第二回)

松井鎮子 14

幽囚十ヶ月

春田一郎 24

魔の味い

高木伸夫 31

完全なる隸属

坂田信治 36

戦慄怪談屋敷

岸本青柳 40

体臭日記

狩井麗作 46

異常体験記

相沢松柏 48

おそれい日記

足立夏夫 54

ある洗腸マニアの日記帳から

矢崎龍一 60

箱灰色のノート

多山皓 70

女サデイストより奴隷に与える手紙

森山美歌 76

異常体験記

北川操 77

体験記

森太一 80

奇妙な禪

畔野当磨 85

責めとフエチズム

加宮敏一 88

魔の告白

須藤律夫 91

お腹痛の研究 (二)

長岡愛一郎 94

懸賞 (告白・手記・体験)

佐次浩介 100

生理埋め願望

春木俊野 108

姉と弟

青山伸夫 115

陰花への憧憬

吉井環 120

去日の美女

瀬川泰子 136

女人散華

綱集部 147

悲風磨上原

竹谷十三 152

玉稿落穂集

辻村隆 156

アブノーマル・モノローグ

今月の新版特写真集

或るアクロバット・ダンサーの記録

代理部特写真集分譲広告

読者通信

編集後記

今月の新版特写真集

172

編集後記

164

今月の新版特写真集

134

代理部特写真集分譲広告

166

読者通信

156

或るアクロバット・ダンサーの記録

152

玉稿落穂集

147

悲風磨上原

136

去日の美女

120

姉と弟

108

陰花への憧憬

100

生理埋め願望

94

懸賞 (告白・手記・体験)

88

責めとフエチズム

80

奇妙な禪

76

体験記

70

異常体験記

60

昭和二十九年

〇十二月特大号 〔百四十円〕

新連載絵物語、百合子の冒険村崎明子作
続・流腸マニヤの手記 花村恵子
妓嬢の女 純之助
一縷のフイレへの誘導 辻村
川柳に見るお膳の功罪 須藤
夜光島(三) 須藤
鏡中男の教訓 須藤
続・女性切腹断想 須藤
消えたホーセ 須藤
縛り(続・半公刊) 須藤
脱走(続・半公刊) 須藤
悲壮な女性切腹への幻想 須藤
現代マゾヒズム芸術時評 須藤
幽霊十ヶ月 須藤
非小説 性液 須藤
流腸マニヤの性液 須藤
遺稿・悪戯の広場 須藤
敬義先生性愛相談 須藤
私の性愛相談 須藤
女端と矛盾への倒錯 須藤
極端な性愛への倒錯 須藤
お灸を据える女達と灸療 須藤
草紙にみる女達と灸療 須藤
残虐なる女性達 須藤
気遣いにされた令嬢(一) 須藤
栄吉の半生 須藤
美しい女性の考察に反駁する 須藤
美人佐子さまへ 須藤
伊吹真子さまへ 須藤
女性美としての「晩」に就て 須藤
あるマゾヒストの手帳から 須藤
倒錯の英雄・織田信長 須藤
愛恋の月 須藤
特集・告白 須藤
赤い腋窩の女 須藤

特集・告白

〇十一月特大号 〔百四十円〕

私のマゾ・スクラップ 春木 俊野
腹部への加虐 レスボスの記 花村 恵子
変装写真マニヤ 鈴木 三三子
脱腸の回想 赤井 茂
流腸マニヤの回想 赤井 茂
脱腸の回想 赤井 茂
集団心理に現れる倒錯の考察 成瀬 亮
忘年会奇談 成瀬 亮
流腸マニヤの手記 花村 恵子
あるマゾヒストの手帳から 花村 恵子
川柳に見るサクスム 須藤
愛は被虐とともに 須藤
非小説 性液 須藤
一縷の花 須藤
遺稿・悪戯の広場 須藤
敬義先生性愛相談 須藤
私の性愛相談 須藤
女端と矛盾への倒錯 須藤
極端な性愛への倒錯 須藤
お灸を据える女達と灸療 須藤
草紙にみる女達と灸療 須藤
残虐なる女性達 須藤
気遣いにされた令嬢(一) 須藤
栄吉の半生 須藤
美しい女性の考察に反駁する 須藤
美人佐子さまへ 須藤
伊吹真子さまへ 須藤
女性美としての「晩」に就て 須藤
あるマゾヒストの手帳から 須藤
倒錯の英雄・織田信長 須藤
愛恋の月 須藤
特集・告白 須藤
赤い腋窩の女 須藤

特集・告白

〇十月特大号 〔百四十円〕

コレクシオン 佐次 浩介
あぶれた八人の女 長谷川 清
一フエチシストの見た鼻 岸本 清
鉄窓の青春 三根 耕二
スロース・マニヤの記 吉次 一平
奇譚クラブ・サロン(寄稿家と読者と編) 吉次 一平
集者のページ・編集問答・アブ・ラブ・レター・名作のアブ描写・女優の縛られ 吉次 一平
映画連報・アブ放言集・外 吉次 一平
〇十月特大号 〔百四十円〕
あるマゾヒストの手帳から 二俣 津子
初見世バイト 二俣 津子
妖中記 二俣 津子
少年の性愛への公開状 二俣 津子
非小説 性液 二俣 津子
流腸マニヤの性液 二俣 津子
遺稿・悪戯の広場 二俣 津子
敬義先生性愛相談 二俣 津子
私の性愛相談 二俣 津子
女端と矛盾への倒錯 二俣 津子
極端な性愛への倒錯 二俣 津子
お灸を据える女達と灸療 二俣 津子
草紙にみる女達と灸療 二俣 津子
残虐なる女性達 二俣 津子
気遣いにされた令嬢(一) 二俣 津子
栄吉の半生 二俣 津子
美しい女性の考察に反駁する 二俣 津子
美人佐子さまへ 二俣 津子
伊吹真子さまへ 二俣 津子
女性美としての「晩」に就て 二俣 津子
あるマゾヒストの手帳から 二俣 津子
倒錯の英雄・織田信長 二俣 津子
愛恋の月 二俣 津子
特集・告白 二俣 津子
赤い腋窩の女 二俣 津子

特集・告白

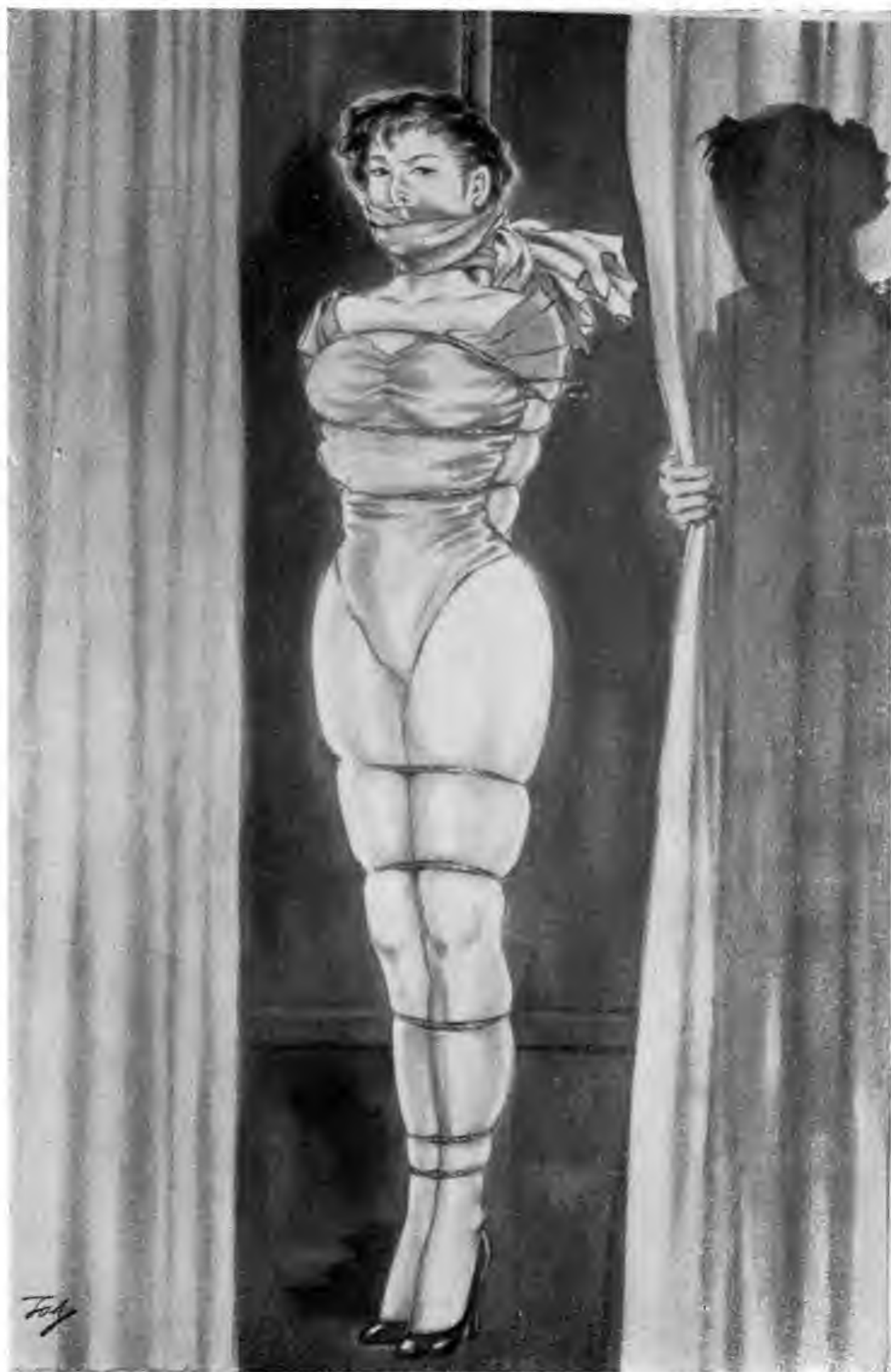
〇九月号 〔百四十円〕

モデル女のまぞひすむ 辻村 隆
長靴愛好癖に就いて 辻村 隆
コレクシオン 辻村 隆
女性の腕狂宴について 辻村 隆
愛と憎しみの彷徨 辻村 隆
体操教師 辻村 隆
中国女性のサディズム 辻村 隆
流腸マニヤのサディズム 辻村 隆
耳かきとガラスの棒 辻村 隆
私のマゾヒズム断片 辻村 隆
〇九月号 〔百四十円〕
私は訴える 須藤
現代文芸に現れた責め 須藤
デパート人形 須藤
赤い腋窩(続・半公刊) 須藤
残虐なる女性達 須藤
私を灼く女 須藤
あるマゾヒストの手帳から 須藤
自刃(日本車の切腹) 須藤
現代マゾヒズム芸術時評 須藤
遺稿・悪戯の広場 須藤
敬義先生性愛相談 須藤
私の性愛相談 須藤
女端と矛盾への倒錯 須藤
極端な性愛への倒錯 須藤
お灸を据える女達と灸療 須藤
草紙にみる女達と灸療 須藤
残虐なる女性達 須藤
気遣いにされた令嬢(一) 須藤
栄吉の半生 須藤
美しい女性の考察に反駁する 須藤
美人佐子さまへ 須藤
伊吹真子さまへ 須藤
女性美としての「晩」に就て 須藤
あるマゾヒストの手帳から 須藤
倒錯の英雄・織田信長 須藤
愛恋の月 須藤
特集・告白 須藤
赤い腋窩の女 須藤

素晴らしいショー

かたずをのんで待つ観客たちの眼の前で、
幕はゆっくり開かれていった。「あッ？」
誰の口からも感嘆の叫び声が洩れた。見よ

そこには、棒に縛られ猿ぐつわをかまされた美女が忽然と現われたではないか。



モデル嬢の 表情

佐賀美智子嬢

編集部撮影



須川令子嬢



萩加賀利江子嬢
千恵子嬢





メイドの拘束服



淑やかな令嬢

スチュアードスの晒し

宮崎昭平・画

巨大な飛行機の手轆に縛られた彼女は、プロペラの廻転と共に、激しい強風に全身は動揺し、腕の痛みが加わってきた。彼女は必死に哀願するのだが、爆音に打ち消されて、整備の人達も気づかないのだった。





アメリカ雑誌 BIZARR のカットより

(復刊第4号)

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1 9 5 6 年 5 月 号

(第十卷 第二号 通刊第八十四号)



花散れど

美沙子はふっと目を開いたが、何かしら水の底にいたような茫漠とした感じに、もう一度目をとじた。

「気がついた？」

男の声をする。

再び開いた目の底をのぞきこむように、夏雄の顔が間近にあった。

「あっ！」

「美沙ちゃん、すまなかったな。大丈夫かい？」

夏雄にいわれ、やっと自分が夏雄の家にいることを思い出した。

「夏雄さん」

連載小説

赤い花は泣いている

(第二回)

松井 籟子

腕をのぼすと、夏雄も手をさしのべる。美沙子は赤い匹田の長襦袢のまま、夏雄のベッドに寝かされている自分に気がついた。結婚式の途中からぬけ出して、雨の中を、夏雄の許へ来たのが夢のような気がする。けれど、赤い匹田の長襦袢でいるところを見ると夢ではないのだ。

すると……—。美沙子は恐いものでも見るように目で探した。

たしか女の人がいた筈だ。悪夢ではなかったはずだ。

テリーといったその女に、自分は夏雄の前で辱められたのだ。

そして、失心してしまったのだろう。

しかし、それが昨日のことなのか、今日のことなのか、いったい何時間意識を失っていたのか、美沙子は何にもわからない。わから

なくてもいいのだ。そこに夏雄がいる。それだけでいいのだ。

「私、夏雄さん好きなの。他の人と結婚するの厭！ どうしても厭！」

うわ言のように云いながら、美沙子は握っている彼の手を引いた。渴いたのどに水を求めるように、彼の唇を待った。

軽く合わされた唇を、美沙子の方から唇と燃やした。長襦袢の袖がすべり落ちて白い二の腕が露わになるのもかまわなかった。

思えば昨日から何度、思いうかべた光景か……。

それを、ふき消し、ふき消して、心にそまぬ結婚をしようと思つたのだった。

幻にえがいた夏雄の姿や、瞳を思えば、今、彼を鬼のように頭から食べつくしてしまつても満腹しないかもしれない。ただ唇を合わせているだけではもどかしい。

「会いたかったの、会いたかったのよ」

恨むような、泣くような言い方で、そんな言葉をくりかえしていても、美沙子のもどかしさは救われそうもない。

「夏雄さん、私を離さないで、しっかり抱いて……」

かきくどくかと思うと又、唇を探す。

母の姿を見失った子供が、母親をみつけた時のように、無邪気に男の愛を求める美沙子を、夏雄はいとしいと思った。

しかし、男には愛情に溺れてしまえない理性があった。

「美沙子ちゃん、式場へ電話かけなければいけないだろう？ 今大頃変なさわぎをしているよ」

「式場？」

さも納得がいかないというように、ぼんやり美沙子は聞いた。

「そうだ、結婚式場だよ。君は花嫁衣裳のまゝ、式場をぬけ出して来てしまったんだよ」

「結婚式……。そうだ、私、大変なことしてしまつたのね、今何時なの？ 私が来てからどの位たつの？」

「もう夜の六時近い。何時からの予定だったんだ？」

「三時から神前のお式をあげて、記念写真をとりに行つて、六時から披露ということになつていたの」

「じゃあ、式場へ電話しよう。客が待っているだろうし、先方だつて怒っているかもしれない」

「私……行かなきゃいけないの？」

夏雄は一瞬返事をためらつた。

（行かないでもいいよ）と云えたら、どんなに美沙子が喜ぶだろう。美沙子ばかりではない、夏雄自身だって、このまま永久に美沙子の手をとっていられたらこんな嬉しいことはないのだが……。

「今更、結婚式なんていかれやしないわ。このまゝ此処へおいて。ねえ、夏雄さん」

じつとみつめる美沙子の目に、彼は静かに首を振つた。

美沙子の結婚が政略結婚なのも知っている。美沙子の心が夏雄にあると同じように、自分がどんなに美沙子を愛しているかもしっている。けれど、愛情だけでは人を幸福に出来ないことを、夏雄の育つた環境が根強く教えていた。

世の中が金力だけで解決されるものとは思わないし、思いたくない。

しかし、だからといって、愛情や精神的な努力だけではどうにもならないこともあるのだ。

夏雄は美沙子を愛しているだけに、その愛情をいつまでも持ちつづける為にも、美沙子を自分から遠い人にしてしまっているのだ。た。

「僕が電話したらまずいから、テリーにたのもう。君が失心してしまつたので、テリーはすまながって、さっきの荒れ方はうそのように台所へ引っこんじやつたよ」

「どうしても駄目なの？」

美沙子は泣きそうな顔で聞いた。

夏雄の心ははなれてしまつたのなら、自分だけで追つてもしょうがない。

唇をかむ思いだったが、たしかめずにはいられない。

「夏雄さん、私をもう愛してはくれないの？」

「愛しているよ」

「そんなら……」

美沙子の瞳は瞬時かがやいたが

「さあ、駄々をこねずに……。人に迷惑をかけてはいけないんだよ。

人を愛するということが、何人かの人が迷惑しては、その愛はやっぱり邪恋というより仕様がなないじやないか」

夏雄にしたら、そう云つて、自分自身納得させようとしているのだが、

「邪恋？」

美沙子はひどい言葉だと思った。

夏雄を愛する心は一番純粋なのだと思つてゐるのに……。だから、こそ、処女のまゝで夏雄の許へ走つて来たのに……。

「わかりました。さっきの女の人に電話をかけてもらつて下さい。

急に気分が悪くなつたので、途中のお医者さんの所で休ませてもらったといつて……。迎えに来なくてもすぐ行きますといつて……。美沙子は悲しさに負けなくなつた。むしろ夏雄を憎みたかつた。自分の大切にしてゐた清純な恋を、邪恋といわれたことは憤りとして心を波立たせ、恋しさと同じ強さの怒りが体の中にふつふつとたぎってくるのをおぼえたのだつた。

新郎の立場

美沙子が着付を終えてから、家で寝ている祖母に、花嫁姿を一目見せに行くということは前からきまつてゐることだつた。

何かの手違いで、花嫁さんひとりで車にのつて行つてしまつたとしても、まさか、途中で別の方角へ失踪してしまつたとは思ひも及ばなかつた。

しかし三時が近づくのに花嫁の姿がない。

家へ電話すると、まだ来ていないという。

はじめは来るのが手間どつてゐるやうに新郎の方へととりつくろつてゐた美沙子の義兄も、四時になり、五時になれば、おくられてゐるという云い訳の嘘さえうまく見つからなくなつてきた。

心当りといつても、花嫁姿のまゝ立寄るやうな家は見当もつかない。美沙子をのせて行つた自動車の運転手を呼びよせて聞いてみたが、運転手はぼんやりと待たされた不平をいうだけで、美沙子をおろした場所を聞いてもどうしようもなかつた。

かくしきれない不安が、新郎の谷野正樹の耳に入つてきた。今日の式に招かれて来ている正樹の方の客は、主に先輩や友人だつた。

正樹には両親はない。母がわりの伯母と一緒に住んでいる。

伯母は自分の縁つづきの娘を彼にめあわすつもりだったから、最初から今度の結婚にいい顔はしなかった。

「おおかた、好きな男でもあったんじやないのかい？」

そんなことをぬけ／＼と云った。

「さもなければ花嫁さんが、途中からいなくなるなんて変じやないか。いくら捕物小説がはやってるったって、花嫁をかどわかすなんて、大時代だね。銭形平次にでも出て来てもらわなければならぬいね」

皮肉を云うのはその言葉の裏に

(だから云わないこっちゃやない。私のすすめた人をもらえばいいのに……)

という気持がかくされているからだ。

正樹は何ともこたえられない。

「おい、どうしたんだ？」

先輩もいう。

「花嫁が逃げたって？」

どんなに親しい間でも、不思議と人の不幸を面白がる人達がいるものだ。

正樹はみんなが自分を嘲笑しているような気がした。

式場の雇人にまでじろ／＼と見られているように思う。

「花嫁さんがどこかへ行っちゃったんですって……」

「おむこさんがきらわれたのね」

「どんな人？」

「ほら、あれがおむこさん」

「気の毒に……」

「いい気味だわ」

「どうして？」

「だってきれいなお嫁さんでしたもの。あんな人に、勿体ないわ」
そんな会話が聞えるわけではないのに、正樹の耳にはひびいてくるのだ。

「可哀想に」「いい気味だ」「気の毒ね」言葉は違っても、好奇の視線に射られていることにはかわりはない。

モーニングの衿元がじつとりと汗ばんできた。

——もしかしたら……？——

正樹には気にかゝることがあるのだ。

それは、正樹の過去の女が何ごとか花嫁に知らせてきたのではないだろうかということだ。

(そんなはずはない)

そう思うのだが、あの女ならやりそうだとも思う。

着付をしている花嫁に近付いて、こっそり手紙を渡したかもしれない——。

(まさか……)

正樹は窓の外を雨を見ながら、

「あんなの結婚式は嵐になるわ。私が呪ってやる！」

と云った女の言葉を思い出していた。

過去の女

美沙子との結婚が決った時、正樹が一番最初にかたをつけておかなければならなかったのは艶子のことだった。

もう五年にもなる。

当時夕刊新聞芸能欄を受もっていた正樹はある舞踊の会で艶子を知った。

二度目に会ったのが歌舞伎座の廊下で、三度目に明治屋で会って浜町で一杯のんだ。

それがきっかけになって艶子の家へ押しかけてしまったのも、酒の酔よりも、歌舞伎のぬれ場を地でいってみたくなつたのかもしれない。

薄時色に赤や紫の千葉鶴がとんでいる炬燵ぶとんがなまめかしかった。

「失礼して帯をとくわ」

艶子は彼の目の前で、シュッ／＼と絹のすれる音をきかせながら帯をといた。そして

「帯をとくということは、昔なら大変なことなのね」と、笑って云った。

内弟子の若い娘が二人ほどいるらしかったが

「私がするからいいわ。おそいからさきに寝てちょうだい」

と艶子はいうと、帯をといたよそゆきの上から羽織だけはなんてんに着かえて台所へ立って行った。

正樹は今みてきた歌舞伎のつゞきを見ているような思いで、いつしか自分も役者になつていた。

「さあ、召上れ」

徳利を傾けられて

「もう酒は……」

というのを

「まあ、いいでしょう」

と微笑んだ艶子の瞳が媚びていた。

一杯つぐと、そのまゝ正樹の顔を見つめながら、急に

「フフ、」

とふくみ笑いをする。瞳で瞳を誘い出すような目ざしだった。

「何がおかしいの？」

正樹が聞くと

「だってね」

と、又、笑いをふくんで

「芝居をみていておかしくなつたの。昔の女の方が勇敢よ。大抵のぬれ場は女の方が積極的ですよ」

「そうかしら？」

「そうよ。男の方から惚れたらふられることになっているの。女が惚れたら……」

と艶子は笑いながら「すし屋」のお里のせりふをまねた。

「わたしやもう寝るぞえ、おおねむ、おおねむ、あれ、お月さんも寝やしやんしたわいなあ」

それ以来の交渉だった。

いっそ単刀直入に

「別れよう」

と云つたら湯島境内のお蔭のせりふでももち出して、案外、冗談めかして切れてくれるかもしれない。そんな気もした。

重い心で艶子の家の格子をあけたが、いつものように、お酒ののっている食膳の前に座ると、急には言葉もなかった。

外泊するのを伯母がうるさくいうので、社の宿直のような顔で一週間に一度か二度、艶子の家で泊っていた。いつの間にか彼の丹前や寝巻が用意されたが、不思議に内弟子たちは「旦那さま」とは呼ばなかった。艶子にパトロンがあるのかどうか、聞きもしなかったが、正樹ひとりを守っている女とは思えなかった。うっかりほじくると反ってまずいと正樹は知らん顔をしている。たまに洋酒をもつて行ってやったりするが、どっちかというと二人の間では艶子の方が出費していることが多い。まさか小遣いまではもらわないが、女が二つ三つ年上なのを承知して、正樹の方から甘える心になっているのだろう。

それに艶子自身、正樹が相当の財産を持っていることを知らなかった。どうせ勤めの身なら、サラリーの高さも知れていると思っていた。

恋の重荷

実は僕、結婚することになったのだ」

正樹が思い切って云い出したのは、二人も酒の酔に、臉のあたりがゆるんできた頃だった。

「結婚？」

艶子は口へもっていきかけた盃を、途中でやめて、おうむがえしにといかえした。

「うん、伯母がうるさくいうので……」

まさか自分から、美沙子を見染めたともいえない。

「そう、結婚するの」

艶子は盃を卓の上におくと、ひとり言のようにくりかえした。

しばらく沈黙がつづいた。

「いいわ。どうせ私が奥さんになろうたって無理なんでしょう。で、いつ式をあげるの？」

「今月末だ」

「そんなに急に？ お目出とうございます、っていうのも変だけれど、まあ、お祝いの意味でつましましょう」

徳利をとりあげる艶子に、彼は（案ずるよりうむがやすかった）と、ほっとした。

さすがに女ひとり、自分の仕事を持って世の中を渡ってきている女だと、艶子を見直す思いで盃を手にとったが

「じゃあ、水盃のかわりに、これでお別れの盃をしよう」

と云うのを艶子は聞きとがめて

「お別れ？」

と、あらためて正樹の顔を見た。

「だって結婚したら、君との間は清算しなければならぬだろう」

「どうして？」

「どうしてって……」

「私は厭よ」

艶子はきっぱりと言った。

「あんたが結婚するのは勝手だわ。どうせ私がいい奥さんになれるとも思わないし……。だけど、これっきり別れるなんて、そんなこと出来るの？」

「出来ても出来なくてもしなければいけないんだよ」

「誰の為に？ あんた、その人に惚れているの？」

艶子の目から青い焰がメラ／＼燃えたつような気がした。

「私と別れて、その人を可愛がりたいのね。私の心をこんなにまで引っぱっておいて、今更、結婚します、別れてくれ。よくそんなことが云えたわね」

艶子は徳利の酒を湯呑にあけると、一と息にぐつと飲んだ。

正樹はとめようとしたが、反ってだまっている方がいいと思つてやめた。

気まずい沈黙を、酒でごまかすように、艶子はぐい、ぐいと飲んだ。徳利が空になると、台所から、一升瓶のまゝ持つて来て、湯呑についだ。

「私はね、今だからいうけれど、あんたの為に、長年面倒をみてくれた人とも別れてしまったのよ。あんたのつけた唇の痕が、私の胸についていたからなのよ。まさか転んだとも、戸にぶつつけたとも云えない場所じやしようがないわ」

そんなことがあったのか——と、正樹は苦笑した。

唇の痕を体中につけて欲しいというのはいつも艶子の方からだった。唇の痕だけではない。時にはもつとひどい齒の痕や、煙草の火までもつけさせられた。

「しかし僕は……」

一応弁解めいた言葉が口にのぼってきた。

「あんたの方からそうしたんじゃない。私が頼んだからって云いたいんでしょう？　そうよ、私からいつもそう云ったわ。でも、そうでもされなければ私の苦しい思いを押さえられなかったのよ」

一目惚れという言葉の通り、艶子からもちかけた恋だった。

歌舞伎座で会って、明治屋で会ったのは、偶然のうだけけれど、演芸記者の彼が来そうな日をねらって彼女が行っていたのだとした

ら、偶然には偶然でも、多少作為のある偶然だったのだ。

その艶子の思いに引きくらべて、正樹の愛情はなまぬるかった。妻もなく、他に恋人もなかったので、此の恋にのつてきたとも思われる。いつも受身だった。

艶子の勝気さが、彼女の思慕のどれ程激しいかを言葉に出してまで云わせはしなかったが、正樹に会える前の晩は、遠足を待つ子供のように落付かなかった。

一週間に一度か、多くて二度、彼女の家へ泊る正樹によく

「寝坊助だなあ」

と笑われたが、彼が来るという前の日は嬉しくて眠られず、自然、彼の傍で安心して前の日の不眠をとりかえすことになる。

正樹からみれば、折角の逢う瀬に、ぐうぐう眠ってしまう彼女の思いなんて、たいしたものではないと思うのだろうが、艶子にしたら、明日会えると思うだけで、前の晩から眠れずにいる程彼が好きなのだ。

来るときまっている日でも、本当に彼の姿を玄関に見るまでの気持はやるせなかった。

何か用が出来て来ないのじやないかと悪い方へ考える。どうぞ来てくれますようにと好きな酒をたつて祈つていいようにさえ思うのだった。

前から面倒をみてくれていた人と別れたのも、キスマークをみられたからというよりは、正樹以外の男の肌がうとましくなったからだ。それ程愛している彼なのだが、彼の方の愛情がたよりないと、自分で自分の激情をどうしていいかわからなくなってくるのだ。

体中が火のようにもえて、つかみ殺してもらいたいようにさえ思

う。

愛しすぎているから苦しいのだと思うと自分の体から、過剰な愛情をたたき出してもらいたいようにも思うのだ。

「ぶって！」

と、わざと物さしを、彼の手に渡したこともある。

「もっと強く、もっと強く打って！」

ピシッピシッと、体に焼火箸をあてられるような痛みにもだえながら、艶子は自分で自分の情熱をもてあつかったのだ。

お灸をすえてもらったのも、そんな気持からだった。

物さしで打ってもらったり、噛んでもらったりするというようなそんな常識はずれのことをそう／＼云い出せない時もある。

正樹が少しでも、女を虐めることに興味を持っている男なら、二人だけの世界で、常識のわくをはずすのはわけではない。

しかし正樹には、艶子のような激しい恋情もなかったし、激しい情熱をもちあつかうような体力もなかった。

艶子は自分で自分がかしくなると、いつも体当りで稽古にはげんだが、一寸息をつく程の短い休みの一と時にも、まるですき間風が小さなすき間から入りこむように、正樹の面影が入りこんでくるのだ。

そんな自分にじれて、お灸をすえてみようかと思ったのだ。

商売柄、ぬきえもんをすることもある。

衿首にお灸のあとをつけるわけにはいかないが、背中や腰ならかまわない。

お灸のつぼを知っているという近所のお婆さんに頼んですえてもらった。

「こんなきれいな肌に、勿体ない」

と、お婆さんは云ったが、いっそ肌に灸の痕をつけておけば、正樹以外の男をさけるまじないになるような気がした。

じりじり熱くなってきた、最後にジーンと骨身にこたえる熱さは物さしの痛さよりもつらいと思った。

「ウーン」

と、一つこらえて、ほっと息をする間もなく、次のもぐさが燃えてくる。そして、その熱さが次々に加わっていった。

「熱い、熱い！」

と、思わず身もだえしても焼きついたもぐさは肌から離れない。身悶えすればよけいに熱くなるのを知るばかりだった。

ただ、その熱さの中だけでは、正樹への恋も瞬時忘れられた。

ぬかるみ

「私は別れない。あんたが別れても別れない」

艶子は同じことを繰り返かえしている。

酔に目がすわり、だらしなく横坐りにした体を、やっと卓にさえて、じっと正樹の顔をみつめていた。

酔った頭にきれ／＼に、彼との三年間の思い出が走馬燈のように走って通った。お灸の熱さを思い出すと、お灸をすえようと思った自分の思慕が我ながら不憫になる。結局、自分はひとりで相撲をとっていたのだと思うと、急に正樹が憎らしく、いっそ困らしてやろうと思うのだった。

「私はあんたと別れる時は死ぬ時だと思っていたんだから、いいわ死にやいいんでしよう」

ふらふらと立ち上ると、帯をいいて、伊達巻を鴨居にかゝつていたハンガーへかけて、輪にした。

「おかしなまねはやめてくれ。君は酔っているんだ、寝なさい」

正樹が艶子の体をかゝえるようにして

「さあ、寝床へ入りなさい」

と、次の間へつれて行こうとする手を押えて、正樹の手を握りしめていると、愛を語るのさえおどおどと、こうして手を取りあっていた日もあったのと思われてくる。

酒の酔が感情の波をことさらにゆすって、艶子は自分を制する術を失ってしまうのだ、

「ねえ、別れないわね、別れないって云って」

と、正樹の首に手をまわし、体ごとたれかゝると、正樹はそれを受けとめかねて、二人でどうと、畳の上へ倒れてしまった。

「別れるなら、いっそ、こうして殺しちゃう……」

倒れた重なりの中で、艶子は彼の首をしめようとする。

本気にしめるつもりもないが、本気にしめてしまってもいいような気がするのも、酔のせいかもしれない。

そんな艶子を正樹はだん／＼うんざりして、本気に別れたいと思ってくる。

最初のように、艶子がきれいに別れてくれれば、反って男心に未練も残る。結婚してからでも、又、折を見て、艶子との関係は続けていってもいいように思うのだが、酒に酔ったの乱暴は、年上の女の厭らしさだけしか感じられなくなるのだった。

「よせ、よさないか」

首にまわした手をはらおうとすると、全身の力をこめてしめてく

る。

冗談のつもりが、冗談ですまなくなってくるのだ。

正樹がそれに対抗するには、男の力で立ち向わなければいけない。やっと彼女の手から逃れて立ち上ると艶子は足にしがみついた。

「別れるなら、あんたの手で殺して！」

「そんな馬鹿なことが出来るか」

「じゃあ、永遠にこうやっている！」

「離せ、離してくれ」

「厭！」

「離さないと蹴とばすよ」

「どうにでもしてちょうだい」

正樹は艶子の髪をつかんで引いた。

「痛い！」

「痛けりや手をはなせ」

「誰が……誰がはなすもんか」

髪の手をつかんで引かれるので、艶子の白いのがぐつとこのび、目がつるしあがった。

「ううっ！」

と、艶子はこらえながら、それでも彼の足にすがりついている。女の執念が酒の匂いと一緒に立ち昇ってくるような気がした。着ているものも乱れに乱れて、凄惨だった。

このまゝいつまでも苦闘をつづけているわけにはいかない。酔った女は気違いと一緒だ。非常手段をとるより仕様がないだらう。

正樹は足をつかまえている指を、逆に一本ずつぐつと開かせた。しかし一本開かせて次のにうつると、前の指を又からませてくる。

正樹の体の中に怒りがわいてきた。

男が本当の力を出せば、女がいくら抵抗しても、男の方が勝つものだ。

彼は艶子の手を逆さにしめあげた。

そして、再び彼女に手向わせない為には、その手を動かないようにしてしまわなければいけなかった。

艶子が首をくくるといってかけた伊達締めは、彼女を後手に縛る縄になった。

正樹は艶子を縛っておいて、外套を着た。

すると、艶子は体ごところがるように、彼の足元へ身をなげかけて、後手に縛られた不自由な体で、まだ彼の帰るのを邪魔しようとする。

正樹は舌うちすると、艶子のしめている腰紐をほどいて、足をしっかりとくくり合わせ、紐のさきを、後手に縛った手へもう一度まわした。

「いいかい。君との間はこれっきりだよ」

正樹ははき出すように云った。

艶子はえびのようにまがった体をもちあげるようにして、正樹の顔を恨めしそうに見上げた。

「じゃあ、さようなら」

正樹がいう。

三年間の恋の終末を、囚人のように縛られて宣告される自分がいたましく、艶子は叫んだのだ。

「あんたの結婚式なんて嵐になるわ。呪ってやる！」

と……。

〔読者通信〕

四月号確かに拝受しました。十五日前後から毎日のように待っていました。奇クだけに、封切る手もどかしく一頁ずつ見るのです。先ず初めに目次で見当をつけておいて、これと、これを、と、例えば嵯峨さんの正月映画の縛られ女優とか、映画の緊縛断片（緑氏）升岡さんの縛られた女優達とか、特に映画関係の事はかり申し上げるようですが、まだ見てない映画があれば早速見に行かねば気が済まないもので、つい初めにページを開くことにしています。内容では辻村さんのアブノーマル雑談「話の屑籠」と、玉稿落穂集は最も期待しているし、又一番初めに開くページで、次に本月から松井さんの「赤い花は泣いている」が連載されましたが、今後の進展に大きな期待を持っています。昨年の五月特大号に二大連載予告に此の外、吾妻新氏訳の題未定（ジヌスチーヌ）がありました。これも前記の小説と共に、何んとか連載して下さる様にお願ひする次第であります。終りに次の二作も出来れば載せて下さればと思うものです。「鞍馬のはらみ女」「転

落の姉妹」では勝手なる言い分ばかり申し上げてお許し下さい。

（名古屋 渡辺 生）

○

私は大の禪愛好者で毎日キリツと六尺一丈の白布で禪をしめて仕事に通っております。私のこの性癖は中学一年生位よりあり、今では家中の公認になっていました。特に私の憧れるのは、男にはなく、女性、それもうら若い女性、日本髪を結ってる娘がきりつとした禪をしめている姿なのです。この願いは復刊第一号の山田正実氏の文中の挿絵の芸者のふんどし姿でようやくいやされました。その他、二十九年十二月号のI・K生様の写真、三十年三月号の畔亭氏の娘相撲の図など、私はどんなに喜んだことでしょう。今後もどんなこんな企画を進めていたかきたと思います。特に奇クを通じて同好者があるということを知ったのは大きな喜びです。なまじ教育のある身で、人にも云えぬうづばったる悩みをいやして下さる貴誌の存在はまことに有難いものと感謝いたします。その中、私自身の告白についてペンを取ることにしましょう。（大阪 英山 生）

幽 囚 十 ケ 月

戦後の刑務所内の囚人の生活を、これほど迄リアルに描き出した文章をまだ他に知らない。誇張も作為も、いささかも含まないこの一文は、文献としても極めて高い価値を持つてゐることを信じて疑わない。

春 田 一 郎

格子ある病床

刑務所自体が社会から隔離された別世界である。その別世界である刑務所の中にも、その又別世界が二つある。一は懲罰房である三舎であり、他は病舎である。三舎の方は自らが反則を犯して入れられるのであるから、云わば身から出た錆であるが、病舎は病氣と云う不可抗力のことで入る所であるから、刑務所へ入って、而もその上に病氣になり、近親に看護せられることもなく療養する受刑者こそ見方に依つてはこの世の地獄にあるものといえるであらう。

休養患者となり病舎へ入ると白衣を貸与される。寝具も純白である。そして板敷にござ

をしくのではなく、畳を一人に一帖ずつあてがわれる。稀には盲腸などの如く短期間の入院もあるが、病舎に入った患者は概して長い者が多く、特に結核性疾患の者は数年になる者さえ一二に止まらないのである。鉄格子があり、扉に錠のかゝる病床で、畳一帖を自分の世界として、黙々として眠る病囚の心中を去来するものは果して何であらうか。八房や九房の雑居房にいる患者は将棋に興じたり、雑談したりして、気も紛れるであらうが、独房の患者の一日はどんなにか長いことである。併し乍ら、実際に患者に接してみると、案外、彼等には暗い陰がないのである。病氣とか将来とかに対する諦観もあらう。併し大体に於て彼等にはその日その日を満期まで、

勞働することもなく、送ればそれでよいと云う安易な氣持がある様に見受けられる。その故か、彼等は普通世間の病人に較べて、苦痛に対する辛抱が著しく足りない。一寸痛くても苦しくても、すぐ医者を呼べ、注射をしろと云う。心臓が苦しくてたまらないという患者にビタミンBを打って置いても結構それで楽になったと喜ぶのである。更に又、支給された薬をのまないで、ためて置く患者もいた。彼は貯めた薬を他の工場の者にやって何彼と交換するのである。工場の者はたとえそれがどんな薬であらうと、薬でさえあれば喜ぶのである。薬を貯めて物交をやり見付けられた患者は高血圧症であつたが、彼から高血圧症の薬を貰った工場の受刑者はその薬を腹

痛や風邪にのんでいた訳である。ある老囚は年来神経痛を患っていたが、彼は一年以上も毎日アスピリンばかりのんでいた。アスピリンでなくては彼は承知しないのである。それで胃を損ねるものだから、工場廻診には必ず健胃散を貰っていたのであった。

Uと云う患者は別段何処が悪いともなしに二年以上も白衣を着てブラ／＼している患者中の最ペテランであった。課長のような老練な医官には歯が立たないが、若い医官は彼の要求をどうしても聞き入れないわけには行かない。一種の手腕が彼にはあった。彼は病舎でなく他の舎房で療養しているのであったが、毎日缺かさず医務課へやって来ては診察を受け、何かしら薬や衛生材料を貰って行くのであった。毎日ビタミンBを一本宛注射し、ヴェロナール〇・五一包を貰い、時には脱脂綿を一袋ねたり、外科へ行つては小便が出ない訳でもないのにカテーテルを挿入して貰うという全く患者中の別格であった。定期投薬には彼はビタミンB剤と規鉄丸とをのんでいた。規鉄丸が一ケ足りなくてもうるさく、毎日貰って行く薬は、他の患者の場合は臨時投薬として調剤し夕方配薬するのであるが、彼は直に調剤して自分で持って行かねば承知しなかった。Uは旅芸人上りだとのことであつた。禿げ上った額、権力者に対する卑屈さとするさ、物腰に見える一種の物柔かさと蛇の

様な執拗さは如実に彼の前身を物語っていた。病舎にいる患者の中で、Eという五十年輩の患者は患者中でのインテリで、且つ所謂うるさ型であつた。病名はせきずいカリエスで一日中机に向つて小説を書いていた。彼は理屈っぽい男で、無産党の闘士を思わせる様な向う行きの強い男であつた。看守も彼には一目置いていた様に見えた。下手をして噛み付かれるとうるさいので、触らぬ神に祟りなしの態度を取っていたのであった。ある日曜日の朝、鈴川看守は看病夫に病舎各房の水洗を命じた。Eは早速看守に食つてかゝつた。折角の休業日に看病夫を使う法はないというわけである。鈴川看守としては各房の水洗をするには看病夫全員が必要であるのに、平日は三名の看病夫を残す他は全部、事務所へ出役する、全員の手が揃うのは休業日以外にないので、己むを得ず、日曜日の朝、水洗をやろうとしたのであったが、Eさんの反対を受け鈴川看守はあっさり命令を撤回してしまつた。又Eさんは所長初め刑務所の幹部に面会願いを頻繁に出した。面会が許されると、日常の待遇は素より広く行刑一般の問題に付いて何時間でも強硬な雄弁を振うのであった。彼も亦、受刑者の一つのタイプであらう。

八房の雑居房にいたKという患者は十二指腸虫症であつた。五十五、六才のやせこけた青黄い顔色をした老人で、物につかまりなが

らよたよたと便所へ通っていた。誰の目にも重症だと云うことは明らかであつた。受刑中病気に罹り、重症となつて刑の執行が生命に危険を及ぼすと認められると、刑の執行停止の処分が行われることがある。之は文字通り刑の執行停止であつて、釈放ではないのである。刑に服さなければならぬのである。執行停止に依り出所する者は再起がむづかしいのが多いが、この措置のお蔭で、所謂「獄死」という最も悲惨な最期から免れ得るのである。従つて現在「獄死」と云うことは極めて少ない。併しKさんの場合はこの珍らしいケースにあてはまつたのである。Kさんが重症になると、刑務所当局は刑の執行停止の申請をするべく、Kさんの家族に身柄の引受方を交渉したのであったが、家族の人々は如何なる事情があるのか、言を左右にしてKさんの身柄の引受を肯じなかつたのであった。身柄の引受人がないのに執行停止を申請することは出来ない。重症とは云え、一日二日に生命の危険が迫っているとは思えない儘に日が過ぎて行つた。八月の或日、早朝に、Kさんの容体は急変して、七時前に彼は獄舎で息を引取つたのであった。家族に手一つ取つて貰うでもなく、水一杯飲ませて貰うでもなく、彼はひとり死んで行つたのであった。八房の隣の七房は独居房であつて、受刑者が死亡した場合

は一時、この房に屍体も生前の儘のふとんと病衣で七房に入れられた。扉の看視口がぴたりと閉される。淋しく刑務所で死んだKさんの何のかざりもお供えもない枕許には、どの看病夫の心尽しか、病舎の裏庭にさいた野花が二三輪、死の前夜迄Kさんがのんでいた水薬瓶にさして、静かに置いてあった。

検察庁の検屍が済むと、急報に接して流石にやって来たKさんの息子が二人、七房に導き入れられた。二人共二十才台のたくましい青年で、背広をきちんと着ていた。この様な立派な子供があるのに、Kさんは何故刑務所に入れられる様なことをしなければならなかったのだろうか。屍体はやがて看病夫の手に依り清められ、納棺され、病舎の裏に少し離れてボツンと建てられている屍室に安置された。瓦葺、平家建の五坪ほどのこの屍室は正面に仏壇が祀っており、その前に棺が安置される。淋しい乍らも刑務所心尽しの供物がそなえられ、御燈明が点じられて、僧侶である教育課長の読経があり、幹部の礼拝が行われる。こうして家族の屍体引取りを待つのである。

翌朝十時頃、Kの家族の人達は霊柩車を伴って屍体の引取りにやって来た。昨日来た二人の青年、その妹らしい二十才ぐらいの娘、それにKさんの細君であろう、五十がらみの婦人の四名であった。その奥さんの風さいも

娘さんのみなりも決して生活に困っていると見えないうさっぱりとしたものであった。二人の青年もちゃんとした麻の上下を着ていた。私は之を見て何だか割切れないものを感じたのであった。Kさんの罪名は窃盗であった。父親であり、夫であるKさんは窃盗囚として刑務所に入り、しかも身柄引取人が無かった為に遂にいまわしい「獄死」をし、その細君と子供達はりゆうとしたみなりをしている。之を何と解釈したらよいのであろうか。

私と同期に訓練工場を終え、二工場でも一緒であった平田さんは今度は患者として病舎に入ってきた。而も早発性痴呆と云う精神病であった。訓練時代も二工場に於ても、平田さんは決して普通の精神状態ではなかった。併し当時に於ては全然本性を失っていたとはいえなかった。謂わば常軌を逸していると云う程度であったが、病舎へ来た平田さんは既に完全な狂人であった。私が

「平田さん、どうした。久し振りだな」と房の外から声を掛けると、平田さんはさぐるようなそらうつろな目で私を見て、ニヤリと笑うだけであった。もう私を識別することは出来ない様であった。彼も亦、悲惨な人生を運命付けられた一典型である。昼は何をしているのか、扉を背にして布団の上に座り、何かもそもそやっていた。狂人としての平田さんにはあらゆるものの縫目をほどく癖

があった。ふとも白衣も入院して二三日しない内にみんなばらばらに解かれてしまった。そしてそのぼろの様な布に埋って、目だけ光らせ乍ら何かぶつぶつとつぶやいているのであった。普段は別段に狂暴性を帯びている訳ではないが、何かの機で狂い出すと手が付けられなかった。或朝など、大工が来て平田さんの房の扉を修理しているので、どうしたのかと思ったら、前夜半、狂い出して一晩中大声で喚めいた挙句、さしも頑丈な扉の腰板を破ったのだそうで、うつろな目で自分のこわした扉の修理を眺めている後手錠姿の平田さんの白衣は板を破る時傷付いたものか、血みどろになっていた。彼の脳裡には絶えず幻覚が去来するらしく、

「だからわしが言わんことやない、戦争をしたらあかんことはあれ程東条に教えて置いたやないか」とつぶやいてみたり

「みつ子、わしは、お前を長らく待っていたぞ、もう何処へも行くのやないで、今日は戸がしまっていてあかんが、明日きつとお前の傍へ行くで、待っててや、待っててや」と叫んで扉につかまって瞳で何者かを追ってみたり

「看病夫さーん」と叫ぶので行くと「今、マッカーサー元帥から電話がかゝって来たんや。わしを迎えに飛行機を寄越したそ

うやから、一べん二舎の方を見て来てんか。マツカーサーの迎えが来たらもうじつとして居れん。早うこゝを開けんかいな。早うわしのモーニングを持って来てえな。云うことを聞いてくれたらあんたも一緒に飛行機に乗せてやるで」と云う。

「よし／＼見て来てやるよ」と云って平田さんの房を離れると、五分程経って又

「看病夫さーん」と呼び、同じことを繰返すのである。之が度重って来ると、平田さんはじれて、次第に狂暴になつて行き、果てはマツカーサー元師が迎えに来てゐるのに皆が邪魔をする云つて大声でわめき、手放して泣き出す始末であつた。

獄窓の狂人、前途の光明何一つなく、現在の境遇すら弁別することの出来ぬ狂囚、人としてこれ程悲惨なことがあるであらうか。

肺結核で半年来病舎生活をしてゐるYは何か氣に入らぬことがあると、硝子の破片で自分の手足に傷を付けるのであつた。無数の浅い切り傷から血がにじみ出ると、やつと氣が静まるらしかった。平常は極めておとなしい男なのであるが、何かのはずみで暴れた時、懲しめのため一時三舎に入れられたことがあつた。Yは病舎へ帰りたくて、医務の職員に手をかえ品をかえ頼み込んだのであつたが、どうしても帰るのがむづかしいことをすると自分の身体にきずをつけ、血を出して、その

血で嘆願書を課長宛に提出したことがあつた。其後、漸く病舎へ歸して貰つたYは前とは打って交つた様に暴れることをしなくなつた。血書の嘆願書は私も見たが、血がどす黒くなつていて、凄いものであつた。

九房にSと云う患者がいた。朝鮮の生れで顔に妙な艶があり鼻をよくつまらせていた。内山君はSの様子に不図不審を抱いて、彼の鼻汁を採取し、病理試験を受持つていた平野君——最近入つた看病夫で、前身は某県衛生試験所の技手であつた。——に検査を頼んだ。その結果、レブラがはつきりと判明したのであつた。医務課の人々はショックを受けた。他の患者に知らせれば、恐怖から動揺を起す虞があり、と云つてその儘放置することは勿論出来ない。Sは平病の軽症だったので九房の雑居房に入れてあつたのである。

刑務所としては早速県に連絡し、癩療養所への収容を交渉したらしいのであるが、何故か話は進捗せず、結局、刑務所の中でSを嚴重に隔離することとなつたのであつた。Sの病房は隔離病舎の一番端にある十三房があてられた。廊下には板の仕切りが作られて、他の房と嚴重に隔離され、消毒設備は万全の措置をとり、S専用のドラムかんの風呂桶さえ準備され、Sは十三房に完全に隔離された。そこへ入る看病夫は全身の消毒を行い、ゴム靴、ゴム手袋をつけてSの世話をするのであ

る。初めの中、Sは何のために自分がこれ程嚴重に隔離されるのか分らず、呆氣に取られていた様であるが、次第に自分の病氣を悟つて、焦慮を示す様になつた。僅かのことに腹を立てたり、つまらぬことに憂鬱になつたりした。無理もないことで、之を強いて叱り付ける訳にも行かないので、Sは老練な「久美さん」が専屬で世話することになった。Sが自分の病氣を悟つた頃から、Sの身体にはレブラの症状がぼつ／＼はつきり現れ始めた。Sは刑務所に入ることに依つて世間から隔離され、病舎に入つて他の受刑者から隔離された。更に隔離病舎の一隅に嚴重に隔離されたのである。三重の隔離、之程完全で嚴重な隔離が世の中に又とあらうか。仮令刑期が満ちてもSの行く先は一般の世間ではあり得ない。精神的には常人であるだけに、最早社会に復帰する可能性の全く無いことをよく自覺し、普通社会の片鱗すら覗き得ない別天地に黙々と生きてゐる肩に等しい病軀を養うSの夜毎の夢は果して如何なものであらうか。

患者の入浴は一般の浴場でなく、病舎に特に作られてある浴場で行われる。作り方は一般の受刑者用の浴場と違い、普通の銭湯に似て居り、大きさはその三分の一ほどである。湯は蒸氣で沸すのである。入浴日には看病夫が先ず入浴し、そのあとで患者が定まつてゐる順番に従つて入浴する。足の立たない患者

は看病夫又は丈夫な患者に背負われ、或は杖にすがったり、白衣の群像が浴場に向う光景は何か凄まじいものがあった。患者の看病夫に対する不満や、患者と看病夫の争いは、看病夫側で出来るだけの注意は払っているのであるが、矢張或程度は避けられない所であった。患者としては着衣や食物に関する不満も勿論あるが、看病夫が呼んでも直ぐ来ないとか、夜の応急処置が不親切だと云う不平が数に於て最も多かった。このようなことに關し患者と看病夫とが卒直に意見を交すために鈴川看守は七月と八月に各一回、座談会を開催した。これは意思疎通の上から非常に有意義であったのだが、この二回で鈴川看守の転属のため中断されてしまったのは惜しいことであつた。

妻ごころ

病舎、事務所の掃除、調剤の助手等で慌しく日を送っている中に、いつしか九月を迎えた。私は九月一日付を以て三級に進級した。五月初めに四級になつて以来四ヶ月である。聞けば四ヶ月で四級から三級になるのは非常に早い方だそうである。四級の場合は二舎の廊下に整列して、二舎の担当看守から申渡しがあつただけであるが、三級以上の進級は八角へ進級者が集合し、副看守長から進級の申渡しがあるのである。整列している受刑者に

対し、科学分類課の部長が氏名を呼ぶ。呼ばれた者は列の前へ出て並ぶ。先づ一級への進級の申渡しがあり、同じ様に二級、三級と行われ、最後に副看守長から一場の訓辞があつて進級式は終るのである。

三級になると、面会も発信も一ヶ月に二回許されるのである。之を最も喜んでくれ、早くから私の進級を待ちこがれていた者は私の妻であつた。妻は許される限り面会に来てくれた。出所してから妻に聞いた所に依ると、面会に来ると先づ門衛所で面会を申込み、こゝで順番を待つて、面会の待合所へ通されるのである。一人の面会が済むと、一人を補充すると云う工合に面会者を通して行く、待合所でも四、五十分待つてやつと面会の運びとなるので、面会はどうしても半日がゝりださうである。私の方は至つて簡単で、仕事をしている所へ、面会の呼び出し看守が来て、私を病舎から八角へ通う廊下へ連れて行く。受刑者の呼び出しは一人が面会所へ入つてから次の一人を呼び出すと云う風に行われるので待つても精々十分である。

この廊下の片側は中庭であり、他の片側は板べいである。この板べい一つが受刑の世界の世界と普通の世間とをへだてている籬であつて、板べい一枚向う側に妻や子がいると分つていても、のぞき見一つ許されない。板べいに切戸が付いていて、之を開けばすぐ前が

面会所である。先の一人の面会が済むとこの扉が開いて、面会を終つた受刑者が廊下に出て、次の受刑者が呼び込まれる。面会には必ず面会係の部長が立会うことになつて居り、部長を挟んで、受刑者と面会人とは向い合せて坐るのである。部長は先づ受刑者を面会所に入れ、待合所の方へ向つて

「春田の面会の方、どうぞ」と呼び入れる。入所後初めての面会の時などは、妻としては生れて初めて見る青い囚衣であり、その上折あしくひげが相当延びていたので、私がとてもみじめに見えたのであろう。面会所へ入つて来ると、立ちすくんだ様に私を見つめたまま、暫くは声もなく

「お身体、如何？」と漸く云うと、目に涙をみるみる中に漲らせた。

其後、妻は許されるだけは必ず面会に来てくれた。

私が入所する直前、妻は「あなたがお入りになったら、私毎日おたよりを出す」といつていたが、妻から来る音信は正に妻の言葉通りであつた。配達の都合や検閲の都合で、私の手に入るのは大抵二、三通同時にであつたが、妻の方では約束通り毎日々々私にたよりの書いてくれたのである。刑務所に於て最もよく手紙の来る受刑者でも一週間に一通位の割合である。私の妻は新しいレ

コードを作ったのであった。

「ひる間の春日和もどこへやら、夕方から変わり出した空には一面の雲が西へ西へと上って居ります。

お別れいたしましたから伊藤——彼女の伯母の家——へ行きまして、再び刑務所へ参りまして、差入れ致しました。

石けんだけ取って下さいまして、一切駄目の中で皆買うとのことで現金三百円入れましたからその様にして下さいませ。

見計って又差入れる様に致しますが取あえず。

四時半のバスで帰りましたら、例の調子でアン子、ミミー（犬と猫）には閉口しました。御飯をやる迄大変な騒ぎでした。

今宵は何となく、二匹とも淋しそうに家の中にじっとしています。

父と二人で語ることもなく春宵の更けるのを待っています。

弱い加寿枝も今日から強くなりましたから御心配なさらず、貴方はただお体に気をつけてお元気でいらして下さいね。加寿枝、それのみお案じしています。

お別れしたばかりで別にお知らせすることもありません。又お便りしますね。

御健康心より祈って居ります。

かしこ

一郎様

加寿枝

短歌同封しました。毎日何首か出そうですアン子、ミミーがよろしくとのことです。

何時の日か明るくならん夫の身の

清きを信じ強く生きゆく

渡されて今別れぬ夫の服

肌の温みは未だ消えやらず

暫くは夫と別れぬカレンダーの

一日消えて今宵過ぎ行く

仰ぎ見る桜に祈りぬ来る年の

親子三人楽しき花見を

嬉々として桜木縫いし人もみな

悲しく見ゆる今日の我眼に

現世のさだめと夫を偲ぶれど

あふる涙の何故か止らず

月見草、人になかなか、さちのなく」

之が私の入所した日、妻が私に送った一番最初の手紙であった。之を第一信として、私が服役した三百日の間、殆ど一日も缺けることなく、私に便りをくれたのであった。受刑生活に於て孤独になった心をなくさめ励ましてくれるものは妻の手紙に勝る者はない。私が十ヶ月の服役中、一回の訓戒すら受けることなく、無事に過すことの出来たのは半分以上妻の愛の力に依るものであった。この妻であるから、私が三級に進級して、私からの発

信が一ヶ月二回となり、面会も二回出来る様になるのをどの位待ち焦れ、そして進級したのを喜んでくれたことか分らない。併し、折角、三級になった九月から妻は肋膜炎で病床に臥す身となったのであった。それでも妻は病床から毎日手紙を呉れた。しかし面会は十一月の終りまで遂に不可能であった。妻は亦、私の入所中毎日克明に日記をつけていた。私が入所した日、妻は左の様な日記をつけた。

「馬鹿、馬鹿、ばかな加寿枝、弱虫の加寿枝予て覚悟はしていたものの、愈々送り出してしまふと、もう何も考える余地なく失心している意気地なしの私。ともすると出そうになる涙をおさえて、一日中我慢した綱が切れて、床に入るなり泣くだけ泣いた。そして夫の留守中の日記を書くため、行儀わるいが、時計の刻む音を聞き乍ら、床の中でペンを取る。

七時起床、何時にない上天気、昨日から全部ととのっている雑品を揃えて九時半のバスで街へ出る。

買い足りない葉書類をもとめて、パチンコゲームに暫く時を過し、市内公園に出る。最後の楽しい思い出に、けれど、桜が美しくれば美しい程、人が楽しげなら、楽しげな程、すべてが私の目には悲しく見える。

冷静に正しく罪を受ける夫の心を乱さない様、今日ばかりは涙を見せられない。中食のすしも今日はのどを通らない。……十二時少し前、公園を出て床屋で夫は散髪をする。刑務所頭の丸刈にしてしまう。毛のなくなった頭が又淋しく悲しい。

徒歩にて検察庁へ向う。一步一步重い足は検察庁へ向う。執行係の島津様にお会いして刑務所へ二人で行く。刑務所へ運ぶ夫の一步步、それは正しく美しいものでしかない。いさぎよい夫の歩み。罪を受けて囚人になる人のそれではない。私には分り過ぎる位わかる。夫の顔には逡巡もてらいもなく、清く美しく、そしてすんでいる。夫の今日のこの顔を私は胸深く刻み込んで、良き妻、良き母にならなければいけないと思う。

刑務所にて暫く手続をし、夫は私に笑顔一つ残して、薄暗い廊下に曲って消えた。夫の衣服を受取るために廊下で待つ。

ガチャン／＼と間を置いてのんびりと打つタイプの音が私の神経をつん／＼とつゝ突いて腹立たしい。島津様、外に待つ私を夫の着換場所まで連れて行って下さる。受刑者の面会室らしい、多勢の面会人が来ている。すべて事務的にどンドン運ぶ係の人が恨めしい。なるべくゆっくり手間取ればよいのに。そろそろ着換を始める夫、獄衣を

みるのが恐ろしいので、うしろの壁にもたれて見えない様にする。それでいて夫の姿が見度い。「後で届ける」との言葉にいよいよ夫の背に無言の別れをして去る。玄関で数分待つと、「衣服戻す」と呼ばれ門の控所にて受取る。先刻まで夫の肌についていた下着、服、靴下に至るまでなつかしく、何ともいえない淋しい感じがする。

用意して来た日用品の風呂敷包みを夫に渡すのを忘れたので、差入しようと思つて係に行けば石けんだけしか差入が許されないとのことと随分馬鹿らしいことだ。折角用意したものが無駄になつてしまった。中で必要品が買えるのことに三百円を差入れする。

刑務所の門を出る、ああ、夫はもう受刑者として刑務所の住人になつてしまったのだ。見てはいけない、振返つたら涙だと思いつつも、思わず後を振り返ると、あの高い冷い塀が目映る。淋しさと悲しさが身にせまる。

帰宅して部屋に入ると、火鉢の横に、あの人が今朝まで敷いていた座布団がそのまま残っている。夫の香が残っている様な気がして静かにその上に坐つてみる。煙草、きせる、湯呑、どれも今朝のままだ。持主はあの高い塀の内らの世界へ行つてしまったのに。胸がつまって涙が出そうになるが、

泣いてはいけない、泣いてはいけない。と淋しい夕食を済ませて、島津様と夫とに手紙を書く。

いざ寝ようとして押入をあけると、夫の枕や寝着が目の前にある。涙のせきの切れるのが恐ろしく、抱きしめたい心と反対に手はそれらを目に付かない所へしまひ込む。床に横になる。ふと枕許を見ると、昨夜まで並んでいた灰皿がない、煙草がない。もう涙を押えることは出来ない、泣く丈け泣こう。涙の干すまで泣こう。

十一時十分前、夫はもう眠つただろうか。初めて結ぶ獄舎の夢はどんなものだろうか。

ふと机を見ると、すいかけの光の箱が一ヶポツンと乗っている。それが涙でとけてゆく。煙草のない夜、夫はどんなにか苦しいことであろう。

夫の夢が安らかであります様に」(未完)

【読者通信】

四月号はよい切腹の記事がなくまことに残念でした。読者通信の中には、切腹を嫌われる方もある様ですが、とんでもない暴論だと思ひます。又、昔の様に亀岡、中康、田谷氏等の活躍が望ましいものです。最近では藤山氏のに感心いたしました。

皆様の御健闘を祈ります。(法谷 四郎)



魔^まの味^{あじわ}い

高木伸夫

私は、これから或る時期における自分の過去を卒直にいつわらず述べてみようと思う。

コプロラグニスト、不浄物愛好者として、いわゆる人生の裏面をいさゝかなりとも知り得たことは私にとってプラスだった。

告白には、リクツも云いわけも禁物である。私はこの小文をまず研究家に捧げ、批判を乞いたいと思う。ひとつのデータとして提出しようとするのである。

終戦の年の初冬、つまり昭和二十年十一月から翌二十一年の九月はじめまでの約一カ年を、私はあるキヤバレーの営業部長として働いた。

キヤバレーとは名ばかりの、進駐軍相手のいわゆる慰安施設で、東京郊外M町の戦争中のN飛行機工場の工員寮を転用したバラックの急造ホールに、ダンスのABCも知らぬお寒い女の子たちをかき集め、速製のキヤバレーにしたままで、今思えば、あれでよくお客様が集まったものだと思心させられるしろものだった。

お客様とはいっても、日本人オフ・リミッツ、アチラの下士官とか下級の兵隊クラスを対象とするものだったから、実は内容なぞはどうでもよく、女と、酒、そしてさわがしいフンイキさえあればそれでOKなのだった。

たゞ風紀の乱れ方とは反比例して米軍当局からのきつい達しで、衛生管理の面だけは猛烈にやかましかった。

万一、性病は勿論のこと、あらゆる伝染病を兵隊たちに移した事実があった場合は即刻営業禁止というハメになるので、営業部長というポストは、甚だテイサイがよいが、私の実際の仕事は、女の子をはじめ全従業員の衛生管理が毎日の仕事で、特に直接客に接するダンサアたちのからだには、一番、目を光らせる責任が私にはあるのだった。週三回の検尿、週二回の検便、検診と消毒にあけくれる生活は、女の子たちにとっては甚だ厄介なもので、つい／＼怠りがちだったが、コプロラ

グニストたる私にとっては、六十名にちかい若い女の子たちの排泄物を自由に取扱うことができるのは大きい役得であり、事実、それは楽しい仕事であった。

×
いくらいやがっても、カードに検尿、検便済みの、私のサインがなければ客席には出られないのだから仕方がない、女の子たちは、自分の体から排泄したものを私に手渡す義務が課せられているのだ。

検尿日に当った女の子は、特定のガラス容器にその日の朝一番はじめに出た尿をとって事務所の私の机の上に自分で提出することになっていった。女の子たちは全員合宿寮に入っていたので、ガラス容器を回収するのは楽だったが中にはうっかりして朝トイレに行つて尿を取り忘れる子もあった。その場合は、処罰の意味を含めて私の室へ呼び出して、ガラス容器に放出させるのが常だった。

「ヨシ。今度から忘れちゃいけないヨ」

私は、職務柄、まじめな顔つきで一ぱいに満たされたガラス容器を受取るや、女の子の退室を許すのだった。

×
今体から出されたばかりのそれは、さながら香ばしい香気を放つ聖なる酒とでも形容したらいだらうか、ガラス越しに掌に伝わる温かみも快よく、一見ビールのような表情で

私に迫るのだった。

ビールといったが、その味は、あんなビールのようになど水っぽい、にがいばかりのものとは比較にならぬ神秘的な深い味をたゝえて、私に満足を与えてくれるのだ。

×
そして、それは今からだから出たばかりの温かいものほど旨く、時がたち、冷えてしまふと、香気も落ち急激に味が変わるのである。一度私は、医師に渡し忘れたそれを一夜おいて口にしてみたことがあったが、それはスツカリ変味し、濁りを帯び、悪臭さえ放つて、私をガツカリさせた。

×
検尿には、試験管に半分もあれば充分なので、彼女たちから受け取ったなかみの大部分は、私の自由になるのだった。

スグに呑み干してしまうのは、いかにも惜しく、私はためつすがめつ、それを眼で愛撫し、香気をかき陽の光にあてゝ、黄金色に照り映えるそれを飽かず凝視する。

どうしてこうまで美しいのだろうか。私はコップに移したそれをソツと唇にふれて味わうのが常だった。

×
同じものでありながら、それらは、その人々により味には大分差異があるものである。殆ど水のように無色透明なくせに、含むとピリツと舌を刺戟するA子のもの。

A子というのは、小柄な神経質な美しい女

性で、無口、キチヨウメンな性格とみえて尿を取り忘れてくるようなことは一度もなかったが、なかったらなかったで、私は何とかナマのものを一度味わってみたい欲望を押えることができなかった。

×
A子のそれに対する私の欲望を満足させるために、私はあるとき、A子を室へ呼んだことがある。

「検尿の結果、君には腎臓病の疑いがあると医師が云つてきたから、モウ一度こゝで尿を取るように。」

私が命ずると、
「困りましたわ、私、いま出たくないんですの」
とA子。

「そうか、じゃトイレへ行きたくなったらモウ一度来るんだよ」
わざと一応室へ帰らせた。

ものゝ一時間もすると、案の定、A子が私の室へ来て、

「トイレ、行きたいんですの……」
小声でいうのである。

体質というのであろうか。

やはり美しく澄んだ、白湯のようであり、そしてピリツと舌を刺す深い味をたゝえていた。たゞ意外なことは、外見に似ず、A子のそれは悪臭にちかい高い臭いを放つのが特色

と思えるのだった。

× B子は、みんなのなかで最も若く、十八才というまだ女学生らしさの抜けない、色の白い美しい子だった。

A子と対照的にB子には私はいつも手こずらされた。

ルーズの性格といおうか、検尿日にも自分からガラス容器に取って来たことは一べんもなく、いつもあわてゝ時間一ぱいに私の室へ来て、まるでトイレで用を済ませたかのような動作で、ガラス容器はそのまゝに平然と室を出てゆくのだった。

× たゞB子のそれは、私にとっては最も旨く感ぜられた。

ほのかなにがみと、からみが適度にミックスされ、美しい黄金色に澄み切ったそれは、一きわたかい香気を放って、私を魅了せずにはおかなかった。あわて、放出するものだから、いつもひどく泡立ち、その泡の味が、また何ともいえずコクがあり、口のなかに軽くひろがるその口あたりのよさは、こよなく私を楽しませてくれるのだった。

× その色も十人十色、濃いのもあれば薄いのもあり、塩っぱいもの、苦いもの、甘味をもつものと色々だった。

甘味不足の当時のことゝて、菓子やコーヒの甘味にはサッカリンが巾をきかせており、サッカリンを食べた子のそれには、体に入っても分解されない、サッカリン特有の味がハッキリ感ぜられるのも面白かった。

× ニンニク、ラッキョーのような匂いのつよいものもそのまゝ尿のなかに混ざり、私の舌を刺戟するのだった。

クレオソートやアルバジルなど薬品類を飲んだ子のそれにも、翌朝のものには必ず匂いと味でそれと察せられるのだった。

× 私は、このひそかなたのしみにも、そこは人間のこと、次第に新鮮味を感じなくなつて来ていたのは事実だった。

だから、新鮮味をつよめる目的で、色々と手を加え、女の子の顔を思い浮べなどしながら、日々味つたのだが、回を重ねるに従ってたとえば、体臭が人各々によって差異あるように、彼女たちのそれにも、各自特有の味と香りを識別できるようになったのは自分ながら進歩だと思われた。

なぜ、人の持たぬ好奇心を自分ももつてゐるのかと、ときには悩むこともあったが、今となつては、とてもこの趣味からは抜け出せそうもなかった。

たゞつけ加えておきたいことは、それらを味うと、あとにいつの間にか舌の先に、僅か

であるが、アムモニアの臭いが残り、一日中深呼吸をする毎に、のどの奥を刺戟するのである。

舌に残る塩気とアムモニア臭は私の心身に適度のシゲキを与え、一日の生活をユカイにしてくれるのだった。

つまり、いつの間にか酒飲みが、酒にとらえられて、毎日のように味わないといわれなくなるように、私も、彼女たちのそれに、いつの間にか捉えられ、ちようど酒か、タバコか甘いものゝように、口にせずには、いられなくなったのだった。

ところが、いつのころからか、私の心のかに、モウひとつの性癖が育ちはじめたのである。実は、私自身そのことに気づいたのは、大分たつてからだった。

心理的にいって、尿なら未だ不潔感も軽く語る私も気が楽だし、読者のみなさんも、眉をあまりひそめずとも読み進んで頂けるであろうが、固体のはなしとなると一寸かんたんにはゆかないようだ。

しかし私は語らねばならない。ありのまゝを述べなければ告白の意味がない。

× 左様、思い切って告白のペンを進めよう。はじめの頃は、いくらなんでもと不潔感が先に立って、念頭には浮かべながらもためら

い、自制してきつゝあつた私は、こゝまで来ると、自分の情感を抑制することが次第に困難を感じてきたことをこゝに卒直に告白せねばならない。

決心がつけば、それは甚だ簡単だった。

私のあこがれのものを入手するには、彼女たちの週二回の検便のチャンスを利用すればよいのではないか。

しかも、ガラス容器の場合とちがって、相手が固体だから、もてあそぶには、却って都合であり、たとえば自宅へひそかに持帰って賞味することも可能だし、口に入れるところを人に見られても感づかれる心配はなく、公然と楽しめるではないか。私はしだいに、彼女たちの固形物への興味の深まりゆく自分を感じたのだった。

それはマツチ箱大のボール箱に、小指くらいの分量が納められて、毎朝、私の机に届けられるのだった。

面白いもので机に積まれたそれらの箱は時の経つにつれて妙な臭いを発散させて私に挑んでくるのである。

はじめは、イヤな臭いだなど、いさゝか面くらっていた私も、毎日それを扱っている内にいつしか臭いが苦にならぬどころか、その香りをかきないと、なんだか心淋しくていられないような心地になってしまっていた。

それまでは、受取った箱をそのまま医師に渡していたのだったが、ある日のこと例のA子のを目にすると、妙な愛着を感じて、ソツと箱をあけ、なかみをのぞいてしまった。

×

A子のそれは、コチ／＼に固まり、あおぐろい、つやがかった光沢をもち、コロリとする感じで、落し紙に大事そうに包まれている。キチヨウ面なA子らしい心づかいがしのばれてほゞえましかった。

蓋をあけ、A子のそれを見てしまったときから、私はコブログニストとして一歩前進した自分を見出すのである。

A子のそれに対して、私は谷崎潤一郎の作品にある、侍従と同じ行為を、夢中でしてしまったのである。

—美しい身分のたかいひとに恋し、その恋がいれられないと知りつゝ、あきらめられずせめて、そのひとの身体から出たものでも見たならば、おのれの恋の心も消えるであろうと考へ、あえてその美しいひとのものを口にしたあの侍従の心は、ひとごとゝおもえないのであった。

舌先に来るにがい味は、尿のときとちがって猛烈と形容してよいほどのものであり、口のなか一ぱいにひろがる悪臭もまた一だんと強烈だった。

戦りつが私の身体のなかを吹きぬけ、もう

何事も考えられなかった。

舌ざわりはチヨコレート、と形容したらよいか、なにか凄くにかい、粘っこい、くさいものが、のどをめぐり、火花をちらして私の口のなかを暴れ狂った感じだった。

何という刺激、痛さに似た快感、舌は淡さにもつれ、しびれる感じだった。

そして、何か大それた人倫の道を外れたその行為から起る罪悪感にせめさいなまれる心地だった。

おそらく、A子の処女性をうばった男はあつても、こうした方法で、A子を所有しつつした男はない筈だ。私はA子に負けて、A子に勝った！ そんな感じだった。

×

これも尿と同じく、前日のたべ物がソックリ出てくるのである。

消化されなかった、焼いもの焦げた皮、人参のセシイ、グリーンピースや大豆が丸ごとのまゝ混入されていたこともあった。

かと思うと、きたない話だが、回虫がグロな恰好で、あたまを出しているのもあった。

興のおもむくまゝに、私は自分の氣に入つた女の子であつたら、丸ごと出た大豆を自分の歯でかみしめたりした。

(こいつが、かあいゝ彼女の唇からのど、食道、胃と体の内面を一回りし、やがて腸から排泄口までの長い道中をして出てきたものな

んだな)

出て来た大豆を水で洗い、しみじみと眺め
もしたものであった。

夏になると、消化されないトマトの皮が誰
のにも入っていた。ピーナツもあった。

黒い小さなかたまりを、何だろうと嚙んで
みたら、それはゴマだった。それらはみんな
彼女たちのからだをくまなくめぐり、体温で
あたためられ、何ともいえない味と化して、
私の賞味を待っているのだ。しかも、出した
本人の目の前で、その大豆を私が食べたとし
ても、本人はこれを夢にも知らないとは何と
も面白いことではないだろうか、誰しもある
がけない楽しみは、私を有頂天にさせた。私
は幸福だった。

ところが、あとで判ったことであるが、私
のひそかなたのしみを、B子とはつくに看破
していたのだということだった。

それは、私が、ある日のこと、B子の液体
を楽しんでいるところを彼女は窓ガラス越し
に見てしまい、六十人の中で彼女だけは私の
秘密をつかんでしまったのだというのだ。

終業後、私の室を襲った彼女から、その事
実をつき込まれ、一言の返事も出来ず当惑し
ている私に、

「いゝのよ、私、誰にも云わない」

彼女はそう云い、それだけでなく進んで私

を楽しませてくれるようになったのは、却っ
て私にはとっては幸せなことだった。

「私、部長さんの気持よく判るわ、」

生意気にもそう云う。なんでも彼女がこの
キヤバレーに来るまでつとめて来た美容院の
マスターというのが、私と同じコプロ趣味者
らしく、それに仕込まれたというのである。

なるほど、そういう訓練を経てきただけあ
って、私の趣味をよく理解し、進んで、私の
ためにその希求することを果してくれたのは
何よりだった。

そのマスター氏は、私以上の人らしく、彼
女のからだから出るものは何でも歓迎という
はげしさだったそうだった。

このB子との交際の体験については改めて
詳しくお話ししたいと思っている。

さて、こうして、約一年間殆ど一日の休み
もなく私は、彼女たちのものを口にして来
た。その間、多少の心配と申せば、まず病氣
に対する恐怖だった。

口にすべからざるものを口にするために起
るであろう肉体的上の障害、或いは又病菌によ
る罹病も考えたが、これは案ずることもなく
全然影響がなかった。

消化した果てのものだから、これをいかほ
ど摂っても、再び消化器を煩すこともなく、
体外に出てゆくのではないだろうか。

といっても、一部の人にいわれているよう

に、これには格別ホルモンがあるというほど
のものでもないようだ。

たゞ、当時私は妻子を山形市においたまゝ
独身生活を送っていた、三十四才という壮年
の男が、一年近くも女に接さず、そして自分
自身何の淋しさもなく過したということは、
こうしたコプロ趣味の賜もので、本来の性慾
がきつくセーブされたと思われるのである。
その間、たゞ女の子たちの食欲のはてのもの
につかれていた私に、やがてひとつの転機が
来た。

それは部隊の移動によって経営が立たなく
なり、キヤバレーは閉鎖、全員解散というこ
とによって、自分自身、いったいどうなるこ
とかと思っていたコプロ趣味にも一応終止符
が打たれたことであつた。

私は体験から思う。

別に奨励する意図もないが、この趣味を一
がいに悪趣味として排撃する必要もなければ
この世界に遊ぶ人々を背徳者としてせめる必
要はないということである。

マゾの変形としての、軽い程度のコプロ趣
味なら格別他人に迷惑を及ぼすこともあるず
いと思われる。

赤線区域の女の子あたりに聞いても、この
趣味の人は案外に多いらしいし、しかもこの
要求をイヤがる女の子というのは殆どいない
というの面白い事実である。

(終)

完全なる隷属



坂田信治

戦争は益々苛烈を極め、私達の生活も次第に苦しくなつてゆきました。そして父は或る些細な闇の運搬をやつた為、暫く家を空けて警察に引張られました。その事は私達にとつて、大きな変化を齎す事になったのでした。その頃の刑事の取調べは、充分皆さんも御存知でしょう。父は見るも無残な姿で戻つて来ました。あの威厳に満ちた父が、刑事達の激しい打撃を受けて、裏れた恰好で私の前に現われた、私の胸は痛わしきで潰れるばかりでした。然し父の眼には、且てない残忍な、兇暴な表情が溢れて居りました。それは酷薄な刑事達に対する、憤懣やる方ない憎しみであつたのでしよう。然しそれ以来、父からは優しさは総て消え去り、激しい兇暴さと鬱々た

る沈黙のみでありました。そして私に対する感情も、冷たく荒々しいものと変り、且無關心な態度で、夜も殆ど酒を浴びる程飲むか、帰つて来ない日が続くようになったのです。父はすっかりさみ切つてしまいました。私は些細な事で、父から激し毆られる機会は、益々増えて行つたのです。そして私の身体には生傷の絶える事なく、そろそろ近所の評判にも、なりかかつて来ました。既に婆やは居らず、家政婦が昼間来るだけで、私は一人淋しく寝る夜は、父のこののみを頭に浮べ、眠りに落ちるのでした。

「おい、開ける。」
まぎれもない、太い濁つた父の声です。私はあたふたと起きると、急いで捻子を廻しました。酒臭い父の大きな身体が這入つて来ました。最早酔つては居りませんが、座つた眼には暗い酷薄な表情が浮かんで居りました。どつかと座つた父は、顎をしやくります。それは私に長靴を脱がせろという合図なのでした。私は恐々踞んで、父の足元に蹲まりました。父は重たげに足を上げます。私は両手で踵をしっかりと掴んで引張ります。然しぴりたり造られた長靴は、脹脛に密着して仲々脱げないのです。

「もたもたするな。この野郎。」
父はいつの間にか鞭を靴の間から抜き出し

て、ピシリと私の首筋に一撃を加えます。私は必死になって靴を引張りました。スポンと音がして、私は尻餅をつきました。

「痛え、痛えじやねえか、いつなったらうまく脱がせる様になるんだ。」

父は私の手を狙って、鋭い鞭を打ちおろすのでした。痺れるような疼痛が、身体を駆け抜けました。そして両足の靴を脱がせるだけで、私は少くとも四五発の鞭を身体の何処かに受けないわけには行かないのでした。

父は寝室に歩いて行きました。激しい怒声が落ちて来ます。

「信治、てめえは一体何をしているんだ。」
私には父の怒りが、奈辺にあるのか想像も付きません。

「てめえは、親父が帰って来るのが判っていて、床も敷いて置かねえ了見か。何だこのざまは、なめるんじやねえ。」

「お父さん、御免下さい。直ぐ敷きます。」
私は慌てて、襖の引手に手を懸けました。

「ふざけるな。」

父は足を上げて、私の足を払いました。私はどっと足元に転りました。父の左足は私の腹に、しっかりと踏み付けられて居ります。「おかしくって、俺の床など敷けねえって云うのか。」

父は身を屈めると、私の身体から寝巻を、下衣を手荒にとりのけ、うつ伏せにすると、

改めて腰の上にどつかと左足を、据えて踏んまえました。何べんもない折檻に、私は馴れたとは云うものの、新たな恐怖は潮の様にどつと押寄せました。

「てめえは馬と交ねえな、一寸甘い顔をすると、すぐつけあがりやがって、矢張り痛い眼に会わねえと、判らないか。」

ああ、又しても鞭は唸りを生じて、私の身体を噛み始めました。そしてそれは父の癖なのでしようか、馬と同じ様に私に対しても臀と腿とを主として鞭を当てるのでした。私は激しい悲鳴を挙げました。その苦痛は、何度受けても絶えられない痛さなのでした。

不意に、誰か私の家へ這入り込んで来ました。隣人の善良そうな、老人でした。彼は父の後から、振上げる鞭の手をしっかりと抑えました。

「坂田さん、止さないか。」

父はびっくりして振向きしました。父と老人は向き合いました。

「何で、止める？」

「ねえ、坂田さん、わたしはもう以前から云おう云おうと思つて居ったんだが、今日はたまり兼ねて上り込んだ。まだ頑ぜない子供をそんなに折檻して恥しいと思わないのかい。そりやその子供は、お前さんの子じやないか。も知れないが、そんなにこつびどく叩いて、どうなるていうんだい。近所でもこの子を可

愛そうだと云うし、わしだってこの子が泣き叫ぶのを、聞くのはたまらないんだよ。ね、頼むから、ひどく殴るのは止して呉れないか。」

「何でい、てめえは、俺が自分の子供をどうしようと、勝手じやねえか。こいはは土性骨が曲っているから、叩き直してやろうとしてゐるのに、横からがたがた勝手な口を出しやがって、何でい、大体、てめえは、何の権利があつて、人の家へのこのこ上つて来やがったんだ。さあ、帰って貰おうじやないか。」
「わしは、今日はもう我慢がならない。これ以上、お前さんがこの子を折檻するなら、警察にでも届けるよ。」

私は父がやられているのを見て、激しい憤りを感じ始めたのです。私は立上つて、寝巻を着けると、

「お爺さんの馬鹿、帰れ、帰れよ。」

と云い乍ら、激しく拳をふり上げて、その男に打ちかかりました。彼は飽気に取られて云いました。

「おや、お前は、あんなに親爺にやられて、少しも憎んではないのか。こりや、驚いた。」

「僕のお父さんの事を、何とか云うと承知しないぞ。」

私は云い乍らその声は嗚咽に変わって、父の懷に飛込んで行きました。父は轟と私を、広

い胸の中に抱きしめました。老人は、その意外な結果に去って行きました。

「信治。」

父は抱きかかえると、その伸びた髪面に私の頬をこすりつけ、激しい頬ずりを浴びせかけるのでした。私の心には熱いものがこみ上げました。涙が私の顔と、父の顔との間を流れて行きました。

然し、それは父にとって気まぐれな、愛情でしか有り得ないものでした。確かにその瞬間は父は私を、可愛い奴だと思ったかも知れません。それよりも父の心を支配したのは、虐待することに依って得るある種の快樂であったと思います。父の折檻は益々手の込んだものとなり、私の立てる悲鳴に確かに快感を感じているに相違ないものでした。つまり父はサディストとして完成したのです。成程父は私以外の、例えば馬、馬車曳の男達の間では絶対の支配者でしたから、私に対しても充分その権力を振う事は、不思議なことではないかも知れません。然し父は今迄私に対して総てを許して、愛を傾けて居たにも拘らず、それと全く反対の行為で酬いても、私は恨むどころか一層父を慕うという事は、堪えられない屈辱だったとも想像されます。父の力を用いて屈服させるもの、それは総てが力を以て対抗し、力と力との争いで敵を振じ伏せることに、勝利者としての愉悅があったのに、

殴つても叩いても、決して反抗しない私に憤ろしい反撥を感じ、サディストとしての暴力を加え、何とかして私をして父を恨ませることに賭けて居たに違ひありません。然し私は完全に父に隷属していました。どんなに痛み傷けられても、最早憎悪の感情を湧き立たせることは、全く不可能なのでした。

私は愛しました。父は憎みました。そして血みどろな闘いは果もなく続けられました。愛すること、憎むこと、それは全く反対の事象であり乍ら、実は相隣り合うことを、醜氣にも私は感じて居りました。サディスト、マゾヒストも亦、相反する行為であるのに、全く同一の目標に向って驀進して止まないという事も、同様なことでありましょう。私の身体は飽く事のない父の責に、見るも無残な姿に変わり果て、瘦せ細った顔には大きな眼だけがキラキラ光る、異様な少年に成長して行きました。

戦局は益々熾烈を極め、空襲の惨禍は次第にその地域を拡めつつ、昭和二十年の年は明けました。そして私達の破局も、近付きつつあったのです。不自由な食生活、益々凄惨を加える父の責、私は最早半病人の様な姿で生きて居ました。確かにそれは生きている、息だけをしているといった状態でした。

春の薄い霞の中に淡い太陽は沈んで行きます。私は眼に涙を浮べて、七輪に燃え付かな

い薪を、一生懸命に吹き付けていました。家政婦も去り、総ての家事は私の手に依って行われねばならぬのでした。一握りの米、夥しい大豆、それが私達に与えられた食物でした。年端の行かない私が行う炊事など、凡そ哀れなものでした。父は殆どよそで食事を取り、私一人みじめな、まるで鶏の餌にも劣る食事をしなければならぬのでした。父が居なければ、私は死ぬか家出をしたでしょう。然し私の心には、父に対する思慕の燈が消える事なく、燃え盛っていたのです。路地に、疲れた足音が響きます。父が帰って来たのです。私は無言で立ち上りました。氷の様に冷たい父の眼が、私に注ぎます。父への奉仕、長靴を脱がせ、ズボンを脱がせ、私は父の怒声を聞き、打撃に足元に転びます。最早私は悲鳴一つ挙げません。父も飽きた様に、唯邪慳にすることが、恰ももう長い習慣であるかのように、素気なく振舞うのでした。父は押入をごそごそやって、何かを探して居ます。「おい、てめえ、襦は洗ってあるか。おい洗ってあるのか。」

私は無言で立ち続けて居ります。父の潔癖は相変らずなのです。

「てめえ、忘れやがったんだな。」

その時突然鋭くサイレンが咆哮しました。空襲警報が鳴渡ったのです。父は素早く電燈を消しました。淡い月の光が窓から射込んで

二人の横顔を照しました。

「兎も角、ズボンを穿かせろ。」

父は、冷たく云い放ち、何か新聞の包みを開いて居りました。私は踞り、馴れた動作で再びズボンを父に穿かせるのでした。

「一寸見な。」

父は、包の中から取出したものの、あゝ又しても革鞭なのでした。

「これは何だか知って居るか。今日俺の乾分が造兵廠から手に入れて来たんだ。これはな、輻重兵が輓馬に使う鞭だ。名前はな、驂馬鞭って云うんだ。よく見な、こいつは一寸きけるぞ。どうだ、今日の罰は、これで果してやるぞ。こいつを馬のけつに当てりや馬の厚い皮膚でもこたえる。てめえも今日こそは、思ひ切りひいひい云わせてやるぞ。」

父はその革紐の腕貫に右手を通すと、じつかりとその極で出来た、長さ四、五十種の太い柄の下端を握りました。その尖は革で包含され、其処を通って先に次第に細くなった一米程の栗色の鞭索が、蛇の様に畳の上を這っているのです。それは馬を殴る為に、入念に仕上げられた、峻厳な革鞭でした。

「裸になれ。」

父は、それを空に振り、鞭尖はパシッと音を立てて、畳の上に鳴りました。突然轟々たる爆音が、微かに聞えました。私は震え乍ら裸になり、手馴れた手付で、自分を縄で柱に

背中を、前にして縛り上げ、無言で腕を上げました。残忍な眼付が、私の背後に感じられ鞭は風をきって私の尻へ噛み付きました。ああその苦痛、それは鯨芯入りの乗馬鞭とは、比較にならない程強烈な痛みでした。一米にも及ぶ軟かい鞭索は、私の尻を斜めに上から下迄一時に過ぎり巻き付きました。そしてぐわっと眼から火の飛び出る様な瞬間と、途端に真黒な闇に落ちて行く意識が交差して、焼ける様な激痛が、脳髓へ駆け昇って来るのでした。私は眼を父の方へ振り向けました。兇暴な顔貌に、征服者、支配者としての権化がありました。私の眼には、再び振り上げる遅い父の腕が映りました。途端夕立の来たような、ザアザアと云う不気味な音と一緒に、辺りは俄かに黄色の明さになりました。父は慌てて私を解き、玄関へ出ました。

私は服を着けて、父に従いました。外へ出ると、花火の様に美しい、光芒が雨の様に降り注ぎ、異様な音の中に爆音が響きました。そしてそれは近付き、私は父の手をしっかりと握って、震え続けました。遂に光の雨は私達の近所に落下し、忽ち炎え拡がり、父は私を引擦る様にして逃しました。拍車が騒しく鳴り、長靴は軋りました。私達はいつか、人の満ち溢れる大通りに出ていました。避難者達は先を争って、罵り会ひ、泣き叫びながら駆け続けました。

「信治、しっかりしろ。」

父は逞しい声を掛けました。赤い空に照らされた鬼の様な、父の顔には威容と、引緊った顔の筋肉が、神々しい程美しく私には見えませんでした。

どっと、火の粉を吹いて道の傍の家が焼け落ち、重り合う人々の頭にかぶさりました。阿鼻叫喚の聲は轟き渡りました。その人ごみに押された瞬間私の手は父から放れました。「お父さん。」

私は全身から叫びました。黒い革の長靴と拍車が一瞬、僅かな空間に隠れし、忽ち消えました。又しても火の柱が落ち懸り、果もない叫声は起り、激しい火災の煙の中に、遂に私は父を見失い、私は人々に押されて父の名を絶叫し乍ら歩いて行きました。そのとき、私は十五才でした。

(第一部完)

【読者通信】

拝啓、寄ク四月号、本日有難く入手いたしました。待ちに待った本誌を手にした嬉しさと共に、しみじみと編集部の皆様方の御努力が胸にしみました。尙、景品の写真、有難うございました。これからも、吾々アブファンの為、力強く本誌の発行をすゝめて行かれん事を御祈りしています。 草々

(東京 真木 昭)



戦慄怪談屋敷

「緊縛された美人の責場を観る」

岸 本 青 柳

今から二十数年以前、支那事変が始まって日本軍が南京へ指して連戦連勝、破竹の進撃を続けている頃であった。私は二、三の友人と共に納涼を兼ねての町の近くへ散歩に立ち出た。其処には真夏の夜の夢ではなくて、真正銘の美しい娘ばかり十数人も縛られている物凄い見世物を観た。葉ッ葉座主催の「戦慄の怪談屋敷」という大看板を換げた仮設演劇場である。文字通り一寸見たゞけでも肌粟を生ずる画看板には、歌舞伎で観る有名な責め場の実演場面のみだった。演劇場は自然の風景を借用した藪潜りである。表の群衆の中から血気盛りの男は素より、少し勝氣の娘達は我れもくと押すなくで、その怪談

屋敷へ吸い込まれて行くのであった。

この一座の演劇場は三方は山に囲繞せられ正面表側は、道路に面して檜の生垣を繞らした四百余坪の相当広い、草薙々たる住宅建設予定地で、この土地は二、三年前から毎年の夏期には、植木市が催される空地である。今年も土地の和泉某という植木屋さんがこの土地を借用に及んで、茲数週間後に恒例の植木市を開くというので、既に杉、松、檜、紅葉、柳、さつまいも、霧島、黒竹など種々の草木を仮植して準備に取りかゝっていた。夫れに臨時的に数ヶ所に竹藪を造って、夏の夜の納涼客を誘致、併せて試胆会を開くというのが勧進元の触れ込みであったが、誠に恰好な化

物屋敷ではある。

私達の観劇したのは、開演後四日目の晩ではあったが、既に木戸口には大入満員御礼の紙ビラが貼られていた。木戸口をわざとらしく、僅かに八燭の青い電燈一個だけで、上部を蓮の葉で蔽い、下だけ微かな光さすのみの薄気味悪い狭い木戸口である。ソコでこの化物屋敷へ這入るには相当の糞度胸がいる。若い男達は面白半分、群がっている妙齡の娘達に、躍氣となって恐怖心を煽っていたが思い切りよく入場する娘達も相当にあつた。一つは群衆心理、一つは好奇心に駆られて数十名の若い男女が、次ぎぐに入場して行く。表の群衆は増すばかりで、大人気を博してい

た。中には若い男が、怖がる娘の手を引ッ張ったり、背後から押したり、無理矢理に娘達を、先頭に立たして、ガヤ／＼騒ぎながら入場する者もあった。表の方の騒々しさに引つかえ、場内は比較的森閑としていた。時々キヤツ／＼という娘の金切声が場外へ洩れて来るくらいであった。私達は友人と共に猟奇心に駆られ、知らず識らず何時か、狭い戸木口を潜っていた。

お菊井戸の怪

この仮設演劇場は間口二十間、奥行二十余間、略ぼ正方形の住宅建設地であり、自然の背景を借用したもので、建物は極く少なく、殆んどは自然の樹木を利用している。木戸口には形ばかりの机と椅子とを一脚づゝ並べ、木戸銭取兼案内係の四十歳を越した位の赫ら顔な肥満した、見るからに頑強らしい一人の男が黙じ鉢巻で「入らっしゃい／＼、評判の化物屋敷はコチラで御座い！」と大声を張り上げ、汗ダクで頻りに客を呼んでいる。其の右側に表看板としての「お菊井戸」との貼り紙した空井戸がある。後で聞いた話ではあるが、この井戸の深さ七尺、底には高さ二尺の踏台と椅子とを設け、お菊の休憩室にしているという、牡蠣や青海苔の附着した壊われた船底板を四角に組んで、高さ二尺位の井桁にして古井戸を連想せしめる。その脇に植木屋

が手入れした太い柳と、相当胴廻りのある門冠りの松の樹が植えてある。勿論植木市の出品には相違ない、その松の樹の一番太い枝から、一本の棕櫚縄が古井戸の中に下っている。暫らくすると、その縄が下に引かれると古井戸の中から、島田髷も散ンバラ髪となり長い漆黒の髪が、顔から両肩一面に、蔽い冠さって、紫矢絁の袷の着物に黒縹子の帯を後に長く垂らし、両手を高手小手に後ろ手に縛り上げられ、更に別の細縄で幾重にも縛られ蒼青な顔に眼を釣り上げ、恨めし相な物凄いはど美しくした二十歳前後の娘がチリ／＼吊り上げられてくる。両足をバタ付かせる毎に、緋鹿の子絞りの長繻絹のスソと、緋の蹴出しが捲られクツキリ雪のような両足が伸びたり縮んだりして、長い袂が揺れる、観衆は片嚙を呑んで、この物凄なお菊の責められている凄相を凝視している。何れもが度胆を抜かれた様子だった。がこの吊り責めは僅か五分間位で再びお菊は井戸の中へ吊り下げられ、姿が見えなくなった。当の吊り責めされたお菊は井戸の中で、縄を解いて貰って椅子に腰かけて休憩する。この実演を一時間に二回繰り返し、活きた看板娘の辛い宣伝役を振り当てられていた。観衆は容易に去りそうもなかった。

宗吾大明神

木戸口の左側に、檜、杉、松の樹木に囲まれた林の中に、赤いお霊代のお稲荷さんに似寄って、新しい神社をお祀りしている。神殿前の赤塗りの高さ一間余の木の鳥居の両脇に「宗吾大明神」と太文字で記した赤、黄、白、桃、紫と色とり／＼の乳付幟が数本立て並べ、神殿正面鏡の前に紅白の大福餅、お神酒、お米、鮮魚、野菜類など海のもの山のもの七、八台の三宝に乗せて献饌していた。また鳥居を潜ったところの大きな賽銭箱には、お米や、一銭、五銭、十銭の銅貨、たまには五十銭銀貨も交って投げ込まれていた。概して斯様な化物屋敷を観せる勧進元が、先ず縁起を担ぐ風習から、茲に宗吾大明神をお祀りして居るのだとも叮嚀に説明を加えられていた。祭神は問うまでもなく、義民木内宗吾（歌舞伎では佐倉宗五郎）の霊を恭々しくお祀りしているのであろうと推量した。曰く因縁を知らずに、善男善女が合掌してお詣りしているのも、一人や二人ではなかったのである。

陰鬱な杜の中

モリ

当時諸物価の廉い頃ではあったが、夫れでも大枚五十銭と云えば相当に高い観覧料（入場料と書いていた）を投げ出し、木片の番号札を受取り場内に入った。場内は自然の風景に植木屋の加工した陰鬱な杜の中であった。

木戸口から少々離れた所に、幅五尺ほどの溪流を造り、滝や噴水を上水道から流れ出ている。奥の方から幽かなコト／＼と薄気味悪い水車の廻転する音が聞えて来る。自然の秋葉山の森の間から、蓄音器仕懸けであらう一羽の鳥が、間断なく「カア／＼」と啼き続けている。手前に幅の狭隘なお粗末な土橋が架り、一人々々づゝその橋を渡って行く、四面は寂寞として涼味を咬る景色を見せている。土橋の袂に「試胆橋」と書いていたのには勧進元の頭脳も、相当なものだなアなど、妙なところで、独り感心させられた。

その土橋を怖々渡って、いよいよ看板通りの怪談屋敷に足を踏み入れた途端、自から胸の当りの動揺の稍々激しくなっているのを覚えて出した。観客と云えば誰一人として声を発する者もなく、蓬々の草ッ原を縫って左方へ廻って行く、土橋からこの辺りまでは点々と青い電燈の光が、薄ボンヤリ通路を照らしているのみだった。

孕み女の逆吊り

林というよりも、森といった方が真実性の帯びた、コンモリ繁った森の中に、殊更破れかゝった杉皮屋根の二坪ほどの一軒の汚らしい古家が見える。左右を形ばかりの板張り内部も煤った壁紙、正面壁際の障子も名ばかりの古びた破れ障子に、中央の罫垣裏の上に

自在鍋を懸け、脂松の青葉を燦べている。如何にも古い田舎の百姓家を思わせている。畳といつても所々浄瑠璃本の紙片を貼った、破れ畳と板間との合いの子床、右端に白髪頭の見るからに意地悪婆アが双肌脱ぎで出歯庖丁をゴシ／＼磨いている。天井から赤い紫陽模様の長繻絆に、桃色の扱帯をダラリ前に垂らし、両手を後ろ手に緊く縛り上げられ、口に絞り古手拭で猿轡を嵌められ、長い黒髪を殆んど畳の上に着かんばかりの、孕み女が逆さまに吊り下げられていた。観客は一齊に、「アッ」と嘆声を洩らし、一種異様な眼差しで、逆さまに吊り下げられた孕み女の惨虐な姿を凝視した。私達はこの女が孕んでいるというのを、娘達の観客から聞いたことで実際に孕んでいるかどうかは少しも知らなかったのは事実だ、女を見るのは矢張り同じ女に限ると考えさせられた。この場面は有名な「奥州安達ヶ原の一つ家」の実演だと側の立札に細字で、詳しい説明が書いてあるのを読む暇もなく、黒幕が下され、薄暗い電燈が消された。この実演僅かの瞬間ではあったが相当長い時間が経過したようにも思われた。

仮令一時間に一、二回程度の実演だと云われても、妊娠二ヶ月の女が、この虐待に堪えるには、女優の身では、相当苦痛だろうと、友人に話かけて、同意を求めたところ、友人も亦その惨虐振りには呆然として、云うとこ

ろを知らなかったらしく、ウンと頷いていた。兎に角戦慄すべき惨虐振りを遺憾なく發揮して、観客の心胆を寒からしめた、と同時に私達縛りマニアにとっては、頗る満足感を与えられたのには今猶記憶に残っている。

二人娘の幽霊

この一つ家から十間ほど距てた林間に暗い場内には似ても似つかぬ明るい電燈の光が樹の葉と幹との間を透して隠現している。檜皮葺御殿造りの屋敷が見え出した。近寄ってよく見ると、室内の三方に金屏風を引き廻わし真ん中に浅黄色の蚊帳を吊って、一人の若侍が寝込んでいる。その枕元から少し離れた隅の方を故意と鈍い電燈を入れた岐阜灯燈がブラ下っている。その背後から髪を振り乱した揃いの淡紫地に裾模様の長袖に、朱色の広幅帯をダラリ蒼い顔を、憂いを含んで恨めし気に凝つと蚊帳の中を覗き込んでいる。若い二人の娘が、繊弱い両手を前にブラリ、静かに立っている。よく／＼見張ると脛から下を、黒の薄絹の布で陰してある。幽霊の姿だ、五分間ぐらいで、今まで明るかった電燈が俄かにパツと消された。すると岐阜提燈の光も幽かな青い光に変わり、室内は薄闇となる。立っている二人の娘の幽霊が、両手を静かに上下に動かす、灯燈の明りもパツパツと五、六回点滅する。室外に微かなボーンと余韻を延いて

物寂しい吊鐘が響いて来る。身の毛を慄たせるような、陰鬱な幽霊屋敷を見せた。真夏の夜の夢ではなく、現実の幽霊屋敷だった。その幽霊の実演も僅か十五分間ぐらいで消え室内は元の明るさに蘇っていた。

金閣寺の雪姫

それからズツと離れた山の麓に、秋葉山から流れ落ちる小さな滝がある。遅れ走せの梅雨が上ったものゝ、時々この附近は夕立に見舞われるので、濁ってはいるが少しばかりの水量があり、その小滝の水が場内の東麓を下して、表路の排水溝へ落すよう地盤を固め土を盛ったいわゆる土手を造っている。山裾一面は二間余の高さの岩盤であり、自然の小滝が所々に点在している。その前の中央辺りに数本の松と桜が植えられ、爛漫たる桜花は見られなかったが、茂る青葉の木蔭に肌身を爽快にする涼風が吹いていた。あたり一面は蓬々たる草原で、何の手入れも施してはいなく、自然の儘に放任されている。一番西側の太い桜の根元に、頗る美しく一人の娘が、荒縄で後ろ手に厳しく高小手に縛られ、頻りに身を藻掻いている。観客はその周囲を取り巻いて、美しい娘の縛られた婉めかしい姿に見入っていた。娘は御殿結びの髪にピラ／＼花簪飾り、淡桃色の四ツ菱紋の三紋を置いた、松竹梅を配した裾模様の晴衣裳を付け

牡丹に唐獅子を画いた金襴の広帯の端と長袖を長く地上に曳いて、荒庭の上に座らせられていた。顔は俯向加減で、ハッキリ容貌は判り兼ねたが、「信閣記金閣寺の雪姫」の責め場である。時折り縛られた雪姫は座ったり立ったり、片足を延ばしたり或いは中腰になったり仰向いたり身を「くの字」に藻掻いたりいろ／＼様々な姿態を作って苦悶する人形振り、実に堂に入ったもので観客は飽かず見とれていた。周囲の景色は金閣寺の庭として一寸不向きではあるが、雪姫を中心に二間位の間隔に建てられた、五、六基の紅い絹張り雪洞が、赤電燈の光で、縛られた雪姫の周辺をハッキリ映じさせ、艶麗な雪姫の姿を浮彫の如く見せているが気持の錯覚か地上に映じた、雪姫の影は何だか物淋しさを思わせた。名も知れぬ虫の音があたりの地下から、頻りに細い声で鳴いていた。

この雪姫の責められている濃艶な至芸を演じた、美しい女優の名を聞き洩らしたが、始終物思いに沈んでいる姿は特に印象的であった。茲でも二十分間立ち停って、一般観客と共に観劇した。

累ヶ淵のお岩

縛られた雪姫サクラから凡そ二、三間ほど東南の奥手に、分厚い松板を二枚斜めに並行して、溪流に架けていた板橋の中ほどで、若

侍の与右衛門が、醜い顔の女房お岩を鎌で惨殺する。歌舞伎累ヶ淵の実演であった。一時間五回位演出するとか聞かされたが、実際与右衛門もお岩も二人とも二十歳前後の俳優であった。与右衛門は優男であり、女房お岩は十八、九歳の娘であった。夫与右衛門は黒紋付の着流し、二本棒を差している。お岩は黄八丈の袷に黒帯、侍の妻にしては服装は少しく似合わぬとも思ったが、与右衛門はお岩の後ろから、黒髪を引ッ掴んで殺し文句の科白よろしくあって、いよ／＼惨殺しようとする際どいところで、板橋の両袂に点じていた、春日燈籠の電燈の灯がパツと消えて実演が呆気なく終幕となる。茲でお岩の衣裳は下町風の娘の風体であり、顔は醜いどころか白粉を塗り塗りに、真ッ白に塗っている。殺され際には、少しく右肩を脱ぎ赤い下着を見せ乱れた裾裏の白いハッ掛けを覗かせてはいたが、殺し場としては何だか気抜けの態であったのは物足らなかつた。殊に数度の実演で兩人共に稍々疲労を生じたものか、呼吸もピッタリ合わなかつた。恵まれた自然の背景に反して、役者に真剣味の欠いていたのには期待を裏切られたのであった。

鍋島猫騒動

夫れを後にして少しく下流に沿うて、山麓の二間ほど高い平地のあるところに出た。茲

には杉、檜、松などの植込みを舞台にして、「鍋島猫騒動」との紙ビラを貼った、明るい電燈の下へ吸い寄せられた。この場面には五間ほど四方に、木の枝から枝へ電線を引っ張り、赤、青、緑、白、黄と色とりどりの豆電燈が無数にブラ下っている。その樹間に五つの百燭電燈が、自然の舞台を周囲から皓々と眩しいほど照射していた、中央から少しく奥まった左側に、高島田、紫矢絢の着物に、黒縹子の帯を太鼓に結んだ、御殿女中に扮した二人の若い女優が、揃いの服装で二人ともキラリ懐剣を逆手に構えて、樹の上の大猫を狙っている。猫に化けた一人の大男が瞬く内に地上に飛び降りるや否や、一人の御殿女中に飛び付く、女中は「きゃッ!」と叫び懐剣を放り出し、大猫に噛み付かれ、必死に身を藻掻いて抵抗するが、忽ち其処に崩れるように横倒しになる。これを眺めた他の一人の女中が裾を乱して一散に遁走しようとする。その襟髪を引っ掴んで後ろから大猫に組み附かれ、これも忽ち俯伏せに倒れて、失心状態に陥り長い袈が乱れる。大猫はニヤン／＼と叫びながら、手を振り足を踏み、歓喜の乱舞よろしくあって、十五分間ぐらいて、五つの電燈が消えると同時に、凄儚な実演の幕が下された。観客はホッとしたような面持ちで、次ぎの場面へと流れて行く、このシーンで印象に残っているのは、最初に倒れた女中の神経的

な顔付と、両足の配り方、身体の振り具合は殊に変態的で気に入った。

宗五郎の磔

その西の方へ二、三間ほど進むと、高さ一間ほどの平地になっている山麓に、四方に高さ一丈位の竹矢来を作り、正面中央の太い粗削りの松の木に、宗五郎が大の字型に磔付の極刑に処せられている。宗五郎は白い囚衣を着せられ、散らばら髪等の等身大の人形を用いてあった。その眼前に、三十歳前後と思われる、宗五郎の妻に扮した脊せ気味な女優が、細縄で後ろ手に雁字搦めに縛り上げられ、奴姿の男に、青竹でビシヤ／＼殴られている。女房はと云えば、茶と黒の格子縞に白裏の袷昼夜帯も半ば解け、髪を振り乱してヒィ／＼悲鳴を挙げて身体を前後左右に揺って悶え苦しんでいる。蒼白い一個の電燈、夫れも十六燭光でただ一つのみで、十間四方を照しているのが頼りで、奥の方はハッキリ分り兼ねたほど、真に迫った刑場の惨状を画き出している。この惨劇も僅か十分間位で呆気なく、例に依って例の如く幕となる。幕と云っても別段黒幕を引く訳でもないがただ一つ頼りの電燈を消されては、何一つ見えない真の闇だ、観客をはじめ私達も、モツと長く、モツと強く女房を責め辱んで、女の苦しむ姿を見せて欲しかった。と異口同音に愚痴を洩らすので

あった。だが翻って責められる女の身になってみれば、後ろ手に雁字搦めに縛られ、その上青竹でビシヤ／＼打ち殴られて、ほんとうに責められるのであるから、到底長い間の苦痛には堪えられないだろうとも思われたが、斯うした女の責めは先ず見世物でなければ、衆人環視の前では臆面もなく演ぜられるものではないと善意に解釈を下したのであった。

浦里の雪責め

茲から数間離れた西南の一角、山麓と溪流との接近した五坪程度の草原に、数本の松、杉と並木に植えた、小高い敷地の溪流に沿って、さつき、霧島、紅葉、八ッ手など無数に仮植した平地を舞台に「浦里」と書いた木の札が立てゝある。その草原の中央ところに、半畳余り綿を敷き詰めた上に、赤地に白く大きく牡丹花を散らした長縹緞に、黄の扱帯が前へタラリ下がり、髪型もスッカリ乱れ、顔から頸から、膝の上一面に蔽い、ハッキリその顔も見えなかったが、推定二十五、六歳位の少し肥り気味の女が、細引で幾廻わりにも後ろ手に緊縛され、松の根元に結び付けた縄を長く引っ張り、左足を立膝に俯向いている浦里の艶な姿が、幽かな電燈の灯で照らされていた。時々縛られた身体を、左右に動かし雪責めの苦痛の色を見せていたが、顔がよく判らなかつたのと、先刻から彼方此方と惨虐

な責められている若い女達の実演を観て廻ったのと、余り神経を興奮させたためか、多少疲労を覚え出したので、一寸覗いたのみで最後の実演場へと、足の運びを早めて行った。

播州皿屋敷の実演

浦里雪責めの場から、紅皿、缺血の縛られ責め折檻の場面を一寸覗いたゞけで通り抜け木戸口に程近い、呼び物の播州皿屋敷をユックリ観ることにした。此処は最終の実演場だというので、数十人の観客は轟々と詰め寄せどの顔も、この顔も何れもが緊張し切っていた。二十坪に少し不足するかと思われる草原の前面に、藁を敷き詰め座ってみるようになっている。今まで一時間余も場内の、数種の縛られた女の責め場を観たので、神経も鈍感になっていったようではあったが、この場面が最後だと聞かされて、俄かに神経が自然に興奮して来た。表道路に近く植木市に準備した、いろ／＼の樹木や、美しい灌木類が所狭いまでに、乱雑に仮植してある。丁度その中間にある古い野井戸を可い塩梅に利用して、その上を車井戸とし、井桁には青竹を割った粋な井戸側に造っている。周りは青紫色の百燭の電燈を、五つ六つも立て廻わし、木の枝から枝へと青い豆電燈を張り巡らしてあって、場内での一番明るい自然的舞台を作っている。十四、五分間黙って待っていた。表看板と同

じお菊その儘の島田髷も崩れ、紫矢絛に淡紅の裳裏打った長袖の袴の着物に、黒縹子の帯素足の二十歳位の中肉中背、色白の神経質的なキリツと引締めた面持の頗る美貌の女優（尾上喜久恵嬢）が、麻縄で三重に高手小手に緊縛された濃艶な姿で、白衣に四ツ目菱の黒の縫紋、毛縹子の袴を付け、朱鞘の大小を挟んだ三十歳前後の、これも色白侍姿の男優に引き立てられ、俯向き加減に上手の黒幕の内から現われた。

すると今の今までガヤ／＼騒いでいた大勢の観客が俄かに沈黙したので、辺りは極めて静粛になると同時に、人々の顔には云い合わせたようにサツと緊張味が漲った。後ろ手に緊縛されたお菊は屠所に曳かれる小羊同然、弱々しく俯向きながら、静かに一歩々々づゝ前へ白い足を運んで来る。時々侍に背後から縄尻を強く引張られる。その度毎によろめく體てお菊は車井戸の正面まで曳かれて来ると、突然後ろから柳腰を、イヤというほど強く足蹴にされ、井戸端へどうと前曲りに崩れて地面に倒された。観客はアツと嘆息を洩らす、侍男は、車井戸に下った棕櫚縄を、お菊の後ろから黒縹子の帯の間を通して固く縛る。そして縛られたお菊の身体を徐々に吊り上げる。お菊は吊り上げられて行く間に両足をバタバタさせて緋縹緋の蹴出しがコボれる。一間半ほど高い車井戸の頂天にまで吊り上げ

られて、太い棕櫚縄の端を側の檜の樹に結び付けられるとお菊の上半身は「くの字」型に前へ曲る。頭を左右に振り、両足を上下に動かす、髪も着物も乱れ、顔面を充血さして苦痛の色を現わして来る。男侍は無言の儘吊り上げられたお菊を容赦なく、手にした割竹で尻、足、背中、手首と所嫌わず相当したかに殴り続けるのでその機みにお菊の身体は宙間でグル／＼廻わり長い両袖がヒラ／＼舞う。その惨虐な責めに観客は、ただ片唾を呑み、手に汗握って真剣に凝視していた。この惨酷なお菊の吊り責めは、僅か三分間足らずで、お菊は縛られた儘、井戸の中に引き下された。その瞬間電燈が一時にパツと消されたが十分間あまりも経って、再び電燈が元の通り点され観客はホツと一息を入れた。

今度は庭座席から三尺離れた眼と鼻の間近の草原に、緊縛されたお菊はキチンと前を揃えて座らせられていた。男侍は観客に一礼してニコ／＼顔で黒幕の中に吸い込まれた。入れ代って「菜ッ葉座」の印法被を着た、四十歳前後の肥満した男が現われ、一礼してから「サア皆さん、当劇場もこの播州皿屋敷でお別れで御座います。此処に縛ったお菊を思う存分に責めてやって下さい。お礼に御褒美を差し上げます。」

云々と口上よろしくあって、側に置いた簡単椅子にドツカと腰を据えて、観客席を見廻



体臭日記

狩井麗作

わしている。我れと思わん者はと口には出さぬが、観客は互いに顔を見合わせて薄気味の悪い微笑を堪えている。この時まで気付かなかったが、お菊に扮した女優髪型、服装は同じではあったが、先の女優とは別人の女優であったことは、仰向いた瞬間の容貌を眺めて始めて判った。年齢も身体の恰好も殆んど相似てはいるが、厚化粧した顔付は前に吊り責めされた女優の顔よりも近代的であり、よく映画に現われる尖った神経質的な、これまた頗る美貌の持主であった。暫らく経って粗い茶褐色の立縞の着物を着た、一見旅館の主人公とも見られる女将がツカ／＼と前へ進んで出た。「妾が一つ演らして貰いましょう」と云いながら、侍の放り出していた割竹を振り上げる。お菊はキッとその女将を見上げる。その顔には確かに不安の色が浮かんでいた。両眼は少し釣り上げ、口を固く結び、その艶に婉かしく、恨みを含んだような顔は何とも云えぬ魅力を持っていた。女将は一旦握

った割竹を放り出し、お菊の背後へ廻るや否やお菊の黒髪をムンズと引ッ掴んで引ッ張り廻わす、お菊は味噌摺りのように四、五遍身体を擦じ廻わす、女将は見ている内にお菊の横腹を片足上げて蹴る、お菊はヨロめいて前横にどうと草原に倒れた。今度はお菊の後ろから帯と、縛った細縄との間に割竹を突ッ込んで擦じ廻わした。その度毎にお菊は裾を乱した儘、座り直そうとするが、両手が後ろ手に緊縛されているのと、背後から擦じ廻わされるので、膝前を合やすことも出来ず、緋緋の蹴出しが白い足に絡まり、髪も散ンばら乱れ苦悶に堪え兼ね、冷汗を顔一ぱいに流し半ば泣き顔に変わって来る。それには頓着なく女将は最後に、お菊の胸のあたりを割竹で強く殴き付けた。お菊は仰向けに転倒した儘容易に起き上がれない。女将は始めて顔の汗をハンケチで拭き／＼引き下っていった。緊張し切った観客も亦、茲で緊張の気分が漸やく解かれたのであった。

座付男が石鹼一箱と手拭とを女将の後ろから、「ハイ御褒美！」と差出したが、これには目も呉れず女将は昂奮気味で黙って、元の座席へ戻って行った。斯うしたお菊に加えた観客の責めは、相当長かったようにも思われたが、後で聞くと僅か十分ぐらいだったという。私達はこのお菊の責めの実演を後に表に出てホッと溜息をついたのであった。この菜ッ葉座Ⅱその名付けの根本はと云えば、大根役者にもなれぬ菜ッ葉の謂Ⅱを観劇して、最も興味を惹き且つ今に印象に残っているのは、何と云っても最後の播州皿屋敷のお菊の吊り責めと、観客がお菊に加えた惨忍な責折檻の場面であった。なるほど菜ッ葉座の大評判の場面だけあったと思った。この讀辭は独り私のみではなく、同実演を観た幾百人、幾千人の人々が口を揃えて「良かったなア」との評判を高くしたところを見ても、略ぼ実演は如何なるものであったか想像せられるだろうと思われる。(終)

嚴重な小包の紐を切り、中をひろげると、ブンと甘ずっぱい匂いが溢れて来た。まだ新しいパンティが一着包まれていたのだ。それと角封筒の手紙、水色のレターペーパーに次のように書かれている。
『お約束のもののお送り致します、お会い出来る迄、これを私とお思いになって下さい。恥

しいのですけど、汚れたままお送りします、隆子』

もう三カ月も会わない。この俺が、田舎に引っ込んでからは、隆子の奴、少し薄情になりやがった。確かにそうだ。何だか言い乍ら、会いに来る回数が減り、果ては、代用品で我慢しろ、と来る。大体小生意気な娘だったが、最近、OSとか云うバレー団に入ってから、特にツンとすますようになった。プリマか何かしらないが、ステージでぎに躍っている間に、すっかりいい気になりやがったんだろう。

パンティをひろげると、むっとする程つよい女性特有の匂が鼻に入ってくる。

『これと私とお思いいなつて下さいまし』

ちよっ、馬鹿にするな。犬かなんかに、お下りものを呉れるように、匂だけを嗅がせようたって、そうは間屋が卸すものか。俺がマゾヒストか何かなら、有難うございますと言つて、随喜の涙を流して頂戴するかも知れないが、こっちは、そんなじやないのだ。かつては俺の女で、今だって多分俺の女と云う事になってはいるのだが近代的な美人ともいふべき隆子だったが、今じゃ、俺の他に、男をこしらえてるかも知れないのだ。

だが、このすっぱいような強い匂いを嗅いでると無性になつかしい気が起ってくる。いけない、俺は、うっかり送って来たパン

ティを鼻に押しつけて、隆子を想っていた。あいつは、きつと、ケロッとして今頃はソフトクリームかなんかをかじっているだろう。或いは他の男と遊び廻っているかも知れない。汚れたパンティで、昔をなつかしがっているなんて、トント御座興でございだ。俺一人が、一人相撲を取っているんじゃないか。

この次は、どうしても、ぎゅつと云う酷い目に会わせて、隆子の奴め、俺の奴隷にしてしまわねばならない。ああ、この俺の病氣さえ治ったら。

どうしても、会つて、隆子をいじめたい。でないと、俺の病氣は治りっこないのだ。匂だけで眠れるとでも思っているんだろうか、隆子のやつ。俺の匂の事については、一言も言つて寄こさないのだ。パンティは、細々と引きさいて燃やしてしまうのだ。パンティが送つて来たなどと家政婦から言われたら、俺の恥だ。それに、一回だけ匂も嗅げば充分だ。そう何度も何度も喜ぶわけにはいかない。ちよっ、喜んだぞ、不用意にもらしたが、俺はちよっとも、喜んでなんかない。ただ、俺の女を、まだ俺なりに、責める事が出来るのだと考えたから嬉しかったんだ。

『許してアッ』

今、俺の目の前に、転がされている隆子はまさしく俺の女だ。俺は隆子の手首をぐつとねじ上げるとむっちりした肌をハンカチで二

巻き括り合して、頭の方から逆さまに毛布の包に、つつみ込んでしまった。

『さあ、声が出るなら出してみる』

びっちり合せた両腕がいじらしく見える。だが表向きだけだ。男を作ったどうか、この俺が究明してやるのだ。煮えているナべの中から、一枚のコンニャクを取り出すと掌で一才冷してから隆子の尻の上へのせる。

『むーっ』と隆子は、のけぞるように、身をもがく。女の不貞をあばくのは、熱いコンニャクに限ると俺のお袋が教えてくれたのだ。五月の朝の爽やかな室内に、熱い湯気が立ちのぼる。ふふ、もう少し熱くしてやらねば効目がないかも知れない。

俺の手から新しいコンニャクが湯気をあげ乍ら隆子の尻にのせられた。

『イツ、イツ、イツ』

とうめき乍ら、隆子は尻を左右にゆり動かす。コンニャクは畳の上に落ちた。

『馬鹿、貴様、密通したな』

必死で、毛布から顔を出した隆子は、うめき乍ら

『いいえ、いいえ、違いわ。私。まじめに』

『あんなにあなたの事思つて』

『うるさい。泣ごと聞きに来たんではない。下着だけ送りやがって、お前自身を何故送らんのだ』

赤い肌に、一応、油を塗る。それから、両足首を合せて縛りつける。これから本当のヤキを入れてやるのだ。



異常体験記

桀^{けつ}王^{おう}やしき

相沢松柏

(一) はじめの章

白狐が二匹向いあっている図案が、中国風な驪山楼の門のアーチの紋章である。K港の大財閥桀氏の邸宅で、税吏の下っ端の私は、市電を降りて署に行く途上にあるこの邸宅がひどくロマンチックにみえて、署長や市長のように一度招かれてみたいものだなアというも思っていた。署の課長級会議の時洩れ聞いた話では、ひどく妖奇であった驪山楼とも桀さんとも呼んでいたもので、その話にでてる「桀王やしき」の呼び名もすぐ桀邸などわかったのである。それから一ヶ月、私は「桀王やしき」に念願かなって大っぴらに出入できる身分になったのである。といって破天

荒な出世をしたわけではなく、むしろ或る上役の汚転事件の罪をかぶって署を追出され、その上役の紹介で入った貿易会社の経理課長（名前だけだが）の身分のおかげである。その日は桀氏の得意先である私の会社の社長の代理であったので米式慣例で私をこきつかっていた署長の上司に桀氏はすえてくれたのである。中国人は、税吏にも愛想をふりまくが、実利的に得意には万全の饗応を辞さないのだ。良い程に飲み、かつ喰べても、宴が早くから始っていたので、私の腕時計はまだ八時をさしていた。市の上流の人々に仲間入りをした私は上機嫌で隣席のS商事の社長と話していた時、宴の初めに桀氏の秘書として紹介された美人の有施が、私の耳もとにさゝや

いた。

「相沢さん、八時十分になったら正門横の未喜亭へおいで下さい」

有施は私の耳もとにさゝやくと、すぐ向い側の市長と、その他二三人の人の耳もとでも同じようにさゝやいていた。私は一寸胸がどった。

「相沢さん、貴方は幸運児だな。私なぞもう五年も出入りしているのに未喜亭の招待はないんだ。」

「未喜亭ってそんな処へ招待して何をくれるんです。賄賂なら御免だが、」

ほろよい機嫌で私はいった。

「非常にロマンチックな人間至上の娛しみ、いや男性最上の娛しみといったところですか

な。まあ、張り切っておでかけなさい。」

今しがた美人有施にさゝやかれた数人の人々が、立ち上って室外へでたので、腰をうかすと、心からうらやましそうにS社長は私の背中を軽く叩いた。

(二) 未喜の章

薄暗い外灯の下で数人の男が、煙草も吸わず話もせず、異様な期待への空気に沈んでいた。私が近寄ると、有施がとび出して来た。

「あゝ相沢さんでしたね。今八時五分、もう五分したら亭が開きますから。」

榮王邸の中国風な外の建物とちがい、この未喜亭は中国風な名前ながら、五坪ばかりの窓もない変った鉄扉が一つだけある変な建物である。平たい屋根まで地上二米ばかりある押しだまつたような鉄扉を、にらむようにして立つ人々と、そして私の傍に芳香をたゞよわして立っている有施美人の沈黙に私はたえかねた。

「未喜亭の未喜とは、一体どんな意味なんですか？」

人にきこえぬように囁いたつもりが案外大きく響いて、口を聞いたこともないおえら方の市長が口をひらいた。

「未喜は夏の榮王妃、蒙山の有施氏の娘です。榮王はある時、部下の趙梁に命じて有施氏を討たそうとしたが、趙梁は戦争のきらいな男

なので『討伐するよりも娘の未喜がすごい美人だから妃にしたら』といったので、未喜を呼びよせてみると成程美人なので、彼女を妃とした。榮王は未喜の為豪華な宮殿を築き、池に酒を湛え、美男美女をこの酒の中へ放り込み、溺れるのをみて未喜は喜び、酒池肉林はこれより始まる。」

威厳にみちてこうつぶやくように説明すると口をつぐんだ。

明るい光。特殊な昼光ランプ。高い天井。四十畳位もあるうと思われる広さの日本風な板の間である。入口にかたまって五六脚の椅子がある。未喜樓の入口に昇っていくラセン階段が洒落た金属製でまるで西洋の別荘のようである。天井の高みから舞台裏のように、いろ／＼な紐や棒や奇妙なプラスチックの横木が垂れ下っている。五六脚の椅子から向うに四米はなれて、木馬や×台、其他奇妙なベッドが雑然と置かれ、その向うにはトルコ風呂様なものが設けられてある。一寸小奇麗な洋家具屋といった内部の感じである。部屋の中はやゝ冷い。

それ／＼の椅子に着席した招待客に、有施が銀の盆に並べた、どろりと濃いコーヒーのような飲物を配った。榮氏が部屋奥から出てくる。でっぷりと太った身体に、白いガウンをまとい、まさに王者の風格、市長が立ち上って、冷いコーヒーのコップを高く上げ

うやうやしく叫んだ。

「榮王様、今宵も又、この未喜樓にお招きを頂きましたことを、吾等臣下一同最大の光榮に存じます。今こゝに催淫の聖業を飲み、この光榮を、より意義あらしめたいと存じます」市長も有施も私を除く皆はぐっと一氣にコーヒーをあけた。有施が私の横ばらをこついていった。

「相沢さん、お飯みにならないと駄目です。さあ早く」

私は一寸舌に味わった。冷くて非常によい芳香がある。二度、三度、私もや々と飲みほすと、榮氏は重々しく口を開いた。

「夏の榮王のすえ、われ今日王の遺志に添い未喜の樓を開き、月々たのしみの日を開いたが、今日又三十六回の招待会を行う。日々新た、この世のすえのたのしみを又娛しもうと思う。今日は、吾々の中に吾等より同好の志を選び、新しく相沢氏を一員とする。伴にたのしみ、伴に力を協せ、この道にいそしむと思う」

市長はいった。

「臣等誓う、勅語にそむかざらんことを」一同は、うやうやしく一礼した。

(三) 裸の高等人夫の章

美女有施は、豊満な胸乳もあらわに、わずか腰部をおほう布一枚のあたかもストリッパ

一の如き姿態。市長も区長も私も海水浴へ行つた時のように猿又一枚となる。みな降々たる筋骨である。私の税吏下ッ端時代の粗食の爲か、青白い貧弱な体は我れながら哀れであつた。榮王のみ白いガウンをはなさない。室温がいくらか高くなつた。何か去勢されたやうな日々である私にも、悩ましき不思議な力がわいて来たのは、市長のいつた催淫の聖薬のおかげであらうか、黒い幕で顔をおほつた人が二人、椅子と私どものぬいだ服を片付ける。そして玉座のような立派な椅子を運びこみ、榮王の後におき、やゝ小さい椅子を有施の後に接近して置く。

「相沢君、一寸」

市長が呼んだ。

「君は初めてだし、何の予備智識もないようだからいっておくが、今からしばらくの間はシヤバの身分を忘れて、裸の高等人夫になつて榮王の命には絶対そむけないんだ。わかつたか」

私はこつくりうなづいた。私が市長の話を聞いているうちに、場内は一変していた。榮王と有施は接近して両玉座に坐り、有施は席に腰を浅く榮王にしなだれかゝっている。場内の膳立てはこうである。舞台に八畳一杯の大火鉢がおかれ、その中に火がかん／＼熾っている。そしてその上に、一尺のくねくね曲つた鉄板がわたさされている。室温は上昇の一

方である。榮王は私を呼んでいった。「その青い握りのあるひもを解いて、そろそろと下せ」

人夫の仕事第一課である。滑車がからからと鳴る。よく手入れがとゞいてるので力はいらぬが、相当の重量感である。招待客のうち市長を除く三人、B氏とC氏は、何か仕掛のあるらしい天井裏の方へ縄ばしごを伝つて上って行き、A氏は奥の責具の方に、榮王の言葉をきくと、老齡がはずむようにとびだしてしまつてゐる。土方の親分あがりの逞しい体つきである。榮王にしなだれかゝるばかりにして、しかし滑車の先を目もさけるばかりにみつめていた有施がうめいた。

「あゝ」

私は一心に手ぐつていた滑車の手をどめて上をみた。私はあつと思わず驚きの声を発していた。見よ、そこにはすんなりとした臍が、吊り下げられる苦痛に足の指をゆがめながら宙に止つてゐるではないか。

「ビシッ」私はふと肩にやけつくやうな痛みを感じた。はつとふりむくと有施の顔が怒りに燃えていた。

「人夫、怠けてはいけない！」

有施も手に細い革の鞭を持つてゐる。私は奇妙な反ばつを感じた。それを知ると、市長が驚くやうな敏しようさで、もう焼けて熱くなつてゐるはずの火鉢の上の鉄板をとびこし

てやつて来た。

「相沢君手を止めてはいけない。止めると縛られてゐる人が苦しむ、早く早く」

みると、もう足首、ふくらはぎと美しい脚線が苦痛に波うつてゐるのである。私は又、から／＼と縄をひき出した。

(四) 後宮の女への責の章

私はそこに腹部の異様なふくらみをみた。妊婦である。手を休めずふり返ると、榮王も有施も冷然と、しかしやけつくやうな嗜虐の目に燃てみつめてゐる。私は先刻の義憤もどこへやら、かゝつと頭に血の昇るのを覚えた。なんという美しく妖しい妊婦の姿であつたろう。かろうじて女の足が地につく寸前に私の作業は中止させられた。口には嵌口器をはめられ、後手に手錠をはめられてゐる中肉の美しい女だ。顔はやゝ丸顔だが整つた目鼻立ちも申し分ない。顔面の鼻から下に半分にはめられてゐる嵌口器に観念したか、目もうつすらとじてゐる。形のいゝ鼻から吐かれる息もなやましげだ。乳房をぶりと飛び出す具合にした二条の革ひもは天井より吊り下つてゐる綱に結びつけられてゐる。足先を地につけた緊縛の姿がまた美しかった。

「驢姫どう？ いゝ姿ね、早いうちに私にその姿をみせていたら、みなさんの前でそんな惨めな姿をみて貰わなくてもすんだのに、お

腹って、よくふくれるものね、ホ、ホ、」

有施は、何か毒をもった言葉を強くなげつけるようにいった。ハッと妊婦驪姫の苦痛にゆがんだ顔が上る。有施の顔と並んだ榮王の顔に驚きの表情がうかび、物いゝたげに口の筋肉がけいれんした。ツと涙が驪姫の白い頬をつたう。有施が立ち上った。私をうった細い鞭を手にもっている。涙の目が凄艶にさえて、口惜しげに驪姫は近づく有施をにらみつけた。有施は乳房の上に一つ軽い鞭をくれた。弾力性のある若い女体がしわる。声のない苦痛の叫びが顔に姿態にあふれる。

「たんとおにらみ、私は一寸も恐くはないのですよ。後宮の女のぶんざいで生意気にも正夫人である私の云いつけにそむいて、その罰なんだよ」

乳房を力まかせに握んでは、放なし、握んでは、放なし、傷のつかない有施の仕置は、驪姫が悶絶する迄行われた。悶絶して驪姫はやつと吊下げの責めから逃れられたのである。有施もさすが息をはづませていた。覆面の男に女玉座を下げるようにというと、有施はぐったりと榮王の胸の中におれこんだ。

「人夫、驪姫の嵌口器を外して」

それでも有施は次の責めに対する命令を忘れた。私はふるえる手で、横たおしになつて驪姫の頭上のバンドを外し吊具をのぞいた。

(五) 美貌の女鬼の章

後手に嵌めた手錠のかんに細い縄がむすばれた。驪姫が気付く前に、美貌の女鬼有施は、次の行動を起していた。初めから開放されたまゝの足首に、細い鎖の一尺ばかりの余裕のあるのをきり／＼と結びつける。有施の断髪した襟首が、強くかゞんで鎖を結びつける姿には、不思議なほりがあった。

「アアア」

細いうめきとともに、驪姫が目覚めた。足もとに有施の姿は目につかず、手持無沙汰に立っている見知らぬ男の私をみて、一瞬羞恥が顔にうかぶ。

「人夫、驪姫を立たしなさい」

私は有施の命令には、もう逆えなくなつていて、それでも驪姫にあわれみを覚え、そつと背中から抱いて起そうとすると、私の肩に、亦しても非情の鞭がなつた。

「綱を引っぱって立たせるのです。遠慮はいらない」

女王の様に厳とした有施の声である。火鉢の向うに立っている市長が、びゅーと鞭を振って私に呼びかけた。

「相沢君、引き立てゝ、こゝへ連れてくるんだ」

榮王はひと言もしやべらぬ。玉座にゆつたり腰かけて、ロープの腰もとの中華式煙管を

とりだして悠々一服である。煙管は純金、細密な鳳凰の細工がしてある。正に王者の風格である。一寸手をそえて立たせる。わずかな一尺ばかりの歩幅によち／＼と歩く美人妊婦の姿はあひるの歩みにも似て、よろめきよろめき滑稽でさえある。銀の鎖がじや／＼なつて、驪姫は私の取る縄と有施の答に追い立てられる。産み月にはやゝ遠いが、若い女の妊み腹は異様でさえある。ぐるりと火鉢を一廻りした。よろめくたびに抱きとめる私の余徳に、有施の鞭は二人を容赦なく打つ。私に小さな幻想がきた。私が驪姫の恋人でもあるかのような気となる。鞭打ちは痛いけれど驪姫の肌は甘くやわらかい。

「未喜、貴女は私のお腹に子供ができたのに、自分に子供がないのを嫉んで、卑怯者！」

有施は姓名は未喜、史上に伝る。美貌の女鬼と同名同名である。

「おだまり、七夫人の中、六夫人までが私の言葉にそむかないのに、お前だけが従わない、その罰ですよ、私は榮との間を嫉んだりはいない」

榮の煙管はゆつたりけむりをはいた。私の持つ縄尻は市長にひつたくらゐのようにとられた。市長のしなやかに長い鞭が宙で唸って驪姫の尻で鳴った。有施は踊るように走って榮王のひざにもたれかゝる。私は元の壁つぶちに戻って手持ぶたさによりかゝった。

(六) 後宮の女達の章

市長が低い声で驪姫と語っている。有施は
榮王に甘えていった。

「ねえ王様、私の驪姫に対する責は、私のね
たみや、そねみでないですわねえ」

榮王はうなづく。

「女ぎやくの洗礼を素直にうけた私と、六夫
人に対してうそぶくような広西の嬌児に對し
ての洗礼なんですわねえ」

榮王は嚴かにいった。

「驪姫も子供が生れる迄にこの洗礼をうけね
ばならないんじや。でなければお前はともか
くも六夫人の妬心に、驪姫も生れ出る子供も
不幸になるだろう」

「王様は理解深くしていらしやる。だから私
すきよ」

有施は人前もなく榮王にしなだれかゝつ
た。この時、舞台裏から嬌声がしてA氏の後
から、それぞれに特徴のある美しさを持った
六人の榮氏の愛妾が、と現われてき
た。腰部はわずかに金糸銀糸を刺繍したピロ
ードの黒布をまとい、顔面には美しい白絹で
おおっているまるで白い妖精のような輝やく
ばかりのポーズである。紗を透してピツチリ
と眼のくぼみ鼻の高みがみえる。みな同じよ
うな体つきである。縛られている驪姫に嬌声
をあげて尻をつねり脇腹を擦り通りすがりに

小さい罵しりをあびせて、榮王をとりまいた。
私風情には目もくれない。こゝに日本の風景
でない、さんざんとした中国の後宮の嫉妬が
艶然と私の前にあらわれた。話や文章でしっ
ていたが、みたのは始めてである。私はしば
らく幻想の恋人驪姫より目をそらし、榮王の
手活の六ツの花に目をやった。白絹に包まれ
た女貌の美しさ。天井裏のBC氏が縄ばしご
をつたって降りて来た。A氏とC氏が私と並
び、B氏が市長の方へ歩む。市長とB氏がア
スベスト製の防熱靴をはいた。市長の鞭が又
一つ驪姫の肩で高鳴った。

(七) 火上の美女の章

シロ・クロ、シロ・シロとちがってこれは
雄大高尚な見物の感じである。部屋の空気は
暑い、らしいに熱せられてきた。驪姫の悲鳴が
きこえた。B氏と市長の手に持つ鞭が交互に
ひびいた。火鉢の上の鉄板を足をゆわえられ、
後手にしぼられたまゝ歩けというのである。
驪姫は泣きながら鉄の渡し板の上ののつた。
くらっとよるめく。無残にも市長が火の中に
入るのを恐れてぐつと縄じりをひく。こんも
りふくれた妊娠がぐつときんちようして驪姫
の身体がのけぞる。足が細いくさりにひかれ
て又よろり。今度はB氏がのけぞるのを恐れ
てぐつとひく、妊娠にかえてむちりしたお
尻がぶつとりとでる。嗜虐の望みにたえかね

でそのお尻に市度の鞭がぴちりととぶ。驪姫
の悲鳴は切なく、その度に未喜亭の原始的な
昂奮はたかまるのである。初心者の私など余
りのことに、もう足は地に生えたように動か
なかった。驪姫の悲鳴のたびに七人の女が感
極つて、はげましの声ともわからぬ嬌声をあ
げる。未喜の謳い声だけは私にもその意味が
とられた。

「可愛い、驪姫、苦しめ苦しめ、苦しみが深
い程、王の愛しきは深くなる。恥しい姿は女
の光榮、お前の子の幸福はそれによって得ら
れる。」

きれく、のすゝり泣きに似たうめきだが、
要約するところである。未喜の顔は美しく紅
潮し、白絹の愛妾達の口辺には濡れてなまめ
かしい紅が映つて、絶叫のたびに上下する。
よくみると、驪姫の手錠に結えつけられた細
引は二本となり、火鉢の手前と向うから、市
長とB氏の二人の高級人夫が驪姫を導くので
ある。鉄板の中は二尺ばかり不規則に曲つて
いて、次の板まで二尺の差があつた。驪姫に
許された一尺の歩巾では近道はできない。う
ねうねと続く道を、その道のはてしまで何十
尺あひるのように、よち／＼と歩むしか手が
なかった。不思議に蹴のこげる句も、炭火も
初め以上に熾っている様子はなかった。榮王
も、もう煙管は手にだらんとして火の消えた
のも御存知ない、惚惚の境であるらしい。見

てみると、初め爪先立ちで上った鉄板は熱いのであろうが、もう四尺初めの位置よりはなれていた。千々に乱れる驪姫の心そのまゝによろめき、よろめきをさゝえようとして縄尻をひっぱられる。又正常に歩もうとして「もっと早く歩け」と強い鞭をうけたときに、よじれもだえる。その妊娠、その美しい脚線美の不自然なくねりは、そのヨタヨタした不恰好な妖しい姿が、七人の女達の異国の罵声をわかせるのであった。

(八) 妾妻の友情の章

ぬる／＼と驪姫の肌に汗がまつわり、昼光色に美しく光った。歩き初めて数尺、板の中間へも近づけば又絶望の出発点に後退する。力つきんとすれば鞭がうなり嬌声がとぶ。胸は妖しく波立って吐く息も荒かった。かみしめた唇には今は言葉なく、驪姫は正に息たえんばかりである。部屋の中は益々暑く、裸でじっとしていてもまだ私の体は汗にまみれる。驪姫はそれでもまだ歩みつづけていた。又その絶望の道は、始点から市長の方の側を中央部に向う。衰えた歩速に「早く早く」と市長の鞭がなった。早めようと驪姫の足が浮いた時、支えの手が狂って紐はB氏の側にピンとはり、哀れな驪姫はアツという叫びを残して、歩み板の間の火の海の中へ転落していったのである。みんなの叫びのあとに異様な沈黙が

一時おそった。七人の妻妾も今は声をのんで剛直してしまった。と次の瞬間、有施末喜が築王をつきたおして立ち上った。「驪姫驪姫」彼女はためらいもなく火鉢へ突進した。六人の妾もそれに続いた。市長もB氏も、うろ／＼したまゝである。私もA氏C氏も火鉢に駆けよった。築王は立ち上って息をのんでいる。とそこに目を見張る光景がうかんだのである。妻妾達は火鉢の上のやけている筈の鉄板へ上り、驪姫のおちていった間へ駆け寄ったのである。何という妻妾間の愛情と息をのむ間もなく、有施は白絹の妾達とともに完全に気絶した驪姫を助け出したのである。

私の緊張は極点に達していた。私は幻想の恋人驪姫が救い出されるのを見ると、不甲斐なくも板の間に尻をついていた。

私は深夜のK市の海岸通りを快速で走る市長の乗用車、キヤアディック五五年型の快い振動に身をゆだねていた。市長は市長としての月一回のあの労働に快い疲れを覚えてか、うとうととしていた。——私も先程の強烈な刺戟に参っていた。それでも私には市長に聞きたいことがあった。

「市長さん、あの火鉢には驚きましたね、少しも熱のない、よくもあれだけ模造したものですね」

「ウム」

「あの驪姫さんですね、第何夫人ですか」
「第七夫人」

「すると、夫人としては最もニューフェイスなわけですね」

「ソウダ」

「外の夫人達はみな今夜の趣向を存じていられた様ですが、築姫さんは御存知なかったんですか」

「シラナカッタ」

「驪姫さんは本当に築さんの子供をお腹にもつていたのですか？」

「アノ人達ハ、有施夫人ヲ除イテ、アノ築王やしきカラ、初メテノ夫人ハ五年、驪姫サンハ一年、一步モ出テナイシ、夫人達ノ召使ハ全部女ダカラナ」

「それで有施夫人がいつていた驪姫さんだけが築王のいゝつけを守らなかったで、今日のお仕置をうけたというのは本当ですか」

「ソウダ、驪姫サンハ〇大出ノインテリ知識階級ノブライドガ許サナカッタダネ」

しばらく沈黙がつづいた。今度は市長が口をきった。

「相沢君、アンナ催シニタビ／＼出タイト思ウカネ」

私はしばらく考えてから「ノー」といった。市長は大声で笑った。

「ソノ答ハウソダ、今度ノ催シニモ君ハ必ズヒカレル様ニヤツテクル。君ハK市ノ実業家名家ノ中デ、嗜虐ノ趣味ノアル者ト築王ガ認メタノダカラネ」

ガクン、車は大きくゆれて海岸通から山手にさしかゝった。私の家は近い。私は快い疲れにう／＼とした。
(終り)

おそい目覚め

足立夏夫

1

あれは甘藷の二番草を採っていた頃だからまだ九月に入ったか入らないかの時だった。

その夜は、頭痛と寒気で、気分が悪く、宵の口から寝ていた私は、近所の男の子に、「おじさん、おばさんがお寺で踊っているよ」と表の入口から大声で知らされた。

その日は村会議員の村上という家の増築祝で、朝から部落の男たちが総出で棟上げの大きな材木を担いだりして手伝った。私も皆の中で、小まめに立廻り、油断なく気をつかって皆を指図したりしていたが仕事の終る頃、身体の調子が悪くなってきた。

で、晩の振舞いには妻の雪子を出して夕飯もとらず、薬をのむとすぐ寝床に這入ってしまった。眼だけはさめていたので、表口からの小供の疳高い声も、バタバタと馳け去る登音も聞くことができた。

(踊っている、雪子が踊っている)
身体は横にしたまゝ、何だい？ など思う。

お寺では昼間のお手伝いのお礼の意味で酒と簡単な晩御飯が出る筈だが、踊りなどというものには一切、関係がない。もっとも、酒の上のことで誰か酔った上踊りだしたということは考えられるが、あのおとなしい雪子が村人たちの前でこんな大それたことを仕出かす訳がない。だけど、あの俊坊が、自分の一存で知らせて来たのか、それとも大人の言葉で知らせて来たか知らぬが、はっきりと、「おばさんがお寺で踊っている。」と云った。

予感というものでもしたのか、私は起きて枕許のズボンを穿きにかゝった。
ジャンパーのボタンをはめる手が、ふるえ



ているのを知ったが、何のためにふるえるのか自分では分らなかった。
部落の小さな寺へ走る様に出かけた。
お寺の三十畳敷位の広間では長い木製の机

が鍵型に並べられ、皆、相当酒も廻っている風で、女房連も混ったその座の雰囲気は誠に乱痴気騒ぎに近いものだった。私は一つ石段を昇った所にある腰高の硝子障子の僅かの隙間から覗いてみた。

男たちは手を叩き、何か歌ったり、叫んだりしている。箸を動かしたり、酒をのんだりしているものもあったが。皆座敷の中央で腰をふりふり、奇妙な踊りとも、学校の体操ともつかぬ恰好で両手を高くさしあげたり、足を交互に前に突きだしたりしている女を熱心にながめていた。女が足を前に突きだす時、こゝからは背後しか見えないが、多分、着物の裾でも乱れ、白い脛でも露われるのだろう、男たちは一齊にはやし立てたりしている。

多分、女は酒に酔っていて、前後左右に身体を、よろけて何か歌でも唄っているのか、高い調子の、よく透る声を張りあげていた。広い座敷に二十燭ぐらいの暗い電燈しか灯つてなく、皆の顔も、どれをみても赤黒く、くすんでいるようだった。

ワツという歓声が上った。女が畳の上に倒れたのだ。

「ワツ、見えたぞ。見えたぞ。」

誰か、しどけなく投げ出された女の膝小僧辺りを指して、机の上を叩いた。

「何ッ、見えた。見えたとは何だ。そんなに見たいのか。よし、見してやる。」

畳に起きあがり、頭をグラグラ、ゆすりながら女は喚いた。雪子の声だ。私は猫の様にそこにうづくまり、煙草の煙り、酒の香、人肌のイキレ、煮物の臭いなどの、どんより、よどんだ暗い広間の中央を凝視した。

雪子は二三歩歩いて又転んだ。この時横から明らかに酔って足許も確かでない一人の男が現われて、雪子に近づいた。

「どうしたんだ。お雪さん。」

だみ声を、ゆっくり押し出す様にして腰を屈めて雪子を抱きあげた。

雪子の足と首に手を廻し抱きあげるには上げたが何分、男も酔っているので、すぐその場に二人とも崩れて転った。

破れ返る歓声のなかで、しばらく二人は首を抱き合っていたが、

「おい小川君、大概にしておけ、子供がみているじゃないか。」

見かねた年輩の村上さんが、小川を引き離した。

私は何もかも見ていた。どんな些細な雪子の動作をも見逃すまいとしていた。今迄、とにかく酒一滴、ビールさえ口にしたことのない、この雪子の狂態には度胆を抜かれたが、この異常な見世物は又、私の心情に変態的などぎつい作用を及ぼした。

村人たちの眼前で、たとえ、それが酔余の狂態とはしても雪子が小川みたいな若僧と接

吻し合った光景は強く私の心をうった。

私は、うづくまっていたが、足がふるえいや足や身体ばかりでなく、いつも私が持っていた理性は何処かへ消え失せ残った心の全部が音をたてゝふるえ、おのゝいてゐるのを知った。

私は競輪の味も知っている。

最近、妻の雪子には内密で名古屋まで出かけて女レスリングの実演も見てゐる。それは誠に広告の文句ではないが、一見の価値ある見世物であった。私はその時、リング近くの席で見たが、若い女の豊かな肉体が、ぶっかり合つて織りなすアラベスクは田舎者の私の眼をうばった。特に闘う女の力む表情、又は苦痛に堪える表情の色々異つた角度からの演出は私を充分満足させた。

けど今、雪子の痴態を見て私の陥つた心の状態には比すべくもなかった。歓喜と苦痛の交錯した、これまで一度として味つたこともない心の状態ではあった。

そこに潜んで小さくなっている私をみつけた便所帰りの酔いどれが、不意に私を驚かした。

「何だい？ そんな処で。」

私の肩に手をおいた相手は、私の顔を認めた。が怪訝の表情など、すこしも現わさず、こう云った。

「鳥居さんじゃないか。そんな所に遠慮して

おらず、入れや。」

酒くさい息を私の顔近くで、むんむんさせながら、

「いや見直しました。あんたのお内儀さんには頭をさげます。へたな芸者よりどれだけ面白いかしれん。」

と、よいどれは云った。

「あの、おとなしい雪さんが……いやはやたまげました」

そう云うと彼は私の手を取り、なかに連れこもうとした。私は皆の仲間入りは御免だと思った。というより、こゝで独り、雪子の、どんな些細な一挙手、一投足をもみつめていたかった。まさか、そうも云えず、

「身体が悪くて寝ていたが、一寸見にきただけだ。」と云ったが、どうしても上って酔わせようと思うのが、私の手を離さない。無理に帰るよりは、見られた以上、内部に入って皆と一緒に飲んだ方が利口だと気がついた。ハキモノを脱いで一緒に座敷に上りこんだ。

「やあ、やあ、清ちゃん、只今到着とは随分おそいぞ。」

誰か、私をみつめて、こう大声で云うと空席に坐った私の方に歩いて来た。他にも二人の友人が寄ってきて、湯呑の酒を強いられた。

「さあ、あけた、あけた、ぐっとあけた。」雪子がフラフラと私の前に現われた時は、

私も二三杯酒を腹に流しこんでいた。雪子は私の前に坐りこんでいる男たちの身体を、かき分ける様にして、どかりと崩れた。片手に持っていた銚子から酒を一杯にみたと、

「さあ、あんた。ぐっと一息にね。一息に景気よくやりなさいよ。」

酒の満たされた湯のみ茶碗を私にさしつけてきた。

酒に充血した、やゝ据った大きい雪子の瞳を真正面から、じっとみつめてやった。けどしつとりとうるんだ雪子の酔眼は私の眼にも云わせた言葉の意味など、てんでうけつけなかったし、又酔っぱらって分りもしなかった。

一種の、無邪気とも云いたい、この動物的な眼の色は私の初めてみるもので、美しかった。雪子は私の口許に茶碗をふれ無理に口の中に流しこもうとした。酒は私の口をつたわり膝の上をぬらした。

2

その夜、私は酔った。けれども心の隅にはてんで酒の酔いなど受けいれない冷い場所があり、そこはある感情で煮えていた。

怒りといえどもそれもあるし、嫉妬といえどもこれもある。がこれらの感情を乗りこえて私をゆすぶったものは別な雪子の半面を知ったということとは尽きる。とにかく今迄の生活が平穩でありすぎた。そこへ突然、上から異様

なものが落ちてき、大きな音をたて、転ったのだ。驚愕に胸は早鐘をうち、狼狽えて何が起ったのか分りもしないなかでオロオロするばかりだった。

私は其処へ坐ると何時、帰ってきたのか、私より先に帰り、寝床の中に入っている雪子の顔が眼にとびこんできた。

雪子の白い額から血が滲んでいるのまで、私の酔眼に映った。

私は起き上った。私は手にしたタバコとマツチをすてた。

無言で蒲団をつかむと、乱暴に、ひきめくった。モンペのまゝ横になった姿勢の雪子を足蹴にして、うつぶせにしたが、抵抗はなかった。雪子をうつぶせにすると両手を後手にシゴキで縛り、両足も別の紐でしばった。

「何するの！」

とか、口のなかで呟いて、そうされまいとしたが私は容赦しなかった。

肉つきのよい雪子の身体を縛り上げた時、私は年甲斐もなく、身体中を獣の血が動きだしたのを知った。故もなく私は狂喜した。うつ伏せにしたパーマの頭を右手にムんずと握み、片膝で背中を押えつけた。雪子のノドがボキンと折れそうになるまでもちあげ、

「この阿女！」

私は、うめいて急に雪子の首を息の止まる位、蒲団の中に力まかせに押しこんだ。

「こいつ！」

私は髪の中の指先に力をこめて、何回も雪子の首をもちあげ、蒲団に押しつけた。

しまいには、次第にテンポが早くなり、この動作の中の雪子の真つ赤な、苦しうに眼を閉じた顔が私のなかの眠れる何かを、よびさました。雪子の背中が一つ大きく波うつとぐっと口から酒や食物を、そこら一面、吐いた。

「げっ、げっ！」

のどの奥を鳴らして、苦しがつた。

その吐かれて、白いイキの出ている汚物のなかへ雪子の顔を押しつけて、今度はもち上げることをしなかった。雪子は汚物のなかで顔をねじ、呼吸をしようと、あがいたが、私は膝に力をいれ、ゆれる背中や腰の肉を観つめた。

私も、その晩は酔っていた。知らぬまに、そのまゝ寝こんだしまったのだらう。

眼がさめた時、自分の顔をじいっとみつめている雪子の眼にぶかった。睨み返した。

「ほどいて！」

雪子は小さい声で云った。両手を後に縛りあげられ、両足の自由も奪われたまゝ雪子はエビの様に身体を曲げている。

「貴様は何という馬鹿だ。俺と一緒に十年余りになるのに、その間、俺が飲めといつて勤める酒さえ一杯として飲んだことがあ

るか。それに何だ、昨夜の貴様の振舞いは。一体誰に飲まされたんだ。」

私は自分の言葉に呼びさまされたかのように雪子の陽にやけた頬の肉をひねりあげた。

「痛い！」

「それに、その額の傷はどうしたんだ。この馬鹿野郎！」

雪子は無言で私を見た。その眼の色に後悔の念とか、詫びる気持とかいう殊勝なものもすこしでもあれば、私は又別な人間になったかも知れぬ。もう昨夜の酔いは二人ともさめている筈だ。酔めないまでも正気ではある。

「どの顔さげて、表に出れる、一体、昨夜のことを覚えてるのか？」

「何だね、こんな事ぐらいで。私は一向に平気だよ。お前さん。」

他人事の様に平然と、小さな、いつもの声で返事をした。

もう朝の陽が部屋一杯にさしこんでいる。

私は、不意に起きあがると牛と鶏に餌をやるため土間に降りた。

私は生え抜きの百姓で、飼っている動物たちの食事は時がくれば与えねばならぬ。どんな事が起きた時でも、これはやらねばならぬ様に教えこまれたもので、この朝もふだんより一時間半ばかり遅かったが私は義務を果して、ほっとした。

着物を着替えながら、ニヤツと笑ったが、こんな笑いも雪子には曾ってないもので気にはかゝったが一日の生活が始ったのだ。

それこそ、せまい部落内のことだから、雪子の狂態のニュースで、てんやわんやだと思われた。私は外に出たくなかった。外出する用事もなかった。けれど雪子は午後の二時頃暑中のなかを自転車で何処かへ出掛けていった。どこへ行くのか聞こうともしなかったがこの雪子の行為の大胆さには驚いた。こんな一面が、こいつにはあるのかと思つた。あんな、油をこつてりと頭に塗りつけた小僧にも等しいやつと雪子がキッスした場面が思いだされた。

この小川という若者は私の近所の、お仙さんという後家さんの家に寄宿している測量技師のことで、半年程前に村に流れてきた人間で私は、どうもこの若者が前から蟲がすなかつた。

お仙さんも当の小川も、ちよくちよく、私の家の風呂に這入りにきたから、よく知っている。

雪子は肌が合うというのか、五十の坂をこしたお仙さんとは、よく往来し、小川がまだこの村に流れて来ない以前から、お仙さんは私の家の風呂に入りに来たし、それ以外にも足繁くやってきた。

或る晩も、

「たまには私が流してあげるよ。」

わざと蓮葉な声で、こう云うと、白い腕を捲りあげ小川の背中に近づいた時の、あの雪子のさり気ない動作には、何だか擦ったいものを感じた。そこら一面にこもった松葉の煙の中で、ゴシゴシ小川の背中を流している雪子をすかし見ながら、あわてゝ前に坐つてその日の新聞を見ているお仙さんの顔をうかがったこともある。

曾って一度として雪子に背中を流して貰ったこともなく、まして一緒に入浴したこともない私には、雪子のこの心のうごきが奇妙に思われた。自分から進んで小川の背中を流してやろうという雪子の心は、単純な好意以上のものが確かにあった。けどこの時は別に気にもとめず、むしろ、もっと雪子が露骨に近づいていけばいゝとさえ望んだ。

小川はニキビの痕が顔に残っている様な若僧のくせに、いやに腰が低かった。

誰と会つても先に挨拶し、何か適当な、おべんちやらを云つた。小川の口にかゝると、どんな些細なことでも、すぐ御追従の材料になった。一つの才能には違ひなかった。

私は、こういう小川の面を知つて、この若僧、案外世間を知つていやがるなと思つた。雪子と、こんな小川とのコンビは誠に奇妙だとも考えるが、そんなこちらが思うほどの間柄だとは思えぬ。

何にしても十年の余から一緒に生活している雪子の身体でも、心の裏の裏でも充分知っている心算であるが、昨夜からの雪子の行為には全く呆然とした。全然別な女の心が雪子のなかにもぐりこんだとは思えない。半以上は酒の上のことにして昨夜からの出来事は夢のなかの出来事としか考えられぬ。しかし小川の若僧とは何かあるには違ひない。とちめてくれる。私は故障した個所を修理したモーターをもとの場所にしまひにかゝつた。

雪子が自転車をもつて帰つて来た。誠に屈たくない足取りである。私は黙つて雪子の後姿をみつめていた。

自分では分らないが、おそらく私の瞳は愛憎二つの炎に燃えて光っていたことだろう。

3

村の人達に対する思惑や、小川の事や、雪子の狂態そのものや、これらのものが入り乱れて私の心のうちでブスブス燃えつゝけた。

特に雪子の平然とした常のまゝの言動が何か私を悩ました。常のまゝと云つたが、何か愉しげで浮々とした調子さもあるのには合点でしなかつた。

こん畜生！ そう思つた。

三日たったが、その間、私はごく必要なこと以外一言も喋らず、夜になつても雪子の身体に一指も触れなかつた。

雪子も知らぬ顔で何か女の仕事をしていた

様だが私は、ふと気が軽くなつて云うことがあった。

「教育者のお父さんが泣くぜ」

雪子の父は町でも名の知れた教育家だったが、三年前に死亡している。

「泣くでしようか。私は何をしたか、さっぱりおぼえがない。」

「あのザマは見られたものではなかつた。」

「そうですか、ではさっぱり別れますか。」

「いゝな。いつでも出ていけ。小川と一緒に出ていってもいゝぞ。」

「出ていける様にして下さい。」

「お前が本気で出ていくというなら、やるものはやるが、一体いくら欲しい？」

「こゝの財産の半分は貰いたいよ。」

「そいつは駄目だ。こゝの財産は俺の家の先祖伝来のもので、畠一枚だつてお前にやる義理はない。五万円もやるから出ていけ。」

「そんな端した金で出ていけるもんですか。馬鹿々々しい」

こんな会話が、普通の声で、やりとりされた。心にもない憎たれ口を叩き合つて、あとはぶいと又、別々の仕事にかゝつた。

「あんたは気を廻して小川さんのことばかり云うけど、それ本気なの？」

とも切り出してくることもあった。

「気を廻す？ 何だいそれは？」

「あゝ嫌だ、一人でも子供があれば何だかだ

云われる所はないのに。」

「子供には何も関係はない。お前が好きなのなら小川と仲よくするのでもいいよと云ったまでだよ」

「ふん、私が本当に、そうであっても、あんな平気でいられる？」

「俺の眼の前でいちや／＼してもいいよ。」

「おやおや、お前さんも随分、いやらしいこと云うよ」

三日目の夜のことだった。私は雪子の方を振返って別のことを云いだした。

風のない蒸しあつい夜で、今迄すこしも姿をみなかった蚊が三四匹飛んできた。

「昨日、作業場で米をついていたら寅治さんに会ったが、一寸したことを聞かしてくれたよ」

雪子はウチワを使いながら黙って私を見ている。

「小川君、近いうちに佐久間の方に行くんだってな、そう云っていたよ寅さんは。」

雪子の顔には何の表情もうかばず、口から赤い舌を出して下唇をしめらすようなことをした。

温順のように見えて、謝るということを知らない、この強情な女に私は憎しみだけをおぼえた。

「先夜は馴れない酒をのまされて、あんな失策をしてすみません、許して下さいと何故一

言云わぬ」

この私の言葉が切られると雪子は恰好のいゝ鼻梁に小シワをよせて笑った。そして云った。

「謝るようなことは何もないじゃないの。」

そして、この後、雪子の口から出た一言で私はかっと逆上した。

「ほんとうに男の癖に、しっこい！」

初めは、たゞ憎悪の念だけで動いたが、途中から憎しみの心は消えてなくなり、異常な慾望にクラクラしてきた。

あの夜の自分の行為が電光のように頭を通り過ぎるのを意識した。

「何するの！」

「小川と何処で会った、それを云え。」

私は雪子を押して転がし、腹の上にまたがり両手で、相手の両手首を押えつけた。下から雪子は大きく眼を見開いて私を睨んだ。恐怖の色が、かすかに瞳の底に、ちらついた。

「さあ何処で会ったか云え。」

「まるで気狂じやないか。離して。苦しい」

「云わぬと縛り上げるぞ」

「うゝゝん。」雪子はうめいた。

「云うか。」

「云う。云う。だから、そんな手荒らなことはやめて。」

「早く云え！」

私は雪子の云うように半ば狂っていたかも知

しれないが、でも相手の肉体を傷けたり、明日の労働が出来なくなる様なことは決してしてはならぬと考えるだけの余裕はあった。私も雪子もはアはアという息を吐きながら争った。

「この野郎！」

私は心にもないことを云ってしまった。

「この野郎、お前はな。俺のもんだぞ。誰にもやるもんか。」

私は手あらく雪子の髪をつかむと、畳の上に捻じ伏せ後手に腰紐で縛り上げた。

「ふん」雪子は何も云わず、たゞ下から私をみてにやっと笑った。私はつられたように縄尻を持って引き上げた。

「糞馬鹿だね、お前さんは」と切れ切れに云う。

「おゝ、俺は馬鹿だよ。だがよ。だがお前はいつ見ても可愛いゝな！」

「フン」声をたてずに雪子は笑った。

「喰べてしまいたいくらいだ。」

「たべたらいゝじやないか。」

「よおし！ 喰べても構わないな。」

「馬鹿！ この人は本気にしてる。」

「どうだ。痛いかな。」

「痛いさ。生身だもの。だけど、もっとひっぱれ。強く。くそおやじめ！」



灰色のノート

——ある浣腸マニヤの日記帳から——

矢崎 竜一

十二月五日

少年時代一度も浣腸された経験のない奴はまずなかろう。今スクリーンの上で青春期のはにかみの微笑をちら／＼見せるZ・Yも彼の少年時代、浣腸したことも幾度かあったろう——と想像したら急にうれしくなってきた。

俺は映画『潮騒』を見ている間中、この考えが離れなかった。これは、現在のまゝの彼の顔立の中に俺は一つの理想美を見出したからなのだ。

十二月七日

暗いコンクリートの塀が何時までも続く。やがて路上をおうよううに広がって垂れているライラックの枝越しに淡い街灯の光を認めた。もうすぐ電車通りだ。俺は足を早めた。はだを突きさす真冬の

風が物悲しい音をたてて俺の背後から吹きぬけて行った。

俺は客のいないのを見ますとR薬局のガラス戸を開けた。そして「一番大きい浣腸器を」と、思いきって言ってみた。一〇〇CCの浣腸器を見せられた時、俺は思わずごく／＼と生唾を飲みこんだ。冷いものがつうと背筋を走る。俺の顔はたまらなく火照ってきた。

十二月八日

連夜の浣腸のくせがついたためか、自然便の排泄が全くなかった。しばらく浣腸を休む決意をする。

十二月十一日

便秘が今日で五日続く。腹がはって気分が悪い。ヒマシ油を飲んでみる。

十二月十二日

相変わらず通じなし。

夜、五〇CC浣腸する。心ちよい腹痛を伴い快便。

「この国の患者たちは一、二本浣腸をちよつとしてやれば確実にそして心快く消滅してしまうような腸の痛みや体の疼痛にひどく悩んでおった。それにもかゝわらず彼等は絶対といつてよいくらい自分の悩みを打ちあけることを拒否しておつた、というのは薬剤師の

手によって浣腸がされるからなのだ。そこで私は、危険を感じず羞恥に苦しむことなく自分で自分にする浣腸器具を、たとえそんなものが現実には在り得ないとしても、それを必ずや探し求めようV (P. 51~P. 52)。

かくて、彼は同時代のフランスの浣腸器についてその欠点をしらべあげ、又浣腸の歴史——いゝかえれば浣腸器の歴史——を、浣腸薬を、あるいは当時の浣腸研究書等を仔細に検討した結果、遂に直腸ゾンデ(現在のネラトン氏カテーテル)を考案、これを筒管に接続して用いるイルリガートルを発明した——という一編のお話だとわかったので、あとは暇を見てゆっくり俺の興味ある部分をノートすることしよう。

二〇〇〇 浣腸してねる。

二月十五日

流行は貴族社会から拡まる。二世紀にわたる西洋の(特にフランス)浣腸黄金時代はヴェルサイユの宮殿から始ったものらしい。

デュメスニルの「挿絵入医学史」によれば十八世紀と十八世紀は浣腸をおそろしく濫用した。ブルゴーニユの公爵夫人はなに気兼することなく、ヴェルサイユ宮の、従者にかしづかれて一室で、浣腸をなされた。それ丈に腰元たちはこの施術に熟練した。ルイ十四世と云えどもこの迫害を免れなかったV※ (P. 114) と述べておる

※王はその在位中二〇〇〇回の下剤・浣腸をかけられており、ルイ一三世は二一二回浣腸をされたことが従医の記録に残されている。

テノドラツクは又このルイ十四世時代、「おくすり」という言葉が浣腸と同意義に用いられたことを明らかにしている。そして経口的な薬に対して、尻から飲まされる「悪魔の薬」とも呼ばれたという。(「好色な古代」P. 112)

△浣腸する? 医者は立合の順序を決めるため輪になった。それ

から正しい順序で医者は前へ進んだ。第一薬剤師、嘴管を手にも。※次いで第二薬剤師は浣腸薬を充たした浣腸器を持って、それからたいまつを持つお部屋付のおこしように。それに続いておこしように王(ルイ一五世)の尾骶骨を彼が無遠慮に照らしているのを見た途端、陛下を御不快にしないようにと、明りを最も必要とする施術の大切な瞬間、医者のシャツポをさつと引きむしって焰をさえぎってしまった。あろうことかフオルジョ師はお穴をはずしてしまいがりシヤのアレオパゴンの烈怒にかられ……わな／＼と唇を噛んだV (ドクトル・ポール・ドロローネ「十六・七・八世紀の医者の生活」P. 215)

※当時の浣腸器はガラス製でなく金属で出来ていた。肛門部位に挿入される嘴管は浣腸時に筒管に結合されて浣腸器となる。飽衣飽食の揚羽蝶のような生活が浣腸を必要としたのであろう。

二月十七日

浣腸は俺に青春のはかなさと少年期へのノスタルジヤを感じさせる。——中学校の理科教室の教材戸棚。俺の好きなOの奴が戸棚の中を熱心にのぞきこんでいる。俺はうしろから彼に近づいた。だが、俺は彼の肩をたたくのを止めてしまった。Oの目は一本の浣腸器にじっとそまがれていた。俺はその晩、ワンパクなOが彼の母親に浣腸されている夢を見た。

音楽教室で授業の始まる前。五、六人の悪童連が雑談に花を咲かせていた。一人の悪童が浣腸されて便所に行った話を疑音まじりにはじめた。するともう一人の悪童が笑いながら、いやそうじやないこうだと云いだした。他の奴らもこうだ、あゝだと互に自分たちの経験を披露する。俺の傍で黙ってそれを聞いていた長身のWが「俺はまだ浣腸されたことがないんだ」と淋しそうにつぶやいた。俺はWをなぐさめてやりたくなった。高校二年の春のことだ。

二月十九日

A・浣腸の最初の発明について(ノート)

△浣腸の発明の名誉は人間にあたえられるものでなく、これは実に動物たちの本能によって齎らされたものであるV(グラーフ「モリエールの器具」P.61)

パピルスに記載され、一四八二年はじめて印刷に付された「俗人対語」の公刊によって最初の発明者エジプトの鳥(鵠)の生態が明らかにされた。その記述によると、「鵠は腐肉をたべないのでこれを見つけると海岸や川にはこび去り、自分は蛇の卵を食って剂下する。又体内の有毒な胆汁が過剰になって気分が悪いと感ずると海水を嘴に満たして、それを自分の腸に挿入する。あの不愉快な腐肉を川に流してしまうように、彼は自分の腸中にどん／＼流し込む」(挿絵入医学史P.114)。これを見たエジプト人は浣腸によって気分をそう快にする方法を知った。そしてヘロドトスが彼の「歴史」に述べているように彼等は健康保持のため浣腸と嘔吐を毎月行い、これを三日間続けて服用した。

参考書 富士川游著「医史叢談」中の(灌腸)の項 P.384~390

(昭和十七年 書物展房社 発行)

B、浣腸の語原、類語など(ノート)

自身瀉腸胃(史記)

肛門突薬之筒(紅毛医述)

吉利詞爹兒クレステル「水銃にて薬液を腸中に激し入るるの術」

(内科選要 寛政五年刊)

西洋語の浣腸(クリステル)はギリシヤ語のクリステル、エニ

イマ又はラテン語のラヴメンから来ている由。これらはすべて洗うと同意語。

英語 Enema (エンマ) Clyster (クリスター)

仏語 Lavement (ラーヴメン) Clystere (クリステール)

独語 Klysma (クリスマ) Klistier (クリステル)等。

アナロギー(類語)

浣腸=浣腸器(Seringue < seriner—(俗)ひめ込む、syringe(英))

肛門。

浣腸器(Seringue & lavemen) = ポンプ、肛門、腸洗滌、ヴァ

ギナーから目、耳の洗滌等。浣腸——イルリガートル、注

射器。ピストン——嘴管、麦の莖、ゾンデ、筒管、射出、

エジャキユレール、エジュキラシオン、排泄。浣腸——肉じ

る(ヴィオン・ポワンチュはルイ王朝時代、浣腸剤として

用いられる)、注射、やろうの注封器、一物。(ラルース

類語辞典・俗語辞典より)

二月二十日

明日から学年試験がはじまる。試験勉強に取りかゝる前に浣腸隆盛期がどうしておこったかの基礎づけを簡単にして置こう。

デカルトの思想とモリエール時代の医学と浣腸との関係についてデカルトは思惟し得るものは神、精神および肉体の三つの実体であることを彼の「方法敍説」(一六三七年刊)第四部において明らかにした。

実体である神は絶対者として人間の精神や肉体には全く依存することのない存在である。むしろ肉体と精神とは、それが実体的存在として存在するためには造物主、神に依存しなければならない。だが肉体と精神の二つの実体はそれ自体神を媒介として結びつくことは出来ない。肉体と精神とが結びつき得るのは大脳の松顆腺によつてである。この松顆腺は、実は人間の「精神の座」であつて、肉体そのものは一種の自動体なのである。

人間の肉体は器官の装置によって動く自動体であり、その機能は心臓にある。心臓は動脈を通じて血液を循環させ、自動体の生命を

保持する。この血液の中には動物精氣エスプリザンモが発生するのである。

この動物精氣とは、云わば神が「自然に対しては正統的協力の手をさしのべるだけで、彼の定めた法則に従って自然自らが仿いて行くのにまかせた」ものではなく、神が肉体に「光のない火の一種」をそつと心臓に焚きつけて置いてくれたものである。例えば株はその乾く前に密閉しておくとか熱を帯び、新しい葡萄液を搾りかすの上で醗酵するにまかせておくと酒になる。動物精氣は循環する血液の内にあつて熱を作り、酒を作る原動力である。しかもこれは「極めて微妙な気流、あるいはむしろ極めて純粹で強烈な焰のようなもので、それは絶え間なくおどろくべき多量に心臓から脳へとほつて行き、そこから神経を通じて筋肉のうちに浸みわたり肉体のあらゆる部分の運動をあたえるものである」(敍説第五部)。それ故、この動物精氣がおとろえ腐敗すると人間は病氣になる。

このようなデカルトの血液循環の思想は実は当時の英国の医師ウィリアム・ハルヴィー(一五七八—一六五八)が一六二八年に公刊した著書にもとづいて記述されたものと認められる。しかもハルヴィーの説は、それが発表されるや全歐洲に大論争をまきおこし、新説血液循環論を認めるかどうかについてはパリ医師会があげて反対の立場を取り、モリエールの最後の芝居「氣をやむ病人」が上演される一六七三年までもちこされた。そしてこの年にはじめてパリの大学で新説を講座に入れることが許されたのであった。

デカルトとモリエールはこのハルヴィーの説を正しいものと認め、自己の哲学体系の中に、あるいはその戯曲の中に取り入れた先覚者であった。そしてデカルトの解く動物精氣と病氣との関係はまたモリエールの戯曲の中に巧みに取入れられ生かされておるのである。

一六六五年初演のモリエールの「恋の医者」第一幕第二場では一人の令嬢を中にして論ずる二人の医者、マクロトン氏とバイス氏の

対話がそれである。マクロトン氏によれば、令嬢の容態は煤色のトゲのある蒸氣の在る徴候が認められ、それが脳膜を刺戟しておるようだ。(実際には彼女は肉体の病氣ではなく恋やまいなのだ)これはギリシヤ語でいうアトモスで、令嬢の神経病はこのアトモス、即ちがんめいなねん着力のある腐敗した氣分から起り、それが下腹部にまでしんとうしているようであると。バイス氏はこの氣分は長い時の連鎖によって生じたもので脳の領域にまでくすぶって来て悪性になったものだ。マクロトン氏はこの惡氣をぬきとるため是非とも令嬢に排泄をさせようということになる。先ず少量の鎮痛剤を用い浣腸を実施する。それから、もう一つ下剤をおかけしよう。バイス氏も勿論これに賛成で、浣腸、下剤、放血を行い、必要とあらば何度でもこれを繰り返えそう。そしてこのような医学の作法に従って死んだとしても、作法に逆って長生きするよりは、はるかに立派な事であると二人は結論づける。こゝにおいてデカルトの動物精氣はアトモスと云う生き／＼した言葉と意味とにおき返えられる。更にこのアトモスと浣腸との関係が巧みに説明された(?)のが「氣を病む病人」なのである。

兄の拒絶によって浣腸をつきかえした結果になったアルガン氏はたちまち主治医ピュルゴン先生の怒りを買ひ、先生浣腸をいたしますから、どうぞもう一度浣腸器をもって来て下さいと泣きながら頼む彼をしり目にかけ、俺の浣腸を輕蔑し、身体の清掃を行い惡液の完全排除を拒否するお前、「お前の悪い體質、内臓の不調、血液の腐敗、胆汁の苛烈、体液の沈降等をみなそのまゝほっぱらかしに置いて置いてやろう」。それによってお前は消化遅延を引きおこすだらう。そして消化遅延から消化不良に、消化不良から消化不能に、更に完殻下痢に、更に進んで下剤重症となり、水腫病をひきおこして遂にはお前の生命を喪失してしまうのだ、と宣告される。

まさか浣腸を拒否したために命をなくすなどとは現代人は考えはしまい。それは浣腸治療の限界を知っているからだ。だが、当時にあつては、例えそれが喜劇であるからとしてもこれに近い当時の病理学の説明が浣腸を重視させていたことがうなづける。そして例えブルソオニヤツク氏が俺は何んといわれてもしやせんぞと威嚇してみた処で、薬剤師たちの手に／＼持った大浣腸器の包囲陣をのがれることは出来ないのである。彼等は歌う。

「浣腸だ、浣腸だ、甘いあまあいおかんちようだ。それはうまい、うまいものですぞ。そらしましよう、ね、しましよう、さあしましようよ。おなかのお掃除、おなかを空にするために……」(ブルソオニヤツク氏第一幕第二景)と。

二月二十四日

昼休み、研究室で明日の経済史の試験の下しらべをしていた時、Sが不機嫌な顔をして入って来た。どうしたんだと聞くと、この二三日通じがなくて頭がはつきりしないと云う。じやあ浣腸したらいいのにとするとSは顔を赤くして横を向いてしまった。

Sと連れ立って正門前の薬屋に行きイチジク浣腸を三箱買う。トイレに近く、学生のいない小教室に入って、俺もするからお前もしろと彼に二箇わたしてやる。お互に顔を見合せないようにして、しばらく／＼と／＼やっていたが、一緒にトイレへ行く。

Sの排泄音が壁を通して前方から響いて来る。俺は壁に向って一人でニヤツとした。上衣のポケットから箱の中の効能書を引張り出して読む。

お父さま方、学生さん方の便秘は頭を重苦しくし、お仕事やお勉強に重大な影響を及ぼします、だって……。

三月一日

K書店の二階へ上る。書棚の前で店員と話をしている横顔の美しい——まだ少年期のなごりをその頬や口元に留めている、丸帽のK

大生をみつけた。何げなしにこちらを向いた顔を見たとき俺は今時こんな(花も恥じらう)美青年がいるのかと驚いた。俺は本を探しているふりをして彼の顔をちら／＼眺めた。彼は一冊の本を買ってしまうと、うしろのカウンターで本を読んでいた若い女子学生の肩を、ぼんとたたいた。女の子はびっくりして振りかえった。二人は顔を見合せて笑った。青年は白い美しい歯をみせて笑っていた。そして二人ははしやぎながら俺の前を通りすぎていった。俺は何だかとり残されたような気持ちで茫然と彼の後姿を見送った。俺は彼と話をしていた店員を憎んだ。それ以上に俺はあの女の子を憎んだ。

俺は淋しかった。「Y」へ行って飲む。美青年の面影が目先にちらつく。俺は「Y」を出てなま暖い夜の新宿の裏町をとめどもなくただあるき廻った。再びひつ返えて「Y」のスタンドでカッチャんを相手に閉店まで強かウキスキーをあふった。マスターに止められて、「Y」の二階でカッチャんとねる。

三月二日

三島由紀夫の「禁色」を買う。

三月三日

桃の節句。女のひな祭の日。純粋な美学の法則に従えば、
 Le corps de l'homme était plus beaux de beaucoup, et plus parfait, et plus accompli que le corps de la femme——男の肉体は女の肉体よりも遙かに美しく、優れ、且つ完成している——が、かの交態性慾も正にこの事実より発生するものである所以をゲートは述べたV(ジイド「コリドン」P.138伊吹氏訳による)。ハこういう感情は一度目覚めると容易に動物的感情に傾いて行く。男色(独語では少年愛)は人類そのものの如く古い。そしてそれは自然的である elle est naturelle。——自然に根を下していると云ってもよい。自然に背くものではあるけれども、文化が自然から獲得したものは

逃してはならぬ。どんなことがあっても放してはならぬV（同書p.139）。

だが、^{クナース・リーベ}△美少年趣味（少年愛）が変奇的にくずれると、少年のコンビネーションを被せたり、あるいは少年に浣腸させたり、少年の腎を揉ったりすることなどに愉快を感じて来るものだV（かびやかづひ氏）そうだ。果してそうなのだろうか？

三月五日

フローレンス・ナイチンゲール教程本「病院の看護—理論と実践提要」の132・浣腸の項に、俺は珍しい浣腸のあることを知った（P.108~P.109）。^{ラフマン}Les lavement thermique—あえて訳せば、その温度によって効果のある浣腸とでも云うことになる—冷水では肝臓の充血を軽減し、四〇度ないし四五度の温度では生殖機関の炎症の治療に用いられるという。男性の場合は摂護腺炎に、女性の場合は、いやこれは省略しよう。

三月八日

サルトルの「壁」（人文書院版「サルトル全集」第五巻）のなかの最後短編、「一指導者の幼年時代」の主人公リュシアン・フルーリエは、彼の高校時代、ホテルのベッドで三十五才のベルジエール氏との「素晴らしい一夜」のはじまりに、息の根が止まりそうな接吻を受けながら、自分が浣腸されることを想い出していた。△その時、ベルジエールが勝利の叫びをあげた。「とうとう、決心がついたね。と彼は云った。そして息をきらしながら、つけ加えた、さあ、君にもしてやろう」リュシアンは自分で、パジャマを脱ぎ始めた。

四月八日

加虐性肛門性慾——浣腸時の怒りの爆発は性器の刺戟後のオルガスムに通ずるもので、腸領域の強い受動的刺戟は逆って攻撃性の快感を誘発させることになるフロイドは云う。肛門は括約筋の強直

性攣縮によって閉じられている。だが粘膜からの粘液分泌によって滑動性となる。

△身体部位とこれに続く粘膜管腔は、正常な性の機転で興奮したときの本物の性器とまったく似たような仕方、新しい感覚と神経支配の変化の座となるV。（フロイド「性に関する三つの論文」第一部V）

加虐性肛門性慾と少年愛の最も美しい形で結合し形成されたものは密封の「児灌頂」ではなからうか。

△むしろ君に読んでもらいたいののは、弘児聖教秘伝のほうの不可思議な愛撫の儀式を詳述した部分なんだが、（何という精妙な術語だろう！愛される少年の具は「法性の花」とよばれ、愛する男の具は「無明の火」とよばれている、理解してもらいたいののは、児灌頂のこういう思想だ）

彼は老いた奇々した指のうごきで頁を繰り、その一行を読んできかせたV（「禁色」第一部九二頁）

△稚児は先ずよく自らの法性花を清浄に洗い柔かな紙を能く揉んで拭い、油もしくは唾を指頭に塗って法性花に入れよく誘うて後、頭指と中指と、次に頭指と中指と無名指とで誘うて置かなければならないのである。

また聖に会う少し前に左右の腹わたを撫んで身をよるべしとありこの腹法によっていよく身体を柔軟にしておくのである。稚児が僧に添い臥してから僧は稚児の結び目をはらりと解くのであるVこれはかつて、KK誌、旧号に紹介された、今東光作「稚児」からの引用だ。少年は前もって腹圧をなくすよう、よく腹筋を柔軟にして置かなければならない。腹圧をかけて、聖の（無明の火）を

少年が拒否するなどとは実に罪深いことなのだ、しかも聖は少年に
対しこう呼びかけているではないか。

「……汝の身は深位の薩埵、往古の如来なり。此の界に来て一
切衆生を度す」

「汝というのは」と俊輔は解説した。この呼びかけの相手は稚児な
んだよV（禁色）

△このようにして無明火が清尽し萎えしほむとき、本有具足の八
葉の蓮華にもたとえられる稚児の無垢清浄なる法性花は開かれるの
であった。それは仏性の開眼にもひとしい我性の開眼とでもいうこ
とが出来てであろうV（稚児）これこそ同性愛最高の開花であると
云えよう。

参考書 鹿火屋一彦著 Homo sexualit Technik（同性愛の実
践方法を闡明にした快著である）日本特集出版社

III

七月五日

ロージェ・マルタン、ジュ・ガールの「アンドレ・ジード」（新
潮社刊福永氏訳）を読んでいるうちに××に着く。駅前の某邸の自
然林のような大木が、うす雲りの夜空に黒々とそびえていた。同級
生のTが自家用のスポーツ・カー「MG」をもってきて待っていた
Tの顔を見るたびに俺は「いゝ目だなあV」と思う。

食堂で彼の妹たちと夕食をとる。Tのすゝめで俺は八月中ばで彼
の家の離れを借りることにした。夕食後離れへ案内され、すぐ床を
とってもらう。

潮騒のおどろ／＼なるを聞いているうち、いっしか寝てしまった
ものらしい。夜中せんべいを噛みながらデュ・ガールのつゞきを読
了。

七月六日

別荘地の朝。相変らず蒸し暑い。窓をあけると、眼下に青々とし
た樹木と本邸の赤い屋根がしつとりとぬれている。その先に広がっ
た灰色の海。一日中梅雨のような雨が降り続く。寝ころんだままで
ジュネの「泥棒日記」とジードの「秘められた日記」に読みふけっ
た。

七月七日

Tと学校へ行く。

七月八日

はじめてTとねる。

七月十二日

土曜日の午後。青い空。Tにせがまれて祐信の版本「なんしよく
てかゞみ」を取りにゆくため駅へ出る。東海道線のこの小駅のプラ
ットフォームには学校帰りの高校生たちが上り下りの電車を待って
あちらに三人、こちらに五人とかたまつて立っている。汚れた灰色
の手さげカバジをぶら／＼させて話をしている者、洋傘をおもちや
に戯けあっている者。少年たちのびち／＼した黒い顔。白いシャツ
黒いズボンに黒のゴム長靴。

早朝のどしや降り。は嘘のようにからつと晴れた午後。フオームの
ベンチで、俺は馬鹿みたい長靴族の群をじつと眺めた。膝までとど
く大きなゴム長。すねをより長く見せている不恰好な半長。漆黒に
輝くエナメルのもの。灰色に近い粗悪な生ゴムのもの。

天候の変わりやすい、しかも道のわるいこの海岸地に住む少年たち
はちよつとした雨にも必ずといってよいくらいゴム長を愛用してい
る。俺の前に立っていた少年が傍の可愛い顔の少年のが履いてい
る大きなゴム長を見て言った。

「お前も長靴か」

「うん。こんな天気になっちゃ、なんだか恥かしいな」

そう答えながら少し照れたらしく、頬を赤くした。相手の少年はわざと自分の半長をくねらせて

「どうだ、こうするとあれみたいだろう」

と云う。その様子がまことにグロテスクに見えたのだ。それを見せられた彼は益々赤くなった。俺の顔にもかっと血が上って来るのを感じた。上り電車が来る。

七月二十日

「君近頃トイレにいったいないね」紺のボロシャツ姿で部屋に入ってきたTが云う。まさに凶星だ！「それに君が浣腸マニヤだってことはわかってるんだ。Sから僕聞いたぞ。それにきのうの朝、洗濯があったらとママが言うんで、わるいけど僕、君のボストンを開けちゃったんだ。そしたらリュウちゃんはんちやんとれいのものを入れてあるもんね……。だけどリュウちゃんはんの薬瓶はすっかり空じゃないか。今日は僕、最高におどってあげるから安心しろ」Tのやつめ、すっかり見ぬいていやがったな。蟬の声が急にやかましくなつて俺の耳をつく。

Tは呼鈴を押して本邸からの少年をよぶと、耳うちした。間もなく少年は風呂敷包をもつてもどつて来た。そして俺の前へこんなものをならべた。

グリセリンのポンド瓶(五〇〇CC)二本。ワセリンの小瓶。洗面器。便器。ゴムシーツ。それにエニマシリンジ(Energysyringe)と呼ばれるゴム浣腸器と。

「なんだい、便器があるのか？」俺はちよつとむくれた。Tはすました顔で「じゃあ君はエニマシリンジを使ったことがないんだな。用意だけはした方がいいね」。彼は少年に洗面器に半分程水を入れてこさせると、エニマシリンジをその中へつけた。そしてじゅう／＼とゴム球を押して具合を試していた。

俺は浣腸されながらこんなおそろしい(だが、なんと素晴らしい)

浣腸器を人はよくも考え出したもんだなあと思心した。そしてKK誌に紹介されたH夫人の「蛙腹」ってこういうものかと思った。

七月二十五日

Tの運転するMGで東海道の松並木をつっぱしって、K海岸に住むHをたずねる。防風林の木陰でHのやつ全身汗にまみれてボディ・ビルをやっていた。

三人で海浜づたいを歩いてからA島に渡る。

青黒い大きなうねりのよせる淵、それをとりにまく小岩の点々と見える場所へ出た。われわれの立っている足元のはるか下に牙をむいたような白い波がさつと散る。白い禪姿の若者や少年たちが飛びこんでは泳ぎ、又引返しては飛び込む。われわれも飛び込んだ、そして眼前にあった小岩にたどり着く。「ここが稚児が淵というんだ」名も知らぬ海草をもてあそびながらHが言った。そしてこの地方で歌われるというF音頭の一節を彼は美しい声で聞かせてくれた。

へせて今宵はホテルの窓で

しのぶ恋路の稚児が淵

月が散る散る潮騒むせぶ

若い生命の思い出に

七月三十日

神田のレストランLにあつまつたT・S・F・Aを俺と五人でビールを飲む。Fからわれらのグループをエニマ・クラブにしないかとの提案が出る。面白い、と全員賛成する。Tの発言——会員が輪になって後ろの者が前のものにとやれば、皆一勢に浣腸が出来る。「止め」の合図があるまでのある一定時間これを続けさせる。それを最高に堪えられたものをわれわれの会長にしようじゃないか。Aが苦笑した。「君のお尻によく聞いてから再考しろよ。とに角馬鹿々々しいや」ということでFのクラブ創立案はオジヤンになる。

七月三十一日

日の沈んでしまった浜にTと一緒に出る。さっきまで風と共にこぼれて来たうるさいスピーカーの音楽も人の声などの雑音も嘘のように消え、ただどう／＼と寄せては返えず波音が高く聞えてくる。

波打際ではまだふざけ廻っている裸の二人や棒をなげては犬にひろわせている少年がいた。

砂の上に腰をおろしたまま二人は、相手を砂の上へ転がしては叫び声や笑声をあげている少年たちの姿を眺めていた。丁が竹の棒で砂をつついた。見るとつぶれて割れているイチジク浣腸のカラだった。丁は俺の顔を見てにやりと笑った。

夜丁に浣腸してやる。

八月三日

ベットの中で丁が言った。

「僕はシテッケルの浣腸は自慰であると云う言葉は確かだと思うねそれだから、僕たちもハイラーメン（結婚）することによって浣腸も又ホモも解消出来ると信じたんだ。僕は男性として女性を愛しないことは絶対にはないと心の底では考えている。しかし僕は男が男を愛するという、もっとも単純な（実は倒錯の神秘性をもった図式によって複雑になって居るのだが）愛の形の中に、いわばプラトニック（この言葉を僕は「饗宴」の中でアリストテレスが用いたような意味につかうが、）な理想美を見出したいんだ。簡単に相手を変えらる多くの男色家の好色な遊技としての（ホモ）を僕は考えたくないんだ。僕は相手を得られない時に（自分をウールニングにおきかえて）浣腸をして代用することもある。しかし浣腸は一種のフェチズムだ。前技的な性格を持って来る。だから浣腸器や浣腸の行為はそれ自体ではけっしてそのものにはなり切れないのだ。浣腸する場合僕はある理想美のイメージを画いていなければ全く興味を失ってしまう。（ホモ）もこれと同じだ。君もそう思うだろう。」

彼は低い声でつけ加えた。

「僕は理想美のある年齢まで追求してみても、それが求められないものだとわかった時にはすぐハイラーテンしてしまうよ」

III

ある日、古新聞を整理していたら、こんないやな記事を見つけた
カンチヨウして愛児を殺す

（所沢発）埼玉県入間郡原市場村原市場中村とし子（三二）は、去る七日朝同村土屋医師に急性胃腸病と診断された長女かつみちゃん（三）に間違えて農薬のヌオルマリソでカンチヨウしたためかつみちゃん八日朝死亡した。

★

静かな夜。時々風が窓ガラスに雪を吹きつけるらしいさらさらという音がする。俺は床の中から一本のガラスの冷やかな浣腸器をじっと見つめていた。灰色のある頁に書いた「俺は一つの理想美を見いだしていたからなのだ」という言葉を想い浮べていた。ZYのはにかみの微笑がちらついていったが、それもいつしか消えていった。現実には在るものはただ電燈の下で相変らず冷く光っている浣腸器だけなのだ。

（おわり）

絵画のアイディア募集

各種趣向の「画帖」並びに「写真帖」を作成の上、同好者の方々に分譲する企画を立案中ですが、右に關してのアイディアを広く読者の皆さまから募ります。採用の分には、完成した、画帖又は写真帖を贈呈いたします。なるべく詳細なる説明並びに略画の添布をお願いします。

編集部



箱 はこ

磔 はりつけ

——西鶴「武道伝来記」より

多
山
皓

人間は何が幸いになるか分らない。
殊に女は、氏なくして玉の輿に乗ることができる。

小梅がわけあって武蔵国の親元をはなれ、この福島橋山刑部の所に召使われるようになって三年、全く偶然の機会から彼女は刑部の寵を受けるようになった。

彼女はもじもじしているのが大嫌い。朋輩の女がもじもじしているのを見ると、向うずねをけとばしたくなる程で、なぎなたの一手も心得た明朗な女性であった。彼女が刑部に

見出だされて、寵をうけるようになったのは彼女のこのお俠な性質のおかげとも云えた。今も朋輩の野沢というのがその大嫌いなもじもじをしているのである、先刻から老女の紫竹としきりに話をしている。

「そなたも十九も二十にもなって、まるで初心な。少しも恐れることはないではありませんか、お上のお伽するは我々の役目の一つ、万一が一手がつかつて、身ごもればそれこそ立身のいとぐち」

「はい、それは……。そのくらの事は私も存じてはおりますなれど、今日は大事な母上

様の御命日ゆえ」

「何とおいやる、御主人の命に従うに、命日もなにもあるものか」

「でも、仏様は、御見透して申します、そのんな勿体ないことが」

野沢は、腰帯のしどけない姿で、半分泣きながら云うのである。

彼女は今宵、燈をおろして帰る途中、刑部の目に止まり、くどかれて後帯をつかまれ、帯を解いて逃げて来たのであった。

「そなた、そのように、心強うこばめば、あとでどのようなお叱りがあるうやも知れませ

ぬぞ」

「……………」

「あゝよめた。さてはその方、思つた男があるのじやな。こりや、不義密通は、お家の法度と知らないか」

「あれまあ、何で私がそのような……」

「男がなくば、何故にうんと云わぬのじや」
「でも……」

小梅は例によつてまだろこしくて仕方がない、しばらくじりじりしていたが、

「わたくしが参つて、野沢様の帯を返していただく参ります」

そういうと、早や、裾をさばいてスタスタと部屋を出て行った。

座敷は、今日の芸づくしの後もかたずいて、不機嫌そうな刑部が一人、几息に寄りかゝつて浄瑠璃を口ずさんでいた。

彼は今年二十八歳、美男子というのではないが、キリツとしまつたところのある好男子。

それが、この所三年の間、起き伏し馴染んで、一人の男児までなした妻に先立たれて、いたく打ち沈んでいた。

毎々毎々の読経三昧、月代もそらずに四十九日を過したのである。

然しそれでは体にも悪いというので、老女紫竹の心づかいで、月代も当り、こよいの芸づくしが催されたのであった。

ふだんはまじめ一筋の家老が口三昧線に隆達節をうたえば、今宵を晴れの芸づくしに、殿のお目にとまろうと、一段とあでやかによそおつた女共が、舞え唱えの披露に及び、果は、新参の腰元が、目を真赤に泣きはらしながら、チヨンヌゲを踊らされるなど、至れりつくせりの趣好であつたが、刑部には少しもおもしろくなかつた。

馬鹿騒ぎの座敷をあとにして、書院に出て見ると、夕方まではおぼろ月も出ていたが、いまは時雨れて風に瑠璃燈がゆらいでいた。

「外せ！」

気短かに云い放つた声を聞き、早速おろして行きかけた女性を、一日見るより、刑部は不満のすべてを満たされたように思った。

「待て、申すことがある」

それは死んだ女房に生き写しではないが、どこか似たところのある、なよなよとした女性であつた。

しかし女は帯を解きすてゝ逃げてしまったのである、彼はおもしろくなかつた。

「今宵の伽をさせるのだ、召し連れよ」

老女の紫竹に命ずると、座敷へ帰り、ひとり浄瑠璃を口ずさんでいた。

「野沢の帯をお返し下さいませ」

小梅は刑部に恐れげもなく云つた、刑部はしばらく小梅の顔を見ていたが、

「うむ、返してやるぞ、その代りそちが今宵

の伽をいたせ」

刑部の手が小梅の肩へ延びて行つた。そこで小梅は目が覚めた。

二

目が覚めれば肌寒い獄屋の内、格子を通して月の光がさし込んでいる。

「あれから半年、わたしの運命はこのありさま、それにしてもあの日は——」と小梅はなかばあきらめた運命の糸を、ねむられぬまゝにたぐつて行くのだった。

あの日は、宿下りをしていた。

彼女は生国が武蔵であつたので、この福島には仮り親が居るだけであつた。その仮り親の呉服商小次郎という者は、気のよい男で、彼女も宿下りを楽しみにしていたが、その日小次郎は風邪をひいて、体の具合が悪かつたので、つい長居をしてしまった。

「どうも、今度という今度は、おれも長いことはなさそうだ」

小次郎はそういつて、木綿の布団の中から骨と皮ばかりに細つた腕をのばして、小梅の白いやわらかな手をにぎつた。

「もつとも、おれは年に不足があるわけじやねえ、六十まで生きりや沢山だ」

そんな事も云つた、今度は本当にあきらめ切つた口振りであつた。

「そんな事があつてよいものですか。なおそうと思えば、どんな病氣だつてなおるもので

す。何でしたらまたこの間の山伏にでも来てもらいましょうか」

小梅はやさしくそう云って、祈禱をすゝめた。しかし小次郎は頑強に頭を振って、
「もうなおろうとは思わぬのさ、今更なおつた所——で」

そう云って卑屈な笑いをうかべると、
「だが、お前さんは大事にしなきゃいけないぜ、先の長い体だ、不養生だけはしないようにな」

と自分の娘をさとするように云った。

「近頃お殿様の御機嫌は」

「ええ」

ええとは答えたが、小梅はそれから先、何と答えてよいかわからないのだった。

帯を返してもらいに行つて、一時寵愛はうけたものゝ、殿の寵愛は、今はすっかり野沢に移っていた。

「相かわらずお目をかけて下さいます」

死の迫った仮り親に、彼女は到々嘘をついてしまった。

「お前は、殿様に可愛がられて仕合せじや」

小次郎は、自分の事のように目を細めて喜んだ。それを見ると、小梅はいたゞまれず、
「おいとまいたします」

と立ち上った。

「これがこの世の見取めかも知れん」

小次郎は後から追いかけるように声を掛け

た。

「不吉な、そんな事が」

小梅はそう云いながら後も見ないで表へ出た。この北国にも春のきざしはあらわれて、梅がほころで始めている。

小梅は我が名にちなむこの花が大好きであつた、一枝手折るとふくよかな香をかいだ。表門を入つて庭づたいに部屋へ行きかけると、二、三の奴に前をさえぎられた。

「何をするのです」

奴の粗暴なふるまいに、小梅はまなじりを決してたずねた。

「太々しい奴だ」

奴の一人は云いながら荒縄を彼女の手に掛けた、彼女が手刀で払うと、うしろから腰を蹴られて前に手をついて倒れた。

アツという間に彼女はぐるぐる巻に縛られてしまった。

三

「一体何事が起つたのでございます、私が何をしたらと申すのでございます」

それに真に不審に絶えぬという顔つきで、決して芝居でないことは、心の正しい名判官なら直ちに見分けたに相違なかった。

「黙れ！ あの手子箱は其の方より野沢へ送つたと確かな証拠があるぞ」

菓子箱と云われてハツとした。彼女は宿下りの前に、多仲という家中の若者から送られ

れた山吹餅の折を、そのまゝ開きもせず野沢へ送つたのであつた。それは多仲が常々彼女は無態の恋慕を仕掛けて来て、菓子箱なぞ持つて来る事も稀でなく、その度に返していったのだが、たつてというので面当ての意味もあり、同時に男勝りの彼女としては、殿を寝取つた敵へ塩を送るつもりで、野沢に送つたのであつた。

「その菓子箱は、確かに野沢様に送りましたなれど、その菓子箱が又、どうぞいたしましたか」

刑部は得たりとたゞみかけて、

「そちは山吹餅に、斑猫の大毒を仕掛け、野沢を殺そうとたくらんだであらう」

それはまさに晴天の霹靂であつた、菓子箱は小梅の手には四半時もなかったのだ、あまりのことにあ然として声も出ない小梅を見ると、刑部は声を荒らげて、

「白を切るならどこまでも切るがよい。そちは恋の敵の野沢を殺そうとたくらんだのかも知れぬが、野沢はその餅を一同の女に振舞つたのだ。そち以外の腰元は、みな枕を並べて苦しんでおる。恐らく助かる者はあるまい。

どうぢや、恐ろしいことゝ思わぬか」

「恐ろしいことでございます」

あまりの事に小梅は、前後を忘れて乗り出すようにして云った。

「そうぢや、恐ろしいと思うであらう。恐ろ

しいと思わば、真直に申し立てゝ罪に伏するがよい」

それを聞いて小梅はハツとした。

（そうだ、自分は今疑われていたのだ。あまり大きな恐れのためにそれを忘れかけていた、これはめったな事は云えない。）

そう思うと中々次のことばが出なかった。

刑部は静かに見下しながら、

「どうじゃ」

と尋ねた。

「お情ない事をおっしゃいます。私は菓子箱こそ送りましたれど、斑猫の事なぞ少しも存じませぬ」

それだけの事を云うのがやつとであつた。

そんな過去の事を回想しているうちに、ハツと現実に返つた。

四

昨日のあの音は何であつたろう。

材木らしいものを投げ出す音や、こつこつという木を斧でけずる音。トン、カンカンという釘を打つ音。

その音を聞きながら牢番の五郎助はニヤリと笑つた。

その音が頭の中から消えさぬうちに小梅の耳にヒタヒタ云う足音が聞えて来た。

「寒いか」

と云う声がしたのでハツと驚いてそちらを見ると、牢格子の外に五郎助が月明りをあび

てニヤニヤ笑つていた。

「お前は五郎助、何しに此処へ」

起き上つてキツとにらみつけながら詰問する小梅に対して、五郎助はニヤニヤしながら

錠を外して中へ入つて来た。

「お前を楽しませに来たのさ」

「楽しませに？」

「そうよ、お前もいよいよ、きよう限りの命だからナ」

そう云つて五郎助はまたニヤリと笑つた。

「きよう限り——」

小梅は心臓が一つドキリと大きく浪打つたのを耳にさえ聞いた。

「そうよ、お前はきようの四つにいよいよお仕置きになるのだ」

「四ツ？」

小梅にはもう涙というものは一滴も残つていなかった、彼女は唯きよう然と五郎助の口元を見つめたまゝ無表情であつた。

「それではいよいよ首が落ちるのじやな」

吐き出すようにそう云うと、相変らずニヤニヤしたまゝの五郎助は、

「首は別になくならないさ」

と、これも噓んで捨てるような調子で云つた。

「自分のした事を考えて見よ。八人も何も知らぬ女を毒殺したお仕置が、打首ぐらいですむと思うか」

「八人も毒殺、恐ろしい事。けれど私にやない、私はそんな事をした覚えはない」

小梅は五郎助のそばににじり寄り、その裾へしがみついて云つた。

「おれは知らないナ、殿様の前で白状した奴が居るんだ、そいつが殺したんだ」

彼はすがりついて来た小梅を冷く見下しながら云つた。

「白状——」

小梅はそれだけ云つた。

「おれは殿様じやない。だからお前が本当の犯人だって、うその犯人だってかまわない。

お前を楽しませてやればいゝんだ」

「楽しませる？」

小梅はギョクンとして云つた、話が百八十度転向したからだ。

「末期の水の代りだ」

「五郎助、それでは私のお仕置は？」

小梅にはその方が重問題であつた。

「昨日、木を削る音がこゝまで聞えて来た筈じや、それで分るだろう」

相変らず五郎助は冷たく云い放す、その言葉に突放された様に小梅は身をしりぞけた。

「磔！ 私は磔になるのだ、私を磔にするのだ。罪のない私を、私だまされたのだ」

小梅はそう云うと、ワツと泣き伏した。今まで枯れ果てゝいた涙が、一時にドツとあふれて来た。

「あの恐ろしい碟になる位なら白状しないで責め殺された方がまだましだった」

彼女は泣きじやくりながらそう云った。

「白状しなければ痛い目に合わせるぞ」

これは一種の言葉の魔術であつた、この言葉は決して白状すれば痛い目に合わずに済むという反語ではなかつたのだ。

彼女の頭の中には以前見た碟のむごたらしい有様が、地獄絵の様に駆けめぐつた。

大兵肥満でひげもじやの、さも強そうな盗人が、胴中に槍を突込まれてのた打ちまわつて苦しみ、口や鼻や目から真赤な血を流して絶命した、それがいつか自分の身の上になるとも知らず。「可哀そうに」とも云わず、悪人の落ちゆく果と見守つていた自分がつくづく恐ろしかった。

「碟に本当に碟に」

彼女は五郎助の膝へ再び猛然と突進して行くと、氣違ひの様に云った。

「まアそんな所さ、そう思つていりやい」

「何とかして、どうかして助けて、命乞いをして、何でも上げる」

今の小梅には身分の低い牢番の五郎助などに、そんな力が有るかどうか疑つて見る力さえなくなつていた。

「ようし、命乞いしてやろう。その代り、何でも言う事を聞くな」

「何でも聞く聞く」

前後の見境もなく、取り乱した調子で言つてしまつた。

「おれが命乞いすりや、親船に乗つたようなものよ。」

そう言いながら彼は、小梅を力まかせに押し倒した。

五

四ツの太鼓の鳴り響く頃には、広庭に棧敷が組まれ、そこに刑部を始め家中の者が、仕置の始るのを今や遅しと待ちかまえていた。其処には磔柱はなくて、一つの大きな杉の箱が置いてあつた。

小梅はあれから失神をした様にボーとしたまま時を過していた。

五郎助が救つてくれる。そんな平常な時には考えられぬ様なことを真にうけて、牢の壁に寄りかかつたまゝ半白な目で人待顔は外を見ていた。間もなくその目は格子の外に五郎助を見出して、急にキラキラ輝き始めた。

「待つていた五郎助。待つていた待つていた。」

彼女は狂氣の様に牢格子にすがりついた。

五郎助は一人ではなかつた。その後には家老が三人の若党を従えて立つていた。

五郎助は鍵を開くと

「小梅、外へ出る」

と横柄に言つた。小梅は転げる様に外へ飛

び出すと

「どうだった、助かった？ 命乞いをしてくれた？」

と叫んだ。五郎助はハッの悪そうな顔をしていたが、家老に

「何の事だ」

と聞かれると、

「もう近頃、こいつは頭がおかしくなつて来てるんで」

と白くれた。

小梅は五郎助に、呪い言葉を浴びせながら高小手に縛られて若党に引かれて行つた。

五郎助は又ニヤニヤと笑いながら、人の居なくなつた格子にピーンと錠を下ろした。

六

半分狂氣し、半分失神している小梅の前で家老は長々と宣告文を読んだ。読み了つて若党達に、刑を執行する様に命ずると、家中一同波の様にゆらぎ、あちらこちらからささやき交す声がざわめきのように聞かれた。そのざわめきの中で小梅はハッと我に歸つた。

彼女は我に歸ると瞬間的に立ち上つて二三歩逃げようとした。縄尻を引いて引もどされると、あたりを見廻した。そこには大きな磔箱が有るだけで磔柱はなかつた。

(磔はうそだったのか。) そう思つてあたりを又見廻したが、そこには打ち首に使う土俵もなかつた。

「裸にせよ」

家老の声に小梅はハッと身をすくめた。然しそんな防禦は何の役にも立たなかった。三人の若党は彼女の縄を解くと手取り足取りして獄衣をぬがせた。ゆもじ一つされて体全体が小さきみにふるえ、それにつれてむき出しになった乳房もブルブルふるえた。若党の乱棒な取扱いで、ゆもじはゆるんで白い腹がのぞいていた。そしてその胸にも腹にもまざまざと拷問のあとがいくつもいくつもついていた。それが小梅の無実を証する有力な証拠だと考える者は家中には一人もなかった。

「サア箱の中へ入れるんだ。」

氷の様に冷い家老の声音が再び響いた。彼女ははじめて杉の箱は生きながら彼女を埋める棺桶である事を知った。

彼女のわずかばかりの抵抗もものは、三人の若党は忽ち彼女をその箱の中へ押し込めてしまった。

彼女が完全に箱の底へ寝かせられると、家老は庭の一角へ目で合図をした。するとそこから頑固者らしい白髪頭に袴大小の老人を先頭にした数人の男女が箱のまわりに進み出て来た。

先頭の老人は殺された野沢の父であった。彼は家老の前へ出て二言三言注意をうけ、改めて一同を連れて刑部の前へ行き丁寧に一礼をした。それから小梅の入られた箱のそば

へ近付くと、彼女の顔を睨みすえ、

「成程、外面似菩薩内心如夜叉とはよく言った。おのれはまあ、ようもようも恐ろしい毒を盛って、大事の娘を殺しおったな。幸いお殿様の情深いお計らいで、わしを始めみなの方が、おのれを一寸きざみにして怨みを晴らす事が出来るのじや、これ、その様な白々しい顔をせずと、少しは悲しそうな顔をせい。おのれはまあ、どこまで図々しい女なのじや」

然しその言葉も自意識を失っている小梅には何の事やら分らなかった。白々しい顔をしているのは、図々しいからではなく、半分意識を失っていたのだ。しかしその時、掌に焼け火箸を当てられた様な激痛を覚えて意識が再びよみ返って来た。

「痛ッ、痛ッ、痛ッ、」

彼女は無意識に、続けざまに叫んで。

同じ痛みが左の掌に起り、足に起った。何が何だか分らないままに

「痛ッ、ア痛い、ア痛い」

言おうとは思わないのだが、口をついて飛出て来る。見物の中には笑うものもあったが殺された女房の姉妹である二三人の娘は顔を覆った。勿論小梅はそんな事は知らない。唯頭の中に、牢屋で聞いた事のあるのと同じ様な音が響いているのを悟っただけであった。

トーン、カンカンカンカン。

然しそれが何の音であるか分らなかった。

その音が激しくなるにつれて、痛みは次第にひどくなり、場所も拡がって行った。彼女は思い切って手足を縮めて見なくなった。そこで肩と腰に力をこめて手足を引きよせてみたが、痛みが増しただけで動かなかった。もう彼女は永久に手足を縮める事の出来ない様になっていたのだ。手も足も太い釘で、箱の縁に縫われていた。

七

毒菓子の中に斑猫の毒を仕込んで、人の女房を毒害した罪は、憎んでもあまりあるものだといふので、その裁判の方法は、激しく論議された。多くの人は彼女の手足を牛に引き裂かせて牛裂きにする事を主張した。事実牛裂きはその、当時でも、最も恐ろしい刑罰の一つであった。

しかし、それでも尚生ぬるいと主張する一部の人があった。いわゆる「目には目」、「歯には歯」という刑罰が報復であった時代の事である。八人の女が、長時間苦しめぬいて死んだのに、ほんの小時間苦しんで股が割れて死んでしまうのでは、苦しみ方が足りないと考えたらしい。とはいふものの、牛裂きよりも惨酷な刑罰は、当時でも中々なかったのである。刑部はしばらく考えていたが、ハタとひざを打って

「これがよからう」

と言って、一案を示した。

それは大きな箱を作って、その中へ小梅を入れて、殺された女達の親族の者に、所きらず釘を打ち込ませるという刑罰であった。

これは箱磔と言って、あまり他に類似を見ない刑であった。一同の者もそれならばよろうと賛成をして、先ず最初に小梅の四肢を箱に張付ける役を野沢の父がうけ持ったのであった。

小梅の手足が張げられて、箱の底に張付けられたあとは、殺された女の親族達が、手に槌と釘を持って箱を取り囲み、滅多矢鱈に釘を打ち込んだ。

無惨に爪を砕いて、白魚の様に細い指へ打ち込む者、ふくらかな胸へ打つもの、柔らか

な腹へ打つ者。釘の先だけを一二寸打ち込む者もあれば、釘の頭で吹き出る血を止める程深い所まで打ち込む者もあった。

流石に若い娘は、恐ろしくて打ちそびれていたが、それでも小梅を憎むあまり、家中を若者や奴に、代理を頼む者もあった。

こうなるとその場に居合わせる者全部が、一種の気違いになるのである。打つ人も見る人も、同じ興奮に取りつかれて、この惨酷な遊戯を楽しんだ。そして楽しみつかれてみなが手を引いた頃には、小梅の胴と言わず手足と言わず、針ねずみのような釘の山が出来ていた。流石に顔は残されていたが、口からも目からも血が流れ出し、箱の底は血の海であった。そしてこのあわれなけにえは、その

中で、一寸でも五分でもいいから動こうともがいていた。

小梅が完全に息を引取ったのは、数日の後だった。箱の表には巖重な蓋がなされ、土の中に埋められた。

九、後日譚

数年後の事である。小梅の弟の九蔵と言う者が、突然やって来て、刑部の息子の市丸を奪い、斬り殺そうとして、後藤森之丞の鉄砲に打たれて返り討ちになった事件があった。その時、刑部は独言を言った。

「若気の至りだ。余はたやすく余の意に逆わぬ野沢一人を殺す気だったのに、八人もの人間を殺してしまった。」

(西鶴武道伝来記より)

女サデイストより

奴隸に与える手紙

森山美歌

随分長い事、奇ク誌上に御無沙汰致しました事を読者の皆様にお詫び致します。読者通信でこの美歌に読びかけて下さった方が多かったのに暫く沈黙していました訳は、私の生活が変ったからなのです。それは結婚。そして御承知の私の奴隸の三吉が遠く九州へ長期

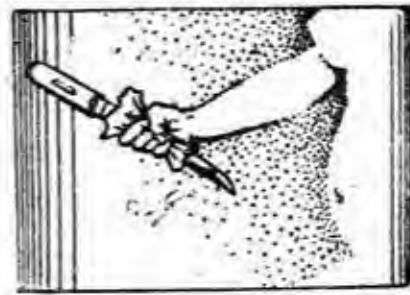
出張になったから。でも短い結婚生活もやめて、又もや私はのび／＼とした奔放な生活が出来る独り身になりました。平凡なありきたりの結婚生活なんて、私の性に合わないわ。一生結婚なんかしなくて、逞ましい男達にかしづかれる女王様になって、そいつらをこき使い、責め苦しめて生きてゆくのが私の性に合っているようです。

今の私の手元には、三吉と安の二匹の雄がいます。然し三吉は今東京にいません。だから

ら手紙のやりとりが唯一の快楽です。その手紙を皆さんに公開致します。本当の内容はもっと／＼凄く、そのものずばりの表現をしています。そのような部分は訂正致します。だから迫力は半分以下になってしまいました。余り本意ではありませんが仕方ありません。私から女王の手紙のほしい方は誌上に住所氏名を發表されたら、遠慮なく差し上げましょう。手紙を書くことも楽しみの一つですもの。

(次号へつづく)

〔異常体験記〕

撫子^{なでしこ}の花散りぬ

—私は切腹した—

北^{きた}川^{かわ}操^{みさを}

たまたま書店で見つけた「奇ク」三月号の川合伊都子さん作「Sappho日本版」を読んだ時、私は言いしれぬ異常な衝動にかられて、思わず私の手はお臍の下を強く押えていたのです。そこにはひとすじの傷あとが、あの忘れ難い記憶を呼びさますように、はつきりと残っているのです。そしてそれは、あの過ぎし日の傷ましい陶酔の中へと、私を導いていってしまうのです。

あの日——忘れることのできない、昭和二十年八月二十三日は、ことのほか暑い日でした。当時、私は旅順郊外のある軍人宅に女中として住んでいたのです。その頃は終戦直後のことではあり、当時の旅順もまた、敗戦の

混乱状態は全く眼にあまるものがあつたことはいうまでもありません。そのうちにソ連の軍隊が来るといふ噂から、いつしか彼等が来れば、日本の女はみな彼等の慰みものとなつて辱しめをうけるのだということまで、まことしやかに伝えられるようになりました。

私の仕えている主人の海軍士官は旅順の港に居られたのですが、敗戦の責任を負うて自刃せられ、留守宅にはまだ御結婚後間もない、お若く美しい奥様がただ一人居られたのみでした。奥様は御主人の御最期をお聞きになった時、あまりのお悲しみのせいでしようか、それからどっと床におつきになり、持病の心臓を悪くせられ、以後ずっと床について

いられるまゝだったのです。その上、奥様は三ヶ月の身重でした。こうしたなかで、私達は日本婦人屈辱の恐ろしいニュースを聞くようになったのです。そしてとうとう忘れることのできない日がやって来たのです。

その日は御主人が亡くなられてちょうど初七日に当たっていました。形ばかりの仏壇に花など供え、奥様と一緒に御主人の冥福を祈りました。おつとめが終ると、私は奥様のお相手させねばなりません。奥様は前々から変つた習慣をもつていられるのです。

私ははじめのうちは、こうした日課がいやでいやでたまりませんでした、しかしいつしかこの奥様の日課を心待ちするようになっていたのです。いつものように洗面器に水を入れて奥様の床へ持ってゆきますと、いつになく真面目なおもゝちでこんなことをおっしゃいました。

「操さん、これから私の云うことを驚かないで聞いて下さいね。このごろ町に伝わっている噂をあなたも知っていますね。私達もあゝいう辱しい目に会ふのなら、日本の女としていさぎよく自分で死にたいと思いますの、私はこんな身体で、このまゝ衰弱していったなら、いざという時に自分で死ぬことも出来ないでしょう。私は夫が亡くなった時から今日まで、ずっと考えて来たのですが、今日決心しましたの、今日は夫の初七日ですし、これ

以上あなたに迷惑をかけたくないし、とうてい日本へは帰れそうもない身体、夫の後を追って立派に大和撫子として果てたいと思います。操さん、私は夫のように夫がお腹を召されたこの短刀で、私もお腹を切って死にます。操さん。さあ泣かないで、今日は充分に身体を拭いて下さいね」

思いがけない奥様のお言葉に私は吾を忘れて、思わずも嗚咽してしまいました。お優しい奥様、お若くお美しい、こんな良い奥様の家で働くことのできる喜びを充分に味っていた私でしたのに、御主人の御最期から奥様の御病氣、そして今のお言葉——私は何といつて御答えしたらよいのでしょうか。奥様だけ死なせて、どうして私一人だけおめおめと生き永らえることができましょう、私はこの時、奥様の後を追って死のうと覚悟を決めたのでした。そうです、私は心ひそかに奥様をおしたいしていたのです。

奥様は着物をお脱ぎになって横になられました。御病氣で衰弱してられるとはいえ、均齊のとれた、よくひきしまった美しいお身体は同性の私が見ても、ほれぼれとするような魅力あるものでした。いつものように御自身で顔をお拭きになると、タオルを私にお渡しになります。私はこみあげる涙を押さえながらいつもよりもていねいにお身体を拭いて差しあげました。胸から腹へ——これが私の

奥様に対する毎朝の日課なのです。グッーと盛り上った、おわんを伏せたような二つの胸の隆起は、乳首こそ黒く色づいてはいますがまだ処女のような弾力性に富んでいるのです。私はその乳首や双つの丘陵をタオルで撫でますと、奥様はそのつぶらな眼を閉じて、うっとりとしていらつしやるのです。二つの隆起の間を通過してタオルはみずおちへ、しみ一つない純白の雪のような身重のお腹は、かな息づきに上下さえています。みずおちからドームのように丸くせり上ったお腹へと私が手が動きます。私は日ごとに大きくなってゆく奥様のお腹を見るにつけ、いつも私のおしたいしている奥様の愛情を、一身におうけになった旦那様が嫉妬されるのでした。丸いお腹の頂上に、黒い深く窪んだお臍があります。私はそのお臍も念入りに拭いて差しあげるのであります。奥さまは眼を閉じて、私のするがままにまかせていらつしやいます。縦にやや長く、大きく窪んで渦を巻いてひだのあるお臍の奥まで、私は心をこめて蒸タイルを丸めた右手を動かしてゆくのです。この時、いつもは美しい奥様と一緒にいられるという幸福感で一杯なのです。

タオルに私のすべての誠をこめて奥様のお肌を拭いてあげながら、こんな美しいお腹を刃物で切られるのかと思うと、ほんとうにいたわしく、私は泣けて泣けてしかたがありませんでした。いつしかあふれくる涙に眼の前がボーツと霞んで見えなくなり、思わず奥様のお側に打ち伏してしまいました。「奥様、私は奥様をずっと以前からおしたい申上げていました。どうか私もお後を追わせて下さいませ。」

私は必死のおもちで奥様にお願ひしました。奥様ははじめのうちは私の短氣をおいさめになり、お許しになりませんでした。私の心からの御願ひにとうとう喜んで許して下さいました。私のその時の嬉しさ、どうかお察し下さいませ。

やがてお身体の清掃を済まされた奥様は、身の廻りの品々など私に焼かせられました。床のシーツも真新しいのと取かえ、床の上におすわりになって、両足をかたく紐で結ばれました。そして着物を肌脱ぎになり、充分にお腹をあらわにせられました。大きくふくれているお腹はかすかに息づき、お臍の黒さがとても印象的に見えました。やがて静かに右手に旦那様の無念の血をすいこんだ短刀をとられ、そのままじっと両眼を閉じられました。そして左手で脇腹からお臍のまわりを何度もお撫でになりました。何というお美しい姿でしょう。いつも見なれている奥様のお姿ではありますが、こんなに美しく神々しいようなお姿は、はじめてだったような気がしました。

やおらぱちりと眼を開けられた奥様は、「操さん、あなたにはずいぶん御世話になりましたね。有難う、お礼を言いますよ。私はひとあし先へ行きますよ。あの世とやらで再び逢って今日の物語をしましょう。私の最期を充分に見とどけて下さいね。では、さようなら。」

と言われたかと思うと、ぐっと胸をおそりになり、深く息を吸いこんで、大きなお腹を前へ突き出すようにせられました。瞬間、やにわに右手の短刀を左の脇腹へ、ぐっと力いっぱいお刺しになりました。「ブスト」というにぶい音、私はその瞬間、正視できず、思わず眼を閉じてしまいました。「うむー」というかすかなうめきと共に、奥様は大きく息を吐きながら、苦しうに短刀をグッと右の方へ引きまわそうとなさいます、なかなか奥様の意志通りに動きません。二つの乳房が大きく波をうち、クワツと開いた眼から瞳が飛び出しそうです。思わず私の体が前へ乗り出した時、グツと刀はお臍の下、一寸ほどのところへきて止まりました。にじみ出る真赤な血潮、唇をかみ、眼は一点をみつめて、必死に襲いくる激痛をこらえていられる奥様その時の御様子を私はどういうふうに描写したらいのでしょうか。やにわに奥様はお臍の下から短刀を抜かれたかと思うと、最後の力をふりしぼって心臓めがけて突こうとなされ

ました。しかし、短刀は奥様のお心のままにならず、お臍のすこし上へグサリと突き刺さりました。と思うとどうと奥様は前へうつぶせにのめって倒れました。それが奥様の最期だったのです。壮烈な勇しい御臨終でした。

私もおくれをとってはなりません。鏡をとりあげて髪をくしげずり、涙をぬぐって顔も手早く薄化粧しました。それから香水を充分に身体にふりかけました。私も奥様のように大和撫子の一人として、立派に死んでゆきたいと思ったからです。私はその時、私も奥様と同じく自分のお腹を切りさいて果てようという覚悟をきめていました。諸肌をぬいで座り、両足を紐でしっかりと結びました。鏡の中に映る自分の顔は緊張にひきしまっていました。はちきれそうな二つの乳房はかすかにふるえ、雪のような私のお腹はかすかに息づいています。私は不思議なほど冷静な気持ちでした。「死」という観念はどこにもなく、今からどこかへ旅行にでも行くような、そんなうれしい気持ちにすらなっていました。

右手にかねて用意の西洋剃刀をとりあげ、一旦瞑目しました。今度目を睜いたとき、奥様は全く息絶えて純白のシーツにあふれ出た真赤な血潮が、緋牡丹のように鮮かに眼に映りました。私は左手で静かに静かにお腹を撫で廻しました。すべすべとした何のけがれも

ないこのお腹を、今、自分自身の手によって思うさま切りさくのかと思うと、たまらなくなっていました。過ぎし日の楽しかった奥様との日常生活のたまゆらが走馬燈の絵のようになめぐるしく廻ります。私は思わずいざり寄って奥様を抱き起しました。白蠟のように血の気をなくしたお顔は断末魔の苦しみを おもてにあらわしていらつしやいました。小さくつぐんだ唇からかすかに血がにじんでいました。私は自分の唇を静かに当ててお別れの接吻をかわしました。私には親も兄弟もなく思い残すことは何一つありません。私の心の中は晴れやかな気持ちで一杯でした。「奥様ごらんになって下さいませ、操も立派におあとをおしたい致します。」

私は大きく息を吸い込んでお腹をふくらませると、力一杯エイとばかり左の脇腹へ剃刀を刺しました。瞬間焼けるような激痛と、しびれるような陶酔感とをふたつながら同時に感じました。私も奥様のようにおくれをとらじとぐいぐいと剃刀に力をこめ、お臍の下へと引き廻そうとしましたが駄目でした。手に力を入らずなんだか眼の前がボーッと霞んでそのまま意識が朦朧となっていました。奥様は私がかたまり永い眠りからさめて気がついてみえますと、見知らぬ病院のベッドの上で寝かされていました。私は死にきれず、とうとう後れをとってしまったのです。(終)



体験記

奇妙な禪

森 太 一

思い切って戸を押して入った。セメントで固めた狭い玄關の左側が治療室になって居るのか、畳の上にベッドが一台、カーテンの向うに透いて見えた。覗いた顔は意外にも女医であった。縁無し眼鏡を掛けた三十位の背の低い女医は、

「どうぞお土り下さい。」

と招いて呉れた。私はもうこう云われた以上は逃げ出す訳にも行かず、ボツと顔を赤くして下駄を脱ぐと、女医の前に立った。

「何処が悪いですか。」

「あの…。よく下痢をします。」

「下痢って、日に何回位するんですか。」

「日に何回と云う程ではありませんが、時々します。…それに便がよくありません。」

「そうですか。では、鍼にしますが、お灸にしますか。」

「鍼をして下さい。」

「鍼ね。」

カルテを出してペンを握った女医は、

「お名前は？ 住所は？ 年令は？」

と矢つぎ早やに聞いて、カサカサと音を立ててカルテに書き込んだ。こんな、鍼、灸をする治療院で病院で診察を受ける時のように名前や住所迄聞かれるとは予想しなかったのだ、私は口ごもり乍ら出鱈目を云った。

「職業は何ですか？ 酒屋さん？」

女医が紺の前垂を見てそう聞いた。

「はあ、そうです。」

割合気楽に答える事が出来た。しかし半面、

落着かない自分の態度を見て、本当は酒屋でなく、中学生である事を見破られはしまいかと何となく不安であった。

「酒屋の店員さんね。」

「はあ。」

私は、中学生の制服ではどうも鍼、灸の治療院へなどへは行けない気がして、ジャンパーに長ズボンの上に、「白雪」と白い文字が染め抜いてある紺の帆前掛を締めていた。そして自分では酒屋の丁稚小僧になり澄まして来たのであった。こうする方が、自分の期待している体験が効果的に行われるに違いないと思ったからである。私は中学生であるにもかかわらず、丁稚小僧の服装をする事に異常な憧憬を抱き、その日も、途中、雑貨衣料品店で買った前垂をして来たのであった。

ベッドに腰を掛けてみると、女医は、方形の小さな金具の入れ物を開け、鍼に使う様々な器具を脱脂綿に浸けたアルコールで消毒し始めた。生れて始めてされる鍼の事は、私は全く知らなかったが、その中で、体に突きささるであろうと思われる五センチ余りの針を見た時には、あんな長いものが、アスツと突きさされてはどんなに痛いかわれないかと内心非常に心配した。けれど、鍼と云えば極くありふれたものであるし、特別痛いと言ふ話を聞いた事がないので、自分にも我慢出来るだろうと少し度胸を据えていた。用意の整つ

た女医は私の方に椅子を寄せると、裸になるように促した。私は、いよ／＼来るものが来たと観念して、前垂をとってベッドの下の方に置いた。上半身を裸にした私はベッドの上に体を横たえた。最初は背中から治療が行われた。チクリと第一の針が首筋にささったのか、軽い痛みを覚えた。声を立てる程の痛さではないが、思わず顔をしかめるような圧痛が時々あり、背中になると、次第に慣れたのか案外平気でいられた。下痢をすると言うのに首筋や背中をする意味が解らなかつたが、少しでも余計鍼の体験をさせて貰う方が、思わぬ儲けものをしたような気持がして、もっと方々され、最後に目的の場所に針がささるように胸を躍らせていた。女医の手はほとんど下がり、もうそれ以上裸の部分を残さない所まで針がさされていった。

「バンドを緩めて下さい。」

私は、伏臥の姿勢の儘、腹を持ち上げるとバンドを少し緩めた。女医は、緩んだズボンを下にぐっと押した。ほんの少し腰が露出したようだった。数針下ろされると更に、バンドを緩めるように云った。私は再び腰を持ち上げてバンドをすっきりはずした。ところが私の腰は或る線まで裸に出来ても、それ以上裸に出来ない部分が残っていた。私は、紺の前垂で禪を作ってしまった。ボタンで留めてい

たのであった。これは私の苦心の作で、頑丈に縫ってあり、青と云う白い文字が正面にあり、「青物市場」と云う文字が反対側になっていた。昨夜遅く迄こつそりと縫い上げた前垂の禪は、私をひどく喜ばせ、早速着用していたのであった。女医の目にもこの奇妙な禪が止まったのか、確かに禪の一端に指を掛け一層背骨の最下端までめくろうとしているようであった。私は女医が禪を見てどんな気持ちを抱き、又自分に対してどんな事を考えているであろうかと、胸をワクワクさせていた。どうも女医の手付きから判断すると、禪が目にと止まって更にその実態を究めんとしているようすがするのであった。この想像がはつきりと事実となつて現われたのは、腹部に治療される時であった。やがて、仰向いた私の身体を、撫で廻した女医は、へそを中心とした四点を軽く指圧して

「此処へ、お灸すると一番よいんですがね。お灸はおいやですか？」

と私の顔を覗き込んだ。私が同意しなかつたので、プスプスと腹の周囲に針が下ろされたが、私自身、これでは下痢には効くまいと思つた。女医は、下腹を二、三回撫でると続けて一針二針とさし始めた。ズボンは、私が横転した時、すっきり白いパンツが見える迄になつて居り、禪の青の文字が半分位現れていた。女医は別に何にも云わなかつた。

私は、女医が自分の奇妙な禪を見て、事務的な謹厳な態度が変わり、或る行動をとって呉れはしないかとワクワクさせたが、さすが堂々と大きな看板を掛けられつきとした女医は、そんな私の異常な狂想を知る由もなく、最初からと全く同じ態度で治療を続けているばかりで、私は物足りなかつた。そして何の変化も示さない女医を見て、自分の姿が無暗に哀れに思えて来るのであった。「変な子」と思われているのではなからうか。と云う疑念と羞恥が起こり、こんな事なら、いっそ、パンツは云うに及ばず禪のボタンまではずして置けばよかつたと後悔した。

治療を終えた私は、代金を持つと、コソコソと其処を出た。鍼そのものは、何の興奮ももたらさかつた。唯、屈辱感がひしひしと胸を痛めつけた。私はこの儘、帰るのは馬鹿らしく、今度は、按摩をして貰おうかと思つたが、表通りの按摩屋では、気がひけるような気がして、ゴミゴミした長屋の一軒にそれを見つけて入った。此処では、坐った儘であつたから、前垂だけは、しみじみと見れたが、女中らも、力一杯揉む按摩には、参ってしまった。それこそ、骨がバラバラになつてしまつた程猛烈に痛かつたので、半分位で止めて貰つた。私は、肩よりも腰を揉んで欲しかつたが、按摩は何にも云わず、いきなり肩をぐい／＼と揉んだのでつまらなかつた。私は、な

か／＼うまい具合に、思っている訳に行かないと世の中を見直した。しかし、その裡、必ず目的が達せられる日の来る事を期待していた。

奇妙な禪。私はそれ迄に幾つかの禪を自分で考案して作った。晒木綿とか、赤い布で作った六尺禪や越中禪や三角禪は、既に倦きる程作り、あらゆる機会に着用に及んだ体験を持って居た。私は、色彩とか模様とかが簡単なものから段々に複雑なものに興味を覚えるようになり、材料も、木綿等の布地よりも、古い通学靴やズツクの袋等を裁断して縫ったし、又、青いビロードのカーテンや、机のカバー類に到る迄禪に作っては楽しんだ。更に禪らしからぬ材料を考えるようになり、たとえどんなに不恰好になろうとも、禪の体裁を具えると思われるものは何でもかんでも裁ち切れ縫われてしまった。そして遂に、紺の前垂に思い付いたのであった。これは、我々から素晴らしい考案であり、私は寝静った後、針と糸をこっそり母の縫箱から持ち出して一心になって禪にしつらえた。三枚、四枚と縫う裡に、自分の体に合わせてうまく作れるようになり、ぴったりと調和すると非常に愉快になり、夜睡る時は勿論の事、学校へ迄も締めて行った。私が作った最も多い禪の型はモッコ式だった。禪による緊迫感が、私には、こたえられなくなっていたのであった。そし

てそれが、より奇妙な場合であればある程強く刺戟したのである。

第一回目、失敗した私は、次回の日迄、幾度かあれやこれやと計画を立てた。

◎どんな服装をして行くべきか。特に下着の着用操備について。

◎何処にするか。こみ入った診察や、外科的施術を必要としないもの。

◎時間はどうするか。比較的患者の少ない時は何時頃か。

第一の服装については、今度は真面目に制服制帽とし、下着も水泳禪クロネコマワシ一本とその上にパンツを着用する事にした。始め前回同様前垂姿の丁稚小僧に変装して、奇妙な禪をして行こうかと思つたが、市電の中から見た「超音波治療院」と云う看板を掲げた立派な家に行つて見ようかと思つていたのでそんな所へなど、丁稚小僧の服装では、どうもそぐわない気がして、中学生そのままの服装で行こうと考えが変つた。

第二の場所は、電柱の広告で見た治療院ならば、物理療法であるから、症状も下痢とか腰が痛いとかにして置けばよいと思われた。所が、私は幸か不幸か、別に病氣もせず、必要に迫まれる症状がなかったもので、本当に病氣―それも割合に軽い病氣で、治療院に行つて治療を受けるのに最もふさわしいもの―になりたかつた。この願いはやがて、ふとし

た時、友達と学校の運動場で衝突して、右脚のつけ根が少し捻座したように痛くなった。

これは、教師にも家族にも打ち明ける程大きな負傷ではなかったもので、これこそ治療院に行く口実が出来たと内心非常に喜んだ。

第三の時間は、開校記念日の午前中に行く決心をした。

決行の日、新しい白い水泳禪を着用した。これはその夏海水浴場の売店で買ったもので唯クロネコマワシの黒い布地を白い布で作つた物であつたが、非常に清潔感があつて好きな禪の一つであつた。これは、若し、腰部に音波が当てられる時、万一の場合をおしはかつての用意にして置くつもりで、六尺禪では都市の中学生としてはあまりにも似つかわないと思つたからだ。臀部の割れ目に快い緊縛感を受け乍ら、その日の九時頃家を出た私は三十分程して治療院の前にたたずんだが、どうも入りにくくて幾度も其処を通り過ぎて、やっとドアを押したのは、たま／＼私の前を通り過ぎた商店の小僧が「何をしておるんだろ。」と云わんばかりの目付きで自転車の上から変な顔をしたからであつた。ゴチャ／＼と古びた下駄や、皮靴の中に、編上靴を脱ぐと、「待合室」と白ペンキの札のある小さい部屋の入口に立ったが、その中に、幾人もの年寄りや中年の患者達が居るので、少しきまりが悪い思いであつた。私はやはり、其

処は自分のような者の来る所ではないと自分の突飛な行動を後悔し始めた。けれど、空間を見つけて、やっと坐ったが、既に顔がほてり出していた。もう世の中に対して何の生甲斐もなく、その日／＼をどうやら暮しているだけとしか思えないひからびた老人、如何にも病身的な皮膚のたるんだ中年の女の患者を見てみると、自分迄も一層病身めいて、ひどく情無い気持がして来るのであった。私は、備付の新聞でも見てそういうやるせない気持から逃避しようと心掛けたが、何故か心臓がドキ／＼して容易に動揺がおさまらなくて不安であった。午前中、しかも未だ十時前と云うのにこう人が立て込んでいようとは思わず何時になったら順番が廻って来るのかと、落着かなかった。

私の順は、なんと午後二時を少し過ぎていた。治療室とある部屋、リノリウム張りの床の上に、ベッドが三台据えてあった。入った正面は衝立があり、左側に長椅子が一脚とその反対側にも同じ長椅子があり、四人ばかりの患者が順を待っているのか、何れも上半身肌ぬぎの儘黙って坐っていた。私はうんざりした。この分なら、一体何時が来れば治療を受けられるのか見当がつかず、空腹にも耐え兼ねていた。すると待合室と云うのは一体何の為にあるのか、諒解に苦しんだ。どうも後から判断する所によると、治療を受けた患

者が休息をとる為のものらしかった。私はうかつさに後悔して、それから二時間も待たされたが、又その間が、私にとつてはどれだけ心を、躍らせるものであったか次のような光景で充分実証出来た。十坪位の治療室の壁には人体解剖図や骨格図がはってあり、いくつものダイアルの着いている電気器具が部屋の隅にあって、三台のベッドには、何れも治療中の人達が、或る者は伏臥して、或る者は仰向いて寝ていた。灸を背中に据えて貰って居る者、超音波の器具を関節に受けている者等様々であった。幾人かが入れ替わり、私の椅子に最も接近したベッドに、九つ位の可愛い男の子が、パンツ一つで上がった。ちんちくりんの医者は、その男の子を仰向きにさせる、二言三言冗談を交えていたが、音波治療器を手にとると、男の子のパンツのゴム紐をずつと下まで下げた。へそ迄かくれていた腹が一面に現われた。私の胸は高鳴りを覚えじつと注目し乍ら男の子の腹に何が行われる事かと息を呑み込んでいた。やがて、ペタ／＼と油のような液体が、腹部一面に塗られると懐中電灯の先端を曲げたような金属性の治療器を腹に当てがい、へその周囲を廻らし始めた、重そうな治療器が凹みをもって腹にめり込むようなその動きで、男の子は

「こそばい」と笑った。体をよじらせると

「辛抱せんかい。」

と医者は微笑して制した。私は、男の子がたまらなく羨ましかった。正に、私にとって理想ではなかったか。パンツをあのようにずり下げられ、治療を受ける男の子と、自分とが、入れ替わりたいたいと思った。こんな素晴らしい治療法があるとは予想だにできなかったのだ。何故早く気が付かなかったのかと歯がゆい思いであった。

次から次へと治療を終えた患者が治療室から出て行っても、新しい患者が見え、長椅子はいつも人数が減りそうにもなく、こんな大勢の中で、裸をさらすのは、恥しくなり、皆に注目されないでうまく治療を終えることを祈った。

しびれを切らす程待たされてやっと私は上半身裸になってベッドの上に体を横たえた。パンツ一枚きりだった。医者は私の容態を聞くと、パンツの紐を緩めるように命じた。私は体を横に向けた。サッと医者の手がパンツをめくり下げたので腰部が半分だけ現われた。私はこんな時を予想して禪の紐をゴム紐にして置いた。案の定それが役に立って、医者は治療器がよく当たるように、禪のゴム紐を上の方に上げて、腰の関節が一面邪魔物がないようにした。私は、そんな姿を周囲の人達にさらしていると思うと、目を開けているだけの勇気がなく、何をされても良いよいに

凡てを観念しているふうを粧った。音波治療器が当てられるとジツ／＼と温か味を覚えやがてさすような痛みが迫まって来た。これえ切れなくなるとその位置が変わる。同じような動作が各部位で繰り返された。私は白い禪して治療を受けていると云う自分の光景を描くだけで満足した。長い時間待たれたその理め合わせにしても尚余りあるものであった。しかし慣れるに従って、禪の紐を布のものにして置けば、医者はその紐をはずせと云ったかも知れなく、そうすれば今よりも一層自分の欲望を効果的に遂げる事が出来たのではないかと少し残念であった。しかし又、いくら私が露出欲に燃えているにしても、あまりにも冒険過ぎる年令であったので、禪一つでも、相당한決心であった。医者は、長い間待たせた詫びを云い、丁寧に治療して呉れた。反転して更に十分分。私はこの為、パソツがすっかり脱げ、完全に近い白禪一丁の姿になっていた。その裡いよ／＼大胆になり大人のように越中禪が六尺禪一本であった方が、どんなにか素晴らしいと考えていた。何故パソツなどはいて来たのだろうか。私は更にかつての奇妙な禪を思い出した。前垂禪をして、居並ぶ患者達や医者をして驚かしたらどんなスリルを味ったであろうと、想像を逞うしていたのであった。

「あの、下痢をよくするんですが。」
「では、ついでにやって上げましょう。」
私は、自分乍ら、とっさにうまく答えたものだと内心小躍りして喜んだ。まさか、あの男の子のように腹部にも治療を受けようとは今の今迄思われなかった事なので、無性に嬉しく、始めは、背中からと云う医者の言葉に腹を下にして手足をベッタリと前後に伸ばした。腰部に又もや圧迫と軽い痛みを覚え、蕩然となった。そうして間もなく腹部になった。禪のゴム紐が下げられ、男の子の場合同様、冷たい液体が筆のようなもので塗られた。私は、両手を折り曲げて背中に当てていた。重味のある治療器がその周囲を緩やかに移動し始めた。ヌラヌラと肌の上を滑るその治療器は、やがて快い温かさを持つてきた。それが又何とも云えぬ心持で、實際腹が悪くても立ち所に直つてしまひそうに思われた。その上、適度な重量感による圧迫が、腹の上の内臓を刺戟して活力がモリ／＼と湧き起つてくるように思われた。

「どうです。いい気持になって来たでしょう？」と顔を覗きこんで聞いた。勿論医者の尋ねる意味は私にははっきり解った。医者は決して腹部の刺戟に伴う他の部分の副次的快感迄尋ねているわけではなかった。又そんな目的でこの治療院の門をくぐる患者も無かつたし、故意に患者に挑発する医者ではない事はよく判断が出来た。治療器の位置が少し移動して胃の部分を中心となった。それでやつとつまるような刺戟から少し遠ざかり、ほっとした。やや動揺がおさまり平静を保つと、私は夢心地になった。何と長い時間であろう。他の患者達に済まないように思われる治療だった。滑べりが悪くなったのか、再び液体が塗られ、最初のようにへその周囲から、下腹をぐるりとえぐるように治療器が廻転した。この時だった。私は急に再襲した衝撃に全く自制心を失った。予期しない結末は実に浅ましい光景だった。

私は、尚も続けようとする医者の手を払い除けて体を起こした。

「じゃあ、この位にしておきましょう。」と云う言葉を背中に聞いて、ベッドから飛び降りた。患者は誰一人知らないようであったのが、せめてもの幸運だった。

「向うの部屋で着なさい。」

医者の言葉は、意地悪く私を追っかけた。私は脱衣した服を、抱えると、それでも、医者の云った通り、廊下を隔てた反対側の部屋に飛び込んだ。机と廻転椅子があつた。背後に音がして、戸をガラ／＼と閉まると同時に

「どうかしたの？」

と医者の声がした。私は返事に困ってモヂ

くした。

「便所ありますか」

私は教えられた便所へ行くと、その部屋に帰った。医者は私を自分の前に立たせると、自分でパンツの紐を解き褌一つにした。私は

しおれた儘しよぼんとしていた。

「君は、少し体が普通ではないようだからもう一度診て上げましょう。」

と冷静に云った。私は、かくなる上は、医者者の言に従うより仕方がなく、唯首をうなだ

れているばかりだった。

医者は、徐ろに害を説いた。私にとっては耐えられない幾分かであった。

(了)



責めとフェチズム

畔野当磨

浅草の六区は今ではストリップ小屋に押されてしまっているが、一昔前のひょうたん池附近には簾掛けの見世物小屋が沢山立ち並んでいたものだ。

なかには一名花屋敷とも云う伊藤晴雨先生好みのお化け屋敷があり、私も小さい頃、上京してきた祖父に連れられて見に行ったが、木戸銭を払って真暗な小屋の中へおずおず入って行くと蠟燭の光に照らされ赤腰巻一つの臘人形の女が後手に縛られたまゝ牢の中で首

をくまれ鼻や口から血をたらして縊死している姿や、汽車に轢き殺された若い娘の生首と両足が線路の上に転がり電気仕掛でビクビク動く薄気味悪い見せ場等が並んでいた。真暗な通路を急に飛び出てくる火の玉やぶら下ってくる生首などに驚かされて一段と広くなった仕切りへ出ると、青色の囚衣を着た二人の女が股の付根まで裾もまくし上げさせられた恰好で磔刑木の上に両手足や首を縛されていたが、小肥りの年増の女の方の磔木の前に

は二人の非人が左右に分れ、鋭い槍先で囚衣の縄目から外に飛び出た本物と見間違えような臘人形の白くむっちり盛上った乳房の下を電気仕掛で貫ぬく度に、真赤な液体がぽっくり空いた傷口から迸り出ている姿がカンテラの青白い光に照られて背筋がぞっとする様な凄惨な感じを与えていたが、一方、年増女の柱から五、六米後方に猿轡を嚙まされて磔になっっている女の柱をさえぎっている高さ一米半程の竹矢来の真中に下っている張札をよく

目をきかせて見ると、墨で

金五銭払フ者ニ限り、中ニ入りテ此ノ女ヲ
突クコトヲ許スモノナリ

と書いてあるので、私は槍突きをやってみたくお祖父さんにせがんだところ、「よしよし」と云って張札の下指標が差している矢来の前わきの少し筵の口の開いてる所へ行くと一人の爺さんが出て来て、お祖父さんの渡す金と引替えに「まあこれであまり強くな突いて下さい」といって竹槍の先が少し円くなっているのを渡し、矢来を横に倒して中へ入れてくれたが、驚いたことには暗い上に少し離れていたためよく見えなかったのだが近寄ってよく見ると臘人形どころかへ張りのある生々とした本物の人間、しかも若い娘が強く喰いこんだ縄目から白い乳房や太股をあられもなくむき出しにした恰好で磔柱に大の字にしっかりと、しかも猿轡まで囁まされた姿で縛られているではないか。さすがの祖父も「これはひどい」とつぶやき、自分では突くにしのびなく私に「お前やりたいならやれただけどあまり強くなくな」と云い竹槍を渡してくれたので、早速、乳房の下脇の白い肌に赤く塗ってあるし目がけて思い切って突き初めたが、ゴムマリを突いている様な感覚が槍先を通じて私の手に伝わってくる内に磔柱上の女の人の縛られている身体をねじらせ顔をゆがめている姿を目にしたので思わず突

くの止めたが、何だか悪い様な気がしたので「ごめんよ」と云いながら傍へ近寄って見たところ、乳下の白い肌に無数の突き傷の跡があり血がにじんでいたが、その内なんだが異様な臭気がしたので覗いたところ囚衣のめくられた裾の間にびっしり濡れたおしめが目についた。祖父の「これこれ」と云う声と、見張の爺さんの「お時間ですよ」との合図に小屋を出たが、おしめをされたまゝ磔になっている見世物小屋の娘の姿が強烈な印象となつて今でも忘れられず時々その際の情景を夢にする。今では風紀上の取締りも隅々まで行き届く様になったが、あの当時には取り締る目をかすめてあの様な非道い事がこっそり行われていたわけで、一日中肌もあらわに一寸も身動きできない姿でおしめをさせられたあの娘の如く他でもサーカス小屋等に見られる様な悲惨な酷虐な仕打ちに涙している女達が多かったに違いないなかつたと思う。

一年程前、私の友人に君の好きそうな芝居を浅草のストリップ小屋でやっているぞ、と云われ早速縛られた女の絵看板が出ている浅草のストリップ小屋の中でもグロで有名なその小屋に行ってみることにした。

地下鉄を田原町で降り浅草名物の焼そばを食べてからその劇場に入ってみたところ、場内はひる下りのせいかわ合空いていたが、演し物は「紅皿欠皿の責め」で誰の演出か知ら

ないが野暮ったい一向サド的刺激を感じさせない芝居で、お腰一つの半裸体で責められる欠皿が婆や下男に竹箒で撲られたりつまかれてるのに、にたにた笑っているのには呆れかえったが、さすがストリップだけあって体だけは仲々見事なものだった。その内に引つたてられた欠皿が家の前の小川にかゝつている水車の横面に両手足を大の字に縛られ水車が廻り腰巻一つの体が逆さになる度に赤い腰巻がぱらりと下に垂れなかなかつた。

なんだたいした事はないなと期待外れに思いつ外へ出ようとしたが、まだ夜までには時間が充分あるので次のコントを混じえたストリップ、シヨウを見ていたが、思いがけなくも劇中のコントの一つに「赤ちやん学校」というのがあり、ストリップパーが赤ちやんになつて乳母車に乗ったり、母親（男優）なるものに連れられて出てきたが、どれもこれも浴衣地の明らかにおしめと判る褌の様なバタフライをしており、ユーモラスというよりもサジステイックな感じがした。お母さん役の男優にストリップパーが「ママおしっこしちやったからおちめ替えて頂戴」と云うと、母親役が「じやおねんねして」とそのストリップパーを仰向けに寝かしつけ両股を持ち上げ、「くちやいくちやい」と云いながら取替え、そのおしめをひろげて「まあこの赤ちやんおませねオシッコ真赤よ」と云って客をどつと笑わせ

ていた。

これは来てみて良かったなあと思い、もう一度見てゆこうかと思つたが、二度見るのも変なので又くる事にして小屋から出たが、なにしろおしめをしたストリップの悩ましい姿が忘れられず宙に浮いた様な歩きっぷりで帰路についてる内に、なんとかして女の子におしめをしてうんと虐めてみたくなり玄人の縛り専門のこの附近に住んでいる女を上手く丸めこんでそれをやってみようかと思つたので早速私がブン屋時代浅草探訪に出かけた時知りあつたスギ坊というボン引の親分に掛合つて見ようと夜の六区のかしこにたむろするボン引の一人にスギ坊の居場所を尋ねたが、国際劇場裏のRというバーに行けばいいとの事ですぐに訪ねた所、かんじんのスギ坊は居なかつたが私の顔を知つていてくれた自分の一人が会つてくれた。

「実は縛り専門の女の子を紹介して欲しいんだ。なるべく赤ん坊持ちの一番色っぽい年頃の女の子がほしいんだが」と聞くと

「なんでまた赤ん坊持ちなんて」と云うので「夫婦のようでその方が気分が出るんだよ」と答えると

「ああそれなら君子姐さんがいいや、新町の飲み屋のおかみをしていたんだが男とできちやうと、あけく果は物まで奪られて捨てられちやうと女の人だがね、なにしろ一寸変つ

たやつで縛られねえと気分が出ねえって言うんだよ」

「で赤ん坊といつも一緒にいるのかい」

「客を引いた時はいつも隣の部屋に預けるんだけどなんなら自分の部屋に置いとくよ」

「幾らぐらいなんだい」

「俺あ、よく知らないから直接掛合つてみなそれに兄貴の知つていいるブン屋さんだから俺たちもピンなんかはねえよ」

というわけで早速、広告のチラシの裏に場所を書いて渡してくれたので、お札にタバコ代を置いて出かけていったところ、その場所というのは普通のしもた屋風の家の二階だつたが、あにはからんや二階の窓ぎわの物干竿にはおしめが十二、三枚それも目もさめる様な浴衣模様の夜風に吹かれてひるがえつていた。玄関の扉を開けて入るといかにもずるそうな婆さんが出てきたので

「スギ坊の紹介でやつてきたんだけど、おきみさん居ますか」と尋ねたところ

「いま風呂屋に行つてんですけどね、すぐ帰つて来ますからお二階へどうぞ」と

相好を崩して急な階段をその部屋に通してくれたが、調度の行届いたなかなか立派な部屋で中もきちんと整頓されているようで、片隅にはおしめが二、三十枚程きちんと積み重ねてあり、かたわらにはおむつカバーが巻いて置いてあつた。こっそりおしめやおむつカ

バーを手にして先刻見たおしめをしたストリップの姿態を思いだしている内に「ただいま」と云う声とともに赤ちゃんを抱いてその女の人が入ってきたが、見てはつとする様な木暮実千代を思わせる三十才位の小股の切れ上った粹な女で湯上りのほんのりと赤味のかゝつた小肥りの体に浴衣を着た実に色っぽい姿をしていた。

「あらいらつしやい、いま赤ん坊を隣の部屋へ頂けてくるわ」と云いながら、そのまゝ隣室へ行こうとしたので

「一寸待てよ、可愛い赤ちゃんじやないかそばに置いといた方が夫婦の様で気分が出るじやないか、それに時間で帰るから置いておけよ」とあわてゝ云つたが無理矢理隣室へ預けに行つた。しかし別に赤ん坊がいなくともおしめやおむつカバーがちやんと部屋にあるので心配はなかつたので次に、

「君、縛りの方もやるのかい」と聞くと、

「まあ、誰から聞いたの」と顔を赤らめ色

っぽい眼付で聞いたので、

「いやゲン坊から聞いたんだけど、やつてくれる？」

「でも割増し代頂くわよ」

「ああ、只の縛りだけやらせて貰えればいいんだ」

「それじゃ千五百円戴くわ、若し少しでも手をかけたら千円増しよ。でも縛りの人は身許

が判っている人でなくちややらないのよ、だつて一ぺん両手足を縛られ猿轡をされてゐる内に着物なんかを眼の前でござり盗まれちやったんですもの、証明書かなにか持っていて」と云うので、

「あああるよ」と金と身分証明書を渡すと、

「じや下の婆やさんに預かつて貰うから」とせわしく階段を降りていった。やがて上

つてきた彼女は早速電球の下で、

「じや脱ぐわよ」と浴衣に手をかけようとしたので、

「いやそのままではいいよ、それよりかんじんの紐がないじやないか」と云うと

「ああそうそう」と押入れから一本の紐を取り出して私に渡したので、早速後手に縛り上げたところ、それだけでもううっとりした眼付で私の方をにらんでいたが、部屋の隅にかけてあった手箒を取り寄せ彼女のしている腰紐を二の腕から胸へ廻したところへ差し込みぐいぐいと捻じ上げた。

彼女の痛たがる姿態を暫く眺めていたが、これ以上やると私の住所を婆さんに知らせてるしゲン坊の手前もあるから不味いことになつてはと残念だったがそのままにして部屋を出た。力のない足取りで階段を降りると、婆さんが出てきて

「あらもうお帰り」と云うので、

「ああ証明書返してくれよ」と云つてやると「きみちやんいいって云ったかい」と聞くので、黙つて五百円札を一枚婆さんに渡してやると、にんまりした顔をしてそれを袖の下に入れ引き替へに私の証明書を出してくれた。

上気した五体が冷んやり感ぜられる夜の街路に出ると、今日体験した異様な出来事に、数知れぬセクシイなイマージを胸に潜めながら酔つたように疲れ切つた足を引きずりながら帰路についた。

(完)

マゾ・バレエ

『魔の白鳥』

(写真又は絵のアイデアとして)

加 宮 敏 一

エトアール・モダンバレエ団のニューフェ

ースの芳男、プリマドンナの蘭子から次回新作のパートナーに選ばれた時は、まるで夢み

るような興奮にかられました。

蘭子はいつも新作は彼女のプライベートな練習室で、秘かに研究して、公演前はある限られた弟子の他は誰も入室厳禁でした。その蘭子の練習室へ独り呼ばれた芳男は、壁いっぱい鏡の中に立つと、もう胸を躍らせていました。

芳男は学生時代に水泳をやっていたので、均勢のとれた、まるでアポロのような肢体とノーブルな美貌の青年でした。

巴里の香水の匂いを漂わせて、華やかなガウン姿で現れた蘭子は、芳男に見込みのある

ことを話して、

「これからは私のパートナーになるのだからこれを着なさい。これは貴方の為に挑えたのよ」と、練習着も渡しました。

感激を押えながら更衣室へ行こうとした芳男を、蘭子は呼び止めて、

「今日から此処で着換えてもよくってよ」

しかし、芳男はさすがにためらいました。

蘭子は「早く支度なさい。私はもういゝのよ」と促すと、ガウンの裾もチラツとのぞかせるのでした。

「はい」と芳男は、頬を紅らめながらも、ブリマドンナのパートナーという興奮に、夢中で着換え始めました。

黒のバイク一つになって、その上へゴムのサポーターをきつちりと締めて、蘭子の挑えた黒のナイロン製のタイツをはきました。それはピッタリと身体に合って、芳男の美しい線は泰西の彫刻像のようでした。蘭子は「黒のアポロね」と満足そうに眺めるのでした。

二

そうして、蘭子と芳男の新作バレエの練習は始められました。三日ばかり基本のレッスンを続けた後、ある日蘭子は

「貴方の身体の線は、もう少し工夫すると理想的になるわよ、これ、私の個人用だけ貸して上げるからつけて御覧なさい」

と出したのは、蘭子が考案した総ゴムの一

種のコルセットでした。芳男は、つけ方が判らずまご／＼していると、蘭子はもどかしそうに、

「タイツの上へじかにつけていゝわよ、私が着せて上げるわ」と手伝うのでした。

三日間の練習でもう恥しさは薄れていました。胸から腰、腹、と、キツチリとそれをつけ、股間を通してゴムベルトを締め上げ、そして改めて胸から腰まで背部で編み上げるように力一ぱい締め上げられた時には、芳男も息が止りそうでした。蘭子は

「これも修業よ、舞踊家は線が命ですものね。苦しくても公演まではずうっとこれをつけてなくちや、線が出来ないわよ、いゝわね」

「ええ、辛抱します」

威圧的な美しい瞳に、芳男は押されてうなずくのでした。

その夜から蘭子の練習所へ泊り込みで、練習を続けることになった芳男は、いつも蘭子の目が光っているの、その特製コルセットを絶対に外すわけには行きませんでした。

そして二月ばかりすると、蘭子は改めてその編みテープを、更に何センチか締め上げるのでした。一週間ばかりの間に、コルセットは始め着せられた時よりも、三分の一は完全に縮まりました。

芳男は黒いタイツの上に、胸からウエストそして股間までを、蜂のように締め上げられ

たまゝ、夜も寝なければなりませんでした。

三

その上に蘭子は、「今度は脚のトレイニングよ」と、四インチ以上もあるハイヒールを出して来て、

「これを履いていると、いやでもお腹が引込んで姿勢がよくなるし、爪先で全身を支えるから、トウの力が出来るの」

蘭子に手伝って貰って、無理に押し込むようにやつとそのハイヒールを履いた芳男は、すぐに爪先がしびれる感じでした。まして四インチ以上もあるヒールなので、立つと殆んど爪先だけに全身の重みがかかるので、練習のバー(棒)に掴まって、よろめくようにしか歩けないのです。その様子を見た蘭子は、いつになく不機嫌で、

「そんな腰つきじゃ、練習にも何にもならないわ、今日は一日それを履いて歩く稽古をしてらっしゃい」

と、命令するのです。

四

それから二、三日したある日、蘭子は芳男に対して

「基本はこれくらいにして、今日からは本格の練習に入ることよ、振付のアイデアもやっとな出来たから、新作の題は魔の白鳥にするわ」そして芳男は、例のコルセットの上に舞台衣裳のタイツを着けました。それは、全身

にピッタリ合った青いナイロンのタイツでした。そして、モダンバレーだからというのでトウ・シューズではなく、例の四インチ以上もあるハイヒールを履かせられました。

「では、始めるわよ」

と、蘭子はサラリとガウンを脱ぎ捨てました。芳男は思わずその蘭子の眩しいばかりの姿に息を呑みました。純白のナイロンのタイツにピッタリ包まれた蘭子の肢体は、全身から光りを放つかと思われるくらいの、妖しい美しさに輝いていました。

五

そして、いよいよ練習が始まりました。

バレー「白鳥の死」は美しい王子と白鳥の恋物語ですが、蘭子の新作「魔の白鳥」は、美しい王子を白鳥が誘惑する筋書でした。その白鳥は実は恐しい蜘蛛の精が化身したものです。魔性の誘惑に陥った美しい王子はもがき喘ぎ苦しんで、遂に全身の生血を吸いとられて死ぬのです。

誘惑の振付が終ると、いよいよ残酷な本性を現わした魔の白鳥の網に、美しい王子が掬められて生血を吸われる段になりました。

純白のタイツの蘭子は、青いタイツの芳男の、先ず両手を背後にねじ上げて、手首を嚴重に縛ると、その縄の一端を首へ廻してグイッと締め上げました。思わず「うゝっ……」と、芳男は息も止りそうになるのをやっこ

らえました。

蘭子は、更にその縄を両腕から胸へと廻しひし／＼とかけた上に、腹、腰、両足と、身動きもならぬよう緊縛するのでした。そしてよく自転車へ荷物を縛る太いゴムのロープを手首の縛り目へ結びつけ、背部から股間を通して首縄へかけたかと思うと、芳男の腰へ片足をかけて、全身の力で締め上げました。そのロープには、特殊な金具がついているので締め上げられた芳男の刺戟は、思わず大きな呻き声となりました。

すると蘭子は、

「こんなことで音を上げて一人前の踊り手になれると思うの、意気地なし」

と云うと、いきなり芳男の口へ彼女の汗に汚れた練習タイツをギュー／＼と詰め込み、その余りを頬から顎にかけて二巻した後、膝で押えつけて力一ぱい締めつけるのでした。もう哀れな捕虜の王子は、呻き声一つ出せず身動きも出来ません。

六

全身を緊縛されて足もとに転がっている芳男を、蘭子はじつと眺め下して、彼女の爪先で芳男の頬を突つきながら、

「これが魔の白鳥、つまり私の正体よ、やっ」と判って？」

芳男は始めて蘭子の恐しいサチズムに慄然としましたが、もう本当に彼は完全な犠牲で

しかありません。ただ泣き出しそうな瞳で蘭子を見上げるばかりでした。

蘭子はその芳男の手首の縄目へ太いロープを巻きつけると、天井の滑車へ通し、片隅の巻上機へかけました。蘭子はそのハンドルを廻すと、先ずビーンと張ったロープは、次に芳男の身体を次第に吊り上げて行きます。タイツ上から一層ギリ／＼と喰い入る縄目に全身を締め上げられ乍ら、芳男は今や完全に宙に吊り下げられました。

突然、ピューッと鋭い唸りが鳴ったと思うと、いつの間にか蘭子は手にした練習用の鞭を一振りして、

「いよいよ哀れな王子は生血を吸いとられるのよ」と云うなり、力をこめて芳男の背部へと打ち下しました。

ビシ／＼と云う響が、静かな練習室を震わしました。吊り下げられている芳男の青いタイツの下で、声を奪われた彼の肉体がわずかに震えました。

ビシ／＼、ビシ／＼と蘭子の鞭は、次第に激しさを加えて行きます。もう芳男の感覚は段々うすれて、ほんとうに自分が哀れな王子になって、魔の白鳥に生血を吸われているような幻想に陥って行くのでした。

(終)

【体験告白手記】

お 臍 の 研 究 〔二〕

その医療的価値に就て



須 藤 律 夫

私は医者ではないのでお臍の医療的存在価値等に就て言及する資格は毛頭ない。然し古書等繙いて見ると、色々と伝説めいた民間療法等に伴いお臍が時々利用？されているので今日は思い出す儘にその存在価値に就いて書き述べ度いと思う。言わば私の「お臍随筆」とでも言う可きであろうか。

(一) 身心の修養法

先ず第一は臍下丹田の修養であらう。臍と言うものが人間の身体の略々中央に位するものであるならば、臍から下に身体の重心を置

く事によって、人間の身体は安定し、従って精神の安定も得られる訳で臍窩より恥骨までの位置、所謂丹田に力をグッと入れる事により、自然と重心を下に移す事になり、精神の落ち着きも得られるのである。但しこの場合「臍頤」にもある通り「項羽が山を抜く力もこの垢を取れば忽ち落つ」でお臍のゴマはその儘にして置いた方が良いでしょう。

(二) 宿酔の覚醒法

宴会に限らず、少し酒を飲み過ぎた翌日など、所謂「宿酔」は上戸の誰でもが経験済の

極めて不快な自覚症状であるが、或る有名な洋画家T氏にきくと、次のような方法が効く由である。二銭銅貨——（と言っても現在は流通していないが大正年間的大型銅貨）を二つ用意して仰向けに寝み、その一つをお臍の穴の上に置く、暫くしてその銅貨の温まった頃別の銅貨を差し替え、之を交互に繰り返す言わば銅貨でお臍を冷やすのだそうであるが筆者は未だ実験して見た事はない。又之と同じような行き方で干柿をお臍に当てゝいると酔は次第に醒める由、古来柿は人体を冷やすものゝ如く言い伝えられているが、一度試めして見度いと思う。

(三) 腹痛の治療法

腹痛の時、お臍の穴に塩を詰めて置けば治るとか、又芭蕉（バナ、）の皮を貼りつけて置くとよい等言い伝えられた。然し医者にきくと科学的な根拠は薄弱な由、蓋し昔から「お臍をいじると腹痛を起す」とか「お臍のゴマを取ると風邪を冒く——」などと母親に訓められていた我が国では、所謂「反対療法」とでも言う可きか。

(四) 船酔の予防に

船に弱い人など乗船の前に梅干一つを用意し、そつとお臍の穴に詰めて置くと如何なる波浪にも船に酔わないとか、又梅干の代りに

硫黄の塊りを詰めて置くのもよいと伝えられる。

元来船に酔うとは耳石の作用であるが、之が臍石と何等かの関係があるのであるうか、兎に角今度海釣りの機会にでも試めして見度いと思う。

(五) 便通のまじない

厳格な意味合では之はまじないではないかも知れないが、二、三日便秘の時など先ず観世経を作り、このこよりをお臍の穴に差し込んで擦ぐると通便するとか、元来擦ぐったときは極めて微かな感触である。従つてお臍の穴に指を差し込んで搔き廻すより、この方が却つて臍窩周辺を刺激して、腸の運動を促すのかも知れない。

(六) 急性腸カタルと塩灸

之は曾つて本誌上に書いた事がある（我が告白の断章）ので重複を避けて記述して見度い。

出典は或る婦人雑誌の附録であるが、著者は某海軍、軍医少将だったかと記憶する。先ずその方法であるが——。直径三センチ、高さ四センチ位の竹筒を作り、之を平らなものゝ上に置き、その底に半センチ程の厚さに塩を固く敷き詰めるのである。一方お臍の穴にも塩を詰めて用意した竹筒をその上に乗せ、

一回三〇火から四〇火の灸をすえるのである。熱さに耐えられなくなったら、そつとこの筒を持ち上げ、冷えてから又乗せる。之を繰り返して行うのであるが塩は幾回でも使える。

曾つて原因不明の腹痛の爲め非常に悩まされ之は二回程筆者も試みた事があつたが、結果は何れも日ならずして回復している。本誌には度々灸責め、その他灸点による嗜虐の記事等が散見されるが、このお臍の塩灸も「趣味と実益」を兼ねるものであるう。實際文の頂きに点された火が、恰度あぶり出しのようにじわり／＼と広がって行き、やがてお臍の上の塩全体が熱せられた鉛のように焦けた時など、その熱さと苦痛とは、思わず腹筋をよじらずにはいられない。更にお臍の穴に詰める塩を少くすれば、それ丈に熱さも激しくなり宛ら五臓六腑を引きさかるゝ思ひである。

實際臍乳頭（お臍の穴の底）は知覚過敏帯であり、その裏側には四本の筋が放射線状に分布されて居り、その中一本は肝臓、一本は膀胱に、そして他の二本は鼠蹊部に流れる為めか、それは妖しい迄の苦しさである。（苦痛と言う名の魅力とでも言おうか、お灸の済んだ後は誠に気分爽快なのだ）因みに著者はそれ程の過激さを慫慂してはいない。否むしろほの／＼と臍部に熱さを感じる程度がよいとか、猶之は臍窩のある人の場合であるが若しその人が出臍であつた場合は、お臍の

上に味噌を塗り、その上に灸をすえるのも同じ効めがあると伝えられている。

(七) 臍の緒の効用

之は現代では余り見られない慣行かも知れないが、生児の臍の緒を永く保存し、万一その子が病魔に襲われ、生死の関頭に立つた時その緒を取り出し煎じて飲ませれば救われると云う。この爲めに臍の緒保存用として「玉の緒函」等もあり、又臍の緒と共にその子の生年月日、本籍地等を認め、巾着に入れて保存したものであつた。之が所謂臍の緒書である。然し医家に云わせると臍の緒そのものには目立った化学成分もなく、臨終に煎用しても果して幾許の効目のあるものか疑問だと云う。

(八) 美人となるには

彫刻家朝倉文夫氏は「美しき臍」と題し、曾つてお臍を利用しての美容法を説かれているが、私はそれを受売する前に順序として先ずお臍のゴマに就て書いて見度い。半年程前だったかNHK、お馴染の二十の扉の質問に動物、鉱物、植物、なるヒントの下に、「お臍のゴマ」なる出題があつた。動物とは表皮細胞、鉱物とは汗、脂の分泌物、植物とは繊維類の切片でもあらうか、兎に角このお臍の穴の黒い固りを地方では知らず、関東では

世俗にお臍のゴマ、若しくはお臍のゴミ、或はお臍のカスなどと云っているが、「ゴマ」とは全く上品で、実感の伴った形容ではないだろうか。この事は渡辺紳一郎氏もフランス、パリーの踊り子を引例、日本のストリップバーを評して次のように云っている。

前略——日本の新宿のレビューガールのように、たまに臍を見せるから見てやると、例の胡麻とか云うものゝある臍では困る。あれは胡麻ではなく臍の芥なのである。臍の芥を無理に堀って取ろうとすると腹が痛くなる。パリーのガール達は毎日オード、コロニーユで臍の掃除を忘れない。だから日本でも女の子がお臍を見せ物にする時は、アルコールがカストリを薄めて、それを綿につけて拭くところ。云々——。

之に就てはアメリカ、ユタ洲にも面白い風習がある。一夫多妻を以って知られる同洲には、有名なモルモン教徒の共同部落があるが彼等は一人平均九人の妻を持って居り、その精力絶倫な事は推して知る可きである。ところで彼等の信ずるところに拠ると、精力の源泉は臍と骨の中の髄である。従って夫は妻に自分の臍を大事に手入れさせるが、それが精力の源泉である丈に、数名の妻は入念にお臍の穴の手入れをし、目的貫徹を期するとの事である。

扱、話を本題に戻し、前記朝倉氏は「臍の

手入れ」に就て次のように述べている。前略——臍は母胎の中でそこから呼吸し、栄養をとっていたところで云わば人類発祥の地である。ところがすっかり忘れて仕舞って、臍が茶を沸す、お臍の宿がえ、へそ曲り、さては臍線りなどと、どうも可笑しい方面にばかり応用されているようだ。臍はもっと大切にされなければならぬ。(中略)更に臍を撫でると健康かどうかは立ちどころに判断出来る。手の平でスツと撫でおろして何かひつかう感じがするのは良くない。それから臍が汚れているのも良くない。臍のゴマを取る腹が痛くなると云うが、あれは無理をして一度に掃除をするからだ。臍をきれいにすると美人になる事を御存知かね。私は仕事の関係上何千人と言う裸の女を見ている(中略)然し美人になる事は何の女の子も乗り気だ、其処で秘法を伝授する。それは臍の上にオリーブ油を数滴タラ〜とたらし、脱脂綿か、ガーゼで押えて軽くしばって置く。こうすると臍の不浄物が溶けてきれいになる。そして顔の色も全身の艶も見違える程美しくなる。(中略)健康になり度い人、美人になり度い人は臍を大切にしてお手入れを怠ってはならない。

渡辺紳一郎氏も、朝倉文夫氏も、お臍の掃除に就ては異論のない処だけれど、私には何故か一寸淋しい御託宣だ。実際ストリップ劇

場のカブリツキとか「出臍」(例の突き出ているステージ)に陣取って眺めていると、私は踊り子の黒々とした胡麻をよく見たものである。ライトに照らされた真白なお腹に、真黒なお臍の胡麻、少しどぎついコントラストではあるけれど、私は何故か美を感じる。それと同時に又言い知れぬ郷愁をすら覚えるのだ。然し之こそ私の根強い偏執であらうか。

(未完)

——次回は実例を併記した臍相学に就て——

〔営業部より〕

○次号からは、毎月二十日に確実に発送するようにしたいと思っておりますから、誌代を一月毎御払込下さる方々は、十五日頃迄に御送金下さるようお願いいたします。

○三カ月以上お申込みの方々は、送料は当方にて負担いたしますが、一カ月宛お申込みの節は必ず送料十六円の御加算を願います。

○今後、発行の都度御案内は出来かねるかも知れませんが左様御承知願います。

○景品は第一回の雑誌発行の際、同封いたします。前金切のときは、雑誌の封筒の表に印を押しておきます。予約金の明細書はつとめて同封することにしております。

懸賞〔告白、手記、体験〕

生理め願望

長岡變一郎

(一)

気が付いてみると、私はいつか川の堤防の上に出ていた。

この辺一帯は、炭鉱の多いところだ。

季節はもう夏だ。

私は、又しても例の、アブノーマルな欲求に駆られて、まるで夢遊病者のように其処彼処を、フラフラとさまよい歩くのが癖なのだ。

今の私の「求めて止まぬもの」それは即ちキメの細かい土砂の大量である。

私はその大量の土砂の下敷となって、生理めになりたい！それが私という人間の持つ奇妙な願望なのだ。

キメ細やかな、しかもシットリと湿った土砂の中に軀を埋めた時のあの快感を、私はもう小学生の頃から知っていた。

小学生の頃、私は全く、青瓢箪であった。尤も一年生の終り頃までは随分と環境が良かったが、それが却って禍して、神経質な、そしてやがてはアブの道に親しむ人間となる素地を作ったのかも知れない。

私の家は、それ迄は大阪難波の赤手拭稲荷の近くで、盛大な紙問屋を営んでいたのだが、どうした事情でか、それが急に没落した。そして一家はさながら「落武者」のように、汐見橋から大型の荷舟二隻を仕立てて遠く、毛馬の関門を越えて、その頃―大阪府西

成郡―と呼ばれていた一寒村に移住して行った。雨の激しく降る日であったことも、子供心に悲しい思い出として残っている。

その村で、父母は淀川を中に挟んだ対岸の亜鉛会社に通って馴れない職工生活を始め、私は勿論、その村の学校に通って二年生としての学びの道にいそしむ事となった。

神経質な―村の子供達に言わせれば―「青瓢箪の役者の子」であった私の、ここでの毎日は、これ迄のそれとは全く違った悪環境に支配されて、次第にアブノーマルな性格を現わし始めていた。

村からは、海が近かった。自然―春から夏にかけて、体操の時間等を利用しての身体鍛練に、教師は私達生徒をよく海水浴に引率して行ったものだった。

然し、私は泳げないどころか、その学校から半里足らずの道程を、「駈足ッ」などと号令をかけられるそれすらが、苦手な程弱いタチであった。

私は、水の中へは絶対に入らないで、海水の引去った干潟の砂地で、シットリと湿った砂を弄くったり、又ソツと穴を掘って、その中へ自分の軀を少しづつ埋めてみたりして、唯一人級友達と離れては「孤独な遊び」に親しむのだった。

(二)

夏休みには、まだ大分間のあった七月のある日のこと、例によって私達は海へ行つた。

何がさて炎暑の真つ最中とて、級友達は泳ぎの出来る者も出来ない者も、皆一様に涼を水に求めて、勇敢に海中めがけて飛び込んで行つたが、その中に、又しても私だけが一人ボツンと干潟に取残された。

私は、海月が大嫌いであつた。それから、壊れた貝殻やゴカイやら、又蟹などが砂を掘つてゆく手にフツ触るのも堪らなく不愉快だつた。

そんな神経質な私が、成るだけそういうものの出てこない、美しい砂地を選んで、今日も干潟に自分の軀の横たえられる位の大きな穴を掘り、そのシットリと湿った砂に埋もれて、独り悦に入つていた。

ところで——読者の中にも経験された方が居られるかも知れないが、自分の手で自分の軀を埋める作業には限度がある。先ず穴を掘る。掘り上げた砂は勿論、その穴の周囲に土手を作つて積み上げておく。穴はたとえ望んでも、そう深くは掘れないであらう。いう迄もなくそれは穴の中に軀を仰臥させた時、自分の手が軀を埋めるその材料たる砂の山に届かないからだ。

自分で掘つた砂穴の中へ、私は軀を横たえてみて、それで全身が間違ひなく這入ることを確かめてから、今度は上半身を起す。つまり

穴の中へ足を投げ出して座つた形だ。

それからいよいよ両手を使って、足首から順々に腰の辺迄を埋めてゆく。但し両足の付根の辺迄は、相当量の砂を載せる事が出来るが、それ以上は次第に上体を倒さねばならなくなり、自然姿勢の均衡がとれない為に息苦しくなってくる。そして軀にかける砂の分量も、上体になればなる程浅くなる訳だ。もう少し順序を追つて説明してみよう。

始め上体を起している間は、両腕の自由が利くので、足首を埋める時は、膝を少し立てて上体を前屈みにすることによって、両手を足首迄届かせることが出来、従つて相当量の砂でシツカリと埋める事が出来る。

足首を埋めて、次第に膝小僧のあたりまで砂を冠せてゆくと、両手の届く範囲が少し宛縮まってゆく。更に作業を進めて、腰の辺を埋める頃には、左腕（ギッチョの人なら右腕）も脇腹に添つて垂直に延ばして埋めるので、それ迄使つていた両腕が、残る右腕しか使用出来なくなるであらう。

また上体になる程、軀にかける砂の量が少く、即ち浅くしか埋められないのも、それは以上に述べたように、五体の自由が次第に砂中に固着してゆくからである。

このようにして、我れと我が手で己が軀を埋めてみた状態をみるに、一番深く埋れている個処は、何といつても矢張り足首であり、

上体になる程、次第に浅くなつてゆく事は、既に述べた通りだが、その上体も左脇腹と右脇腹とでは全然比較にならない。

右腕一本の自由でカける砂は、上体の左から右に向う程浅くなり、最後に右腕と首だけが、ニユーッと砂中から出ている訳だ。

（どうも大変七くだい説明になつて了つたが筆者と同好のマゾの方が、他にも必ず居られるような気がしてならない。生理もれの実演について御経験のある方、どうか本誌を通じて、御意見をお聴かせ下さい。）

(三)

何事によらず私は、こうした孤独な遊びが好きだつた。それでこの日も、そうしてゐたのだったが——私は自分で自分の力の及ぶかぎり、五体を砂に埋め終ると、しばしウツトリとなつて涯しない青天井を眺めつつ、忘我の境をさ迷つていた。と、その時である。

私の五体は、何かそれ迄とは比較にならぬ程の重圧を感じて、ハッと驚いた。勿ね起きようとした。しかし、いつもなら別に大した努力を要するでもなく、砂を割つて起き上る事の出来たのに、一体どうしたというのか、この時はビクともしないのだ。

「わーい、オモシロイオモシロイ」

、そういつて口々に囁し立てているのは、さいぜん一齊に海中に飛び込んで行つた級友達

の中での意地悪と腕白で通った。選り抜きの悪童五、六人であった。

私が忘我の境をさまよっている間に、意地悪な彼等はソツと忍び寄って来て、私の五体の上に、各自が一齊に砂を載せ加えたものであろう。

この時の私は、勿論ベソをかいいたので、彼等は程なく私をその砂の重圧から解放しては呉れたものの、さて不思議なのは、それ以来の私の心理である。——即ち、私はその時の快感——つまり他人の手によって「生理め」にされたい。と、そんな奇妙な欲求を抱くようになった。

それからの私は、努めて悪戯好きな彼等の眼に触れる所で、（また埋めてお呉れよ）といわんばかりに、これ見よがしの「埋もれ遊戯」に没頭するのであったが、皮肉な事にはさて私がそうすると、決ったように彼等は、私を構っては呉れなかった。

勿論、私のアブノーマルな欲求は、次第にその度を高めてゆき、やがては全身を文字通りの生理めにされて、窒息死してもよい。とさえ願うようになった。

私は遂に、一策を案じて「夏休み」の来るのを待った。四年生の時の事である。

夏休みが来た。

私は一人セッセと海に通った。

海は、ゴツタ返す程の賑わいが、毎日のよ

うに続いていった。潮干狩をする者、海水浴又は水泳が目的の者もあり、老若男女、なべての大盛況で、さしもの広い海が人又人の頭で埋まったかの感があつた。

ところで私の目的とする場所は、独自の、即ち貝など居なくてもよい——潮の引去った美しい砂地でさえあればよいのだから、その大勢の人々から離れた場所——そんなところを選ぶのにも、案外苦勞ではなかったのである。

私は、思うところあつて、かねて用意の大蛤数個と小銭とを、例の埋もれ遊戯の為に堀った穴の外、即ち仰臥した際に、その頸の辺にあたる個処に置き、ソロソロと軀を埋めにかかった。

当時この村の人達の生計は、概ね半農半漁を以て維持されており、人々の性格は、大人も子供も相当陰険であつた。一例を挙げると彼等は各自がそれぞれ潮干狩等によって各々獲物があり乍ら、一寸のスキでもあると忽ち他人の獲物をカッパラうのである。己を利せん為には時と所を嫌わず、かなりな乱暴も敢てするのであつた。

私が眼をつけたのは、ソコなのだ。

(四)

私は一策を案じて、試みる事にした。——その最初の日——私が自分で自分の軀を埋めて

いるその傍に、寄って来たのは、私より年下の四、五人の男の子達であつた。

彼等は、私のその埋もれ作業を、暫くジツと眺めていたが、やがて何思ったのか言い合せてたかのように、各自がソロソロと私に手伝つて砂をかけ始めた。

私にとっては「思う壺」である。私は彼等に言った。

「もつともつとウンと砂を乗せて呉れヨ、僕が起き上れないように埋めてくれたら、其処にある錢も蛤もみんなやるからナ。」と、彼等は忽ち大喜びで私の軀を身動き出来ぬ程、砂中に深く埋めてくれた。

（これ、これ！この術に限る！）私は大い満足した。然し同時に怒が出て、飛んでもないことを口走ってしまった。

「構わないから、顔も埋めて了つて呉れヨ」と。

いかに低学年の子供達とは言え、顔を埋めたらどんな結果を生じるか、位の事は知らぬ筈はあるまい。（何だか気味の悪い奴だ）——と思ったかも知れないし、それとも（事終れり）即ち私が急には刎ね起きる事が出来なくなつたのを確認した故でか——彼等は私が内心、今少し彼等の手によって何とかされた——その欲求を裏切つて、アタフタと私をそれ迄にして逃げ散つた。勿論、錢と蛤をカッ浚つて行つたこと、言うまでもない。

試みの第二回目——。例の如くにして私が軀を埋めていると、今度は青年層の三人が、立止ってジツとこれを眺め出した。

青年達は、過日の子供達のように、私に手伝って呉れようともせず、又私としても、この年長者達に対しては、さすがに「埋めてお呉れヨ」とも言い出し難く——然し私は、独自の勘による或る種の期待を持って、独りセツセと埋もれ作業を続けていった。

果して、私の勘は適中したらしい。

彼等も又私が囹にしている例の大蛤と錢を欲したのであるが、何がさて狡猾なこの青年達は、前回の子供達の如く、労力を費すことをせず、あく迄タナボタ式に事を運んで行った。即ちさきにも述べたように、彼等は私がセツセと埋もれ作業を只その傍に立って、ジツと最後迄観察していた。が、私の作業がほぼその最終に近くなった頃合を見計らって三人は不意に私に襲いかかって来た。

彼等は、いつの間にかそれを用意していたのか、私には判らなかつたが、手に手に一握りの濡砂を持って、それをいきなり私の顔の上に乗せたのである。

(しめたッ!) その瞬間、私はそう思ったのであった。(どうやら「生理め願望」が成就しそうだ!)

然し、今度も矢張り駄目だった。というのは、彼等三人は、私の顔の上に各自一握り宛

の濡砂を乗せ、私が視界を失つては怯む(事實は怯むどころか、本能的に眼は閉じたが、マゾ的快感に酔って恍惚としていた)スキに錢と蛤をカッ浚って遁走してしまった。

これでは寧ろ、初日のアノ子供達に埋めて貰った時の方が、私のマゾ的欲求は満たされたことになる訳だ。然し又、思い様によって、仮令一握り宛の砂にもせよ、三人の青年が、それを私の顔の上に乗せたという事實はその後、に於ける期待が持てない訳でもないような氣もしたのであった。従つて私は、その後も度々以上の方法を試みてみたものの、さして一向に、その後は私のこの奇妙なマゾヒスティックスな要求を満足させて呉れた人間も居なかつた。(居ないのが当り前だろうが)

だが然し、唯一度、私が六年生になった夏の頃——。かの堺大浜海水浴に行った時、その海辺の干潟で遊んでいた四、五人の中学生が、私が夢にも忘れる事の出来ない「生理めの実演」をやっていた。

埋められていた人間は、鼻穴にゴム管を差し込んでいて、その尖端を砂上に突き出してあり、これによって窒息死を免がれていた。

埋め方に廻っている人達は、いかにも楽しそうに喜々として、砂中の人の全身(勿論顔にも)に、これでもかこれでもかとはばかり砂を盛り上げていた。

私は、この有様を見た時程、その砂中の人

に、大きな羨望を感じたことはなかつた。

そして、何とかして、私がそのように埋めて貰えないものかと、胸をワクワクさせたが小心な私は、遂にその事を彼等に頼んでみる勇氣が出なかつた。——それきり、再びそのような遊びをしている人達に巡り会う機会に恵まれぬまま、学窓を巣立って社会人となつた。

(五)

社会人となつてからの私の環境は、又一入波乱を極めた。職業、住居ともに幾度転中年を過ぎる頃の私は、もう全くアブの泥沼に、深く深く足を踏み込んで了つていたのである。

女性緊縛の囹——。即ち責絵の愛好。(想像的サディズム)自己の肉体を緊縛されたい欲求。(マゾヒズム)或は又、フェチシズム等が、私の最も耽溺したものであったが、それらは然し晩年期に入ると、自然消滅の形となつて、今はもうアノ頃の懐かしい思い出にか止まらない。

ところが——ところがである。

唯一つ。晩年のこん日(現在私は四十八才である)に至るも、猶、足を抜く事の出来ない深い「アブ泥沼」! これこそは、即ち冒頭から述べ続けた「生理めの願望」! これである。

他人の手によって、生理めにして貰うことが、不可能（私の要求を満たしてくれた人は即ち、自殺幫助の罪に問われる訳だ）。であると知った私は、同時に——これは何とか考案して、自分の手で自分の軀を生理めにするしか外にない——とそう悟った。

爾来、春秋星霜。私は絶えず「生理もれの研究」に余念なく、——例えば、海底や河底から採取した砂利の山が、どこかの建築場や広場にウズ高く置かれてあるのを発見すると必ずその夜更に忍んで行って、砂利山の横ッ腹へ穴を掘りつつ軀を奥に運んでゆく。そして、自分の軀が、掘った横穴の相当奥に進んだ頃に、砂利の山が崩壊すれば、当然私の願望は達成せられる訳だ——と、そんな事を考へては、事実、度々実行してみた。しかし、その何れの方法（いろ／＼やったのだが、その一々をここで説明する事を一応省略する）も成功とは云えなかった。現に私は、今ここに生きてペンを執っているのだから——とは又云つても私のこの告白が、決して出鱈目や創作的なものでないことは、これ迄にも本誌上に「糊と泥と砂（昭和二十七年十二月号）」「特異マゾの告白（昭和三十年三月号）」等の題目の下に、発表したものを読んで頂けば、大方の諸賢もお判り下さるであろう。

偕、過去の追憶談はこれ位に止めて、これから話を現在即ち巻頭の——〇川の堤防の上

に戻そう——。

× × × × ×
〇川は、この辺の炭鉱地帯では、誰知らぬ者もない程有名である。

昔はこの川を利用して、石炭船が絶えず往来したのだそうだが、陸上運搬に切り替えられてからは、現在では只もう徒らに真ッ黒い洗炭の廃水が流れている丈で、水路を利用しての物運びは皆無である。が、この川は各炭鉱に源を発する——先にも述べ洗炭の汚水を集流させる為に、排水路として、大きな役割を果しているのである。

(六)

〇川の堤防は——何せ川が長いのだから、これ又滅法長いのである。

今、この堤防の数箇所が、補強工事に忙がしく、もと／＼失業対策事業としての此処では、毎日数百人の男女土工が働いている。

彼等は、私が呑気そうにブラ／＼歩いてい

るのをみて、邪魔だとして何度も怒鳴りつけたが、私は彼等の働きつつある、その堤防の補強工事の現場に、大きな魅力を感じた——というのが、此処にはソレ！ アノ大好きな土砂の大量が、取扱われている故であった。

彼等の或る者はトロッコを押し、或る者はモッコをかついでは、その赤土や砂利を目的地に運んでいって、ブチまけるのである。

それらの有様を、私は宛ら物に憑かれたように、ジッと眺めている。——と又しても脳裡に浮んでくるのは、アノ生理めになる事へのあらぬ妄想だった。

そうだ！ この人達が入り替り立ち替り、土手の上からブチまける土砂が、次第に傾斜をなしつつ落ちてゆくその下の、何処かにうまく軀を隠していたならば——と思ってみるしかし、恐らくはそれも駄目だろう。何故ならば、例え軀は傾斜面の途中に穴を掘って、（勿論夜更けに人知れず）うまく隠れる事が出来、その上から彼等土工が各自ブチまけた土砂が、私の隠れている穴を覆い埋める——としても、その土砂が相当大量に、しかも「アッ」という間の瞬間的な早さでブチまけられたのでなければ、私は呼吸が苦しくなれば本能的に、穴がら出て了うことは、極り切った話であるからだ。つまり息が苦しくなっても、刎ね起きようとしても、それをさせない程手っ取り早く、大量の土砂が私を埋めてくれるのであれば、それで、私の願望は成就する。しかし果してそれが出来るだろうか。

いかに彼等の一人一人が、機敏な動作をもつて、モッコやトロの土砂をブチまけたとしても、その分量は断続的である為、高が知れている。従って私の隠れている穴を、瞬間的に大量の土砂で埋めてくれるものは、人間の労力では到底駄目だ。——即ち何かの機械力

によつて、そうなる事の期待出来得る現物に、
出会わぬ以上、妄想はいつ迄経つても妄想
に過ぎなく、現実性がないのであった。

あきらめて、私は又してもブラブラと、同
じ堤防を他の工事現場に行つてみる事にした
O川の堤防伝いに、約半キロ余り西へ行っ
て、O川に架った橋を渡つて対岸に行くと、
この南岸はタラタラ坂になつてI市内に入つ
て行く道との、三ツ又路に近く、O川とは反
対側の土手下に、かなり大きな鉱害による陷
落池がある。そして、今その陷落池の埋立工
事を、堤防の補強工事と併せて行っている。
そこで私は何と素晴らしい大発見をした！ 今
度こそ、妄想が妄想でなく、即ち「生理め願
望成就」の可能性を見出したのであった。
こうなれば勿論、最早ウロ／＼する必要は
ない。大急ぎで帰宅した私は、その夜更を待
つて、密かに家を抜け出した。——目指すは
昼間見つけておいた彼の陷落池の埋立工事現
場へ——！

(七)

炭鉱地帯の周辺に、陷落池のあるのは別に
珍らしいことではない。

雨期になると、坑内でも浅いところへは、
その陷落池の水が浸入してくることもある。
とにかく、私が、その陷落池の埋立工事をみ
て、これなれば永年の願望が成就しそうだ——

——と、そう思ったのは、こゝでは先に迷へた
ような土砂運びを、人力によつて行っている
のではなく、純然たる機械力、即ちトラック
によつて運ばれて来た大量の土砂が、土手の
上から一台分一度にドツと、プチまけられて
いるのであった。

トラックには自動ジャッキが装置してあり
車台はそのまゝだが、土砂を積んだボックス
の前面（つまり運転台の真うしろ）が待ち上
るので、傾斜をなしたボックスからは当然、
ドツと一度に土砂が滑り落ちるのだ。
私は深夜に家を出た。

池はもうかなり埋立てが進行していて、個
処によつては堤防スレ／＼の線まで高くなつ
ている。——トラックは、その堆土の端近く
まで行つて、土砂を落すのだから、問題は、
その土砂がどの地点に落ちてくるかを見極め
て、穴を掘らねばならない訳だ。

私はソロ／＼と穴掘り作業に取り掛つた何
しろ暗くて作業がしにくい。だが又暗くなけ
れば、そんなところに穴を掘っている私の姿
が、誰に見とがめられぬとも限らず全くアブ
ニストも楽じゃない——と、つくづく思う。
それにもまして厄介なのは、傾斜面に掘る穴
を、上向きにすることだった。そうしないと
夜が明けて土工達の作業が始まった時、私の
姿は忽ち彼等に発見されるも知れない。

柔かい土砂の斜面に、上向きの穴を掘つて
その中に軀を隠し、息を殺して夜明けを待ち

更に、それから彼等の作業始めまでは、数時
間の間があった。夏とは言え、曉方の冷気は
冷々としているが、重労働に私の五体は免も
すると、感覚をさえ失う程の辛さ。……しか
も私は——こうした場合のマゾヒストの誰し
もが、欲求するであろうところの、禪一つの
裸体であった。

どこかの鉱業所のサイレンが、七時を報じ
てから暫く経つて、やがてトラックのエンジ
ンの音が近づいて来た。

（素破こそ！）待ちに待った生理めの願望成
就するか？興奮に私の胸は、激しく高鳴りつ
つ、猶もジツと息を殺して待ちに待つ！

「オーライ、オーライ、うしろオーライ。」
誰かの、そう言う声と共に、微かな地響き
が感ぜられた。と思う間もなく、私の隠れて
いた穴は、物凄い重圧を伴つて埋もれて了つ
た。

【後記】

この告白記は、死んだ私なら書けぬ筈でし
た。私の「生理め願望」は、又しても失敗に
終わったのでした。——というのは、穴が完全
に埋もれて、私が窒息寸前の仮死状態になつ
たその瞬間！ 池の底が再び陥落して、私の
埋もれていたその周囲の土砂が、大量に崩壊
したのである。私を土砂の割れ目から発見して
救い出し、手当を加えて蘇生させてくれた工
事現場監督から、そのことは後で教えられた
のでしたが——。

(完)

小 説

紅

こう

魔

ま

殿

でん

佐 次 浩 介

東京都、新宿区角筈一ノ——、つまり、武蔵野館の横に入って、新宿ホールというパチンコ屋の裏にある喫茶店「くれない」に、

登志子は昨日から勤める事になった。一間の間口に十五坪程の、コーヒー店とすれば、まあ中級程度に、凝った店であったが客足は少い割に、その殆んどが常連らしく、

経営状態は、一応良好らしいというのが、昨日一日、店を観察した登志子の感想であった。といっても、昨日は始めてのこととて、店の雑用を手伝う程度で、まだ勤務したとい



うわけではなかったのだが、第一印象としては、これならば、自分にもつとまりそうだと、彼女は、内心強い思いで、家に帰って来た。妹と、二人暮らしの家は、中野に程近い新井町にある青嵐荘というアパートの一室である。

「どうだったの？」

その夜おそく、帰って来た妹の紀子は、半ばからかい気味に聞いた。どうせ、今迄のうちに、私には出来そうもないとか何とか言っ、うやむやにしようのさうと、さして期待もしていないらしい。紀子は、池袋の映画館に、案内ガールとしてもう二年ごし勤めているのに、姉ときたら、仍く気はあるのだが、一向に長つゞきがしない。彼女の様な性質の女には、登志子のうつり気が、もどかしく、頼りないものに思えるのだった。

「うん——」

登志子は、自分でもそれを自覚して、何となく気がひけるのか、言葉少なに答えた。

「やって見ようと思うの」

「大丈夫？」

紀子は、なか／＼信用しない。ブラウスをと、シユミーズ一枚になって胸元に風を入れながら、

「また、二三日で嫌になっちゃうんじや、ないの？」

「大丈夫よ、今度は——」

実は、登志子は、もっと強く主張したかった。でも今迄の事があるから、表面ではさりげなくつくろって、

「そう、そうあんたにばかり心配かけるのも嫌だし……」

「そんなこと、構わないけど」

紀子も、深く立入ろうとはしなかった。が、登志子には、今度こそ勤めきるだけの自信があった。それは、また妹には話せない理由でもある。というのは、喫茶店「くれない」の持つ特殊の妖気、というか、あの「赤色」の魔力に、登志子が強く引かれているからであった。

そして、今朝は九時半の出勤時間より十分も早く、登志子は「くれない」にやって来たのである。

二

追々揃った従業員の数は、四人ばかりになった。登志子を加えて、五人のウェイトレス達は、適当にしやべり、彼女らだけが持っている身体のかなし、しなだれ甘えるような、小声でさ／＼やき交すような、あの独特の色気をただよわせながら、定められたユニフォームに着かえる。それは、濃厚な原色の、真紅のワンピースだった。腕は肩までむき出しのノン・スリーブで、ウエストが、まっくらな巾の広いナイロンのバンドで、ぐいと引き締められている。裾が、シヨット・スタイルの

極端なタイトになっているので、非常に歩きにくかった。一見、シユミーズとコルセットとを兼ねた様な、このユニフォームが、登志子の心を、不思議にわく／＼とさせた。

赤、それは女性を象徴する。女性にとって永遠に憧れの色である。そして、赤の中にうずまき女体程、男にとって悩ましく、挑発的なものはないだろう。「くれない」は、その名の通り赤一色の店であった。コーヒ―茶碗も、壁もボックスも、あらゆるものが赤に統一されて、うすぐらい照明の中に、どんよりど浮んでいる。何も知らぬ者が突然入口のドアを開いたなら、ムツとする様な赤の洪水に、思わず眼をそむけ、出て行ってしまう事であろう。事実、こうした事は、一日に何回となくあるという話だった。そしてその中から、選ばれた僅かの男女が「くれない」の常連となるのであった。したがって、「くれない」に仍くウェイトレス達も、こうした特殊の条件の中に生甲斐を感じる女性達であった。半職業的なマゾヒスト達、と言ったら、叱られるかもしれない。が、同じ新宿に数軒のソドミヤン専門の喫茶店がある様に、こうした特殊な女性達は、殆んどゴドビー店に集まっている。決して、バーやキャバレーとか、赤線区域にはいないものだ。そして、登志子は、こうした雰囲気の中に生活する資格を、十二分にそなえた女なのであった。

三

「貴女、新しいのね、いつから？」

十二時一寸過ぎた頃、フラリと入って来た中年の婦人が、登志子に話しかけて来た最初の客であった。

その冷く、キラリと光る眼、薄い胸に、切りそいだ様な肩、登志子は、背筋にスウッとむずがゆい様な快感が走るのを感じた。

「今日から——ですの、どうぞよろしく」

「あゝそう」

四十か、それよりも少し出ているらしいその婦人は、それきり黙ってジンプイズの代りを注文したきり、窓ごしに、戸外を眺めていた。その細い眼……。

「一寸、登志子ちゃん」

ほんやりと、その細い眼に見入っていた登志子に、カウンターのなかから、一番古顔の夢子がさゝやいた。

「あのひと、あんまり話をしない方が好いわよ、すごいんだから……」

「そう」

「一度、殺人未遂で警察に呼ばれた事があるんですって」

「……」

「あなたには、もっと好い人、ご紹介するわよ、待ってらっしゃい。今日あたり来る頃だから」

夢子は、チラリとその婦人の視線を感じて

ずっと登志子からはなれた。再び、彼女の眼は、窓の外に注がれて、誰かを待っているらしい。十分程そのまゝでいて、ジンプイズが半分程に減った時、ドアがスツと開いた。

「オバサマ……」

十八、九の、少女である。トロリと身をくねらす様に、婦人の横に坐った。

「お待ちになりましたの？」

「……」

「ねえ、おゆるしになって、おばさま、おばさま——、あたくし」

「マミ、わざと私を焦らせていたのね」

「そうじゃありませんの、だってエ……」

「憎い——」

「アアッ、ひどいッ」

婦人の指が、マミと呼ばれるベットの太股をひねり上げたのだ。少女は顔をしかめ、婦人の平たい胸に頬を寄せる。

「あなたは、私のお猫ちゃんでしょ、時間通り来なけりや、駄目じゃないの」

「ハイ、すみませんでしたわ、でもいや、お怒りになっちゃ」

「約束を破ったからね、お仕置をうけるのよ、わかってるでしょ」

「……」

少女は、コックリとうなづいて、身をもたせている。二人の手は、テーブルの下でくみ合わされているらしかった。

「本当に、いけない子よ、マミは」

「ウ、ッ」

少女の顔がゆがんだ。ほとんど無意識に、ハンドバックで太股の婦人の手をかくしながら、息をつめて、じっと苦痛をかみしめているらしい。婦人の表情は、相変らず冷く鋭かった。

こんな光景を、ぼうつと眺めている登志子に、先輩格の夢子が再び身体をすり寄せて「駄目よ、そんなの見てちや、エチケツト」登志子は、あわてゝ眼をそらした。何か得態のしれない嫉妬めいた心が湧き上って、彼女は無性に悲しかった。

四

三時頃から混み始めて、九時過ぎると、「くれない」はどうやら落着きをと戻す。

三々伍々、ボックスによった客達は、或はダブルであったり、一人黙然と物想いにふけったりしていた。コーヒー一杯八十円のこの店は、ほとんどの客が一時間以上、三時間も坐っているものもある。ウェイトレス達は、その間を適当に挑発的な動作で泳ぎまわりながら、時をすごすのであった。それも決して嬌声をあげたり、ダンスをしたりする様な騒々しいものではなく、ひそやかに客と語り合う程度のことで、いつも店内はシンとしていた。ピンクの照明が、女の肌をうっすらと染めて——。

「登志子さん、一寸——」

ほんやりと、とり残された様に、片隅に立っていた登志子に、夢子がカウンターから呼んだ。

「あの方と、お話してあげて」

隅の方に一人で新聞を読んでいる二十七八位の青年を眼でしらせながら、夢子はコーヒーを渡した。

「おとなしい人だからね、あんたでも大丈夫、上手にね」

夢子から生ミルクのカップを受取って、彼女は、すり足でその青年の前に立った。

「いらっしやいませ」

「あゝ」

チラと、新聞から眼を上げて、青年は応えた。登志子は、出来る丈上品に、並んで腰を下すと、

「どうぞ——」

「有難う」

「おいくつ、入れましようか？」

「二ツで好い——」

登志子は、一寸話のきっかけがつかなかった。極端なタイトで、揃えた両足を、フロアの方に曲げるべきか、青年の方に向けるべきか、そんな事にも気を使って、彼女は、しばらくの間、うつむいて黙っていた。

「君は、いつから来たの？」

「今日から——」

青年の顔を、やっとまともに見つめる事が出来た。そして、ニッコリ笑った。

「名前は？」

「登志子——」

「本名？」

「えゝ、まだこゝでの名前はありませんの」

「そう」

彼は一寸考えている様であった。何か思い出そうとしている様に——

「家は、どこなの？」

「大久保ですわ」

登志子も、これだけは嘘をついた。

「姉妹でもある？」

「いゝえ」

彼は、そう、と安心した様に、コーヒーをすゝった。

「綺麗だね、君は——」

「あら」

「本当に一人ぼっちなの？」

「えゝそうですわ、そぞそんな事、お聞きになりますの？」

彼女は、青年がきつと自分のパトロンの事について聞いているのだらうと思ったから、事更、一人である事を強調したのだった。しかし、彼の言う意味は、一寸異っていたらしい。

「いや、只、よく似てるから——」

と、青年は言葉を濁した。

「まあ、誰に——」

「一寸知ってる人にね」

「女の方でしょ？」

「勿論、男さ——」

このへんは、社交的な、あたりさわりのないやりとりで、登志子は、別にその事を深く気にとめようとも思わなかった。

「君は、どんな事が好きなの？」

と、青年は、壁にあるモナ・リザの複製を見つめながら、聞いた。

「あたくし？」

「うん、縛られたいの、打たれたいの？……それとも——」

「どんなでも好いの——」

登志子は、本当に顔が火照った。今まで、誰に対しても秘めて来た自分の欲望が、今、あまりにあっけなくこうして見知らぬ男の為にさらされて、いるのかと思うと、喜びと同時に、ふっと恐ろしい反省が、木枯の様に心の中を吹き抜けてゆくのだった。

「経験はあるんだろう？」

「ありませんの、たゞ、何となく……」

「そういう欲望があるというんだね」

「えゝ」登志子は、うなづいた。

「それで、こゝに勤めたの？」

「えゝ」

登志子はうなづいた。

「僕は、あんまりすゝめないな、こういう所はね、ずいぶんひどい人も来るからね、僕だつて——」

そう言つて、青年は口をつぐんだ。甘酸っぱい、自責の心と闘っているのだろうか、登志子は、青年の、どこやらモンゴメリ・クリフトに似た横顔を、美しいな、と思つた。「でもね、あたくし、かまいませんの、それは、悲しい事ですわ、もう、あきらめていませうの、あたくし、今日まで、こらえにこらえて……」

そこまで話した時、不覚にも、ポツリと、登志子の眼に涙が浮かんた。

五

彼女が、マゾッホの流れを汲む、特殊性格者の一人である事を自覚したのは、女学校を卒業する直前であつた。その時、生れて始めて見た責め絵、それを一見した時の恐ろしい程の期待と憧憬、登志子は、他人の身に引きかえ、自分が幸福すぎる事が、うらめしくさえあつた。妹の紀子と二人で、家を出て東京に職を求めたのも、ひとつには、こうした満されない心を、慰めるためであつた。しかし、登志子の様な年若い、そして内気な娘にとって、こうした世界は、あまりにもはるかな憧れの的でしかなかった。今度こそは、真面目に勤めて、こんな苦しみから脱け出そう

と決心するのだが、一度、あの発作的な激情が自分の身内に湧き起ると、彼女は、歯を喰いしぼり、われとわが身を責めさいなんて、身悶えするのであつた。その度に、眼の前に浮んでくるのは、もえるばかりに紅の、あの血の色、登志子は、抵抗した。しかし、激情は、止まる所をしらない。一度ならず彼女は自殺を思ひつた。それは、決して具体的なものではなく、極めて漠然とした、責めに対する願望であつたが、「くれない」の存在を偶然知つて、登志子は、遂にその中にとびこんだ。私は、悪魔に身を売つた——と、登志子は心に叫んだ。それで好い、自分に与えられた道は、これしかないんだ。

そう思つて、店に出て見ると、今迄、自分一人だけの世界であつたものが、急にひろがつて、はつきりと自分の立場を意識した。しかし、それと同時に、彼女は、こうした世界が、如何に醜悪なものであるかを知つた。

——あゝ、紅、ここは紅の悪魔の殿堂だ。登志子は、昼間から、何回かここを逃げだそうと思つたかもしれなかつた。が、その度に彼女の意志を、こゝに釘づけにしてしまうのはこの壁、このユニフォームの、真紅の血の色、そして、あの時見た、いたいけな少女の夢幻の表情——。

「あたくしつて、結局こういう女なんですもの」

と、登志子は青年に言つた。ずる／＼と、紅の悪魔の手に抱きこまれていく自分、彼女は、切なく、悲しかった。

「悪い事は、わかつていても、駄目だな、こうした事だけは、僕だつて、もう何回こんな所へは来るまいと思つたかもしれやしない、でもやっぱり、来てしまった、今度も……」

「……………」

「君はもと／＼、この世界に生きる様に作られた女なのかもしれない」

「あゝ」

登志子はうめいた。彼女の身体の奥から、たちまち恐ろしい激情の火の手がもえ上り、身もこころも焼きつくすかと思えた。その眼が妖しく輝き、あえぐ様な息遣いが、青年の頬に、かくわしい香りを伝える——。

「君が、どんなに焦つても、もがいても、丁度お腹がへると御飯が食べたくなる様に、どうにもなるもんじやない。でもね、われわれの様な者には、またわれ／＼だけの、ひそかないこいの場所も、あるんだよ」

彼は、そう言つて、カバンの中から、黒い皮のブックケースを付した、洒落れた雑誌をとり出した。登志子にとっては、始めて知る誌名であつた。それを手にとって、パラパラと頁を繰った時の衝撃、それは実に、数年前あの恐ろしい責め絵を始めて見た時の喜悅とも戦慄とも言えない、あの時の感激の再現で

あった。

「君は正しい、君は卒直だ、君は、自分の感情を卑下しつゝも、それから脱け出す事が出来ずに苦しんでいる事を、認めている。僕だってそうだ。この雑誌はね、こういう悲しい運命を背負った人達が、苦しみ、悲しみをぶちまけあつて、秘かななくさめを得ようとする、そのあらわれなんだね。僕たちは、この孤独に耐え切れないで、とう／＼、われわれだけの秘密の楽園を創り出した。これは、僕たちの本だよ——」

「……………」

「出来れば、こんな本の御世話になりたくない、しかし、これは本能的に不可能なんだ。だとすれば、われ／＼は、この本を、最大限に活用する他ない。この本が、他の書物に見られない親しみ、そういったものを、編集方針の第一に掲げているのは、われ／＼の孤独をお互いになくさめ合い、時にははげまし合ひ、そして、秘かな満足を得たいという大部分の読者の切実な声がそうさせているのだと思う。」

「……………」

「この中には、もっともつと気の毒な人々がいるよ、君の様に、異端者としての悲哀を、卒直に認める事が出来ないで、何とかして、これを意味づけようとしている。ある者は、自分が異端者である事を反って誇らし気に主

張しているし、ある者は、われ／＼こそ、人類の中で最も高級な感情をもった、えらばれた者であるという、そんな事を強いて書かねば気の済まない人もいる。」

「……………」

「われ／＼は、この雑誌を抱いて、わあっと大声を上げて、泣きたいんだ、それでこそこの雑誌の存在価値がある。どんなに力み返つても、われ／＼は、人間の最大公約数の外にあるんだ。自分たちだけでいくら意味づけようとしても、常識はそれを認めてはくれない。この雑誌の編集者も、そう考えているだろうと思う。——自分たちはお医者様のよいうなものだ、少しでも、こうした人々が少なかれと願いつつも、それでも現実には、存在せざるを得ない——とね。」

六

登志子は、その日から、この青年に強く惹かれた。彼は最後に、

「僕も、今日からもうこゝへは来ないよ、これだけが友人だ——もう来まい——」

半ば自分に言いかけせる様に言つて、黒い革のブック・ケースをカバンに納め、立ち上つた。名も告げずに——

そして、一月、本当に、あの夜の青年は、二度と「くれない」に顔を見せなかった。登志子は、淋しかったけれど、耐えていた。これが、自分の背負っている十字架なんだ、一

生、こうして生きつづけねばならない。彼女は自分の苦しみを手記に認めて、雑誌の発行所宛に送った。我ながら拙い文章であつたけれど、編集部から、鄭重な返信が来た。

ほんと、救われた様に、登志子は身体が軽くなるのを感じた。今迄になく、力強い腕にしっかりと支えられたような気持だった。

——私は、この雑誌を唯一の味方として、一生、地獄の責苦と闘つていこう。

一月も続いたといつて、呆れもし、喜んでくれている妹の紀子に、又笑われ、失望させるかもしれないけれど、仕方がない。「くれない」を辞めよう——。そう決心した日の夜、登志子は、思いがけなく、先夜の青年がやはりあの時と同じボックスに、一人黙然と新聞を読んでいる姿を見た。

「どうなさいましたの？」

青年は、静かに顔を上げた。

「君も、まだ、ここにいたの？」

「……………」

微笑して、登志子は、首を振った。

「辞めますの、今日限り」

「そうか」

登志子は、自分の手記があつた雑誌に掲載された事を言おうかどうかと思つた。しかし、彼女は、遂に言わなかった。

——それでいゝんだ、この人だって何とい

う名前で手記を綴って居るかわからない。しかし、この人は黙っている——。

「そうか、決心出来て、よかった」

「え……」

登志子はうれしかった。これから進んでゆかねばならない荆の道を切りひらく決心が、彼の一言で、判然とついた様に思った。

「でも……」

と、登志子は言った。

「あなたは、どうして？」

「僕？」

青年は、淋しく笑った。

「お別れに、来たのさ」

「あら、何故？」

その返事は、登志子には納得出来ないものであった。

「近いうちに、結婚する事になったよ」

お芽出とう、と、口まで出かゝった言葉が何故かどうしても言えなかった。登志子は、うつむいていた。それは、彼女だけの夢ではあったが、彼の様な青年に愛され、お互いになぐさめ合って生活したらどんなに楽しいことだろうと思った事もあったのだが——、

「僕はね、実は君の様な性格の女性を求めている。けれど、それはいけない。恐ろしい事が起りそうな気がする。僕の結婚の相手は、平凡な女だよ、君によく似た——」

登志子は、あの晩の、彼の言葉を思い出した。女、それは当然の事ではあるが、やはり女性だったのだ。

「それで、君に、この本、あげようと思ってね。——」

彼は、あの黒いブック・ケースに入った雑誌を、彼女に渡した。

「じゃ、さよなら、今度こそだ」

「待って、お送りします」

登志子は、大急ぎで、真紅のユニフォームを脱いだ。今日限りここには来まい、中野の青嵐荘へ、妹の所へ、帰ろう——。登志子は挨拶も早々に「くれない」の外へ出た。青年は待っていた。彼と、彼女は、新宿の暗い道を、どこまでもく歩いた。

七

そこはもう、千駄ヶ谷の駅をすぎて、明治神宮外苑であった。二人は、疲れはてた足を夜露にしめった草の上に、投げだした。

「くれないをやめて、君はどこに行くの？」

「あてがありませんから、妹の所にしばらく落つきますわ」

「君、この前は、一人ぼっちって言ったじゃないか」

「あら、そうだったかしら」

登志子は、ハツとした。

「どこに、いるの？」

「大阪に——」

言ってしまったから、登志子は自分の心の中が見すかされたのではないかと、胸がドキドキと騒ぐのを、どうする事も出来なかった。——やっぱり私は好きなんだわ、これ位のうそがつけられないなんて——、登志子は、暗い中で、じっと胸を押えた。

——好きなんだ、好きなんだ、この人が、

「あの……」

「えッ？」

思いつめた様な、登志子の態度に、青年は振り返った。

「あたくしを、あの、あたくしでよかったら——」

登志子は、心の底から燃え上る、呪の魔火を思った。

「打って、私を打って、紅い悪魔が、私の胸にいるの、打って、あなた。」

青年は棒立ちになった。彼の顔は、苦悩にゆがんだ。

「お、お願いです、お願い——」

突然、登志子の背中に、やける様な、鋭い痛みが走った。ビシッ、と音がした。

「ウンッ……ッッ」

彼女はのけぞった。その手が、空を掴んで

青年の身体を、空しくも、求める。ビシッ、登志子は、よろめいて近くの木に寄りかゝった。秋近い樹の枝から、ハラハラ

と、木の葉が散って――

「あ、あ、もつとぶって、お別れのしるしに一生、残るように、ぶって――」

青年は、自分のズボンからバンドを引きぬくと、登志子の後手を縛りあげた。

激しい暴力の渦まく中で、登志子は、遂に自分の生命の燃焼するのを知った。すうっと意識が遠ざかって、彼女はうつ伏せに倒れ伏した。そして、どの位たったろうか、或は、わずか、数分であつたかもしれぬ。

うっすらと、登志子が、眼を開いた時、眼の前に、自失した青年の顔を見た。

「あなた……」

彼は、黙っていた。顔に深い後悔と、絶望の色を浮かべて

「あなた、行って、お別れ、しましょう。あたくしは、これで、うれしい、のよ……」

あなたは、これから、おしあ、わせ……に」

「ありがとう」

彼は、うめいた。

「御満足」

「……」

「新しい、奥さまには、こんな、こと、しては、だめよ、お誓いに、なつて」

青年は、うなづいた。

「うれしい、では、さよう、なら、よ、これで、あたくしも、幸せ、本当よ、さよう、なら……」

長い間、眼を閉じて、再び、登志子が再び眼を開いた時には、青年の姿は、どこにも見出す事が、出来なかった。

その夜、彼女が、久方ぶりで、青嵐荘に帰ったのは、もう十二時を半ば程まわるところであつた――。

八

「あら」

驚いた様な紀子に、黙って笑いながら、登志子は、

「やめたわ――」

と言った。

「どうして？ どうしたの？」

「うゝん」

二人は、何となく笑いあつた。そして、紀子が、私、近いうちに、結婚することにしたわ、と言い出したのは、それから、しばらくたつてからであつた。

「どんな方？」

「やさしい方、今日、くにへ、お手紙出したの、きつと許してくれるわ」

「そう――」

登志子は、急に胸さわぎを感じた。

「その人、どこにお勤め？」

「会社よ、築地の、写真、見せましようか」

それは、やっぱり、あの青年であつた。登志子は、表情の変化を妹に気づかれぬ様、背を向けて、電燈のあかりにすかして見る様な

ポーズをとつた。その手が、小さきみにふるえた――。

「この方に、私の事、話した？」

「えゝ……」

「なんて？」

「会社へつとめてるって、だつてお姉さん、そう云えつて仰言つてたでしよ」

「そう？」

「今度、御紹介するわ」

「いゝの」

「あら、どうして？ 反対なの」

「うゝん、この方なら、好い旦那さまになるわ、大丈夫、私も紹介してもらいたいけど、その暇が、ないわ」

「どうして？」

「大阪へ行くのよ、明日、早く発つ」

「まあ……」

翌日、東京発九時三十分の急行に、登志子は乗った。紀子の「お大事にね」という言葉と、自分ひとりの悲しい想い出を抱いて、登志子は、唯、妹とあの青年とが、平凡に、あつたかい家庭を営んでくれる事を、心から祈っていた。

大阪へ行つても、別に、何処というあてもない登志子は、唯、新しい土地で、新しい生活をしたと願うばかりであつた。彼女が、あの雑誌の大阪にある編集室を訪れる日も、そう遠いことではないかもしれない。(完)

姉とその弟

春 木 俊 野

私の姉も、アブノーマルを好む人間だったのかも知れないと知ったのは姉が死んで私が青年期に達してからだった。私とは四ツ違いで二人きりの姉弟の故か両親も感心する程の仲の良さで、私は不思議に此の姉に対しては幼い頃からお姉ちゃん／＼とまるで腰巾着の様に離れた事がなかった。

姉の名は明美と云ったが其の名の示す通り子供の頃から明るく美しい性格と顔立ちで、どちらかと云えばお転婆で女学校の頃は一層それがはばしかった。そのくせ誰もが明美ちゃんとは憎めない、全く可愛い娘だと評判がよく愛されるやんちや娘と云う存在で、温和しくしていると病気でないかと却って心配される程だった。

私が小学校へ入った当時は、何時も手を引いてもらって登校したものだ。が家にいても学

校にいてもそれから外で遊ぶ時でも姉は何時も私の防波堤の様な恰好で見守ってくれた。だから何かにつけて私はお姉さんツ子と云う——それに又早く両親に別れなければならなかった事も私をそうさせた事の一つだったが今此処に、幼い時の淡いそして又それが後々私達姉弟をより一層、離れる事の出来ないものとしていたかも知れない思出を序として姉を語ってみたいと思う。

一、序

私が幾つの時だったか、又何の為だったかも覚えてない。さん／＼と降りそぐ朝陽をうけた縁側で、庭には花が美しく咲いていたから春も終り頃の五月の末頃だったかもしれない。幼い私は縁側の上に俯伏せに転がされて、私の背にはお河童の姉が馬のりに跨って

いた。まだ八、九才位の姉とは思うが幼稚園前？だったと記憶する。私は今にも身体が圧しつぶされそうで一生けんめい起き上ろうとかがいていた。両手をふんばっても足をバタつかせても如何にしても起き上る事が出来ずあの時私はどんな気持だったのかは覚えがない。只、泣きもせず一生けんめい手、足をばたつかせていた事だけは、はっきりと覚えていたのである。

「おや／＼明美ちゃん、大きな子が何です。弟は、そんな事をせずに可愛がつてやるものですよ」

母がそう云って前かけで手をふき／＼台所から出て来た事も一緒に……。

一、姉の日記から

×月×日 晴 (女学校三年生)

に内弁慶ぶりを發揮して、姉とケンカして父母の前であの事を喋られたらと思ったのだ。

でも、別に姉はその事には何も云わなかった。三日ばかりしてから夕食後、父母は階下でくつろいでいたので、私は何気なく二階の姉の部屋に入った。

「どうしたの？、お姉さん、そんな事して」

私は思わず姉の一瞬のたじろいだ顔色も気づかずに云ってしまったが、姉は秋だと云うのに水着一枚になって布団をクル／＼と丸めた上に馬のりに跨っていたのだ。それでも姉は両膝で立つと身体を後に倒す動作をして「体操をしたのよ、肋木の上に乗ったつもりで、だって運動会の体操に私達はこれをするのよ」

と云ってから

「俊ちゃん、あんた此の間、秀子ちゃんにききう／＼云わされていたわね。駄目よ男の子のくせに女の子なんかに負けては」

それを云われると私は一言もなかった。だって——と口ごもり乍ら若鮎の様に四肢のよくのびたそれでも少女らしい姉の肢体を上眼で見乍ら私は窓からすでに薄暗い外を見た。

「じゃ私が俊ちゃんを強くしてあげるわ、さア、私にかゝってくるのよ、どっちか降参する迄よ」

私は何も考えなかった、只、姉となら負けたって恥かしくない。それに姉には勝つかも

しれないと云う望みもあった。「うん」私はうなずくと姉の身体にとびついた。でも勝負はカンタンだった。私は秀子ちゃんの時の様に姉から胸の上に馬のりに跨られた。姉の水着だけの肢体が、私の胸の上にあるのが、私に何かしらまばゆいものに見えて息苦しさに降参／＼と悲鳴をあげたが、私は立上った姉の脚にしがみついて

「僕、強くなるからこれからも毎日けい古してよ、ね、ね」

と甘える様に姉の顔をみつめた。姉は私の顔を両手ですくいあげ乍ら

「いゝわ、でも俊ちゃんを強くするためだから手荒い事するかもしれないわよ、泣いたって知らないわよ」

姉はニツコリ笑って云った。私は姉の顔を見上げて、ウンと頷ぐとその両腿にびったり頬をよせてかじりついてしまった。

私には幼い時、姉が私の上に馬乗りになって苛めた想出が今度は、そうされたいと云う気持ちに何故だか変わってしまった。

四、幼き肉体の火花

姉は全く中性だと父母が笑う様にお転婆だった。二人きりになれば姉は私を処かまわす投げ飛ばし背に腰に、時としては顔の上にまでお尻をすえて馬のりに跨る事があった。でも、私にはそれが楽しい遊びになっていた。

然し時としては、姉が腹這って本等を読んでいると、そっと後から飛びついて姉の背に馬乗りになる事もあった。そして姉が私にした様に、ちゃんと心得たもので姉の片手を逆に後手にねじりあげて降参させたりした。私は姉を四ツ這いの馬にして、お下げにしてリボンで結んである髪を両手に握って手綱にし、部屋の中を何度も這い廻らせた事もあった。だがこんな事は本当に二度か三度であとは何時も姉が私を馬にするのが常だった、無論こんな事は姉と私だけの秘密だったが、姉と私の此の遊戯を決定的なものにする日が矢張り秀子ちゃんの来ていた時に行われてしまった。私と秀子ちゃんは其の後時々、組打ちをやったりしていたが、姉が見ていないと思っていたのが、私がいつもの様に秀子ちゃんに馬乗りされて、ぎゅう／＼圧えつけられているのを又も見られてしまった。其の夜、姉は私を二階の自分の部屋に呼ぶと、

「あんたは秀子ちゃんに勝てないの、あれだけ私が毎日練習してあげてるのに」

と何時にもないはげしい語気で私にくっつかうった。それを私は何とか弁解すると、

「うそ云っても駄目、ちゃんと知ってるわよあんたは秀子ちゃんに負けるのが好きなんでしょう、秀子ちゃんのお尻にしがれるのがあんたは好きなのよ」

私は姉の此の言葉をきいた時、子供心にも

今日は土曜日で授業は午前中だけ。京子さん、春子さんの三人で公園を廻って帰る。私は家の前で不図、イタズラを思いついて、そつと門を入り玄関から入らず庭先の縁側とは反対のお勝手口から入った。本当は母をワアツと驚かすつもりだったのだけど家の中はシソとして誰も居ない。ナアンダ、つまらないと心の中で云って靴を脱ごうとしたら、

「だめ／＼もがいたって起きれないわよ、さあ、これでもか／＼」

と云う女の子の聲が縁側の方の部屋から聞えた。私は、おや？、と思つてそつとお勝手に靴を置いたまゝ、お勝手の次の部屋から隣の部屋を模のすきまから覗いてみた。

ボタン／＼と畳を叩く音が一、二回聞えてウン／＼云っている声が弟の俊野だと感づき又女の子の聲はお隣の秀子ちゃんと思つたが矢張りその通りで私はその光景をみて何だか顔が火照つて来る様な気がしてしまった。縁側のガラス障子をしめた其の部屋の中で俊野と秀子ちゃんが格闘していたのだ。それも既に勝負はついていて仰向けに寝ている俊野の胸の上に秀子ちゃんが悠々と馬のりに跨っていた。秀子ちゃんは俊野と同じ年で二人共五年生、いつも仲のいい二人なのだがどうしたのだろう？、俊野はどうも内気で気弱いが秀子ちゃんは私に似てお転婆で、さっぱりした気性の子なので私は好きだ。でも今、咄嗟に

どうしたのだろうか？と思ひ又女の子が男の子に馬のりになつてゐる光景が不思議に私の心を揺すぶってしまった。俊野のバカ女の子に負けるなんてお姉ちゃん嫌いよ、と私は心の中で叫ぶと又そおつとお勝手に戻り靴を持つて外に出ると玄関へ廻つて、私はわざとガラ／＼と勢よく戸をあけ、只今ア、とさも今帰った様に怒鳴つた。

「あらア、二人共どうしたの？」

私は二人は離れて知らん顔してゐるのだろうと半ば可笑しく思ひ乍ら襖をあけたらまださつきのまゝだったので思はずしどろもどろに云つてしまった。俊野は私の声にあわてたのか一寸もがいたらしく顔を真赤にして秀子ちゃんの小麦色に陽に灼けた健康そうな両腿の間にピツタリはさまれてゐた。秀子ちゃんの両脚は俊野の両腕をしつかと踏み敷きお尻は胸の上に馬のりに跨つてしまつてゐる。

「お姉ちゃん、俊ちゃんたら悪いのよ、トラソブでずるい事ばかりするから今、こらしめてたの」

秀子ちゃんは私の心が不思議にも何故か狼狽にも似た気持なのに、そんな事は頓着なしに勝ち誇つた様に私を見上げて云つた。お河童の顔があどけなくて可愛いが今の私には憎らしくみえた。そして俊野の顔も、二ツ三ツひっぱたいてやりたい衝動に駆られていた。

「秀子ちゃんは女の子だから、わざと負けてや

ったんだよ」

俊野は私に見られて恥かしそうに、それでも口だけは負けずにへらず口をきいていた。

「あら、あんな事いつて、さつきからおきれないくせに、さア、これでもか／＼」

秀子ちゃんはお尻を揺すぶつて俊野をおさえつける。俊野は、む／＼と口を秀子ちゃんのお尻におしつけられて首を振ろうとしたが秀子ちゃんの両腿に挟まれて顔を動かさない。苦しうに顔をしかめてお腹をヒク／＼させてゐる。秀子ちゃんは俊野の顔を自分の両腿に挟んで、ふ／＼と私を見てイタズラっぽく笑つた。

私は子供の、それもケンカでもない此の二人の組打ちが、どうしてこうも心が早鐘を打つ様な衝激に駆られてしまつたのだろう。なだめたり、すかしたり、笑つたりして二人をとりなし、母が帰つて来ない中にと引き分けさせて全然そんな事にふれない顔で私は他の遊びを提案して三人で遊んだが、夜寝てからも此の光景が脳裏に灼きつけられ秀子ちゃんが私の姿に変わつてゆく様な気がしてならなかった。

三、シークレットの芽生え

私と秀子ちゃんの組打ちを姉に見られてから、私は子供心に恥しくてなるべく姉に抗わない様にしてゐた。と云うのは何時もの様

全身に恥かしさが感じられて顔から火が出るみたいと感じられる程赫々なってしまった。変態性欲と云うものを私が知っていたわけでもないが女の子に馬のりに跨られる事が好きだった私は、これはいけない事なのだ、自分だけのものつ罪悪だと子供心に感じていたから、それを曝露されて身をすくめたのと同じだった。黙って俯向いた私の頬にピシッ／＼と交互に姉の平手が飛んで私の頬はジーンと痛さに火照った。姉があんたは女の子に負けるのが好きなんだ、と云わない前に私を打ったら恐らく私は姉にとびかゝっていたかもしれない、それこそ大喧嘩になっていたかも知れないが、私には姉にとびかゝる力は姉の言葉に完全に打ちひしがれていたのだ。

「バカ／＼弱虫ッ」

姉は私をおし倒すと胸の上に跨って尚私の頬を平手で打ちつづけた、私は両手を姉の膝に踏みしかれて姉の手を防ぐ事も出来ず

「御免よ／＼」と泣き出してしまった。

「どうしたんだ、二人とも、明美、やめな

か」

「二人とも、どうしたって云うの、けんかなんかして」

私の泣き声とドタバタと云う物音に父母が驚いて駆け上って来て、私と姉を引きわけたが姉は母の胸に顔を埋めると大声で泣き出してしまった。私は二十程姉から頬を打たれて

声も出なかったが、姉の泣き声を聞いていると何故か泣けなくなり、何だか私が姉を苛めて泣かせたみたいだ錯覚を感じていた。

五、狂い咲きの花

私が中等学校に入った時、姉は女学校の五年生だった。水泳と庭球の選手だった姉はのび／＼した肢体と美貌が男学生の憧れの的で、其の弟の私は誰からも羨まれている存在だった。女学校時代をスポーツで思いきり楽しんだ姉は、又学業の方も副級長と云う成績で卒業したが、大東亜戦争が烈しくなった頃なので専門部へ進学するのをやめて或る軍需会社へ勤める事になった。私も其の頃は、姉や秀子ちゃんとした様な遊びは殆んど忘れて強制的に入部させられた野球部で、球拾い等をやっていた。野球は外来のスポーツだと云うので排撃されかゝっていたが、二年生の夏に春木は投げる事を練習すればきつとのびる、とその時のコーチに折紙をつけられ、それから私は投手としての練習が始まった。然しそれも束の間で野球部はやがて廃止となり私達は教練、勤労奉仕に毎日／＼を過す様になつてしまった。そんな或る日の日曜日、私は朝からお勝手ではしやぎ廻っている姉にイタズラがしたくなり、姉の買物袋へ近所の小川からつかまえて来た小さな蛙を封筒の中へ入れて其の中へ入れておいた。其の日は姉と仲よ

しの佐々木と云う矢張り同じ会社の——私には友達と云っていたが、れっきとした恋人が来る事になっていた。戦争たけなわの頃、姉の相手としては不思議に思う程の優しい男で姉より五つ年上の二十四才で姉の云う事は何でもきいてくれると云う事だった。お使いに行つて姉は其の蛙を入れた封筒を取り出し、人目もはゞからずキヤアツと悲鳴をあげたらしく、家に帰つて来るなり二階に駆け上つて私に組みついて来た。私は半ば逃げ乍ら今では力づくでも姉には負けない自信があつたが姉と組み打ちするのが本当に久しぶりと云う懐しさが先にたつて、弟とは云え美しいと思つている姉の顔と姿態に屈服する様に私はわざと其の場に転がった。姉はズボンをはいていたので当り前の様な恰好で私の背に馬のりに跨り私の首すじをおさえつけた。私は、はね返そうと一寸もがいたが、こうなると、どんなにありつた力の力を出しても駄目だった私は姉の身体に馬乗られ乍ら二年前の事を懐しく思つた。

「どうだ、降参か？」

「うゝんまだ／＼」

「でも降参したって、今日は許さないわよ、あんなひどいイタズラしたんだから」

私は姉の身体が身動きも出来ない程、私を組み敷いているので、いさゝかしまったと思ひ乍らそれでも膝に力を入れて、時々お尻を

もちあげていたが、ふと階下の気配を感じた
「お姉さん、佐々木さんが来たんじゃない」
「……」

母の挨拶する声が聞えて、明美「〜と呼んでいる。」

「ホラ、お姉さんの恋人だよ」

「何に云ってんのよ、子供のくせに、只のお友達よ」

姉はコツンと私の頭に拳固をくれたが

「とにかく今日は許さないわよ、誰が来てもお母さんも今日はお仕置していゝって云ったんだから」

私も母と佐々木が二階に上って来るらしい気配に心配になって

「ね、こんな処を見られたら恥かしいよ、許してつたら、もう本当にしませんから、おねえさア」

私は身体をゆすって、もがいたが、そのとき既に遅く母と佐々木は階段をあがって部屋に入ってきた。母は驚いた顔で

「あら〜、二人よるとすぐ喧嘩なんですよ明美、何です。おてんばな恰好して」

呆れた様に云う母と佐々木を見て姉は

「今日は佐々木さん、弟つたらね……」
と蛙のイキサツを自分が大勢の人の中で悲鳴をあげて笑われる迄を面白おかしく話して「恥かしかったワ、それでね、今こうして折かんしてるのヨ」

すると佐々木が

「俊野君、だらしがないぞ。お姉さんに負けて、相手は女じゃないか」

私は畳にベッタリ片頬をおしつけられ乍ら「だって、お姉さんは女でも四年、さきに生れたんだもの、それに人の中で恥かしかったって云うけど、あれは女の人の話だよ、お姉さんなんか女じゃないか……いた……いたア」

姉は私の両手を逆にねじりあげてしまったのだ。

「これでもか、えらそうな事を云って」

私は手が折れそうどう〜悲鳴をあげた「御免ナサイ〜手が折れる、おかアさん」

「明美、もう許しておやり、佐々木さんが呆れているよ。本当にお前達つたらあべこべなんだから」

姉はそれでもふ〜とバツの悪るそうに笑うと

「じゃ今日は許してあげる」

と手を放して立上った。私は腕の力がぬけた様でやっと起き上ったが

「あゝア、わざと負けるんじゃないかった」

等と云って皆を笑わしたりした。姉と母と佐々木の話の中で、姉が

「いゝわよ、そんな事を云うんだったら、佐々木さんを今度はやつつけるわよ、動けない様に縛ってふみつけてやるから」と云った。「明美さんの折かんなら僕はよろこんで受け

ますよ」

佐々木がそう云ったので又皆大笑いとなつたが私は二人を残して母と階下に降り乍ら、ふと、姉が佐々木を私の代りにするのでないか、佐々木は私から姉をとってしまうのでないかという予感に脅えていた。

六、姉の体臭

戦争は終わったが私の家は焼かれ父母は空襲で死んでしまった。私と姉は混沌とした世相の中で渋谷区のD町にアパートをみつめて住み込んだ。食べる為に生きてると云うのが当てはまる様な世の中だった。姉は或る化粧品会社の会社へ勤め乍ら私を学校へ出してくれた。「大学だけは、お姉さんがどんな事をしても出してあげるワよ」

それが姉の口ぐせだった。私はともすれば学校なんかやめて働きたい、そして自分のもらった給料で姉との生活を助けたいと思いつてもそれを云ったが姉はきかなかった。私は姉に感謝し乍ら毎日焼けた学校へ食生活の中から通っていた。

其の頃から生活の一助として姉はアルバイトとして夜はダンスホールへダンサーとして通う様になっていた。美しいと思っていた姉の顔が益々磨きあげられて美しくなるのに比例していくうち私達の生活は人間並の暮しが出来る様になって来たが、私の心は何故か重

く感じられる様になっていた。夜は私が寝てから姉は帰り朝は姉のおきない裡に私は学校へ行く、姉と話をすると言う事が殆んどなくなってしまうていたからだ。私は姉に仕える様に姉がいゝと云うのもかまわず靴を磨いたり洗濯をしたり、時には姉のズロースも黙って洗ったりした。私には実の姉であり乍ら何故か姉の体臭が好きだった。朝起きて、昨夜の疲れでぐっすり眠っている姉の足許に坐って、形よくのびきった姉の素足に夢中で唇をつける事もあった。私が秀子ちゃんにわざと負けていると云って姉が怒り、私の顔が姉に打たれてひどくはれ上った事などを昨日の様に思いうかべたりした事もあった。私も姉も生活に追われている故もあるだろうが、もう昔の様な遊びが二人の間で出来ない程、成長している事が何となく淋しく感じられもした。たまの休みの日には姉は私にダンスを教えてくれたり、ヤミ市に行つてあれこれと食料品を買い込んで来ては料理をするのが好きだった。そんな頃の或る日、私は学校から帰って部屋を片づけようとして、誤ってインクを姉の大切にしていた絹のうすい靴下にこぼしてしまった。私は姉がやっと大金を出して手に入れたばかりで、一、二度しか使っていない事を知ったのですっかりあわてゝしまった。姉が怒ると云う事より、私は姉がやっとの思いでこれを買ったのでないかと云う事が

考えられた。姉はきつと許してくれるだろうけれど、見栄を商売のダンサー稼業で姉は又肩身のせまい思いをするのでないかと云う事が私の心配だった、私は決心すると姉が此の間買つてくれたばかりのオーバーを手にとって外へ出た。私はオーバーを売るつもりだったのだ。でもそんな事をした事のない私は当時、軒なみに並んでいた古着屋へ入るのが恐しいみたいで、其の前を行ったり来たりしていた。今、考えると不良達にたかられて安く買いとられるよりよかつたと思つているが私の挙動が不審だとして、いわゆるアベックのパトロールにつかまり、警察署へ連れて行かれてしまった。

盗品でないかと云う事が大きな疑いだったらしいが話した事はなかったが近所の顔見知りの警官がいて、何も云わずに黙りこくつている私をなだめすかして姉の勤め先を訊き出し電話をかけてくれたのだった。姉はすぐ飛んで来て、私の手を取り理由を訊ねた、

「ね、何にお金が欲しかつたの、お姉さんは大抵の事は俊ちやんにしてあてけるつもりよ。それなのに買ったばかりのオーバーを売ろうなんて、どうしたのよ」

私は訳を話そうと思ひ乍ら、何故か婦人警官を交えた警官達の前でそれを云うのみにめきを感じて強情の様に黙りこくつていた。なだめすかしていた姉の語氣が急に変わった

と思う間もなかった。姉はいきなり

「姉さんのこんな思いも判つてくれないの」とポロ／＼と涙を流すと私の頬をパアんと平手で叩きつけたのだ。ジーンと痛さが耳に響いてハッと私は打たれた頬に手をやって姉の顔を見た。つぶらな姉の瞳から大粒の涙が溢れて、形のいゝ豊頬の顔が悲しそうにゆがんでいた。私は、はりつめた氣持が一瞬どつと奔流の様におし流されて大声で泣き乍ら姉にしがみついてしまった。

私のときれ／＼の話を聞いた姉は「バカねエ、靴下なんかどうなつたていゝじやないの。あんなものは何時だって買えるのよ。そんな心配しなかつたて、話さえてくれたらお姉さんはちつとも怒らなかつたのに」

姉は泣き乍ら私を抱きしめてくれたが、その姉の体臭に私も又泣き乍ら自分の肉体の奥底に火花を感じずに居れなかつた。

七、肉親の垣根

或る日、何時も遅い姉が珍しく早く帰つて来た。佐々木を連れて来たのだ。兵隊に行つたゝま消息のなかつた佐々木が帰国以来姉の行方を探し求めていたらしく、それがやっと判つて三年振りに逢う事が出来たのだった。

其の夜は、本当に久し振りで楽しい夜だった。話の様子で佐々木は、姉が何をしていよ

うと弟の私と二人で強く生きぬいていてくれた事は嬉しい。もうこれからは自分に任せてもらいたい」とと力強い言葉をもらしているのを私は感じとって、義兄が出来ると云う事が不思議に頼もしかった。

姉はそれからうって変った様に元気になった。全く昔のやんちや娘を思わすばかりのお転婆ぶりだった。

「俊ちゃん、相撲してみようか」

姉の言葉に私と組合った姉は、ころ／＼と布団の上に転がったりした。

「さアどうだ、降参するか」

姉は私の胸にどっかと馬のりに跨って私を見下し乍ら笑って云った。

「く、くるしい」

私は甘える様に顔をねじって姉の脛に唇をつけ、姉の顔を盗み見た。

「ドレイになるなら許してあげる」

「ウン、ドレイになる。僕、お姉さんのドレイだ」

姉は立上って椅子に腰をおろした、芝居気たっぷりに女王のふるまいだった。私も又、芝居の様なフリをし乍ら実は姉の足許にひざまづけた事が嬉しかった。私は姉の素足に頬をあてゝ、いつまでも姉の脚を胸に抱きしめていた。

それからの姉と佐々木は逢う機会が多くなり、恋愛以上のものとなっている事は確かだ

った。私はかつて佐々木が姉を自分の手からもぎとってゆくのでないかと心配した事があったが、今の私には姉を幸福にしてくれるなら、又佐々木が自分の義兄になってくれると云う事が嬉しい程、佐々木は昔乍らの温和な性質で私には慕える人物になっていた。姉の期待に背きたくないと云うひたむきな私の姉に対する一種の崇拜的な気持は学業に現われて私は級長となって最上級生となりいよく明春は大学と云う事になった。姉も佐々木も祝ってくれて私は幸福の絶頂に達したかの様な心持だったが、やがて私自身のアブノーマルな気持が自分を自ら、否、姉までも不幸に追いやる事になってしまった。

——と云うのは敗戦の混沌から漸く日本も立直り何かにつけて落ち着きをみせて来た昭和二十四年の春も過ぎんとしていた頃。私は急に学校の用事で姉の意見が必要となった事があった。姉は其の頃、時折り佐々木の所へ泊って来る事があったので私はもし姉が帰って来なかったらと思ひ夜遅く佐々木のアパートを訪ねたのだ。私は勝手知った佐々木の部屋へ玄関から入るつもりだったが、ふと外から見た佐々木の階下の部屋の窓に、皎々と昼灯が灯っているのを見て二人はきつとむつまじく話しているのだらうと思うと、あとで冷かしてやれとイタズラ気を出し、そつと庭の方へ廻って傍にあったミカン箱を台にしてガラ

スのしまったカーテンの隙間から部屋の中を覗いて私は思わず叫び声をあげそうになってしまった。そして私はむら／＼と怒りに全身をふるわせてしまった。

姉はズロース一つの裸にされ、真白な裸身が床に横たえられていたが両手は固く後手に縛られ、胸に廻した細紐が両の乳房に固くくいこんで今にもハチ切れるのでないかと思う程ふくらんでいた。形のいい脚にも固く縄はくいこみ、その縄尻を持った佐々木が姉の腰に片足をふまえてもう一方の手にもった竹の物差で姉の背を肩を打ちすえていたのだ。打ちすえられる毎に姉は苦悶の表情をしたが不思議に声はたてなかった。

私はもう一刻の猶予も持たなかった。一寸触った窓はかきがかゝってなく外に開く事に気づいた私はわざと一枚、拳で叩きわって何か大声で叫び声をあげると夢中で窓によじのぼり部屋の中にとび込んだ。

「お姉さんをどうするんだ、貴方はそれでも男か、俺が相手になってやる」

私は傍にあった果物用のナイフを手にもつと驚いて口もきけずにいる佐々木に向ってじわり／＼とつめよった。

「と、としちゃん、違ふのよ。よし、としちゃん」

姉が私に途切れ／＼に叫んだので、私は佐々木を睨みすえたまゝ姉の身体の傍にしやが

み込んだ。姉の身体は全身汗みどろになり鞭の跡が赤くみみずばれていた。顔にはおくれ毛がふりかゝって一層私は怒り其の極に達してしまった。が姉の次の言葉に私は戸惑いを感じてしまった。

「俊ちゃん、いゝのよ、私が悪いの。私はこうされていゝ女だったのよ。だから佐々木さんに乱暴しないでおとなしく帰って頂だいね私もすぐ帰るから」

私は姉の裸身に気づくと、急いで傍にあつた姉の洋服を上をかけ、そのナイフで姉の縛

めを断ち切った。

私は普段、女の様におとなしい佐々木がどうしてこんな目にあわしていたのか、又姉はどうして彼をかばおうとしていたのかも考えず、只、私の前で一言も口がきけずにいる佐々木が憎くて／＼たまらなかった。

八、花散りぬ

其の後しばらく経って敗戦以来の辛勞が祟ってか、姉は晩秋の肌寒い夜、急性肺炎に倒れて淋しく死んでいった。

佐々木はまだ独身で、時々私の処へも遊び

に来ることがあるが、私達はあの時のことについては、話に触れたことがない。私が姉のポートレートを机の上から離さないのと同じく彼は又姉の写真を大切にしまっているそうである。

「姉さん！」

私は子供の頃のような気持で姉の写真に向って言葉をかけることがあるが、姉はもう再び私の前にあの笑顔をみせることはない。私は相変らず会社へ通い、独り暮している。

(おわり。)

(告白体験手記)

陰花へ

の憧憬

青山 伸 夫

私は、昭和三十年一月号で好評を博した佐次浩介氏の「号泣」に少なからず疑問を抱く者です。

いや疑問と云うより、あらゆる奇癖性を帯び乍ら、その思いを達し得ない人々に、私のそれに似た体験をお報せして——と柄になく

筆をとりました次第です。

三十年三月号にも、箕田様宛へ——奇妙な便り、読者通信の塵籠から——と云う手紙を書いた青年が、郵便局で同じ愛好家の女性を眸にとめ乍ら言葉すら掛けられない純情さを想うと、過ぎし私の体験を想い出して微笑を禁じ得ない。私のように、この青年に——

もう一步の押しがあれば、その美貌の女性も素晴らしい同好家に得ていたかも知れない——？

——私は、四国、香川県高松市の洋装店に生まれ、長男ゆえに父の跡継ぎを予定されていたが、洋装店の主人になることを嫌い、公務員になるつもりで勉強していたが、洋装店の

主人になるのに学問は不要と、私の進学は真向から反対された。

けれど私のたつての希望で、昼は東京の得意先にある王子製服会社へ技術習得の形で住込みと定り、夜学であれば通学してもよいと云う条件で、私は東京都北区王子町に住む事を許された。

未だその頃はきわめて純情で、住込んだ「王子製服会社」の九割に近い女工さんがなんとなく恐ろしく、その食欲、舌戦に幻滅をさえ感じていた。

しかし今春入社した十人の女工さんの内で断然群を抜いた、清水美奈子と云う十八才になる女性に心を惹かれ、私が夜学に通う時刻と美奈子の退社時間が同じ事から互いに愛し合うようになった。

会社から国電王子駅迄の十分間の道程が、私達の愛の小径とでも云おうか、美奈子は国電田端駅の自宅へ、私は都電の早稲田行き電車に乗るのだった。

会社の休日には、日暮里駅の時計下で待合わせ銀座や浅草で映画を観て、楽しい一日を送るのだったが——私達は至って純情で映画館の暗闇で、そっと手を握るのがせいぜいだった。

ふっくら盛上ったセーターの胸、色白の頬など、街を濶歩している、どの女性よりも素晴らしく、どのアベックにも劣らない——等と

私は美奈子と手を組んで歩く事にほのかな優越を感じていた。

大学を卒業したら両親の許しを得て結婚する——いわゆる普通の恋愛コースを辿っていたのだったが、私が美奈子に接吻を要求した夜を境として急激に崩れていった。

二

「お待ちになりました？ 美奈子、急いで来ましたのよ？」

「ウウン、二分位い」

「済みません」と頭をさげ、美奈子はいつものように右腕を私にあづけて寄添ってきた。

会社から駆けてきたのか、その息づかいが荒々しい。美奈子が呼吸する度に、白いコートの上から小刻みに乳房の輪廓を感じ、このまま王子駅に行ってしまうのが惜しくなってきた。二人の歩調は引込まれるように「アベック公園」と異名が附いた「滝野川公園」に向っていた。

私達はベンチで抱合ったアベックの横を夢中で通り抜けやっと空のベンチを見つけ始めて二人だけの微笑を交した。

いつのまにか私は美奈子の手を握っていた。時間の経過など判るはずがなかった。

只、甘いような口紅の香りと、眸の中にボーンと霞む美奈子の桜色の頬があるだけだった。右手に柔かな丸味を感じるとせめて接吻だけ——とそのまま夢中で彼女を抱きしめよ

うとした。

と、急に美奈子は私の手を払いのけ、顔を俯伏せたまま逃げるように立ち去って行くのだった。

（何故だろうか？）私は、自分の愛情が裏切られたようで、その虚脱感にぐんなりベンチに坐ったまま、逃げるように木立へ消えて行った美奈子の後姿をいつまでも呆然と眺めているばかりだった。

——此処までは、奇ク読者には、大変退屈であつただろうと思う。それは、きわめて、ありふれた事だからだ。

しかし私は、この夜を境に、奇クで拝読したような異例な女性を発見し、童貞で自分自身そういった性癖は無いと信じている私が、その異例な三十女を見事に誘惑したのだった。

その頃迄は奇クを拝読する度に、世にも不思議な人々が大勢いるものだ——ぐらいにしか思っていないが、住込み女工の取締係「宮内タミ、三十二才」の妙に沈んだ顔色を見てみると、何か云いしれぬ幻想にかられてきたのだった。

彫の深い異国的な感じで、すらっとした、およそ女工さんなどというタイプではない、むしろ、垢抜けのした外国商館のタイピストとでもいったスマートなタミは、数少ない会社の男達には眼もくれず、只仕事第一と伪く女だった。

私は最初、石女ではないか？と疑った事もあったが、みんなの評判では「二万五千円も貰うのだから、男等は馬鹿らしく見えるのではないか」とこれが圧倒的な根拠ある噂だった。

美奈子に拒否された夜から、私は退屈まじれ興味半分に、タミの結婚しない理由を調べ始めた。美奈子には、それから以後は口もきかず殊更、素っ気ない態度を示し自分の気持ちを偽っていた。

美奈子が近寄ってくると、私は逃げるように避け、その腹いせのように必要以上にタミに話しかけ美奈子を牽制したのだった。タミと話せば話す程、その人間的な深味のある性質に引込まれ、次第に美奈子の幻影が崩れ始めたのに気がついた。

三

私は、王子製服会社社長の客分でありながら、窮屈な本宅に住むのを嫌い、最初から住込の弟子達と同じ部屋に寝起きしていた。私達の居間は、四畳半に三人住いだったが、廊下を隔て、三畳の間に宮内タミの寝室があった。

勤続十年を誇るタミは、スシ詰めの女工さん達を尻目に三畳一間ながら一室を使用していたのである。

或る夜、私は十二時近くまで奇クを読んでしたが、十二を打つ時計の音に、スタンドの

灯を消そうと手元のスイッチに手を延した。

他の二人は、昼間の疲れでぐっすり眠っていた。私は消灯後も、高手小手に縛られ鞭打たれている女の悲鳴が響いてくるような幻想で眠れなかった。

と、「ウウン、ウウン」低いがはっきり異様な呻めきがかすかに聞こえてきたのである。

断続的に響く、その呻めき声は「宮内タミ」の寝室らしい、瞬間的にそう思われた。タミに対する私の想像がどうやらか的中していたらしい嬉しさに私は思わず起上った。

（何をしているのか？）これは私にも判らなかつたが、そっと廊下へ出るとタミの室に近寄った。廊下を立ったまま、で渡ると、ギシギシ音がするので夜気にヒンヤリする廊下の板の上に俯伏せると、匍匐して這寄った。腹這いのまま、寝室の前で横になり、ガラス戸を境いに、あらゆる感覚を聴覚に集中して次の響きを待っていた。

「ウウン、ウウン」呻めきに混って何か物の擦るような響きが、夜のしじまを破って私の身に挑むように伝ってくる。

（一体何をしているのだろうか？）、只それを知りたい一心だったが、なにしろ、頑丈なガラス戸一枚隔てているので、室内の様子は伺うすべもなかった。

この時程、夜目が効くネコや犬が羨やましく思った事はなかった。

——しかし、この願望も思ったより速く達せられる日がきた——。

その翌朝、不覚にも寝過し、他の二人が洗面を済ませているのに私はまだ夜具にうずまっていた。寝起きを共にしている吉野と千太は、私が枕元に置き忘れておいた奇クを見つけて珍らしそうに眺めていましたが、彼等は素晴らしい挿絵に、感嘆の余り、「宮内さん！どうだい？」

と二人はタミの部屋へ駆込んだ。

私は、彼等がタミの部屋へ奇クを持っていた瞬間——、私は十二分の好奇心を以て窓越しにタミの横顔を盗み見た。

「騒々しいわね、朝から何事なの？」

彼等を男と思つてないタミは、鏡台に向つて化粧して居たが、「此の縛り方、どうだい？」と云った千太の声と同時に、チラリと視線をやったタミの青白い顔に一筋の暗影が走ったのを私は見逃しはしなかった。そして、タミは、彼等から奇クをとりあげると喰い入るように眺めるのだった。

頁をめくる毎に、瞳が異様に光り、青白いがぼーっと桜色に紅潮してくるのが私にもわかった。「そうか、そうだったのか——」私は自分の頬に浮かぶ微笑をこらえきれなかった。

四

日曜日を明日にひかえ、王子製服は活気に

あふれていた。住込の者は、明日は久し振りに家に帰られる、家族に逢える——と云うだけでなんとなく浮々とし、仕事にも何時もより馬力をかけていた。

四国に実家がある私は一日の休みでは帰るすべもない。今迄の休日は美奈子と飛び遊んでいたが「滝野川公園の件」以来、絶交状態なので明日の休みは淋しいぞ——と自分で自分に云い聞かせながらミシンを掃除をしていると、傍に、ぽつんと美奈子が立っていた。

「青山さん、美奈子を許して下さる？」

「……………」

「私が悪かったの、あの夜、わたし……」

「そ、そんな事はないよ！」

「あの、明日……」

美奈子の眸がうるみ、涙がこぼれそうになつていたので私は慌てて沈黙を破った。

「日暮里で待ってるよ」

美奈子の言葉じりを、そのまま私がそう云い続けると、美奈子は嬉し気に一寸会釈して小走りに裁断室に入った。

女工連中の視線を背中中で受け乍ら私は席を離れた。そつとタミの方を横目で眺めたが、矢張り男など眼中にはないと云った態度で型紙を裁断しているのには、取りつく島もなかった。

彼女も山形県から上京しているので、正月と盆以外は家に帰らず休日も部屋に閉籠った

まま過すのが習慣になつていた。

午後五時に終業のベルが鳴り六時になると騒々しい会社も静寂さをとり戻した。

住込女工は日曜日をあてこんで家に帰る

し、私と同室の千太も吉野もいそ／＼と帰つていった。寄宿舎は私とタミだけ居残る形となつた。今迄こんな機会は度々あるわけだったが、私が夜学へ行っているか、或は近所の映画館へ行つていたものだ。

だが今夜は違う。学校は学年末で休暇だし映画館へも行かなかった。私は本宅で夕食を済ませ、映画に行つてくると女中に伝え、逆に自分の部屋へ戻った。

——やがて、食事を済ませたタミは部屋に入ったが、すぐ手拭を持って銭湯に行つてしまった。

電灯はつけていない。窓ガラス越しにそれを見とどけた私は、（今だ！この機会に！）とタミの居間に這り込み、かねて計画していた通り押入を開けた。上の段は、タミの夜具と衣類行李等が置いてあり、下段は時季遅れの既製服を山のように積み重ねてあつた。

私は、その積み重なった服の合間に自分が隠れるような場所を造り、別に一枚のコートを頭から被る用意を整えどほつと一息ついた。（これでいいなあ）と見廻したが、真暗で何も見えない。フスマに部屋が見える程度の小穴をあけタミの帰りを待った。

——やがて、タミが戻つて来た。

ガラス戸が開く音と共に電灯をつけたらしくかねて用意しておいた隙き穴に一条の光が流れてきた。

今迄の無断で他人の部屋へ入ってきたという不安も、べつたり鏡台の前に坐ったタミの姿で吹飛んでしまい、そつと隙き穴に眸をやつた。私の眼に飛込んできたものはタミの見事な上半身だった。着細りというのか、洋服を着ているときは、ほっそりとしているタミだったが、今、眼の前に、こんなポリウムがあると思ひもよらぬ事だった。

顔から顎の下、首筋にまで、丹念に化粧をすましたタミは両手を交互に使つて肉に食い込むような指圧運動が数分続き——皮膚の一面が赤く充血するまで行われた。白い肌に赤色の濃淡ができてきた。後で判ったことだが私が最初にものを摩擦するような音に驚いたが、柔軟体操で自分の上膊部や脚線、或は乳房、腹部等を掌で摩擦している音だったのだ。

突然、タミは立上ると押入に近ずいてきた。私は見つけられたか、と驚いて素早く頭からコートを被り衣服の包の間にかくれたが、それと同時にさつと光線がさし込んできた。身動きも出来ずに息をこらして私の前立ちにだかつたタミのむせかえるような女らしい体臭を今も忘れる事が出来ない。

タミは夜具を取出すらしい。

夜具を敷き終えたタミは、室の電灯を消して青い十ワットのスタンドに切り換えると再び鏡台の前に坐った。期待に固唾をのんで覗く私の目の前で、先ずタオルで猿ぐつわをはめ湯上りで油気のない髪を乱し、シユミーズの右ホックを脱した。

机の抽出から常用しているらしい細帯を取り出し両足首を結び、その余りで胸をグルグル縛った。此処迄は慣れたらしく簡単にいったが、その後が大変だった。

空いている両手を後手にして、胸部を締めた紐の隙間にいれようとすのだった。アクロバットのように頭を曲げ両脚の間に突込み、ごろごろ転り始めるのだ。横倒れになり乍ら鏡に写る自分の異様な姿を横目でにらみ、三疊間の端から端までノタ打ち回るのであった。

最初は自分で暴れる度に帯目が締るらしく「ウウウ、ウウウ、」と私が盗み聞いたあの夜同様の呻めき声をあげるのが、押入れに潜んでいる私の耳にも、その気配がすっかりわかるのだった。

しかし、一人で縛った細帯は動き回ると共にゆるんでくるらしく、彼女はまた改めて自分で縛り直すのだった。

私は、自分の吐息が押入からつつ抜けにタミに聞こえはしないかと心配しながら、息を

こらしていた。

——ふと私は、今迄タミが誰に緊縛され此の秘かな悦虐を楽しんでいたのではないかと云う疑問を感じ、自分で飛び出して緊縛してやりたいという強い誘惑をどうすることも出来なかった。

それからの私と彼女のことは詳しく述べる程、筆の自由を持たないが、とにかく、奇巧の誌上にあるような見事な緊縛が、この駆け出しの私に出来る筈はなかったのは当然のなりゆきではあった。

今から思うと私は、その時は只、縛り役のみで何をしていいか見当もつかないのが実情だった。タミは猿ぐつわの下から、もどかし気に呻めき声をたてていたのを覚えていた。

——このようにしてタミと私は三日に一度の割合で、楽しい緊縛プレイがひそかに続けたのであったが、しかしその真価を未だ味わぬ内に、住込女工に私たち二人の事が露見してしまった。噂はすぐひろまって、社長の耳に達し、私は無理矢理因果をふくめられて王子製服を追出されてしまった。もともと気のすすまない洋服修業ではあったので、私も表面は快く承諾した。

「技術習得したものあり」と社長直筆の製服証書を貰った私は、四国の郷里へ帰るべくタミと美奈子に見送られて、十時三十分発、急行瀬戸号に乗り込んだのだった。

若い私は、その時——タミと社長が、只ならぬ関係であった事等に気がつくはずもなく、タミの心尽しのプレゼントを胸深くしまつて特二の座席に坐っていた。

最後迄——美奈子には優しい言葉を掛けずに私は想い出の東京を去ったのだった。現在、私は自分の故郷で洋服店を経営している。

〔代理部より〕

○KK通信についての御照会が、よくありますが、現在、KK通信の発行は致しておりません。以前発行しておりました分も、只今一部も在庫しておりません。

○吾妻新訳の「被虐の家」も売切になって、目下在庫はございません。御送金にならないで下さい。

○サディズム、マゾヒズムに関する従前の分譲品中、若干在庫のある分が残っておりますから、御希望の方は、サドかマゾが御明記の上、十円切手封入にて御照会下さればお返事いたします。

○雑誌に挟んで照会の回答をしてくれというお申出がありますが、雑誌は第三種又は第五種便にてお送りする都合上、私信を挿入出来ませんので御承知願います。

○売切れ或は品切れの恐れあるものについては代品の御指定をして下されば幸甚です。

(終)

創作

「去^{きよ}日^{じつ}の美^び女^{じよ}」

吉井環

香織^{かおり}はコタツに入り、編みものゝ手を休めて、隣室から呻き声をじつと聴いていた。

「今夜の私はどうしたのかしら、私が私でないみたい」香織は思う。

もう三十分も前からフスマを隔てゝ苦しそうなうなり声がする。始めは時々であったが、この十分は殆んど一息毎にうめいているようだ。

「もう解いてあげようかしら」とフト思う。しかし今夜は、どうしたのか。もっとあのまゝにしておいてみよう。これからどんな声をだすだろうか。そんな興味がしきりにおこってくる。常には感じない、自分自身でも解らない、意地の悪い気持である。頭がしめつけられるような気がする。

うめき声は哀願に変わってきた。

「ねえ、ちつと来ておくれ。聞えないのかい。ねえ、早く！」夫を縛りあげてから、もう二時間にはなるだろう。

「もともと自分で縛ってくれって、私に頼んだのですもの。もう少しそのまゝ辛抱していらっしやい」香織は心の中で云う。そして黙って編みものゝ手を動かしている。

「うゝむ、うゝむ、香織、お願い、解いて、解いておくれ」

「ねえ、ねえ、ちつと来て、そこに居ないの？ 痛いんだよ、解いておくれ、赦して！」

夫の哀願がつどく。

今夜は不思議に心が動かない。もっと何かしてやりたいような気持がしきりにする。

「本当に今夜のわたくしは、どうかしてしまつたのかしら。」夫の性癖が自分にも、のりうつた。と、香織はみぶるいをする。

「猿ぐつわを、はずしておしまひになったのね。うるさいこと」口に出しては云わなかつた。今迄はこんな氣になったことはない。縛る手もコワゴワ、そして夫の縛られた姿が、惨めで目をそむけているのが常であつた。冷たい白けた氣持だつた。夫が早く満足して、

解いてくれ、と云えばいい。一刻も早く彼女の尊敬する夫の正常の姿に帰してやりたかった。「これは私の苦行」香織は本当に、そう思っていた。

でも今夜は違う。夫が苦しめば苦しむ程、妙に心が満足する。

「あんなに苦しがつて、いらっしやるわ」とむしろ滑稽な感じがしてくる。それどころか心の片隅から、云い難い快感が、しのびよるように心をひたしてくるのである。

「どうしたのでしよう？」

指折り数えれば、この数日中に生理日が来る筈だ。「そのためかも知れないわ」彼女は一人で赤くなった。いつも来潮前は気がいらだち気味で落ちつかなかった。ふだんは我ながら消極的な自分が、その数日だけは何かに駆りたてられる気持になる。時とすると目の前の蟻をいきなりつぶしてみたりする。今夜はそれがひどい。夕刻、夫の帰りをまつ夕化粧の時、急に自分の髪の毛を鉄でジヨキジヨキと切ってしまいたくなって、怖しくなった。こんなことは、これまで一度も感じたことはない。「あゝ、きっとそのためだ」と香織は再び思う。

でも来潮近くに、夫から彼女の所謂「私の苦行」を命ぜられて、夫を括りあげねばならなかったことも幾度もある。しかし今夜のように惨酷な気持になったことは、なかったといっている。

「何でもいゝわ、今夜は徹底的にお仕置をしてあげよう。私を寂しからせ、私にこんなみじめな苦行を要求する罰だわ」

今日は何の雑作もなく、そう思えるのだ。

「香織！ ゆるしておくれ、もう解いておくれ、痛いんだよ、苦しんだ、聞えないのかい、ちよつとこゝへ来ておくれ。うゝむ……」フスマ越しの声は悲鳴に近い。

「今日は特別に、きつく縛ったのですもの。痛いかも知れないわ、ちよつと見てきてやりましょう。」彼女はコタツから出て、ゆっく

り立ちあがった。その音を聞きつけたらしく、夫は「ねえ、早く早く」とわめいている。

一瞬彼女の頭の中に、夫の縛られた、みじめな姿がひらめいた。

美しい眉をしかめた。それを振りはらうようにフスマを開けて寝室へ入っていった。

夫は、うつぶせに括りあげられて転がっていた。身うごきも出来ないらしく、彼女が縛り終えた時のまゝの姿勢で悶えている。寒さしのぎに背中にかけてやった丹前も、はらいのけもせず、そのまゝかゝっている。

背中に重ねて括り合せた手首が、やゝ紫色になり、二重の首縄が、のどに喰い入っている。両足首を重ね、後手に連結し、その縄を前から首にかけて、ひきしぼってある。従って夫は足首と手首とが殆んどくっつきそうに弓なりに布団の上にうつぶせに転がっているわけだ。

足首を伸そうとすれば手首が下に引かれて、手首と首とに耐え難い痛みを覚えるらしい。せめて転がろうともがいても、余り弓なりにされているので何とも自由がきかない。繊弱な香織にとって、これは随分力のいる仕事だった。手首は喰い込んだ麻縄のために見るからに痛そうだ。猿ぐつわのつめものは、そこに吐き出され、口鼻をおさえていた手ぬぐいは、はずれて首の廻りにずり落ちていく。女のように長く黒い髪の毛が目の上にかぶさり、顔いっぱい油汗が浮んでいる。

香織はゆっくりと夫の枕もとに座った。そして自分のハンケチで夫の油汗を丁寧に優しくふいてやった。

「いかに、お苦しそうですね。もう解いて欲しいとおっしゃいますの」夫は妻の姿を見て、やっと少し安心したものか弱々しい微笑さえうかべて

「うん、もう骨身にこたえたよ、香織のお仕置はきびしいね。もうゆるして、これ以上つゞけられたら手が動かなくなってしまう」

終りの方は泣声だった。

香織は夫の顔をじっと見た。もういっぱい油汗がういていた。こんなに卑屈な哀願をしていても夫の顔は美しい。細面で色白で面長で目の切れが長い。女を思わせ少年を思わせる端麗な顔だ。たしかにその表情は苦痛にゆがんでいるけれど、それが不思議に醜くない。却ってエロティックな魅力を持つようにさえ、今夜の香織には感じられる。

「ねえ、わたくしもあなたに、お話がありますのよ、きいて下さる？」いつも無口で自分から話出すことのすくない香織であるだけに夫はびっくりしたようだった。

「聴くよ、聴くからさきに縄を解いて、ね」

「そうねえ、痛そうですわ、でもね、あなたは今日の私のお仕置を受けていらっしやるのよ。私の囚人だわ、囚人はわがまなことを云わないの。これから私のいうことをよくお聴きになるのよ。そして私が満足出来るような御返事なら、そのときお仕置をゆるしてさしあげますわ」

夫はますますびっくりした。こんなことを云う香織を想像出来なかったからである。

「香織、香織、今夜は変だね。僕は苦しいんだよ。手首がしびれて、ちぎれそうなんだ。頼むよ、話は何でも聴くから、さきに解いて、お願いだから、ゆるしておくれ、縄を解いて！」

彼女の胸はこの時突然熱くなった。

「お黙りになって！ 私の云うことをきくの、何です、誰が猿ぐつわをはずしていゝと云いましたの。これだけでも、まだゆるしてあげられませんか。」

香織は唾液をいっぱい吸っている布片をとって、齒を喰いしぼる

夫の口を無理にこじあけて、火箸を使ってそれを押しこみ、手ぬぐいでしっかり口鼻を掩った。

夫は驚天した。絶えず呻いた。彼女は黙ってその夫の姿を見下していた。美しい眼がもえるようだった。そして身をかゞめて、夫の手首に喰いこんだ縄をゆるめにかゝった。しかし一度締った縄は仲々簡単にゆるみそうもない。ひっぱったり、ねじったり、遂には縄に綺麗な白い齒をかけてひっぱった。縄はいくらかゆるんだ。夫の指は漸く屈伸し始めた。しびれを直しているのだろう。夫が身動きをした。同時に足首と手首をつなぐ縄が、ぐっとひっぱられて再び手首をしまった。彼女はまた齒をかけてゆるめにかゝった。彼女の柔い頬に冷たい夫の手が触った。同時に夫の指が彼女の頬を、ぎゅっとつねった。かなり痛かった。これが夫が彼女に対して出来る唯一の復讐だった。

彼女は不思議にかつとなった。この気持も始めての経験だった。「何をなさるの！ ゆるめてさしあげてるじやあないの。そんなことなさるなら、もう赦してあげません。いつまでもそうしていらっしやい、私が解いてあげなければ永久にあなたは、このまゝでいなければなりませんのよ。まだお仕置が足りないのね。」

彼女立ちあがって夫の洋服タンスから、革バンドを持ち出して来た。いつもの嫌悪感と恐怖感が消えていた。彼女は夫からバンドで打つように命ぜられたことも二度や三度ではなかった。でもいつも本当に嫌だった。そんなことをしなければならぬ自分が、みじめで可哀そうだった。まして夫を打つことに興味を感じたことなどは一度もなかった。

夫を縛ることがまず「第一の苦行」そして鞭打ちが更に大きな「第二の苦行」彼女は心の底から、こう思っていた。彼女のこれらの行為に対する感情はこれ以外にはなかった。おどおどとふるえ、眼に涙をいっぴいたためて、顔をそむけて夫の言葉に従った。だ

から自分で夫を鞭打つためにバンドを持ち出すなどということは、この日まで香織自身にさえ想像も出来ないことだった。「気が狂うのではないか」頭のすみに、こんな思いが、ひらめいた。でもそれは一瞬にすぎない。身のうちの突っかかるような感情のいらだちが彼女を駆り立てた。

「徹底的にお仕置をおうけになるのよ、今日は充分御満足なさるまでやって差上げるわ、泣くならお泣きなさい。お泣きになっても、香織の気がすむまでは、ゆるしてあげません。だいたい、あなたは学校からお帰りになるとすぐ御自分の書齋に閉じこもっておしまいになる。お食事がすむと又すぐ御勉強、お食事の時だって、うるさそうにしている、私に何のお話もきかせて下さらない。私は一日中ひとりぼっち、結婚生活って、もっと楽しいものかと思っていまして、その上あなたが私に要求なさることは私には苦痛よ、縛らせたり、叩かせたり、汚い布片れを口に入れさせたり……。死ぬ程いやなことを私にさせていらっしやるのよ。おわかりになっっている？こんなことをさせられる位なら、むしろ私があなたから、そうされる方がまだ楽な位ですわ、あなたの縛られている恰好——本当にじめ！自身の夫をこんな罪人みたいな姿にさせ、それを見ていなければならぬなんて妻の悲劇、それにだんだんひどくなる。真赤な単衣をこしらえろなんて、何だと思っただらお仕置の時に御自分がお着になる着物ですって、それに私まで妙な氣になっってきたのよ、あなたの御要求を死ぬ程嫌な思いをして、しているうちに私の手は、だんだん上手になる。もっとももっとも、あなたに叱られ叱られやっているうちに……。あなたは大学の助教授で立派な学者だと思っていました。まさかあなたがこんな癖を持ちていらっしやったなんて——本当にとんでもないところにお嫁にきてしまったものだとは何度溜息が出たかわかりませんわ、でも今夜のわたくしは少し変、自分でもそう思うの、いつもとちがいます。何だか徹

底的にあなたを折檻したくなっていますのよ。それに私のよくしやべること！本当に変ね。解いてくれ、解いてくれと何べんおっしゃるの。そんなに解いて欲しくて泣き声を出す位だったら、始めから縛らせなければよしいのよ。余り勝手ですわ、こんなことなされてあなたは御満足かも知れないけれど、あなたとはちがう私の身にもなったださい。私をさびしがらせ、私に嫌な要求をする罰として今夜は泣き声を出す程のお仕置を受けるのよ。手加減なんかしません。さぞ御満足なことでしょうね。大学の助教授が、後手ぐつわ足首まで一つに縛られて、妻にバンドで叩かれて泣いているこの姿、さあ、これから始めますわ、何でしょう。まだ打ちもしない前からその汗、さすがのあなたもお苦しいと見えるわ。今にもっと苦しくなるのよ、手首もゆるめてあげるのではなかった。さあお泣きなさい。たのしみにしていますわ。」

彼女は、かきくどくように長々としゃべると、手に握った革バンドで力一杯夫の身体に振りおろした。ビシ——！見る間に赤いみみずばれが生じ、ついで第二撃！夫はひいひいと悶え廻る。それを見ると益々狂い立つように香織の白い手に握られた革鞭が、ところきらず夫の身体を打ちすえた。夫はポロポロと涙を流しながら、うわう、うわうときこえる押しひしがれた呻き声を猿ぐつわの下からもらす、悶えると足首がうごく。足首をのばせば後手の手首がさがり、手首がさがれば首縄がぐいぐいしまってくる。

香織の頬は桜色になり、目をみはって、またたきもせず狂人のように鞭をふるう。胸がもえるようだった。身体全体が自分以外の何者かに、あやつられて無意識のうちに鞭が振るわれているとしか思えない。

やめようとしてもやめられない。夫の泣き声が彼女を刺戟する。泣き声はだんだん弱まり、もがきかたもすくなくなり、夫は目に見えて弱って来た。

それでも、もう一つと、ピシーリと思い切り夫の腰から尻にかけて鞭をふりおろした。

彼女は立ち上り、夫を呆然と見ていた。ぐったりと、今はもう何の気力もなくのびきって、もがうこともしなかった。

香織は急におそろしくなった。夫が死んだのじやないかしら、猿ぐつわをちぎりのけ、顔をのぞきこむようにした。ぐったりと目をつぶっていたが、鼻のあたりが、呼吸しているのがわかる。

足首の縄をといた。手首の縄をはずし胸縄、首縄を除いた。乱れた真赤な単衣の裾を直した。横たおしに転がった夫は、縄を解かれても、後に廻った手を自分で前に廻す力もなくなっていた。

香織は、やさしく手を持ちそえて前に廻してやった。腕をうごかすだけで痛そうだった。

彼女は不安になった。夫はおこっているのではないかしら、余りひどいことをしたものだ。そして夫の身体に布団をかけた。不思議な感情であった。生れて初めて感ずる感情だった。夫がいとほしくてたまらなかった。夫が始めて本当に自分のものになったような気がした。

鞭打った腰から尻、ももから足にかけて、やさしく撫でた。夫は何も云わない。まだ目をあけない。そしてたゞされるまゝにぐったりしている。

田中香織が、夫、田中伊治郎と結婚したのは三年前、つまり彼女が、やっと二十歳、夫が三十三歳の時であった。

早くから両親を失った彼女は、叔父夫婦に我が子として育てられた。

彼女の叔父は某大学の経済学部で講座を持つ教授であった。教授にありがちな、固苦しいペダンティックな氣質を、この叔父は持たないわけではなかったが、概して云えば学者らしい世間知らずの、

むしろお人好しと云っていい人柄だった。叔母は派手好きで、見るからにはなやかな人であった。叔父の長い学生生活を支えたものは、疑いもなく、叔母が生家から持ってきた持参金であった。それは莫大と形容する程のものではないにしろ、兎に角、叔父の教授という地位は、この金に負うていることは誰も疑わなかったのだ。この二人には子供がなかった。香織は、本当に一粒種のように大切に育てられた。彼女には、全く記憶がないのではあるけれど、人道的な情熱に燃えてはいたが貧しい、宣教師であったという実父母のもとで育てられるより、すくなくとも経済的には幸福であったと云わなくてはなるまい。

叔父の家は、教授の家庭らしい偽善的な面もないわけではなかったが、まず堅実な、真面目な雰囲気満ちていた。

そして香織は美貌だった。叔母は決して美しい女ではなかった。白熊のように——卒直に表現すれば——肥って、フチ無しの眼鏡をかけ、化粧の濃い、着るものも派手な山の手夫人の一人だったが、香織の実母は——つまりこの叔母の姉——は、細面の楚々たる美人であつたという。実際、香織が秘蔵している実母の写真によれば、着ているものは粗末だが、それは不思議に忘れ難い印象をのこす、やゝ古風な「去日の美女」とも云いたい趣を持つ婦人であつたことがわかる。「去日の美女」とは古都北京の表現であるが、香織は、実母の写真を見るたびにこの言葉を思いだす。

二歳の時に相ついで父母を失ってから、彼女は叔父夫婦に実子同様に育てられた。小学校、中学校とすすむうちに、彼女は人の目を奪う美少女となつていった。子供のない夫婦とは云え赤児の時から育てた叔父夫婦にとって、この美少女の姪は、目の中に入れても痛くない程の寵愛のまゝであつた。殊に派手好きの叔母は、彼女に思うまゝに着飾らせては、知人にみせびらかして喜んでいた。それは丁度、美しい人形を友達に見せびらかす女の子の感情にも似ていた。

十七、十八と思春期から、一人前の女性として成熟してくるに従って、彼女の美しさは、水ぎわ立って来た。母親似の小づくりな、楚々とした骨細の身体つきであった。色が白く目鼻立ちの線が細く——かといって彼女の顔には、ボヤけた線が一つもなかった。目も鼻も唇も、絹糸のように細いが、しかしピーンと糸を張ったように冴えていて、しかも頬から頤にかけては、ふっくらとした線の柔かさが細面の娘にあり勝ちな貪相なギスギスした感じを見事にぬぐいつついる。

やゝ大きめの、少し古風な「鈴を張ったような」眼で、じっと見つめるくせがある。この眼は情感がみなぎっていて、決して冷くはなかった。何かすさまじい魅力を持つ顔だちであったが、全体の印象としては、沈んで、博物館のガラス戸の中におさまる、あの貞観時代といわれる藤原後期の観音像を想起させた。

昭和に生れ、戦後に青春を迎えた、この美少女も、彼女の母親と同じく、まさしく「去日の美女」であった。筆者は余りくどくどと、この娘の容貌について述べすぎたかも知れない。しかしこの敘述は、彼女の外貌だけでなく、それは、そのまゝそっくり彼女の性質にあてはまる。

彼女はおっとりとして、決してこまかく動き廻ることはなかった。返事をするのにも、ゆっくり考えて答を噛みしめるように、静かに答えた。彼女自身は「香織」と云う古風な、しかも、あてやかな名を、ひどく恥しがっていたけれども、この名は本当によく彼女の印象を表現している。古い湿った、かつては、はなやかだった、今は淡くくすんで、古い香のする織物——それはそのまゝ彼女だ。日本の古い琴うたのように彼女は戦後の蕪雑な世の中に生きていたのだった。

読者は、もう退屈されたかも知れない。しかしもう一言つけ加えさせて欲しい。それは彼女の声についてだ。彼女は、しっとり落ち

ついた、しかも限りなく透明な声を持っていた。ソプラノで透明な声は、大抵の場合金属性の耳を刺す硬さを感じさすのだが、彼女のそれは、透明さとともに高音部の、云いようのないやわらかさとなごやかさを持っているものだった。彼女は歌はそれ程上手だとは思えなかったが、彼女の声の魅力を——彼女の容貌を除いても——すべての人は否定することはなかった。

筆者は、彼女の叔父吉井教授のもとで、始めて彼女に会った日のことを忘れない。それは筆者の生涯に於ても一度あるかなしかのセンセーショナルな出来事だった。若い学生の筆者が彼女の魅力に魂を奪われたとしても、彼女を知る人ならば、不思議とは思わないだろう。それは教授のもとに出入りするすべての学生——筆者の親友田中伊治郎即ち現在の香織の夫をふくめて——の憧憬の的であった。当然激しい競争が起った。香織自身は無邪気に、すべて平等につきあっているように見えたが、学生達は、誰が彼女を獲得するか、それはスポーツのように壮快な、しかし苦しい期待であった。

吉井教授は、多くの若い学生をあずかる教育者としては、不思議な程、彼女に対して、封建的な態度でのぞんだ。教授には、又別に深い思慮があったのかも知れない。しかし結果としては、香織と学生たちとの交渉には、かなり気をつかっていたし、又香織にも相当の制限を加えて、所謂アブレーゲールらしい開放的な奔放な行動は、とりたくても出来ない環境をつくっていた。のみならず、彼は香織に経済的に一人立ち出来る職能を与えようとはしなかった。教授の一人娘として大学に進ませたり、医師や或はもつとくだけでデイナー、又は一個の芸術家——もつとも彼女は、そのセンスは免に角、手先はそれ程器用だとは思えなかったが——として世の中に立ってゆける教育を与えなかった。ミッシヨンスクールでカトリックの尼さんから教育を受けただけで、それ以上は、家で嫁入りの仕度をしている一時代前の有福な娘の生活をしていた。

さすがに彼女はダンスはしたが、男友達とダンスホールで踊ると云うことは殆どなかった。多くは教授宅のダンスパーティーで、あからさまに云えば「叔父叔母の監視のもと」でつましやかに、行儀正しく踊るのが関の山であった。

それでも若い男性と相擁して踊る時は、嬉しそうで、白い頬が生き生きと赤みがさし、眼がよろこびに輝いていた。このダンスパーティーに対する学生たちの期待がどれ程大きく、又楽しいものであったかは御想像にまかせる。筆者たちは、このダンスパーティーに集る若者以外から、この美しい少女を獲得するものが現れるとは、全く信じていなかったのだから。

香織はこのように、古風な箱入り娘の生活に対して特に反抗的な気分を持つてはいなかったようだ。こんなところに彼女の性質がよく現われている。彼女は与えられた運命を、つましく甘受し、静かに微笑をうかべて耐えてゆく種類の女だったのだ。その意味でも彼女は、間違いなく「去日の美女」であった。

彼女の本当に積極的に情熱を持っていたのは、「音楽」であった。音楽と云っても、彼女のピアノは決して素人としても、お嬢さん芸としても上手なものではなかった。むしろ酷評すれば、ピアノをならったために、お玉杓子が読めるようになった、という程度である。であるから彼女は人に自分のピアノを弾いてきかせようとは決してしなかった。人前でピアノを弾かされることは、彼女には苦痛であった。

その代り人の演奏をしたものを聴くことには異常な情熱を持っているように見えた。従って毎シーズンの主要な音楽会は殆ど欠かしたことはなかった。又自宅には、経済力にまかせて、千を超える古典音楽のレコードを持っていた。そして一日のうちに彼女の書齋から、それらのレコードの音がひびかぬ日はなかった。読書は音楽や美術の本以外には、余りしていなかった。書棚に並ぶ本は、音楽や

美術関係の（それも解説書や啓蒙書程度のものでむっかしい専門的なものは余りなかった）ものか、内外の詩集に限られていた。ドストエフスキーとかスタンダールとかは、その訳本すらも読んでいるのを見たことはなかった。

それ程熱心な鑑賞力がどの程度のものであったかも、よくわからない。それは彼女は人前では自分の意見を積極的に吐くことはなかったからである。そして他人の云うことは、どんなことでも、じつと耳をすまし、静かにうなずき乍らよく聴いた。だから学生たちは余計に宇頂天になったが、時には彼女の、はっきりとした意見を聞けないことに、物の足りなさや寂しさを感じたことも、しばしばであった。

でも筆者は忘れない。彼女のレコードを聴き入っている時の無我の美しさ程、心を打つものがほかにあるであろうか。古い音楽——彼女は、モーツァルトを好んでいたが——に聴き入る彼女は、音楽そのものの化身のようにさえ思えたのである。

又香織は博物館が好きだった。ひまさえあれば上野や奈良の国立博物館に出かけて、仏像や陶器や古代の書画や衣類の中で時間を消した。

学生たちは、それを知ってそつと博物館の中で彼女をまちうけ、話を交わすのを楽しみにした。そんな時でも、彼女は、ただ静かに微笑するばかりで今見ていた美術品についての、自分の感嘆も批評も表らしはしなかった。学生たちは、時に彼女の頭脳を疑った。感性だけあって知性を置き忘れてきた女性なのさと彼女を評したりしたが、乾隆の青磁の壺の前に、我れを忘れて一時間でも二時間でも立ちつくす、彼女には、半ば讃嘆し、半ば呆れた。

彼女はその青磁のように深く、青磁のように静かに、何事も受け入れるだけで、自ら吐き出そうとはしなかった。その性質は、彼女を、更に古風に、更に神秘的に見せた。口数のすくない、めったに

洋装をしない彼女は、学生たちにとって、ますます「去日の美女」であった。

香織が現在の夫と結婚したことも、そういった成りゆきから、当然予想されたことであつた。田中は中学生時代から私と親友であつたが、所謂秀才型の男だつた。名古屋の豪商の次男でどちらかと云えばこれも口数の少ない、いつでもたゞ黙つて勉強している、云わば悪童連中には甚だ面白味のない奴と評されていた。

同郷であつた関係で筆者は戦争中も同じ部隊の経理将校としてすごしたので、この男のことは、よく知っているつもりでいる。色の白い優さ男で、髪の毛がひどく黒々と豊かなのが特徴で、背が高く肩が張つて、全身如何にも良家の坊っちゃんらしい風格を持っていた。

事実、彼は、相当以上の世間知らずで、学問の方では、我々よりも彼の敵ではなかつたが、所謂社会学の方ときたら、彼は全く零といつても過言ではないであらう。

その証拠に、終戦後我々は衛生部隊——兵站病院——の経理部将校として仏印ブノンペンですごしたが、同じ部隊の軍医や衛生士官は、終戦というシヨックと前途の不安もあつて、例外なしに、夜な夜な現地人の私娼窟に出掛けては、不潔な、そして猥奇的な放蕩に酔いしれた。それでなくても悩ましい南国の夜は、紫水晶のように澄みわたつた夜気が遊び心を呼ぶ。不安と絶望と虚脱と憤怒と倦怠と諦念と、さまざまな複雑な想念をまじえて、強い体臭の原始的な女たちを一瞬の陶酔の儀として求めた。谷底のように暗い窪地にインドネシア人や混血児の私娼窟がある。近づくとも真暗の中にポツンとベランダの軒につるしたランプの光が浮ぶ。なまあたゝかい夜気が胸に吹きとほつて、思わずその灯を見つめ歩みをとめて、深い呼吸を一つする。そして暗い足もとを踏みしめるように、ゆっくりと、

その光に吸いよせられてゆく。

そこにある歓楽は、現在の我々の世界とは全くちがつた、アラデインのランプによって現出した世界のそれのようだ。それは決して華やかに豪華だと言ふ意味ではない。人間的な感情の全くない奇怪な、純粹に動物的な刹那の歓びにすぎないのだ。南国のデカダンな夜気が、ふと、気まぐれに我々に見せてくれた幻想の世界だつたかも知れない。道徳も情緒も悔恨も想像も、そこには何一つありはしなかつた。たゞあるのは情欲と排泄だけ。言つて見れば、これは徹底して不道徳な無責任な交渉であつた。徹底して原始的な、最低の接触であつた。いや道徳以前の原始の行為だつた。しかもインドシナの星のように純粹な歓楽であつたとも云える。

どの男も、どの男も、殆ど例外なくこの泥沼の中に這い廻つていた。夜明けに激しい水道栓から放出する水音は、殆ど絶え間なくつづいた。しかし田中だけは、この世界に全く足を踏み入れなかつた。すくなくとも、となりのベットにいた筆者が、彼がそのような破廉恥な行為を、——いや人並に行為を行つた形跡を認めたことは一度もない。筆者ばかりでなく、同じ部隊の将校たちも、皆を首をヒネつて、むしろ不思議がつた。そうして一層の注意を彼に向け、自分たちの仲間である証拠を掴もうと努力さえした。が結果は彼らの負けであつたようである。

田中は色の白い氣の弱そうな顔で、しずかにサロンでフランス軍が残していった小説などを読んでゐるばかりだつた。

中には、そうした彼に、

「田中さんは本当に童貞なんですか。よく我慢が出来ますねえ」とアケスケにこう声をかけて感心して見せる男も居た。そのように問に對し、彼は人の好きそうな、みるからに弱々しい表情で「僕は勇氣がないのでね。いくじなしなんですよ」

と案外に悪びれず、静かに答えた。筆者はその横顔を、つくづく

見ながら、もしかしたら、この男は不能なのではないかと真面目に想像したことがある。

田中自身は、無口で用のないことは余りしやべらなかつたが、愛嬌のない男ではなかつた。問われれば丁寧な、しかも慇懃に、はっきりと答えるので、同僚の将校仲間では評判が良かった。それに持ち前の気の弱さから、相手の感情を極度に尊重した、ものゝいい方であつたからである。

田中は親友の筆者に対しては、かなり打ちあけて、ものを言つた。時には却つて告白癖があるのではないかと疑うくらい、とめどもなく、しかし低い声で話した。それは彼と筆者と二人きりの場合に限つた。筆者は、田中の人格をかなり信用している。この男は頭のいい、しかし気の弱い——悪いことも出来ぬ程気の弱い——インテリにすぎない。

彼は戦争末期に一時、我々とわかれて、ビルマに派遣される野戦病院に配属になって、あの惨憺たるインパール作戦撤退後の、地獄のような悪戦苦闘を身をもって体験してゐた。ポツリポツリ、その当時のことを彼は筆者に洩らしたが、この敗退作戦は、彼に自らと人間と国家に対する骨に沁みるような不信をうえつけたらしい。殊に「自分」に対して最も人間的な信頼を失つてしまつてゐた。しかもそれでも彼は放蕩の中にその苦しみを忘れるなどというこの出来ぬいくじなしであつた。でも筆者は知つてゐる。終戦後帰国までの六ヶ月間彼はひそかに麻薬を用いてゐたことを。

衛生部隊の終戦後の混乱は、かなりのこの種の注射液の処理に曖昧な点があつたことは否めない。彼は中毒者とはならなかつたが、人目をしのいで、時々この薬物を自らの腕へ注射してゐたことは、私は間違のない事実だと思つてゐる。彼にして見れば、やり場のない自分と人間への不信を不潔な男女関係にまぎらわすよりは、この方法をとつたのであろう。私はこの事実を擲んで、彼の心の一面を

のぞいた氣になつた。そしてそれとなく、麻薬中毒への警戒を彼にほのめかしてゐた。彼はじつと私を顔を見つめ、そして黙つてゐた。

幸なことに彼はモルフィニスムスにはならなかつた。それというのは終戦の次の時の六月、ともに内地に復員し、再び吉井教授の教室に歸つた時は、この習慣を全く捨てゝいたことで明らかである。教室に歸つてから彼は猛然と勉強を始めた。それはいさゝか氣狂じみて、何もかも、勉強することによつて一切を忘れてしまおうとするかのように見えた。

彼の顔には、云い難い疲労と絶望とがあつた。やつと三十才に達せんとしてゐた当時の彼を支配してゐた觀念は、結婚後彼が私に洩らしたところによれば、「勉強でもしていなければ、何をしていゝか解らなかつた」ということである。

副手、助手、年をへるに従ひ、教室に於ける彼の重量は増してゐた。そして三十二才の時、助教授に抜擢されたのは、この大学としては異例のことであつた。怒らず怠らず、威張らず、彼への同僚の人は悪くなかつた。むしろ不思議な程、彼への嫉視羨望は少なかつた。これは一つは彼の温厚篤実な人柄にもよるが、もっと多くは、触れれば壊れそうな彼の繊細さ、はかなさに人の心を打つたからだと思ふ。

「あれで、學問上は免に角、政治的に助教授がつとまるかしら」
一様に皆、こうした危懼を抱いた。この危懼が、彼をあらゆる嫉妬から、まぬがれさせたいといつても嘘にはなるまい。

同じことは彼と香織との結婚についても言えた。

彼は当然、吉井教授の私宅は、公私の用事で出入りした。恐らくは、あらゆる教室員や学生のうち、もつとも彼女と顔を合せる機会を多く持った人間であつたろう。それと同時に、彼は、誰よりも香織に無関心な男であつたと云える。田中も男である以上、香織の美

しさに對して、心を惹かれなかつたとは想像出来ない。現に筆者に「香織さんは美しいね。僕が今まで見た女性のうち、一番美しい」と、卒直に讃嘆をこめて洩らしたことがある。とは言え、彼が香織を積極的に我がものにしようと思ひ努力したとは思えない。すくなくとも、その努力が誰よりも最小であつた。淡々と話し、淡々と教授宅に出入し、ひたすら學問の世界に立てこもつていた。

復員して四年目の末に教授自身の口から香織と彼との婚約が發表されたのであつたが、香織をとりまく人には、半ばこれを予期し、半ば意外に思つた。助教授という先生の學問の遺髪をつぐべき位置は、教授の娘を押しつけられるに恰好な條件を持つことは誰にも納得出来る。その意味からは、これは意外なことではない。しかし個人的に香織と田中とが、どの程度氣脈を通じていたかについては、大概の人々は殆ど推察しかねた。もっと熱心に、もっと香織の心に立ちいつている男たちが、他に多くあるように思へた。結局は、教授の意向で、香織が——持ち前の消極さで——田中をあてがわれたのだと、いうことに皆の意見が一致した。

田中自身この婚約を特に喜んでゐる風ではなかつた。むしろ、その責任の重さに圧迫を感じてゐるようであつた。

「僕は、うっかり死ねなくなつてしまつたよ。」彼は、複雑な苦笑を浮べて、筆者にボツリと囁いた。

それから間もなく、この「前途有為な」少壯学者と類稀な「美少女」——この時にも香織の印象は「美少女」以外にはなかつたが——その盛大な結婚式が行われ、一週間の伊豆への新婚旅行のち、四谷の愛住町に新居を持った。人々はこの夫婦に對し祝福の言葉の代りに、そして羨望の言葉の代りに——或はそれらをこめて——こう云つた。

「白い小さい錠剤のように、はかない夫婦。この荒っぽい世の中を、あの二人がうまく乗り切つてゆけるものかしら」と。

それから以後の新婚生活の詳細について、筆者は詳述する資料を持たない。

冒頭のある記念すべき出来事については、後に田中が親友の私になした告白の内容によつて、お伝えしたのである。

しかし結婚以來、この二人の夫婦生活は失敗の連続であつたようだ。あの告白に附随した彼の言葉によつて、その間の消息をお話しよう。

第一に二人は普通の若い男女が天下晴れて夫婦生活を味うという意味あいからは、余りにも神経質すぎデリケートすぎたようである。妻をリードすべき田中の方に、より大きな責任があつたわけであるが、——全く想像出来ぬ事柄であるが、彼は本当に知らなかつたという。冗談を云つてはいけない、と、読者は怒られるであらう。筆者も始めて聴いた時には、余り馬鹿らしくて本当とは思へなかつた。

こんな有様であるので、田中自身は免に角香織がこの生活に満足してゐたとは思えない。むしろ、夫に對して精神的に愛情は感じてゐる、世界が一つになる愛の陶醉は、未知の世界であつたに違いない。

田中についても同様で、元來が、そのような方面よりも、勉強の方が好きな男だから、香織の愛しさには疑問がなくてもつい知的な象牙の塔内の楽しみに、より多くの興味を惹かれ、家庭はさみしくなつたのであらう。

このような田中は、しかし一つの妄想を持つてゐた。甚しい虚脱状態にあつて射し始めた麻薬の陶醉の幻想中に現れたのだ。これは冒頭の夜の出来事の告白に次いで筆者に洩らした重大な事項である。

田中には五つちがいの姉が居て、母親代りに彼の面倒を見てくれ

た。彼の生家は二十数代もつづいた地方の豪家で、白壁の塀を立てまわした広大な古い家に住んでいた。

筆者も、しばしばこの家を訪ねたが、みるからに古い大きな家であった。もう何年も使わない、日の光も射さないガラシとした部屋がいくつもあった。そのような部屋は、シーンとしてホコリ臭く、置き捨てられた長持や頑丈な鉄板を貼った古めかしい簞笥などが、奇妙な圧迫感を与えた。時雨が降る暗い夜など、この古い家具が生きもののように気味悪かった。高い天井の上から、この家に住む家霊の、ぼそぼそとつぶやく声が、どこから洩れてくるようであった。

勝気な姉は、弱々しく優しい彼を、そのような部屋につれこんでは、兵児帯で後手に括ったり、猿ぐつわを嵌めて、つねたりしていじめた。大人しい彼は、そのような姉の折檻に対しても猿ぐつわの下で、女のように細く長いまつげの目をして、じっと苦痛にたえていた。

このような姉弟の遊戯は人知れず、ほぼ五年程つづいたという。この期間の長さは、驚くに足るものがあるが、その間一度も人に知られたことがないとは、又想像しにくいことである。しかし田中の言に従うことにしよう。

この姉に対して彼は一度も反抗したことはなかった。どんなにされても、ただ云うなりに折檻をうけていた。そして田中自身は今でも、この姉を、もっとも懐しい人に思っているという。

支配者の姉は、彼が十五才の時、急性肺炎で五日ばかりであっけなく死んでしまった。この遊戯もそれ切り、姉の死とともに行われなくなった。そして彼は、それについての興味と、その気憶すら失っていった。

その間に彼は成人になり戦争に駆り立てられた。そしてインドシナの終戦後の一夜、麻薬陶酔の幻想の中に、突

然、目の醒めるような鮮烈さで、この折檻の時の甘い思い出を肉体的に感覚した。どう云う心理の作用か、それは田中自身にも解らない。多分、女性への憧憬が、抑圧された性の呻吟が、惨酷でしかも慕わしい姉の折檻の姿をかりて、このデリケートな青年の心によりみがえったものであろう。

それ以後注射のたびに、この思出と陶酔とは彼の心を水のように浸していった。

復員がせまる頃彼の心は、これ以外にはなくなった。彼は必死の力をふりしぼって、麻薬の誘惑から脱け出し、同時にこの奇怪な幻想から逃避せんとした。そして死にも狂いの勉強は、その知的の興味によって、この目的を達するのに大きな役割をした。

彼が香織を——この纖弱な「美少女」を——男まさりの姉の姿と錯覚して、思わず折檻を要求したのは、結婚後一年半経った頃、かりそめの胃痙病で、来診の医師に、はからずもモルヒン・アトロピンの注射を受けた夜のことであった。

この要求に対して、香織は、殆ど驚天した。執拗な要求と、地団太を踏む、もどかしさの表現が、夫の口から洩れても、香織はたゞおろおろとするばかりであった。が気が狂ったのではないか、香織の可憐な心は、怖れに戦いた。結局、彼女は夫の要求に服した。おそろおそろ目に涙をいっばいためて、夫の手首を後に括り夫の口を猿ぐつわでふさいだ。猿ぐつわなど、どうはめるものか、彼女にわかる筈もなかった。夫の狂ったような懇願によって、辛くも恰好だけがついた。翌朝、彼女の夫は、彼女に、身も世もなく、昨夜の悪夢のような狂態を詫びた。田中自身、身をひきちぎりたい自己厭悪におそわれた。三日間はロクロク食事も出来なかった。

しかし、この突発的な、やみ難い要求は、その後にも起った、今度は、麻薬でなしに、同僚の転任の送別会で飲んだ少量のアルコール

ルの作用によって誘発された。

香織は、全身情けなさに溢れて、彼にこういった。

「私では、いけません？ 私を縛ってください。あなたをこんなことをするより、私がそれを受けた方が、どんなによいか……」

この哀願は、夫の激しい要求に押しつぶされた。彼女は、涙をぼろ／＼流しながら、夫の自由をうばっていった。しかも悪魔は猶意地悪い陶酔を田中に与えてニヤリと笑った。即ち、田中は美しく弱々しい香織が、全身に恥辱の思いをみなぎらせて、おどおどしながら自分を括ることに、目のくらむような陶酔を覚え始めたのだ。折檻を受けているのは、田中自身であり、香織でもあった。

香織がこのような夫の要求に対し、実家に逃げもどりもせず、又教授に告げもしなかったのは、むしろ不思議だ。香織の持ち前の運命に忍従する性質が、この苦役に堪えたのであろうか。又これが香織のマソヒズムの現れであつたのであろうか。ともあれ、このことによって、いく度か危機にみまわれながら、二人の結婚生活は、まがりなりにもつづいていった。

「でも、香織は、自分の意識とは反対に、僕を縛ることが、一回毎に巧妙になっていったのだよ」田中はそう告白した。

その頃、筆者は時々街で香織にあつた。相変らず水際立った、しかしすこし寂しげな美しさだった。人妻というより、むしろまだ美少女の感じが抜け切っていなかった。いつも和服をきて、冬は好んで真白なマスクをかけ、うつむきかげんに静かに街を歩いていた。マスクの上の目が筆者の心に泌みいるように可憐でさびしげであつた。

同じような夫の『発作』が、その後も幾度かつづいた。香織は、それでも、やはりだんだん馴れてきたらしい。彼女はいつか、これ

を『私の苦行』と呼び始めていたが、その『苦行』に対する無意識の心の変化に、彼女は気付いていたのだろうか。『苦行』の次の日には、彼女は、よく音楽をきき入っていた。モーツアルトのハ長調のあの美しい絃楽四重奏曲や、変口長調のピアノソナタが、彼女の心を洗った。彼女はやはり夫を愛そう、と改めて心に誓うのであつた。夜の生活以外の田中は、以前とすこしかわらぬ勤勉な学者であつた。学問的な業績も、そくそく積み重ねられていった。舅の吉井教授も、教授夫人も田中に百パーセント満足していた。香織はそういう夫を愛することには、異存はなかった。

「人を愛すること、——これはむづかしいことだけど、私はやってみるわ」

これが素直な香織の誰にも洩らしたことのない決心であつた。あの冒頭に記した決定的な夜以後のことについては、筆者は、まだ皆さんに報告する時期に達していない。

夫婦の間の微妙な交渉など、田中から『告白の覗き役に選ばれた』筆者でも、仲々に正確なことが解らぬのは、当然である。

しかし客観的な事実として次のことは、はっきりと申しあげるこ

とが出来る。

香織夫人が所謂『美少女』の域を脱して、目に見えて、あの美しさのまゝ豊潤さを増し、相変らず口数はすくないけれど、表情が生

き生きとしてきたことである。

彼女の夫とつれだって、演奏会や博物館に姿を見せることも、目立って多くなった。それは、田中の、彼の妻に対する態度の変化とも云えるだろう。以前には、書齋に閉じこもったきり、妻をつれて外出することなど、めったになかったからである。

乾隆の壺を夢中で見入る、この美女の顔から以前の、あの寂しい翳がうすれて、しっとりと落ちついた一人の人間としての風格さえ感じられるようになった。

(おわり)

アブフォト集

特の直接印画紙に焼付けた本誌
御申下さい。多少に拘らず本誌
共の値段です。以下、全部送料
御注文下されば、天星社代理部へ
急送申し上げます。御送金は、
替を御利用の上、受領証送下
されば、送金料不要で確実に早
く到着します。

女体切腹写真

○自害悦虐女体切腹
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女学生の切腹姿態
キヤビネ版 五枚一組 五百円

○切腹曼陀羅図
キヤビネ版 五枚一組 五百円

○女性切腹「立腹」
手札型 二枚一組 百五十円

女学生散華

キヤビネ版 七枚一組 七百円

女性浣腸写真

○女学生の浣腸

キヤビネ版 四枚一組 五百円

マゾフォト

○奴隷使役
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女王様の尻の下
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○長靴着用の女性から
鞭で仕込まれる
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○奴隷教育
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○乗馬靴乗馬服の男か
ら責められる男
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○男性縛り 禪美縛体
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○男性緊縛二態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○男に縛られる男
キヤビネ版 三枚一組 三百円

鞭 撻
キヤビネ版 二枚一組 三百円

最新版女体緊縛フォト

光沢印画紙焼付
本誌写真部特写

本誌、復刊第一号並に第二号
誌上に初めて発表して大好評を
得た、縛られた女体の特写が
ト。若々しい多数のモデルが
縦横無尽に活躍している。ア
垂涎の傑作揃い、絶版にならぬ
うち、お早くお求め下さるよう
お待ちいたします。

○高瀬忍嬢
悦虐ポーズ代表選
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○美少女緊縛
(中富綾子嬢)
キヤビネ版 二枚一組 二百円

○藤田節子嬢
「落花狼藉」キヤビネ版
第一集 三枚一組 三百円
第二集 三枚一組 三百円

○古川裕子好み縛り
(萩千恵子嬢)
第一集 第二集
キヤビネ版 三枚一組 各三百円

○加賀利江子嬢
第一回縛り集
第二回縛り集
キヤビネ版 三枚一組 各三百円

○加賀利江子嬢
悦虐ポーズ集
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○厚狹春江嬢
股間しばり三態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○デニムのスボン縛り
(加賀利江子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○須川令子嬢
股間しばり三態
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢
新版腰巻しばり
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○灸点地獄
(施術者 春日ルミ嬢)
被術者 伊吹真佐子嬢
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○悦虐モデル
緊縛六人集
キヤビネ版 六枚一組 五百円

○ジャジャ馬馴し
(中富綾子、村田那美子)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○逆さ吊り
(伊吹真佐子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢
新版股間しばり
キヤビネ版 三枚一組 三百円

『切腹画集』

予約募集

一部予約価 五〇〇円

熱心なるフアンの要望がありますので、「切腹画集」の刊行を企画致しました。御希望の方は、予約金五百円御送金の上、御申込み下さい。予約数により左記の要領によって発行する予定です。

記

一、予定申込数 五十名以内の時は、刊行不能のため返金、又は「切腹画」、三枚乃至五枚をキヤビネ版印刷紙に複写の上頒布します。

二、予約申込数 百名以上百五十名未満の時は「切腹画」八枚をコロタイプ印刷にて完成の上頒布します。

三、予約申込数 二百名前後の時は、右のコロタイプ印刷の「切腹画」を製本の上、画帖として頒布します。

四、予約申込数 三百名前後の時は、十六枚の「切腹画」をコロタイプ印刷の上、画帖とするか、或は、八枚の彩色画を、オフセット色刷として製本の上頒

布します。

五、予約申込数 四百名前後の時は、十六枚の「切腹画」をコロタイプ印刷の上、各葉に解説を附し豪華な画帖とするか、或は、十六枚の彩色画をオフセット色刷印刷として頒布します。

六、予約申込数 五百名以上の時は、二十四枚の極彩色「女体切腹絵巻」を烏の子紙に印刷の上、絵巻物として頒布します。

◎御申込者には、予約金預り証をお送りします。発行予定日、並に画家は未定ですが、経過は今後の本誌上にて報告致します。

◎御申込みの節、御希望の趣向ポーズ等について御申出があらば、出来るだけ御希望にそうよう構図をきめます。

◎御送金にならないでの御申込は、勝手ながら受付致しかねます。

◎予約締切後の画帖の分譲については、大体、一冊千円程度にてお頒けする予定です。

(切腹画集予約係)

○坂口利子嬢

悦虐全裸緊縛集
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢曲芸縛り

キヤビネ版 三枚一組 三百円
手札 型 三枚一組 二百円

○強烈縛り五人選集

キヤビネ版 五枚一組 五百円

○須川令子嬢

立木縛り野外晒し
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女体いじめ四態

春日、伊吹、二嬢コンビ
キヤビネ版 四枚一組 四百円

○猥らな縛り

キヤビネ版 四枚一組 四百円

○肉体美緊縛三態

(伊吹真佐子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女体品定め

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○ローソク責め

(春日、伊吹、二嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女学生凌辱連続写真

キヤビネ版 六枚一組 五百円

○須川令子嬢

高手小手五態
キヤビネ版 五枚一組 四百円

○川辺砂登子嬢

メンズバンド着用
キヤビネ版 二枚一組 三百円

○衆人環視の緊縛

(萩千恵子嬢)
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○修学旅行の出来事

(須川令子嬢)
キヤビネ版 二枚一組 二百円

○お寝み前の五分間

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○晒責め三態 (伊吹嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○佐賀美智子嬢

女事務員の縛り
キヤビネ版 三枚一組 三百円

○凌辱魔侵入 (シリーズ)

キヤビネ版 十二枚一組 千円

○旦那の二号責め

キヤビネ版 十枚一組 八百円

○落したズロース

(佐賀美智子嬢)
キヤビネ版 五枚一組 五百円

天星社代理部特選写真集 (実費分譲)

□高級光沢印画紙使用 大きさ

(タテ 九 横 十三)

緊縛女体のフオート

二枚一組 一五〇円 五枚一組 三〇〇円
三枚一組 二〇〇円 六枚一組 三三〇円
四枚一組 二五〇円 (以上送料共)

◎腕によりをかけた二十集◎

◎この二十集は、マニア諸氏からの要望を百%取入れて作成したもので、各集とも十分に変化をつけ好みのものを手軽に、しかも安価に入手してコレクション出来るように心掛けて配置しました。どうか皆様のアルバムを一層多彩絢爛たるものにして下さい。

AS1 タンス責め

(伊吹嬢) 三枚一組

タンスの環に両足を縛られて、逆か立ちになったところを頭を足で踏みつけられる。

AS2 浴室の緊縛プレイ

(須川嬢) 二枚一組

AS3 柔肌の弄戯

(村田嬢) 二枚一組

全裸の柔肌にまといつく蛇のよな縄。村田フアンに捧げる。

AS4 アクロ緊縛

(萩嬢) 六枚一組

柔軟な萩さんの華やかな身体が縄の束縛にあつてエビのように曲ったり、シャチホコのように逆立ちしたりする。

AS5 トイレ五態

(須川嬢) 五枚一組

初めて試みたトイレの中に於ける緊縛。

AS6 強烈股間緊縛

(中塚嬢) 六枚一組

新人中塚文子嬢を観念させた新考案の強烈股間縛りは豊満な全裸の肌を容赦なくさいなみつつける

AS7 セーラー服哀歓

(須川嬢) 三枚一組

清潔な可憐さを制服に包んで受ける縄目の悲しさと歓び。

AS8 奇抜な縛り

(伊吹嬢) 二枚一組

文字通り奇抜な、そして大胆なポーズ。

AS9 蒲団責め

(須川嬢) 五枚一組

丸めた蒲団の上で、どんな責めが演じられることだろう。新しいアイデアによって試みた卓越したポーズ揃い。

AS10 新股間縛り

(伊吹嬢) 三枚一組

絶版となった以前の分と同じ逸品。むしろそれ以上の品。

AS11 女体嗜虐語

(春日伊吹) 五枚一組

春日嬢のあくなき惨虐の手は従順な伊吹嬢の上に加えられてゆく

AS12 裸に縛るまで

(菅嬢) 四枚一組

新人菅登紀子嬢を初めて裸にして縛り上げるまでの連続四枚のフオート。コレクション・マニアは是非。

AS13 胴絞めしぼり

(伊吹嬢) 二枚一組

一入豊満さを増した伊吹嬢の胴もくびれよとばかり手首と共に正面しぼり。

AS14 後手縛三態

(佐賀嬢) 三枚一組

新人佐賀美智子嬢の後手の裸しぼり。

AS15 股間しぼり五態

(須川嬢) 五枚一組

優美な五つのポーズが、どれもこれもマニアのお気に召す逸品揃い。

AS16 馬乗り姫シリーズ

六枚一組

春日ルミ嬢と伊吹真佐子嬢のコンビ作品、伊吹嬢が山肌の上へ裸で押えつけられ春日嬢に馬乗りになられるまで六枚のシリーズ。

AS17 禪美女体

(須川嬢) 二枚一組

正面と背面の二枚の禪姿の女体

AS18 股間緊縛四態

(萩嬢) 四枚一組

どれもみんないゝものを選びました。きつとお気に召すでしょう

AS19 羞恥責め

(中富嬢) 二枚一組

花恥しき乙女的全裸の姿を何ら覆うことを許さず前と後からつくづく鑑賞出来るという幸福なフオート。

AS20 見ちゃ嫌

(伊吹嬢) 三枚一組

三枚共、みんな正面タテしぼりどうかそんなに見つめないで頂戴見ちゃ嫌よ。

◎得難い稀少な

二十五集◎

各組一 枚八〇円
 十組十 枚七五〇円
 二十五組 二十五枚一八〇〇円
 (以上全部送料共)

◎この二十五集は、皆様の各々お好みのモデル嬢、お好みの趣向或はポーズを選んでお求め願えるよう一枚分売となっております。各集共各モデル嬢の特徴を最もよく發揮した好場面ばかりを選んでありますから、きつとマニアの方に一気に召すものと信じます。

BS 1 覗かれたスロース (加賀嬢)

BS 2 股間しばり特選 (坂口嬢)

BS 3 クリツプ責め (川辺嬢)

BS 4 擦り責め (中富嬢)

BS 5 組上の魚 (須川嬢)

BS 6 大の字縛り (浅野嬢)

BS 7 みゝずばれ (杉嬢)

BS 8 くさり責め (高瀬嬢)

BS 9 折檻 (雲井嬢)

BS 10 梯子責め (伊吹嬢)

BS 11 ハリツケ (萩嬢)

BS 12 月経帯縛り (村田嬢)

BS 13 手錠くさり (伊吹嬢)

BS 14 人身御供 (高瀬嬢)

BS 15 落した下着 (萩嬢)

BS 16 下半身裸出 (村田嬢)

新マゾ風景十態

一組 一枚 一〇〇円
 十組 十枚 九〇〇円

春日ルミ嬢熟演のとおておきのマゾフォト。

M 1 ワン公水をやろうか

M 2 なぶりもの

M 3 ベッドの上で可愛がる

M 4 押え込み

M 5 足舐め大写真

BS 17 鼻責め縛り (川辺嬢)

BS 18 高手小手 (加賀嬢)

BS 19 乳房責め (川辺嬢)

BS 20 首縄 (川端嬢)

BS 21 後手しばり (藤田嬢)

BS 22 竹棒責め (伊吹嬢)

BS 23 蛙潰し責め (雲井嬢)

BS 24 改つた表情 (佐賀嬢)

BS 25 森の中の凌辱 (村田嬢)

男性緊縛フォト

M 11 晒し者三態

M 12 男性股間しばり 三枚 三〇〇円 一枚 一〇〇円

女体切腹フォト

H 1 女体割腹譜 二枚一組 二〇〇円

女体浣腸フォト

K 1 エネマシリンジ 四枚一組 三〇〇円

◎御注文の栞◎

◎御注文は符号だけで品物を御指定下さっても結構です。

◎総べて通信にてお申込み下さるようお願いいたします。直接の御訪問はお断りいたします。

◎御送金は綴込の振替用紙を御利用下されば無料で最も安全に到着します。但し普通便より二、三日遅れますから、受領証を注文書と同封の上お送り下されば、早速品物をお送り致します。

散^{さん}女^{にょ}人^{にん}
華^け

悲^ひ風^{ふう}磨^{すり}上^{がみ}原^{はら}

瀬 川 泰 子

安政七年に改元されて、万延となった。今から九十五年前のことである。

会津藩では、この改元のことを、藩祖保科正之の霊前に奉告する例になっていた。正之は、三代將軍徳川家光の異母弟、会津二十三万石を領して、名君の聞こえが高かった。寛文十二年、六十二歳で薨すると、土津霊神と謚名して、猪苗代の見祿山に葬られた。

万延と改元の時、奉告の使いに立ったのは、御用人竹本新左衛門である。

若松を發つて、大寺、横立をすぎ、道は次第に磐梯山の麓にかけて登りになった。三角形に空を区切ってそびえる磐梯の雄姿は、豊かな裾野をひろげてぐんぐん迫ってくる。

磨上原と呼ばれるこのあたり一帯は、その昔、伊達正宗に滅ぼされた芦名一族の最後の決戦場である。この原の中程に、松にかしこまれて「三忠碑」と称する石碑が見える。これは、その敗戦の折、

領主芦名義広の危急を救って殉難した金上盛備、佐瀬種常、常雄の三烈士を表したもので、嘉永三年十二月に第八代の藩主松平容敬の建てたもの。この三烈士の武勇は、敵將政宗をして讃嘆せしめたと言え伝えられている。

新左衛門は、目指す見祿山を目前にして、この「三忠碑」のかたわらでひと休みした。灌木におおわれた見渡すかぎりのこの原野に、血風をおおって死闘をくり返したすさまじい光景を偲びながら、新左衛門はしばし低徊した。その時、足もとから一本の古い鍬を捨てあげた。

これは、俗に「桜根」と呼ばれるものの折れ端であることにすぐ気がついた。大雨の後などには、折れた刀剣の類が、あれから二百七十年を経った今日、いまだに出て来ることがあると、新左衛門も話には聞いたことがある。

新左衛門は、珍しい土産ができたといそかに喜び、帰着の後に、

同好の士に披露をかねて和歌の会を催した。

この時の判者（組合せの優劣を決する審判役）を勤めたのは、後の戌辰の役に、桂林寺町口ではなばなし戦死を遂げた野矢常方である。参ずる者は、西郷近思、柴繁陰、黒河内義信、原清郷ら錚々たる面々であったが、席上第一席に推されたのは、原清郷作の次の一首であった。

あれは誰がいのちの際に放ちけん根のみ残れる征矢のうは指

征矢とは、戦場で用いる矢のことで、戦陣ではこれを簾に入れて背負った。この簾の左方に雁股（矢の根の一種で、兜の鍬型のように、股になって開いたもの）又は鏑矢（矢鏑の一種で、鹿角などで蕨の根のような形に作り、内部を空洞にくり抜いて三つの穴をあけ、先に雁股を付けて射るもの。この矢が空中を飛ぶ時は、穴に風が入って響を發した。鳴鏑とも称した。主として戦端の開かれるに当たって、これを敵陣に射こみ、鳴りひびく、その音で敵を畏怖させ、味方の戦意をおおる役割を果たしたものである）を二本特に用意するのが常で、これは、ほかの矢が十二束（束は一握りの長さ。約三寸三分）の長さであるのに比べると少々長めにできていたので、「上指」とも称したものである。

この内、雁股の矢の根に桜花を鏤り抜き、矢羽を特に四枚にしたものを「桜根」と呼んだことが古書に見えている。これは、何に用いたかという、耦射の場合に限っていた。戦敗れて、力で耦刺（刺し違えること）して死ぬ代りに、たがいに矢を放って死ぬのである。矢羽を四枚にしたのは、射放した後、矢が回転しないため、桜花を根に鏤り抜いたのは、この鏤り痕に肉が食いこんで、決して抜き取ることができぬための用意である。

これだけのことを前以て知った上で、右の一首を読み返すと、作者がねらった作意のほどがはつきりと理解される。

鏑びついたこの桜根の鏑を見ると、あの磨上原血戦の折、恨を

のんで相果てた会津人の体内ふかく射こまれた断命の一矢にちがいない。骨はすでに朽ち去って跡形もなく、たがいに矢を射放ったその人らを、誰と知るよしもないが、遠く思いを馳せれば、哀切の情はひたとわが胸に迫って来る——というほどの意味であろう。

磨上原の血戦は、天正十七年六月五日のことであるが、伊達、芦名両家の興亡をかけた戦は、いつの日にか演ぜられねばならぬ宿命であった。

天正十二年十月、十八歳で家督をゆずられた伊達政宗は、百六十万石の奥羽の名門芦名家を滅して奥羽統一を策し、更に南下して中原の鹿を射止めようとの、ひそかな雄図を抱いていたのである。

奥羽南部から北関東一帯にかけて、結城・相馬・二階堂・岩城・田村・佐竹の群雄が割拠し、これらはおおむね芦名氏に好意を寄せていた。その上、会津は四方嶮山難所と称せられる天然の要害に囲まれている。南下して芦名氏を滅すことは、一朝一夕業ではなかった。

政宗は、この難問題を解決する唯一の方策として、内応者を手なずけることを考えた。当時の群雄は、多くは女を婚せしめ、養子と交換しあつて姻戚関係を結び、以て侵寇蚕食の防波堤となしたが、この政略が必ずしも成功しはしなかった。義によって結ばれるということが、これほどの大事ではなかったからである。

たがいの野望を果たすためには、血肉を犠牲にすることは、さして顧慮されぬ場合が多かつた。「天下の覇王」の夢は、群雄を殺人鬼に駆りたて、権謀術数の虜にしていた当時のことである。下剋上の風習は、すでに武人達の常道でさえあった。

それにつけこもうとする政宗の方略は、至極当を得たものと云わなければならない。政宗が封をつぐや、期せずして内応者はみずから名告って出て来た。安達郡塩松の城主大内定綱がそれである。

定綱は元来、日和見主義の打算家であつたようだ。保身と榮達の前には、常に恒心なしという生き方が、文献の上からも察せられる。

政宗の襲封を賀して長井まで足をのぼした定綱を見て、政宗は邸宅まで与えて厚遇した。芦名氏とは長い交誼を結んで来たはずの定綱が、若冠十八歳の自分が家督をつぐや否や、みずから賀詞を述べに出向いて来たという一事は、政宗にとって勿怪の幸いであつた。裏切者は、利を以て誘うべし——この金言を実行しようと考えたのである。

定綱は、翌年正月、妻子を伴つて再び移り住むことを約して塩松に帰った。ところが、定綱はいつまで経つても現れない。探知したところによれば、定綱は、忠義顔で芦名氏との縁りをもどしているらしい。政宗の癪癖がカツと燃えた。

定綱を遇する道が薄かつたとは思えない。いや、むしろ厚きにすぎぐらいのもてなしであつたとさえ思う。妻子を連れて来た時の用意にと、邸の新築までして待っていた。それなのに、伊達と芦名を天秤にかけて、犬は再び旧主のもとに突つ走つて行つた。憎むべき裏切者。そして、その背後に巖然と構えてほくそ笑んでいる芦名一族……——定綱の神妙げに平伏していたシヤツ面を思い起こすと、怒りは止め度もなくあふれあがつた。この恨みは必らず晴らさねばならぬ、と政宗は齒がみした。同時に、父祖以来しばしば敗戦の憂き目を見て来た会津の要衝檜原城主穴沢氏への雪辱をかねて、一挙に芦名の本城黒川（現在の会津若松市）に迫ろうと決意した。

しかし、謀事は密に、行動は迅速なるを要する。

政宗はまず、耶麻郡関柴の地頭松本備中、彈正父子に内応の手ののぼした。松本氏はもと芦名氏の長臣の列に、つらなる家柄であるが、一族の松本太郎左衛門が前年六月十三日に、謀叛のかどを以て誅せられている。この事あつて以来、芦名氏に対する松本氏の位置

はみじめな転落をつづけていた。この不平と不満を足場として、政宗は松本備中父子の寝返りに水を向けたのである。

次いで、檜原の関守穴沢九郎五郎（檜原城主穴沢善右衛門の一族）を味方に引きこんで、五月初旬、耶麻郡入田村から侵入し、近隣に火を放ちつつ進撃した。

しかし十一日未明、三面を包囲された侵入軍は手も足も出ず、散乱する死屍をそのままして遁走せねばならなかった。松本備中は戦死を遂げ、彈正は長井に奔り、備中の父幽閑は九十一歳の老体を引き出されて打首の刑に処せられた。政宗の深謀も、芦名の武力の前には、一敗地にまみれたのである。

だが、政宗は、この一本の方策だけに頼つていたわけではない。すでに別手は、芦名の支族猪苗代盛国にのびていた。

猪苗代氏は、もともと芦名氏とその遠縁を同じくしている。すなわち、芦名家初代義連は、はじめ三浦氏を称し、後佐原氏を名告つたが、これは義連の四代前為通の代から相模国三浦郷に住みついてゐたところから、はじめ三浦氏と称したわけだが、その子為継の時に源義家に仕え、これより後子孫は源家に属するに至つた。為継の孫義明は、源頼朝が石橋山に兵を挙げるやこれに従い、頼朝を援けんとして出兵の間際に、頼朝の敗北を知つた。しかし、一度の蹉跌で挫け去る頼朝にあらずを見こんだ義明は、敵将畠山重忠の来寇を見越して衣笠城に立てこもり、その子義澄、義連らを頼朝のもとに馳せ向かわせ、遂に弧壘を守つて自害して果てた。時に義明八十九歳。父の遺志に従つてその子らは、頼朝再度の挙兵に加わり、以後各地に転戦して武功大いに顕われた。中にも義連は、義明の七男であつたが、最も武運に恵まれ、後に平泉の藤原泰衡征討の折にも軍陣に従つて、その功により会津の地を賜わるの榮に浴した。会津における芦名家初代をこの義連とするのは、そのためである。その子盛連を第二代とし、これに六人の男児があつたが、四男光盛が後を

つぎ、相模国三浦郷芦名村の出身地名をとり、初めて芦名の姓を名告った。母は有名な駿河前司三浦義村の女で、通称矢部禪尼である。禪尼は先に北条泰時に嫁して一子を生んだが、後に盛連に嫁入って四男光盛以下三人の男を生んだ。長男経連は、第三代光盛にとつては、腹違いの兄にあたるわけであるが、これが耶麻郡猪苗代にして猪苗代氏の祖となった。この十二代の孫がすなわち猪苗代盛国で、一万八千石を領して磐梯山麓に構えていたのである。

猪苗代氏の諸代城主は、本家芦名氏に対して、少なからぬ劣等感を持ちつづけている。芦名第三代は、当然長男である経連がつくべきところ、盛連の後妻矢部禪尼の家柄と勢力に押されて、禪尼の初代光盛が跡目相続をしたという「敗者の怨念」にも似た感情が、隠微のうちに流れている。

たまたま天正十二年十月六日、芦名第十八代盛隆が、家臣大庭三左門のために弑せられて、生れて一月あまりの嬰兒亀王丸が家督をつぐという不慮の事態が発生した。盛隆は、もと須賀川の二階堂遠江守盛義の男で第十六代盛氏がこれを養子として迎えたものである。第十七代盛興は伊達輝宗の妹を娶って、芦名家中興の偉人と称せられる父盛氏とともに政道に専念したが、不幸二十九歳の若さで病歿した。ために盛氏は、盛興の未亡人伊達氏を盛隆に再嫁させて、一家の安泰を策したのである。

しかし、盛氏もすでに天正八年六月十七日六十歳をもって歿し、今また盛隆が、二十四歳を一期として家臣のために非業の死を遂げた。芦名家の混乱は、衰亡への拍車をかけたと言ふべきである。

第十九代亀王丸は、もちろん名ばかりの城主にすぎない。亀王丸の母は、政宗にとっては叔母にあたる。しかし、会津攻略の野望は、叔母甥の血縁にさまたげられはしなかった。

かねて、本家芦名氏に不平を抱く猪苗代氏を煽動して、弱体をあらわした芦名の本城を、今度こそわが手に入れようと、政宗は遠大

な計をめぐらしていたのである。

猪苗代盛国の父盛親は、芦名第十三代盛高の治政にあたって謀叛を企て、文亀元年六月二十八日に誅伐せられている。宗家芦名氏に對する盛国の心情は察するにあまりある。政宗は、ここに目をつけた。

羽田右馬助が、政宗の密使として猪苗代に入ったのは六月のことである。盛国の心が動いた。

盛国が、その時提示した条件は、左の三つである。

(イ) もし謀叛の軍が成功した暁には、会津領の北半分を所領として賜わりたい。

(ロ) 降臣中、席次第一の地位を与えられたい。

(ハ) もし不幸にして敗れた場合は、伊達氏の領地内にて三百貫文の知行を下し賜わる事。

政宗は、右の三条件を文句なしに呑んだ。だが、盛国の子盛胤は宗家に刃向かう無謀をたしなめて父を諫止した。

盛国は、年若い後妻を迎えてうつつを抜かす毎日を送っている。

後妻は、閨の密語に、一日も早く伊達家に属して、芦名への積怨を晴らすべきだと力説した。この妻女の周囲には、一種の妖淫の氣がただよっていた。盛国付きの小姓を取りこんで、夫の目を忍ぶ密事がある。ひそかな歡樂の果てに、事をかまえて謀殺し、密事の露頭を防いでもいた。淫靡の慾情は、やがて義子なる盛胤に向って燃えあがったが、ここで手きびしい拒絶にあった。淫女の誇りかな誘い手は、無残にも宙に迷った。情火は怨念をはらんで逆に燃えさかった。盛国は、なにも知らずに、この淫婦の白い肢体の中に夢幻の境を求めるにひたすらである。妻の脂粉の香と慾情の体臭にぬりこめられた盛国の思念は、日毎に平衡を失って傾きかけて行った。しかし、盛胤の正論の前には、急激な転落がやや支えられていたと云ってよい。政宗は、じっと機を熟するのを待っていた。時の問題だ

と、吐をしめていたのである。

この猪苗代一家の運疑逡巡の間に、政策は更に別手をのぼした。すなわち八月五日に、信夫郡福島に出張った政宗は、塩松城の附庸という立場にあった安達郡刈松田城主青木弘房を呼び寄せて、その主大内定綱への裏切りを勧告した。強大な政宗の勢威の前に、弘房はわけもなく屈して、塩松城内外の地図を献上するという他愛なさであった。

政宗は、この弘房を先導として厚顔な日和見主義者大内定綱を、ひともみに揉み潰そうと勇躍軍陣を進めた。

この時定綱は、小手森城に起臥していたが、伊達の軍迫ると知って直ちに芦名家へ援兵を求める急使をたてた。中目式部（中目城主一万石）、平田尾張（塩川城主五千石）を先遣とし、一方、畠山義継（二本松城主二万石）の軍をも合わせて二十四日未明から彼我の戦端が開かれた。戦況は一進一退したが、二十七日、遂に小手森城は落城——大内定綱は城を捨てて小浜に奔り、越えて九月二十五日、政宗は後を追って小浜城を陥れた。

定綱は更に二本松に難を避け、間もなく会津に遁入したものである。政宗は急迫して二本松に迫り、父輝宗が代って小浜に入った。伊達一族の威圧は、ひしひしと仙道に加えられて行く形となった。

ここにおいて畠山義継は、到底政宗の勢威に拮抗することできない現実の事態を見てとった。身を全うする道は、投降よりほかにはない。しかし、いきりたった政宗の前に白旗をかがけてみたところで、明るい見通しがたつとは思われない——義継は思案のはてに、輝宗の周旋によって、穩便にとりなしてもらうよりほかはないて考えた。

十一月八日——義継は辞を低うして輝宗に降を請い、翌九日、小浜の輝宗の陣営に出頭した。

しかるに、輝宗は内心、この機会に義継を謀殺して二本松城を奪

取しようとしたくらいでいた。義継はうかうかと、この陰險な思わくのワナの中に、みずから飛びこんだ形になったのである。

ところが、義継が小浜に到着すると間もなく、この輝宗方の密謀は、義継の家臣鹿子田和泉によって網破された。

「殿……。実は……。」と耳打ちされた時、義継の驚きは頂点に達した。しかし、すでにわずかの従士をひいて敵陣営に身をさらしている義継である。

「和泉。もはや遁れる道はない。殺すか殺されるか。ただ、それだけだ。機先を制するより手立てはあるまい。よいか。……輝宗の隙をうかがってこれを奪い取り、二本松領内まで一気に駆けぬけるのだ。ぬかるな」

と下知し、従士の一人を、二本松に引返させて援兵の用意を命じた。

勝者の寛容さを見せて、輝宗は悠然と応待した。投降の申し合いは滞りなく終った。義継は一礼して座を立った。輝宗は、つづいて腰をあげると、義継を見送って内庭まで出て来た。

その時は、鹿子田和泉は疾風の速さをもって輝宗に迫ると、利き腕をとって力まかせて引きつけた。不意をつかれた輝宗の体がグツと傾く——次の瞬間、鹿子田の左腕は、相手の首を後から締めていた。義継は、抜き放った小刀を輝宗の脇腹にピタリとつけ、従士の面々は、いずれも刀を抜いて、取り囲むような恰好で身構えた。伊達方の諸士は、この神速の動きに度を失い、凝然と立ちつくすより術はない。その中をこの一団は、サツと厩まで退いて行った。

輝宗の目は、恐怖に吊りあがり、血の気が見る見るうちに失せて行った。義継は、輝宗の肋に当て身をくらわせると、そのまま馬にまたがる。鹿子田が、気を失った輝宗を俯伏せのまま義継の鞍先に乗せあげた。主従二十騎が、砂塵をまいて走りだしたのはこの時である。

阿武隈の流れは、もう眼前にある。援兵が関をつくって迎えてくれるはずだ。援兵——一刻も早くその援兵の姿を見たい——義継は、馬上に猛りながら、胸迫る思いで前方を見つめていた。

ふと振り向くと、従士はわずか五、六騎——すぐに伊達勢の急追が迫っている。それは、悪鬼の執拗さで、どこまでも食い下つて来た。

ドーンと斜後から銃撃の音がとどろいた。頼む援兵の姿は見あたらない。蹄の音は高なり乱れて追いついて来る。義継はカッと血の気あがる思いにかられると、一瞬ほそを固めた。

馬上に鎧通しを抜きとると、だらりと二つ折りになって鞍先につけられている輝宗の髻を掴みあげ、いきなりグサと首を掻いた。血は風に狂うたてがみにしぶいて、返り血が義継の胸もとを真紅に染めた。つづいて輝宗の無残な屍が、ドッと転げ落ちた。これで追手の足を暫時食いとめることができると思ったのである。

しかし、輝宗の死体に駆け寄ったのは、追撃隊の半数でしかなかった。ここに義継の誤算があった。このまま無事に、阿武隈の川境まで乗りおおせるとは思えない。折角、敵の裏をかいたつもりで行動も、所詮は神に見放されたぎりぎりのあがきにすぎなかった。ただ一つ、輝宗の命をこの手にかけてひねり潰したことが何よりの慰めだ——と思いきわめた時、義継は、手綱をグッと左にひかえて、笹簀の中に乗りこんだ。街道をはずれた斜面一帯には、杉の古木が立ちならんでいる。義継の姿は、たちまちこの林の中に見えなくなった。が、追手の自をのがれることはできないであろう——義継の覚悟は、輝宗を刺した時、すでにきまっていたといつてよい。

笹簀の中に飛び降りた義継は、平手で馬の尻を叩くと、主を失った馬は、そのまま斜面を猛り下って行った。

義継は、左膝を地に構えると、襟もとから縦に胸をくつろげた。笹原を蹴散らす騒がしさが、すぐ上に迫っていた。腹まで押し開く

余裕がなかった。義継は、輝宗の血糊にぬれた鎧通しを鳩尾めがけてグッと刺し通すと、左手を峰にあてがってそのまま臍まで斬りさげた。血がサッと笹の葉をそめて、その中へ体は前のめりに倒れ伏した。

ようやく駆けつけた政宗は、義継の俯伏せになった肩のあたりを蹴返し、グラッとなびいた苦悶の死相を見下すと、

「うぬッ」

と叫びざま、その面上に土足をかけて踏みにじった。

その日のうちに、首を打落された義継の胴体は小浜城外に磔けられ、首は二本松に送られた。政宗の怨みをこめた決戦の贈物である。

この日から六日目——十一月十五日早朝から、政宗の二本松攻めが開始された。義継の一子梅王丸を奉じた家老新城弾正は、会津、岩城、佐竹、石川、白河、相馬、須賀川の諸將に援けを求め、伊達の大軍をひきうけたのである。

この日辰の刻（午前八時）ごろから、暗雲をこめて牡丹雪が降りはじめた。暮方から風を加えて、雪はますます積もり、夜に入って寒気は將兵を泣かせた。

雪は遂に、三日間やすみなく降った。白魔と、耐えがたい寒さが、両軍の行動を釘づけにした。特に、伊達勢の士気はまったく挙がらない。これ以上、三万五千の連合軍に肉迫する不利は目に見えていた。政宗は、涙を呑んで小浜に退かなければならなかった。

政宗の奥羽統一の夢は、父の非業の最期によって、いよいよ抜くべからざる非願となったが、群雄を斬りしたがえる難行は、予想以上のものがあつた。心はあせりにあせったが、多寡をくくって兵をくり出すことはできない。

服喪のうちに年明けて十四年四月二日——一万八千の精兵をそろえて、政宗はようやく二本松城に旗を進めたのである。この度は満

を持して、兵糧攻めと、内応者の引き出しに主力を注いだ。箕輪玄蕃、遊佐下総、堀江越中、氏家新兵衛らの畠山家臣が、続々と内応の誓詞を政宗に送った。新城弾正は、これら叛臣の脱走寸前にそれを見破って血祭りにあげたが、城中の動揺は抑えがたく、敗色はすでに明らかであった。弾正は、二十三日みずから城に火を放って、幼主梅王丸を奉じて芦名家に遁れ、翌二十四日、政宗は怨敵畠山の領邑に入ったのである。

しかし、大内定綱といい、畠山梅王丸といい、政宗に攻め落される者は、すべて会津芦名を頼ってその身の安泰をはかろうとしている。芦名は、これらの窮鳥を懷に抱きかかえて、隠然たる勢威を伊達家の前に誇りつづけている——この傲岸ぶりは、政宗の血をいやが上にも燃えたたせた。

政宗は、餌をねらう鷹の目をもって、会津の動きをじっと見つめていた。その間約半年——十一月二十一日のたそがれ時、芦名第九代の幼主亀王丸は、わずか三歳で、痘瘡のために急逝した。当然起こったのは継嗣問題である。

重臣達の意見は二つに分れた。一つは、この際伊達政宗の弟なる笠丸を入れて後嗣としたいという主張である。もともと伊達と芦名は重姻の間柄である。すなわち、第十三代芦名盛高の女は政宗の曾祖父植宗の室に入り、植宗の女は、第十六代芦名盛氏の室に入っている。その上、政宗の叔母は、第十七代盛興の室に入り、未亡人となつて更に第十八代盛隆に再嫁し、しかも第十九代亀王丸の生母である。伊達家との血縁は決して薄くない。今、政宗が仙道を圧して芦名家を最終の目標として攻め寄せて来る時、みすみすその矢面に立って戦乱の苦痛となるのは上策ではあるまい。しかも、伊達勢の威力は、はるかに芦名を越すものと見なければならぬ現在、穩便に手を結んで、会津領安堵の方策に出るべきではないか——これがその意見である。この側に立つ者は猪苗代盛国、富田美作、平田左京

の面々。

他の一つは、常陸の佐竹義重の二男義広を入れようとする立場である。年はまだ十五の若さであるが、その剛毅英邁さは、芦名家將來の柱石たるにふさわしいと主張した。伊達家近年の無道ぶりは、まことに言語同断である。政宗の弟を入れて後嗣とするなど、思いもよらぬ。もしそういうことになれば、明らかに伊達家に屈服したも同然、かえって弱点をさらけ出すに等しいものだ。佐竹氏との連年の盟友関係を考へても、この際、義広を迎えるべきだと言い張った。これを主張した者は、金上盛備、沼沢実通らであった。結城義親はこれを側面から援助した。

その結果、論議は遂に、佐竹平四郎義広ときまった。(義広の母は、芦名亀王丸の生母伊達氏の妹で、やはり政宗にとっては叔母にあたる女性である) 天正十五年三月一日、はじめて黒川城に入り、亀王丸の姉が妻の座についた。佐竹家から従つて国老の列につらなつた者は大繩讃岐、剱石駿河、平井薩摩の三人である。

かねて会津に亡命中の大内定綱は、国老級の人物三人が常陸から入つて来たという一事に、心おだやかならぬものを感じた。というわけは、定綱が政宗に追われて芦名家に投じた時、

「貴殿が長く会津の臣として仕かれる御意志なら、重臣四天王の列に御推挙申しあげようと考えておりますが」

と、耳よりな口約を聞かされていた。

芦名家の重臣を四天王と称し、平田、松本、佐瀬、富田の四家をこれに当てたのは、第十一代盛信以来のことである。しかるに、松本太郎は、天正十二年六月十三日、河沼郡笈川村地頭栗村下総らを語らつて主家に反逆をくだてたため誅戮され、四天王の一が欠けたままになっていた。その後釜に大内定綱を推挙しようという話なのである。しかしこの口約はそのままになっていた。そこへ後嗣問題が起こり、義広を奉じて佐竹家から三人もの国老級が乗りこん

で来たとおつては、定綱に幸運の座がめぐつて来ようはずはない。日和見主義の打算家定綱の本性が、頭をもたげた——定綱は、ひそかに政宗に対して使者を送り、芦名累代の国老と、佐竹家より新入りの国老との間に勢権の争いが見通され、やがて会津の国政は乱脈を極めるであろう。会津攻略の好機は、もはや目前に迫っている。その折、是非お役にたきたいと申し入れたのである。

政宗が、自分を目の仇にしていることを、定綱は百も承知している。しかしそれ以上に、芦名潰滅の非願に燃えている政宗の心中をも見すかしていた。そのためには、芦名の内部を知りつくし、会津の地勢に通曉している自分の利用価値を、政宗は必ず買ってくれるにちがいない——と、定綱は思いめぐらしたのである。

この年の秋、定綱は、急に芦名家を退転して、安積郡片手城主片手定重（五千石）のもとに奔った。定重は、定綱の弟にあたる。

芦名第二十代義広は、大内定綱のこの行跡に対して激怒した。翌十六年五月、みずから兵を率いて片手城を攻めたのはそのためであるが、定重は、実母を人質として二心なきことを誓った。

六月に入つて義広は、父佐竹義重ならびに岩城常隆と相謀り、安積郡郡山の太郎左衛門を攻囲した。連合軍総勢四万——郡山左衛門は、ただちに政宗に後援をたのんだ。政宗は二本松の杉田に陣を進め、攻防は一進一退して遂に八月に及んだが勝負はつかなかった。

そこで岩城常隆、石川昭光の両将が間に入つて、ひとまず和議の斡旋に努力した。若冠芦名義広が容易にあなどりがたい大敵であることを、政宗は改めて感じさせられたのである。

この対陣の間に、猪苗代家においては、父子相剋の醜状を演じていた。猪苗代盛国は、これより先天正十四年末に、家督を盛胤に譲つて隠退していたが、伊達、芦名対陣の十六年七月十四日、盛胤が芦名家への御機嫌伺いのため黒川に赴いている留守を狙つて、盛国は突如として猪苗代の本城を乗っ取った。

盛国を内応せしめようという政宗の触手は、すでに三年前から伸びている。内応した曉における条件三ヶ条も、盛国から申し入れ済みという態勢で、心はとづくに動いていた。それを今まで持ちこたえたのは、一子盛胤の諫言による。盛国の後妻は、かげから夫の尻をつついて政宗方への寝返りを力説しつづけて来た。板ばさみの盛国は、じりじりと内攻する苦慮を持てあましていたと言つてよい。家督はすでに盛胤に移つて、猪苗代家の実権はおのれの手を離れている。謀叛をくだてるためには、その実権をもう一度自分のものにしなければならぬ。後妻の謀略的な密語が、この思わくに拍車をかけた。後妻は、義子盛胤を憎んでいる。妖淫の搦め手を蹴られた意趣が、今は憎悪となつて燃えていた。盛国は、この妻の慾情にぬれた体臭なしには夜も日も明けぬ傾倒ぶりである。いつかは板ばさみのシレンマを踏み切らなければならなかった。本城乗っ取りは時間の問題であつたとも見られる。

この報に接するや、盛胤は急拠黒川を發つて、安積郡横沢村に入り、次いで舟を仕立てて猪苗代湖を渡り、湖畔金曲の壘に迫つて、守将大堀土佐、秋屋半右衛門を追い落してこれを占拠した。そこで盛国は、みずから兵を率いて金曲に向かう。こうした血肉相食む乱闘が、主家芦名の対陣中に行われたことを芦名義広を憤激させた。義広は、双方に使を派して、その暴状を責めた。

盛胤は、事の成り行きを静観する態度に出て、一度横沢村に引き返し、盛国はそのまま本城に居する形となった。

政宗は、この機会に盛国への触手を更に強めた——そして半年。会津周辺の情勢を、徐々に伊達方に好転させようと計つたのである。

翌十七年三年から、政宗の攻勢は陰陽に活潑な動きを見せはじめた。四月一日、例の大内定綱を呼び寄せ、会津攻めの要衝を割り振つた。つづいてみずから本宮城に入り、安子ヶ島、高玉、駒ヶ峰、

新地、谷地の諸城を屠り、会津領の東面に向かってひしひしと迫った。

義広は、大内定綱が伊達方に通じ、片手城もすでに政宗の侵略におちいったことを知り、先年片手定重が人質として黒川に送りこんでいた片手兄弟の母を、薬師堂河原に引き出して逆磔の極刑に処し軍を進めて磐瀬郡に入った。

六月一日、政宗は親臣たる伊達成実、片倉小十郎景綱を猪苗代に遣し、内応の最後の勧告をなさしめた。盛国は、先の三条件を改めて申し入れ、十三歳の第三子亀丸を人質として、政宗への忠誠を誓ったのである。

ここに至って、政宗の会津攻略の宿願は、まさに達せられようとする態勢に入った。

一方義広は、安子ヶ島、高玉をはじめとする諸城陥落の事態に対して、特に精兵三百を選んで、三日の朝方、耶麻郡壺下に備えさせた。壺下は、猪苗代湖東岸に位置し、盛国の本城からは東南四里の距離にある仙道の要所である。

盛国はこの処置に対し、

「たとい伊達勢大挙して攻め来ろうとも、この猪苗代の地には一歩たりとも入れ申さぬ。わざわざの御出兵は痛み入り申す。数年来のお疑いを晴らすはこの時と覚悟いたしおる節なれば、なにとぞ兵をお引きあつて盛国の忠節を御照覧下さるよう、殿へよしなにお伝えねがいたい」

と説いた。そこで尖兵三百人は引き返して行った。だがすでに、これより二日前、盛国は政宗と盟約を結んでいたのである。

翌日、盛国の詐謀を知った義広は、急ぎ黒川に取って返した。このことは、すぐに、安子ヶ島城まで進んでいた政宗の耳に入った。

義広はおそらく、猪苗代に向って大軍を差向けるにちがいない——と政宗は察した。猪苗代が芦名勢をもって固められれば、盛国

を内応させた意味は水泡に帰する。今となつては、猪苗代の本城を一時も早く手に入れなければならない。数年来じつと待ちつづけた盛国の寝返りを、会津攻めの決め手として使えるかどうか。それが勝敗のわかれ目になる。

政宗は精銳十七騎を従え、石筵峠を越えて猪苗代に駆けぬけた。

この石筵峠は、一名保成峠とも呼ばれ、耶麻、安達両郡の境にあたる標高九七三米の高地である。北から東にかけて、西吾妻山、中吾妻山、東吾妻山。安達太郎山の諸峰が連なり、西には磐梯山、東南三里あまりには、それぞれ二本松、本宮の城をひかえている会津への重要な間道である。

保成峠の名は、会津にとって一つの鬼門である。政宗に先を越されたのが、この間道ゆえであるばかりでなく、明治元年、薩長土連合軍が、南方から会津若松を攻めると見せかけて、実は精銳三千をくり出してこの保成峠を打ち破り、会津田中隊、二本松残兵、大島圭介を主将とする脱走幕兵七百を蹴散じて侵入した魔所である。

一方、伊達の分遣隊として原田左馬介の率いる別手は、檜原から大塩城を攻め落して、同じく猪苗代城に落ち合った。攻防両様の準備はまったく成ったのである。

芦名方は、すでに後手に廻った。義広は、この夜、急に全軍に命を發し、七千余の兵を十二隊に分け、一気に猪苗代への進撃をはかった。

先鋒の一隊を率いて立ったのは、富田将監。国老富田美作の長男で、この時二十一歳であった。荒井城五千石の武將である。この時將監の輩下として下荒井の館にももちろん出陣の指令が飛んだ。下荒井は黒川の西一里あまり、鶴沼川をへだてた小村である。この館の主は、荒井三郎二郎実積。実は富田将監の弟で、荒井家に養子となった人物。去年元服をおえたばかり、十三歳の少年である。荒井家はもと、富田家から分れて一家をなした。実積の後見として伯父

釣月齋、その子勘解由及び孫六兵衛以下四人、ほかに附侍三十五家を擁し、本丸は東西三十四間、南北五十間、二の丸は東西四十二間、南北五十八間、三の丸は東西五十四間、南北五十間の構えであった。

出陣の急使が着いたのが戌の下刻(午後九時)——総勢四十騎が真夜中に出立した。今までにない悲壯の思いが、全員の胸をひたした。

実積の侍女に、千浪(二十歳)、操(十八歳)妙(十七歳)、鈴(十七歳)の四人がいた。燃えさかる篝火に頬を染めて、馬上にまたがった若武者ぶりの殿の姿を仰いで、侍女の胸は憂いとあこがれに妖しく高鳴った。三日月が空にかかつて、壮美とおのきの出陣図絵を彩っている。間もなく蹄の音は、一団の疾風となつて、蟹川橋のかたに駆け去つて行った。急に底知れぬ空虚が、館の中によどんだ。篝火はあかあかと燃えつゞけているが、四十騎の武者の姿はもはやない。そのさびしさ、頼りなさ、おぞましさを誰よりも深く感じたのは四人の侍女である。

殿の部屋には、兜にたきこめた沈香のかおりが余薫となつてたゞよつてはいるが、あの凜々しいお姿は見るすべもない。——執ねき独眼龍政宗が、大手をひろげて迫つて来るといふ血戦の場に、あの年若な殿がけなげにも立ち向かつて行かれる。あの涼しい目、清純そのものゝ頬の色、常には軽口をたゞかれて愛らしく動いていた唇が、一文字に強く結ばれていた出陣のあの面ばせ——千浪は、それをじつと思いつめていた。雄叫び、鐘鼓の音、矢筈のひびき、乱射乱撃の騒擾、銃砲のとどろき……耳の底に、ありありと血戦の様相が伝わって来るような気がした。

千浪は、部屋に引きとると、燈明をかゝげて神前にぬかずいた。揺れ動く火先が、天井に物の怪のような無気味な影を映した。心が乱れ、ときめいた。もうじつとしてはおれぬと思った。

「操さま、このたびの殿様の御出陣、なにやら不吉な思いに胸おさされる心地がしてなりません。すでに会津領内に泥足を踏みこんだ伊達勢のこと、一気に押して来ぬともかぎりませぬ。その時は……と思えば、たとい女子の力なりとも、殿様のお役にたちたき存念が湧いて参ります。お後を追つて戦場へと、いま御神前に心を決めました。戦はいずれ明け方からでございますよう。目指すは湯達沢と聞き及んでおります。いかゞなされますか」

千浪の目は、吹っ切れそうに輝いていた。

「思いは同じでございます。千浪さま、ともどもに一時も早う」操は、すり寄つて千浪の手をかく握つた。その上に妙と鈴の冷えきつた手が重なつた。当時会津領内では、城、館、柵、墨のいずれを問はず、侍女以上の身分の女には、すべて、非常に備えて具足(袖、佩楯をのぞいた簡単な鎧)の用意があつた。

額ぎわから黒髪をきりつと締めた白鉢巻、咽喉もと深く合わせた襟の白さが、不断には見られぬ凜烈清爽の趣をただよわせた。一番小柄の妙は、中でもひとときわけなげさが目立って見えた。

既番が引きとめる隙もなかった。四人は、眉尖刀をかいこむと、夜陰を利し、馬腹を蹴つて大手門を駆け出した。すでに子の上刻(午前一時)をやや廻っている。馬は、狂いたつたように黒川街道を西柳原に、更に黒川を斜に突っ切つて蚕養、御原の一筋道を走りに走つた。あたりには、出陣の諸隊のざわめきに、緊迫の空気が異状にたちこめていた。

夜明け前——富田将監は湯達沢に陣し、義広の本隊は、布藤の高森山に達していた。一方、政宗は猪苗代を發して八ヶ森に進み、盛国を先鋒とし、片岡景綱を第二陣、伊達成実を第三陣、白石若狭を第四陣とし、本隊をその後につれて構えを深くし、吹浦の線にじり押して両軍の戦端が開かれた。



玉稿落穂集

—誌上に載らなかった—

原稿のことども—

編集部

玉稿落穂集を第一回第二回第三回と発表し

たところによると、玉稿落穂集にあるような原稿を挿絵入りで掲載しなければ、つまらないじゃないか、という読者通信が沢山参りましたが、編集部としましては全く同感です。

既に準備して直ぐ掲載出来るように手入した原稿。手間をかけて描き上げた挿絵等、掲載した暁は、どんな楽しい雑誌になるだろうかということを見ると、掲載したいのは山々ですが、種々の事情で意の通りにならないのは、読者の方々と共に残念至極に思います。今後、つとめて、玉稿落穂集で掲載洩れの方は紹介してゆきますから、せめて、これにて御満足して下さいよう願います。

扱て、前号に引き続いて、辻佳月子さんの

「蛇精」について述べましょう。

話は、浴室に於ける姿見大の三面鏡についてですが、それについて本文では、左記のよう書き記しています。

そして、そんな時、今の情景をそのまゝに写していた三面鏡があるのに気がつき、恥しさで一杯になる事も度々であった。

だが、私は時々妙な錯覚に襲われる事があった。それは夫と共に入浴している時、不図誰かに見られているような気がして周章て、我に返る事があった。

「どうした？」と囁やくように問う夫に、「私達の今やっている事をつくり誰かに見られているような気がして……」

夫は立ち上ってあちこち見廻わしたり部屋

の戸を開けたりするが

「誰もいないよ、莫迦だな、お前は」と引きかえす。

と云うような場面が、三面鏡の怪の一部ですが、これは、前回にも述べたように、この家の女主人時子の窃視症の一面をあらわすエピソードになるのです。

そして、次には、この話の中心になる大きな事件に突入してゆきます。

此処の家の女主人時子と私の間は益々親密になってしまった。私達の部屋は母家から廊下続きにはなっていたけど外出の時など一切母家を通らず縁側から降りて庭をよこぎり枝折戸を開けて門の方に行くのであるが、私はさも家族の一人らしく母家の中を通り玄関から出て行くようになってしまった。時子は私の事をはじめのうちは奥さんと呼んでいたがしまいに文江さんと云って名前を呼ぶようになって来た。朝五人が出勤すると待ちかまえたように私の部屋に来て話しこむ。私はその時の時子の眼が私に対して親愛の情を超えてきら／＼と情熱に光っているように感じる時があった。はっとして見直すと時子の顔は年令より十歳以上若くは見えたと元のとおり平凡な美しい上品な老婦人にすぎない。矢張り私の錯覚だ。——私はこう思った。

時子は滅多に外出しなかった。日々の入用のものは午前中に来る商店の御用聞きが届け

てくれるし、ちよつとしたものは、時々買物に出かける私が頼まれて買って来た。こんな広大な邸にたゞ一人、訪う人もなく静かに暮す時子が私にはひどく気の毒に思われてならなかった。

或日、私は夫のネクタイを求めに新宿に出た序でに時子の好むM屋のカステラを買って来て一緒に茶でも入れて喰べようと思つて母家にはいると彼女の姿は何処にもない。が外出した気配はないので邸中あちこちさがしたが、不図、これまで一度も私はいった事のない蔵の中ではないかと思ひ、飛石伝いに母家から離れた蔵の前に行くと、重い鉄の三重の扉の前に見馴れた時子の普段履きのエナメル草履がぬぎ捨てゝある。

「お母さん」と呼ぶとやゝ湿気を帯びた暗い蔵の中に木魂する。甲冑とか琴、三絃の箱など古い家らしい調度が雑然と並べられた奥にゆるくカーブした二階への階段の見られる。時子は二階だと思ふと半ば興味から半ば驚かさんと云う茶目気分で足音を忍ばせてのぼつて行つた。蔵の中は高い所に小さい明り通りの窓しかないで真暗ではないが、外部の光線に馴れた肉眼には見分けにくい薄暗さだった。あらゆるところに様々な箱、箆、長持とかその他色々のものがおかれた中を体を横にして通りぬけて行くと、一つの部屋の前に出た。中からぼうとした光線が洩れているの

は時子の持つている灯りであろう。

「お母さん」と呼ぼうとしたが急にいたずらっぽい気になつて、ドアを細眼にあけて中を覗いた私はあつと叫ぶ声をおさえた。

ランプに照らし出された部屋の中央に立っているのは、まさしく時子である。私は愕然とした。——というわけで、此の屋敷の主人時子の秘密を偶然の機会から盗み視してしまふことなるのです。この次に、上半身は女体で下半身は男身という、まことに珍しい身体持主である両性の時子のことが詳しく書かれています。そのところはいさゝか支障がありますので、飛ばして、蛇精と名づけられる時子の蛇に対する異常ともいふべき愛情について述べた箇所を御紹介してみましよう。

時子の足下に蠢くのは数尾の蛇であつた。時子は其の蛇の前にさながら王者のように傲然と立つて小声で何か云つてゐる。蛇は畏敬し切つてでもいるように時子の前を動かかなかつた。——時子の手の石油ランプの光りにぼんやり照らし出された其の光景は全く此の世のものとも思へなかつた。蛇嫌いの私は体中総毛立ってしまったてそれ以上見ていられなかつた。がくがくと震え乍ら逃げ出そうとした途端、かたわらの道具にぶつかつて大きな音をたてた。

「あつ！」

「誰！」中から時子の鋭い叱咤がはねかえつ

てきた。私は逃げようとした。ドアを開けた時子の顔の恐ろしさ。

「文江！」

「許して下さい……悪気で見ただけではないんです！」逃げる私に時子が迫り私のスカートをぐつとにぎつた。

「見たね、見たね、お前は到頭見たね。」

私の肩へ廻して来た時子の手は私をびくともさせない強さがあつた。ずるずると引きずられる部屋の中には恐しい闘志をこめた数尾の蛇が今にも私に襲いかゝろうとしている。「きやあ！」私は魂切るような悲鳴と共に時子の腕の中に倒れかゝつてしまった。

——恐怖のために失神してしまつた文江、さて、次に文江が気がついてみた時には？

何かしらひどい痛みで我に返つた私は、先刻の部屋の中に丸太ん棒のようにぐるぐる巻にして転がされている自分を見出した。私が気を失つていた時間というのは僅かであるらしく、時子は椅子に腰かけて煙草をすつていた。

端麗な眼鼻立ちから上品な衿脚、年令には似合はずふくよかな胸の乳房——という書き出しで、こゝで再び上半身女で下半身男という奇妙な人間、時子のことをくどくどと書いていきますが、これが、一見優雅なように見え、た老夫人の本態であつたわけです。で愈々、身動きも出来ず縛られて転がされている文江

の上に、この蛇精の女の執拗な触手が襲ってくるということになるのですが、その前に、時子が、今迄のナゾを少し解いてくれます。

あのうす気味悪い蛇の姿はもう側に見当らなかつたが向うの棚に並べられた箱、あの中に蛇が飼われているらしい。細くなった長い尾がちらちらして中で蠢めいているのがわかる。

「気がついたのかい？ 文江。」時子は私の様子を眺めていた。

「もう何もかもお前に知られてしまった。私はこうなると却って気楽になってしまった。私はごらんの通りのかたわものだ。そしてお前の大嫌いな蛇をこうして飼っているんだ。お前が私を軽蔑すればする程私はお前につきまとってやるから覚えておく、こんな因果者の私が何の因果かお前にほれてしまったんだ。私はお前が部屋を貸してくれといって私の邸に来る前から知ったんだ。私がお前をはじめて見たのは一昨年の夏新聞社で職場の美人と題して方々のデパート、会社の中のナンバーワンの写真を続けて載せた事があった。その時載っていたお前の写真にほれこんだんだ。それ以来私はお前に近づく機会を狙っていた。お前に恋人がある事がわかって私も私は驚かなかつた。必ず近い将来に私のものに出来ると思っていたから——お前達が結婚して

も家がないと云う事は私には全く勿怪の幸いであつた。そして家のない不自由さにたえかねて私の家にお前達が同居するようになったんだ」

私は別に猿ぐつわをかまされているわけでもないが、答える意力もなく呆然としていた太いロープでぐるぐるに縛られた体は身動き一つ出来ず転がされた儘だつた。

——引続いて、時子の述懐は、あの風呂場の姿見大の三面鏡のことに言及します。こゝで文江は初めて自分たちの入浴していた姿を、すっかり時子に盗み見しられていたということを知らされるのです。文江の驚き、それにも増して、時子が文江に懸想していたという告白の奇怪さ。こうして話の筋は益々佳境に入ってゆきます。

「だが、お前が妙な好奇心を起して、こんなところを見たのは、お前にとって不幸だつた。私はお前がこの私から離れる事が出来ないうようにしてやるんだ！」と云うなり時子は側らに下っているロープをひくとぐるぐるに縛られた私の体は其の儘宙に一尺二尺と上って行き、床上五尺位の所に天井からぶら下げられてしまった。時子はそれを見ると再び奇妙な声で笑い出し乍ら鞭のようなものを手にして来ていきなりそれで私の腰をなぐりつけた。私は痛さに耐えかねて悲鳴をあげたが宙に下げられた私の体はふらりふらりと動くだ

けに過ぎなかつた。だがどうしたと云うのにあるう。私は痛みよりも段々とうつとりとなつて来た。私は又失心したのである。

——「お前がこの私より離れることが出来ないようにしてやる」という時子の言葉の終るか終らない中に、行われたのは、文江に対する激しい加虐の手であつたのです。こうして一先ず失神した文江は、再び目覚めさせられるのですが、こゝで今迄のは、責めの序の口であつたということを、初めて思い知らされます。

彼女が失神している間に準備された、責めの趣向、そしてその責めの物凄さ、刻明をきわめた土蔵中に於ける妖しき饗宴は、二時間位も続いたでしょうか、この文章のクライマックス・シーンともいうべき箇所を割愛しなければならぬのは、まことに残念ですが、この「蛇精」が、この個所の余りにも露骨な描写のために、オミットになっているのですから、これも又、やむを得ないでしょう。さて、それから——

其の日、何も知らぬ夫は何時もの時間に元気に会社から帰って来た。食膳についた時、何時もなら時には夫からたしなめられる程多弁になる私なのに口数少なく夫から不思議がられる程であつた。二人で入浴するのは夫にとって楽しみであつたらしかつたけど、何時になく「今日お先きにすましてしまったの」

などと云う私を、多少不機嫌そうに見乍らだまって石鹼とタオルを持って浴室に入っていた。夜寝床を二つ敷いた私に

「どうしたんだ？」と驚いた表情をした。

「万一、ひとが入って来た時、いくら夫婦でも床一つに枕二つ並んでいる所見せるの恥かしいわ。これから二つずつ敷くわ。」私はこう云うと夫に背を向けて自分の寝床にもぐりこんで掻巻を深々とかぶった。枕許のスタン드의スイッチを切った夫は不平そうにごそごそしていたが、やがて規則正しい健康な寝息がかすかに聞えてきた。

——一度、時子の責めの洗礼を受けた文江の変貌を描いています。これから見ても時子のいう「私から離れる事の出来なくなる」責めとは一体どんなものであったのでしょうか想像もつくというものです。

時子の嗜虐の手を忘れられなくなった文江の、あの土蔵の中の一ときの想い出が語られそして、目に見えない糸にあやつられるように、時子の手元にひき寄せられて夫が寝入った夜中、寝床を抜け出すのです。

そして、あれ程嫌っていた蛇、時子の忠僕である蛇とも、いつしか仲よくなつてゆくという文江の変りようでした。それにもましてそれから、夜となく昼となく行われる土蔵の中のアブ遊戲、それは日一日と激しさを加えてゆくのでした。――

私の身心に現われる変化が夫に気づかれないう筈はなかった。夫にとっては驚く可き事であったであろう。彼は其の原因を知ろうとして鋭い注意を私にそして私の身辺に向けたけれどその原因はどうしても判らなかつたに違ひはない。又私は極力気付かれぬように努力していたから。

夫婦の間に秘密は、絶対にいけない事である。私はそれをよく知っていたけれど夫に秘密を持たずにはいられなかつた。私の冷淡きわまりない態度、夫の狂おしい焦燥し切った態度、あれ程蜜の如く濃やかだった私達の間には険悪な空気がたゞよい初めたのであった事荒立てるのを嫌いな温厚な夫も或る夜、我慢ならぬように妻らしからぬ私の数々を挙げ何かしらかくしている。原因を白状せよと詰問した。

「じゃ、貴方は私に恋人でも出来たと仰有るの？」

私は殊更冷たく笑った。

「だが、全くそうとしか思えないじゃないか？」

「じゃ、お聞きしましょう。その恋人は誰なの？ 私の恋人は……」

「それが判らないんだ！」

「それ御覧なさい。判らない筈ですわ。ないんですもの。私は一日中此の邸から一步も出ないで日を送る方が多いのよ。たまに出ても

附近の青物屋位に行くだけ。いつも此の邸にいます。筆不精の私はラウレターなんか書いた事がないの貴方も御存じの筈よ。それでいて私が恋人だの愛人が出来ているなんて誤解も甚だしいわ。莫迦にしないで頂戴！」

「成程、お前は此の邸から一步も出ていない邸の中は奥さんだけだ……」夫の眼はまだ疑惑に満ちていた。

「ほほ……」私は笑いで胡麻化した夫は釈然とせず苦り切った顔を外向けている。何という悲しい夫婦であろう。だが私は夫なんかより遙かに時子の魔力に魅了されていた。其の関係を少しでも永々続けるには極力夫の疑念を受けないようにしなければならぬ。私はその為にどんな嘘でも夫に云えるようになった。

——というふうに、文江の時子に対する溺れようは大変なものだったのです。昼は勿論のこと、夜でも、夫が寝につくと彼女は蒲団を抜け出して時子の部屋へ忍び込む位は平気になつてしまつていたのでした。なんとという変りようでしょうか。

然し、このような事が、いつ迄夫に知られないでいる筈はありません。遂に、その現場を夫に発見されるといふ事態に立ち至るのです。

この文江の責められる場面と夫と時子の活劇の場面は作者も相当筆を費して書いていま

すが、とにかく、そういったわけで、この蛇屋敷の物語は一応ケリがついてしまっています。そして最後に文江の左のような述懐でこの六十枚近い原稿が終りを告げています。

「それから一年たった後、私は夫と合意の上で離婚した。一度不貞を働いた妻は、再び夫の愛情に報いることが出来なかったというより、あの怪人時子の骨の髄までとろかすような魅力が、私をすっかり擱んで放さなかったからだ。

私は今年二十九才になる。精神的には前の主人を愛していながら、肉体的にはあの時子を慕っている自分自身の矛盾をどうすることも出来ずに悩んでいる。誰かこの私を救ってくれる人はいないだろうか。」と、

次には変わったところで、沼田扶二世さんの「羽村京子様への御便り」という便箋で二十数枚の手紙を御紹介しましょう。この手紙は最初の書き出し数枚は編集部への便りという形式で書かれています。そのところは、

「——私、今日、夜十時迄お客を一人とりましたので、もう後は自由なのでございます。たゞ今十一時を少しまわっておりますが、電燈の灯でこれを書いております。同僚の女の人達はもう寝た人達や（中略）いつか、きつと貴誌のような雑誌があれば発表したいと思っております私、それがかなえられそうない今、まったく期待と恐怖のようなものがいり

まじって複雑な気持です。でもこんな事を書いた位で雑誌にのせていただけるものかしらというあわい不安がたちのぼって参ります。

（中略）貴誌の記事中、本当に私にじっくり調和しますものは、数ある中で羽村京子様のものがございます。「狂い咲くカンナ」「京子の生活と意見」「妖花」等には全く魅せられました。一晩中、否二晩三晩……（中略）

この方の手紙は非常にあけすけに何んでも書いてあるので、どうもそのまゝ掲載出来ない箇所が多いようです。こゝで、沼田さん自身の生い立ちや身を落すに至るまでの一身上のことについて詳しく述べていられます。身長や体重、それに御自身の身体のことについても細かく書かれています。が、今、こゝでは割愛しておきましょう。

「なお小坂多美枝様も飛田におられるそうですが、一度お会いしたく思っております。」と書いて遊廓内の女同志の同紛や私刑、等についても書いてみたい、と洩しています。

羽村京子様への御便り、は「花咲く肛洞」と題名を書いています。

「羽村京子様、私、今日初めて投稿させていただく十九才の女です。職業ははしたないものですが、心まで汚れておらないと自負しています。お姉様（京子様）にこう呼ばせていただけないかしら（のお書きになるもの、とつてもすばらしく、その底にひそむ深い考慮と

知性とには感激し又尊敬しています。」

と、このあたり迄は無難なのですが、この次あたりから、そろ／＼沼田さんの本領が発揮されて、禁止事項が余りにも沢山出すぎてきます。大体が彼女の自分の身体のこと、或は同輩のこと、一緒に入浴したときの様子といった事柄が、歯に衣を着せずに書かれていくのです。婉曲さといったものが、いさゝかもないので、部分的な省略もきまません。次には、女学校時代の海水浴場での出来事それから、海水浴から帰途、学友達が一緒に入浴した事などを、思春期の乙女達の生態をいき／＼と描いています。

そして彼女が、女の身体のある部分に対して殊更興味を持つようになった過程を書き、ナルチズム的な心境から次第にそれが、他の人に向けられてゆく、実際の彼女の行動が述べられています。それは、彼女のお友達という、岡田志津子という人と、冬休みの或る日、彼女の家へ遊びに来たときの出来事から進展してゆきます。彼女の言葉に従えば、それは「浣腸責め」とありますが、その個所の発表が出来ないのは残念です。最後に編集部への言葉として、『編集部様、今日は又、無しつけない事を書きました。こんな告白載せていただけませんかしら、私、一生懸命書いたのです。真実です。云々』と、

（次号へ続く）

筆

随

アブノーマル・モノローグ

竹谷十三三

(一) 猥褻罪のこと

猥褻罪の名で罰せられた文学なり、芸術なりは、古今東西を通じて、いかに数多くあったか知れない。ヴィーナスを縛るには都合のよい罪名である。封建的な圧制政府の下にあっては、いつもこの罪名が天下を横行して居た。明治時代に黒田画伯の裸体画が公開禁止になった例を思い出さずとも、レヴューガールのズロースが股下何インチだと役人共が大騒ぎをしたのもついこの間の事である。今の若い人々は想像も出来ない程にバカらしい事が、法律の名の下に行われたのだ。私等が青春を楽しむ頃、ストリップショウと云うものは、パリー土産の天国嚙として以外は楽しむ

事さえ出来なかった。勿論、今のストリップが芸術かどうかは問題だろうが、女体の美しさを楽しむ自由が、一般大衆に許される様になった事は一つの進歩である。では、当時裸踊りと云うものが日本になかったのかと云うと断じて否である。上流階級は好きだけ楽しめたし、高位高官が待合や妾宅で行った事は猥褻罪以上であろう。だが、この罪名で縛られるのは常に人民であり庶民に限られて居た。元来、こうした法律が必要なのは、公序良俗のためと云う美名の下に、大衆から、美世界、言論、趣好の自由を奪い取るためにあるのだ。これは、支配階級にとっては、その支配権の尊厳を維持するために必要な事でもあるのだ。健全な人間の持つ性慾でさえ否定さ

(二) 変態的趣好と行動

れ、恋愛から夫婦愛に至るまで、恥ずべき行為であるかの如く教える事により、軍国日本を維持して来たのだ。戦時中、軍部や政府が万葉の防人の歌を取り上げ「醜の御楯といで立つわれは」とあたかも、あの時代の日本人が好戦国民の様に宣伝したが、実際は、万葉の防人の歌に、どんなに、「私は妻と別れるのが悲しい」とか「戦争に行くのはいやだ」とか云う歌が多いかをひた隠しにして居た。万葉の歌でさえ、当時は、勝手に都合のよいものばかりを集め、美しい恋歌を出来れば猥褻罪にでもしたかったろう。

何か惨虐な殺人事件が起るとジャーナリズムを始め、お茶坊主共に、口を並えてエロレヴュー、変態雑誌の悪影響と騒ぐ、一時代前に、映画が活動写真と云った頃、殺人、強盗の原因は活動にありとされた頃を思い出す。それは、兎に角として、実際に、惨虐行為を行なう者は、雑誌や本、映画等から影響されて居るのかと云う問題である。この点、私は、全く零とは云わないが、こうしたものの影響は、まず、問題にならないと云う説を持って居る。殺人犯が取り調べの時、訊問者の誘導にかかり、よく、こうした事を述べるが、実際は、エロ本や変態雑誌に無知な者こそ、行為として惨虐になると思う。その実例として

一般的に見て、過去に於て、この種の雑誌、本、絵画を自由に見られなかった時代には、惨虐な殺人がなかったかと云うと、答は、勿論否である。又、特高刑事が行う拷問、外地内地を通じ憲兵の行った蛮行、戦争による惨虐限りの殺人行為が、この種の雑誌の影響から生れたと云うのだろうか。天皇や国家の名の下に行われたものは別だと云う人もあるが、仮に、この点百歩を譲って、これを認めたとしても、継子いじめ、嫁いびり、女郎屋の主人の惨虐行為は、どこから生れて来たのか。つまりあらゆる惨虐行為は、変態的な文献、資料が公開されたからではなく、すべてを公開を禁止し、隠れたカーテンの奥でこそ常に行われて居ると云えるのだ。惨虐行為に無知であればある程、平気でこうした事が行われるのだ。女の縛られた写真を見たから、殺人を行う等と云うのは、百万に一つもないと断言してよい。特高刑事は、思想犯の女を縛り、乳首を火で焼いたのは、決して、そうした知識を得たからではない。寧ろ、逆に、乳首を焼かれる人間の苦しみに対して、無知であればこそ、こうした行為が出来るのである。ここに問題がある。変態心理を研究し、これに興味を持ったからと云って、他人の生命、財産、自由に暴力を加えねば済まない云う事にはならない。寧ろ、逆に、こうした事に興味を持ち、いろいろと研究する事は、

人間性の本質に触れ、深く人間性を愛する事になると云うのは、私の独断だろうか。恐らく、この雑誌の愛読者は社会人として善良であり、立派な人々である。家庭に於ては、よき、パパ、ママであり、青年、娘である。つまり、この種の雑誌を愛読する方からは、決して世に云う惨虐行為は生れないのである。私は、心から「鏡子ちゃん事件」の如き事を憎む、埼玉県のバラバラ事件を憎悪する。これは、趣好だ等と云える問題ではない。だが、これが行為となり、そこから起った殺人は常人でないものを見る。しかも、この殺人は、どんな理由をつけても許せるものではない。一体、変態と云っても、学問的にも、数多くの傾向があり、その度合も細かく分けられる。自分一人ですむ変態なら別だが、相手の必要な種類、例えば、サドにしても、マゾにしても（尤もこの方は一人で楽しんで充て出来るが）対人間関係があるだけ、そこには充分な相手方の理解と共感があるか、ないかの問題がハッキリして来る。一方の勝手気儘な暴力だけで生れる変態行為は、拷問であり、特に、人間性に対する知識、愛情を欠く場合は、誠に怖ろしい結果になる。これに比べて、例えば、ここに相愛の夫婦があり、夫はサド、妻はマゾであったとする。この場合相当、極度の行為が行われてもそれだけでは社会的に第三者に何等の迷惑もなく、その趣

味趣好は自由と云えよう。そしてこの場合は何等非難されるものでもないと思う。継子いじめ、嫁いびり、拷問、宗教裁判等すべて変態小説の材料として欠くべからざるものであるが、これ等の取扱ひも、「こうであつては困る」「こうあるべきでない」と云う深い人間的な愛情の立場で啓蒙的に取り扱われる場合は社会全体に対して、有利なものと云えるのではない。

（三）責めの表現

私は、何時も編集部の方々を悩ます下手な小説を書いて居るので、こんな事を云う資格はないのだが、何時も考える事なので書く。拷問の場合で、拷問される者の苦しみ、楽しみを表現する叫び声なのだ。「アッ……」とか「ウツ……ウーム」とか「ヒエ……」「ヒエ……」とか云うのが普通使われて居るが、どうも余り感情を現して居る文字とは云えない。読んでもそうだが、書いてみると、うんざりする。猿轡から洩れる呻めき声とか、乳房もくびれよと固く縛られた時に出る何と云えない声等、まだ責めの段階では、初歩であり、この時の叫び声は、どう表現してよいか、浅才な私には、何時も困ってしまうのである。「ウツ……」とでも云う以外にないのだろうか。「ヒエ……」と云うのは、実際は、苦しみより驚きの叫びであろう。又、「ヒイ……」と

云うのは、比較的よい叫びだが、どうも長続きしない。ヒイヒイ云わせる等と地の文では効果的だが、会話の中では使いにくい。それから乳房等に火をつけられりした時は、「ウワア！」と云う様な動物的な叫びになると、何と表現したものか。私は、以前に「告白」文を書いた様に、一応、実際に女の苦しむ声を聞いたものだが、何しろ、二十年以上も前の事なので印象が薄れてしまった。長い拷問の時には、「フウ！」とか「ハア！」とか云う溜息式の叫び声がある様に思う。誰かの文章に「ルツ！ルツ！」と云う表現があったが、これ等は、非常に面白く思った。

何にしても、責めの場面の表現はむずかしい。この点、何時も、小説の中の挿絵に越されしまう。自分の事で恐縮だが、五月号の私の「白面鬼」にしても、畔亭数久氏の画の方が、何と優れて居る事だろう。「白面鬼」は自分では、今迄の中で一番よく書けたと思つて居るが、とても、今になってみると恥しくなる。

私以外でも、小説より挿画の方が、読む者の心を捕える例は数多くある。これは、如何に、責めの場合が文字で表現するのが困難であるかの一例と云えよう。私は、常に仕置の場面が大切だと自覚しながら、筆を取るのだがそこへ来ると、描き方が「走り中風」の様になつてしまふのだ。「白いふつくらしした乳房

に針を刺した。女は『ヒイ』と呻いた。」——では、全く、どうにもならない。私は、この点、充分に自己批判して、もっとよい小説を書いてみたいと思つて居る。この新らしいジャンルに一日も早く、文学的に優れた作品がどしどし生れて来る事を切望して居る。

四 乳房の解放

堀口大学の詩に

へ乳房、男の最初の餌食、乳房、男の最後の渴、乳房、女の体のバルコニー、乳房、情慾の円屋根、乳房、女の体の月あかり、乳鳥、恋人のシャボン玉——

と云うのがあるが、女性美の中心が乳房であるのは、今も昔も変わらない。だが、本当に乳房の美しさが認識されるのは、女性が解放されなければ駄目だと思ふ。過去に於ては、女性の乳房は、一応、尊ばれた。しかしそれは、若い女性に限り、又子供を育てる道具としてであつた。妻が、女中であり、乳母であつた時代には乳房もミルク瓶以外には余り考えられもしなかつた。だから日本の女性には、終戦まで、乳房に対して、それ以外の事を考えてもみないのも当然である。娘時代から帯で固く締め、その發育を押さえ、貧弱な肉体を作り上げるのが、教育だつた。だから、乳房が大きいと云うので、自殺しようと言ふ人もあつた。尤も、今でも、あ

る女子大学の学生主事に聞いた話だが、乳房が大きくて悩んで居る女生徒があると云うのは、驚くと同時に全く悲しくなる。生れつき女性として乳房の大きい事は、こんな幸福はないのだ。今の日本人にとって、乳房が大き過ぎる等と云う事は決してないと思ふ。それなのに、まだ、封建的な考えが残つて居て乳房の大きい事は、何か恥しい事の様に女性自身が考えて居る。この事は、もっと啓蒙されてよい事なのだ。乳房の小さな人に対しては、近頃は、パットと云うものが、いろいろ出来て居るのだから、どしどし利用されたい。尤も、こうしたものを入れるより、本当は乳房自身を美しく大きくするために、努力すべきである。農村女性の多くは、若い娘の頃には素晴らしい乳をして居る者が、アツと言う間に衰れた乳房になつてしまふ例が多いこれは、日本農村の特殊な貧困さと過労の犠牲によるものなのだ。一方、有閑夫人、ザマス奥様達はどうかと言つと、これも貧弱な乳房をして居る者が多い。この事は、一般的に乳房軽視から来るもので、本来に健康で美しい体をつくる美容に対する認識不足から来て居るものなのだ。女は結婚したらもう終り等と言ふ考えは正に封建的思想である。この点男性の側にも自覚が必要である。女房の乳房は、子供のミルク瓶等と考へて居ては困る。美しい乳房が欲しければ、他にいくらも女

がある。なんて考えずにあなたの奥さんの乳房を美しくするためもう少し注意を払ったら如何ですかと言いたい。マッサージュから栄養食に至る、一寸した注意で、少なくとも、乳房を今の様にむぎむぎ枯す事のない様に出来るのだから。と言っても、その日、その日の生活に追われ、貧乏人の子沢山では乳房どころではないと言われる人もあろう。だが、決して貧乏だけが乳房を醜くして居るわけではない。鉱山で働く若い主婦の乳房を見給え、実に、美しい乳房を持つ人が多い。たゞこれを生活の疲れのなすまゝに置く、無理解さのために遂に衰れに枯れて行く結果になるのだ。勿論、乳房を美しくするには、貧困と過労から抜け出すことが第一に大切である。このために、多くの努力が払われるべきである。女性の解放は、その社会の文化の尺度にもなると言われるが、美しい乳房が解放され、太陽の下に公然と見られる時こそ、女性の解放の時でもあるのだ。

春から夏にかけ、女性の姿は一層美しくなる。薄いセーターやレースのブラウスの女が貧弱な胸で得々と歩いているのは、何と言う悲しい光景だろう。美容手術を受ける金はないとも、バットぐらいは買えるのだから、せめて外出の時だけでも、美しい乳房で歩いて戴きたいものである。これは世の中を明るくする一つの心がけでもある。青い夕暮れの街

が、美しい胸の女性が恋人と腕を組んで歩いて居るに出会う時、私は、本当に幸福そうだ美しい光景だと心で思う。昔は——私の青春の頃、恋人と腕さえ組んで歩けなかったのを思い出す。その頃、若い女性は、乳房に晒を固く巻き、着物の胸を気にして育ち、それが女性のたしなみだと教えられて居た。実に、バカな事だ。若し、今でも、そんな不心得な事を考えて居る人が居たら、その人の人生は全く気の毒なものだと言えよう。

この事は若い人だけでの問題ではないのだ。五十にも五十の美しさがある。肉体美は若い者だけのものと思つたら、大変な違いである。時代が進むにつれ、努力と注意で相当に若さを保つ事が出来るものだ。日本人の平均寿命も十年近く伸びた。唯寿命が十年長くなつただけでは何にもならない。若さと美しさを十年も、二十年も伸ばす必要があるのだ。そのために、女性にとつてだけでなく、男性の立場からも産児制限も絶対に必要で、乳房をミルク瓶として酷使しない事にもある。

乳房なんて、どれもこれも同じだと考える人は、人間を将棋の駒程にしか考えない人の云う事である。乳房は、顔と同じ様に、実に人により違う。年と共に違って来る。だが男の様に平らな乳房でない限り、必ず、美しい点があるものだ。パスカルの言葉に「人間の一人一人を区別出来ない者は、軍国主義者

だ」と言つたが、乳房の個々の違いと、その美しさに気のつかぬ者は、女性を人間として見て居ないとも言える。

電車に乗っていると、とても背の高い娘さんが増えた。私は、何とも言えない嬉しい気持ちでその女性を眺めるのだ。女性は解放されるとあんなにも伸々と育つものかと感心する。ローマは一月にして成らずと言うが、日本中の女性が驚く程、大きく発達した乳房を持つのも、決して夢ではないだろう。

(おわり)

〔編集部便り〕

○サディズム、マゾヒズム、フェチズムに関する外国からの資料が、少々入手出来ましたので本誌上か、或は本誌上に発表不適当なものは、特集号として御紹介する考えですから御期待下さい。

○絵物語のアイデアの面白いものが、大分送られてきておりますので、適当な俊英画家の筆を煩して完成したいものです。本誌とは別に、絵や写真をふんだんに盛った冊子を企画中です。その方に掲載になるかもしれない。

○編集部からの案内御入用の方は八円切手を送って下されば、新企画樹立の際は案内書なり目録なりをお送りいたします。



或るアクロバット・ダンサーの記録

「拷問に笑う女」

辻村

隆

五月 × × 日

ずっと降り続く雨だ。アトリエ中が湿めっぽくて、気が焦々する。

マキを縛る想念にのみ捉われて、ちっとも創作に力が籠らない。やいの／＼と急かされても、気分が乗らなければ描きようもない。

近頃のマキは、アトリエ内に縄が投げ捨てられた儘になつていても、すっかり気にしなくなつた。狎れて来たのかもしれない。

二人のこの遊戯の為に、俺は昨日、とうとう雇い婆さんを断つた。婆さんには気の毒だ

が、二人のこの何ものにも交え難いプレイには矢張り邪魔だ。マキが馴れぬ手付ですべてをやっている。だが、この広い我が家に、マキとたった二人ッ切りで誰憚ることなく、思う存分振舞える自由の前には、少々の不自由も忍ばねばならぬのは当然の事だ。

早いものだ。始めてマキを縛つたあの夜から数えてもう二十日程過ぎた。

月曜日の今日、もう雨で訪れる奴もないだろう。早い目に玄関に錠を下してマキの心尽しの夕食を終ると、あとは愉しい二人っきりの緊縛のプレイが待ち構えている許りだ。

人並に考え得る縛り方を、俺はすべて実施して見て、それがすべて見事にマキによって解かれていく――。

そうだ。たった一度、痛いとも云わず、ロボロ涙をこぼして、歯を喰いしばっていたことがあつたっけ。

肘掛付きの椅子へ縛りつけた時の事だ。木製の肘突きと、シートの合間へ、マキの体を俯伏せにしてぐいぐい押し込み、背と腰が肘掛けに圧されて凹んでいた。膝で曲げた両脚と、肩から背へ振じ上げた両手を一つに纏めてギリギリと縛り上げ、それを天井から吊り

上げて、体が三角形になる程きつく引き絞つて、椅子の脚が浮き上りかけた処で縄の端を結んで止めた。

別に首に縄をかけ、椅子の下を通して曲折する膝関節に巻きつけ、ぐいと髪を持上げた時、マキの喉はゴクリとなり、息がつかまるのか、口から唾液がダラダラと唇の端を伝って流れた。その時マキは始めて涙をこぼした。

「解いて御覧——」

俺はマキの髪の毛を離して、向い合った椅子に腰を降して、様子を眺めた。

精一杯頭をもたげ、上眼遣いに俺を見て、マキはニツと笑いを投げかけた。

ガクツと微かな音がしたと思うと、早くも片手が縛った縄から抜けていた。

俺に身を投げかけたのは、ものゝ三分も経たぬ煙草一本吸い終らぬ間だった。流石に背骨が痛むのか、片手を廻してさすり乍ら、片腕は俺の首に巻きつけてくるのだった。

こうして俺は辻村隆の書いた式の緊縛方法は勿論、他の小説家のものもすべて試みて見た。あの不可解極まる飛田良二の緊縛にしる畔亭数久の想像画にしる、すべてマキの前に立向えば顔色がなかったらう。

唯、彼等の小説によく現われる、緊縛以外の拷問や責めは、可愛いマキにはしたくなかった。けれど今の椅子縛りにしろ、それが

普通の女にとって見れば、拷問ではなかったと果して云えるだろうか——。マキにのみ通うするだけの話だ。

一度辻村に便りを出して、新らしい緊縛の試みを教えて貰うとするか——。奴、どんな顔をするだろう……。

(私の名前が出てくる度にハラハラしながら一日分を読み終って私は矢瀬弘から送られた日記の断片に思わず羨望にも似た溜息を吐いている。彼の日記はまだまだ想像もつかぬ奇怪な妖しさを漂よわせてつゞいている)

五月 × × 日

マキを初めて海老縛りにして見た。頭と、

【前篇の梗概】

中学時代の旧友、矢瀬弘から私(辻村隆)が受取った部厚い手紙、その内容は、緊縛フォトの構成をしている私でさえ、あつと驚く程の彼の私生活が細字でギツシリと書き残されているのであった。

彼は、終戦後一年程した頃、関西画壇に突如彗星の如く現れた新鋭画家であつたが最近、ゴシップや噂話によつて、彼が異常な私生活に没入しているということは、私も薄々は知っていたので、先頃、多少忠告めいた手紙を出したところなのだ。私も身辺の雑用に追われ、忘れるともなしに彼の事を忘れていた頃、この手紙がひよつこり

組み合せて縛った両脚がピッタリと密着していて、胴はまるで二つに打れている。

俺がもしこうして縛られたら、どれ程苦しみ悶える事だろう。勿論こんな体位にはなりそうもないが、この半分でも恐らく悲鳴をあげているに違いない。その癖、俺は常人に不可能な緊縛を、可愛いマキに行っているんだから矛盾している。

肉団子に尚もぐる／＼縛り上げ、江戸時代の拷問図にもない様な、怪奇な海老縛りをやと仕上げた

後手の縄に太いロープを通して、肉団子をアトリエの天井から吊り下げる。縛るのに丁度二十分かつてゐる——。

舞い込んだのであった。彼の便りというのは——。

東京のアルサロQを訪れて彼、矢瀬弘が見染めた女、それは、アクロバット・ダンスー牧由起子であつた。最初は彼女の交転きわまりないアクロのポーズを彼一流のシユールの画風を以て、カンバスに描きつくしたいという彼の念願ではあつたが、彼女の発するコケテツシユなサジスチツクな数々のポーズは遂に彼をして、緊縛という異様な遊戯を試みさせることになった。否彼の心の底には、以前から、この欲望が巢喰つていたのかもしれない。彼の緊縛プレイの世にも稀なる告白の手紙は、彼の日記帳の紹介になつてゆく。

「さあ——解けるかな」

まさかこれは解けないだろう。だがこれが俺の気持の矛盾した処だ。解けぬ様解けぬ様にと縛り乍らもし解けずに終ったら、俺の勝利となるが、マキへの約束の手前、一応緊縛は終止符が打たれる。口実がなくなるのだ。

だから、俺は解けぬ様——縛り乍らも、マキの超人的な肉体と手腕を信じて、マキならば絶対間違いない解くに違いないと心の片隅ではいつも考えているのだ。

マキは縄の奥から無理に微笑んで見せた。しかしその笑顔は苦渋に充ちている。

吊り下げた為か、腕首はビクとも動かず、マキの額には冷汗がにじみ出し、唇が紫色に変って行くのが分った。

じり／＼とあるかなきかに蠕動するマキの肉体から、一条、又一条、肩から腿にかけ渡した縄が、ずり下って外れる。

強靱な体力は、苦痛の限界を超越して、尚も頑張りつづけていた。縛られて両手で、吊り下げた縄をやっと握んだマキは、体を太いロープに托して浮かせ、腕にかゝるロープの力のゆるんだ処で、素早く片手を抜いた。

空間からバラリと縄が垂れ下り、身をゆすり、くねらせる度に、マキは縄から解放されていった。

空間におびただしい縄の残骸を残して、ボンとアトリエのフロアに降り立ったマキは、

体中をさすり／＼、今度は心から明るい笑みを俺に浴びせてきた。

縄目の縞は薄く色づき、桜色にシットリと汗のかいた肌はたとえ様もなく美しかった。

六月 × × 日

雨が降れば恐らく誰一人訪れてくる者もないから、俺達の遊戯は心おきなく行えて却って都合がい——。

詠えておいたマキのズボンが昨日やっと届いた。ズボンとも云えぬこの詠え品は、強いて説明すれば、中世紀のナイトが穿いている様な、あゝしたピッタリと肌にすきもなく喰いついた奴だ。真紅な色にスパンコールをきらびやかにつけた、このズボンは足の爪先まですっぽり隠れて、脚首の出口がなく先が袋になっている。

マキは眼を輝やかせてこれをはいた。上半身は裸の儘だ。

すぐ様、緊縛のプレイが始まる。

逆海老にそらせると、頭を股の間へ挿し込ませ、両手で脚首を持たせた。誰しもが簡単に出来ない、アクロ特有の芸当だ。

両の手足に、一分の隙間もない特別製の手錠を嵌める。指の合間にスポンジを挟み、五指を縛り合せた上へ、グローブ型の手袋（大風船で代用してある）をスッポリ被せる。両足にも、多少不似合ではあるが、綿をつめこ

んだ袋を被せ、足首で巾着の紐の様に、引きしぼってしっかりと結んでおく。

俺の絞りに絞った智恵は、かく変形して、マキの緊縛を決定づけつゝあった。

第一マキは緊縛を拒まない。たとえ解けぬ日が来ても、続けて俺の緊縛プレイに協力してくれる旨を誓ってくれたのだ。

だから俺は縄に変わる、こうしたものを作り上げたのだ。マキも敢えて縄を解かなくなつた。苦痛の限界がくると、俺に遠慮深く懇願する様になっていた。

こんなよい半身が又とあらうか——。従順で可憐で、潔癖で、窃究の雅妻は、俺のどんな無理にも拒むことなく、いつも優しい笑みをたゝえて応じてくれるのだ——。

だから俺は、この様な姿にしたマキの首に尚も鎖のついた首輪をはめ、アトリエを引曳り廻した挙句、ベッドの足に鎖をつなぐ。

そうされても、マキの顔は飲びに充ち溢れている。この不自然極まる姿も、マキにとってはさして苦痛でないのかも知れない。

六月 × 日

創作は今となつては、も早や、手につく処の騒ぎじやない。絵具は埃をかぶり、筆はかびが生えている。

いつしか、俺のアトリエは緊縛の遊戯場と化しつゝある。

画架は十字架の役を勤め、モデルの画壇はマキを料理する俎と変じ、中心にある真鍮棒は好個の縛り柱と化し、天井の仕切カーテンは姿を変えて、滑車、吊具に模様変えしていた。

それもよからう。俺は今本能のおもむく儘に行動し生活している。笑わば笑え。この広い世界に、こんなにも愉しい味を知っている者は、恐らく俺一人ぐらいのものだろう。

マキは絶えず、俺の健康を気づかってくれ。一ヶ月は保続すると云うッデボ男性ミを買ってきては射ってくれ、栄養のつく料理を懸命につくってくれたり、昼間に午睡と休養を奨めたり、到れり尽せりだ。

すっかり仲間もよりつかなかった。却って煩わしくなくて有難い。

いとしい女マキよ。俺は妻の有難さを泌々と噛みしめ乍ら、これから先、例え如何なる事が起ろうとも、マキを失うなんてことは夢にすら思いたくなかった。

七月 × × 日

マキへの緊縛が本格化するにつれて、俺は責める味を覚えた。激しい苦痛を与える責めではない。納得づくの責めだ。

昨夜は夜つびて、責めを加えた遊戯に耽ってしまった。

こんな朝は、俺は激しい倦怠を覚える。

それがマキとくると不死身で。肉体は以前にもまして強靱になり、肌は艶々と丸味を帯びて輝やいて来た。

そして相変らぬ柔軟運動の日課を続けている。きつと俺の為にだろう。それでなくては、何の運動の必要があるうか。

ズキ／＼する頭に昨夜の責めを想い出す。そうだ午後九時頃から始めて、ひとしきりマキのアクロを堪能した後、俺はアトリエの中心の真鍮棒に、マキの体を蛇身ながらに巻きつけた。両手は勿論吊つてある。

体をよじらせ、肉をきしませ、骨を歪曲してマキは巻きついていった。

真鍮棒を挟んだ両脚を後方で伝って最後の止めをさしてある。

何と云う壮観さだ。マキならばこそ出来る芸当だ。

この素晴しさを辻村隆に見せてやりたい。奴は驚いて腰をぬかすだろう。ざまあみろ。マキには不可能と云う言葉はないのだ。

換骨脱臼自在の女は、微笑んで蛇の様に巻きついていく。余りの素晴しさに、俺は紙をとり上げ夢中でこれをデッサンした。

今迄書き溜めておいたものを一纏めにして辻村隆に、責めのアイデアとして送ってやる。

辻村隆は、いつかこうしたアイデアには不可能があると云っていた。けれどもそれはマ

キを知らぬ者の云う事だ。

「苦しかったわ……少し——」

これがその時のマキの言葉だ。どうだ。ナポレオンとマキは不可能の言葉を知らないのだ。

七月 × × 日

マキを知らぬ輩には話にならぬ。折角送ってやったアイデアに対して、編集部の方田と云う男から、簡単な礼状の文句の外に、事実上無理との通り一ペンの挨拶だけだった。大した説明をつけなかったので無理もないが、俺は不可能な事は描かなかったつもりだ。昨亭や、飛田式の想像の空想画と同様に貰っては、大いに残念——。第一マキが可哀想じやないか。

第一彼等は余りにも猿轡を使いたがり過ぎる。俺もアクセサリーとして、猿轡を使うことなきにしもあらずだが、事実上マキの場合には必要だ。マキは苦痛の呻き声、叫び声はあげない。時として嬌声、歓声は挙げて、それは大いに俺の希む処だ。

苦痛の呻きをあげるのを恥としているマキだ——。そのマキに何の為の猿轡か。

俺は緊縛や責めの時に於ける、マキのあの笑み綻ぶ頬の窪み、洩れる皓齒、唇のそよぎを、どれ程賞でているか、彼等は恐らく知りもすまい。

どこ迄もマキは美しくありたい。

俺はそんな気持ちで全身をピッタリと包む、金色の肉襦袢をつくった。この縫いぐるみをつけた時、マキの身体は、そっくりその儘に浮き上り、金色の肌をひらめかせ乍ら、くねり、からみ、うねるマキの姿はニンフの化身さながらに、この世のものとも思えぬ美しさを惜しみなく撒き散らしていた。

ころを計って俺はマキを呼ぶ。彼女は逆立ちで鮮やかに俺に近付き、トンボを打って立ち上る。

俺はそこへマキを仰臥させ、脚首に縄を巻いて、アトリエの周囲を通るスチーム管に強く引張って結びつける。俺はマキの首に縄をまきつけ、締らぬ程度に結び、後方に廻って両手を縛り体を起すと、グイ／＼押えつけて前に屈ませて行く。

常人では出来ぬ緊縛の拷問の極致だ。

脚首が振れ、腿は波打つ。マキは素早く股に頭をくぐらせている。尚も持ち上げるにつれて、膝の関節は奇妙な微音を立てて外れる俺は遠慮会釈はしない。

「痛い——？」

マキは唯黙ってニツと微笑んで見せるだけだ。この刹那の愉しき——。

可愛い、いとしい女マキ……。俺はマキなしでは、恐らく一瞬たりとも生きて行く甲斐もないだろう。マキの死は、きつと俺の死を

意味するに違いない。

この瞬間——。二つ折れの胴。逆転する血液、脱骨の関節——、マキとて苦しいだろう——。それでいてマキは優しく微笑んでいる。俺はしかも、飽くなき執念で、愛の鞭をふり上げる。この瞬間だけ、マキは苦痛に顔を顰め、軽い呻きを発するのだった。

鞭打ちも、マキの許諾の下に、既に一週間前辺りから日課の一つに加っていたものだ。

八月 × 日

締め切ったアトリエは蒸し暑い。扇風機がブン／＼唸りをあげて、前後左右から絶えまなく人工風を捲き起して、蒸れた空気が逃げ場を失って、いつ迄も激み乍ら吹き続けられている。

一尺五寸四方の黒塗りの小箱に、今俺はマキを閉じ込めた。

先程、魔法使いの様に、マキはこの小箱にスル／＼と這入り込み、蓋の小穴から、吐く息が微かに聞えてくるだけだ。

暑さにうだって、シャツ一枚になった俺は、小箱を十文字に縛って吊り上げ前後左右に大きくゆすぶり続ける。

ガタゴトとフロアに転がせて、時にはサイコロの様に角を立てて力任せに廻す事もある。それでも、蓋を開くと、上気した顔で、マキはいつも元気よく飛出して来る。

小穴の無数にあいたナイロン袋に押し込むと、透いた袋の内側で、畸型児の様に体を丸めたマキは、玉の汗を浮べ乍らも、私に笑みを送ってくる。

袋の口を結んで吊り下げ、その上から鞭をふるう。当りどころが悪いと可愛い眉をひそめ、マキはいや／＼をして見せる。

袋の口から待ち兼ねた様に躍り出た、この牙のない可愛い牝豹は、一気に走り出し、勢よくシャワーを浴びると、濡れ鼠になって引返し、勢よく調子をつけてパツと跳躍すると、見事なアクロのポーズをとる。

九月 × × 日

俺は決して惜しいとも残念とも思っていない。しかし蓄財の半分以上、いやもう八分通りまで使ってしまったのは事実だ。

この数ヶ月仕事をするどころか、日夜耽溺の生活を続けてきたのだから当然の事だ。

マキにはこの事は云わずにおこう。心配するといけないから……。

そのマキは、今俺の眼前で、人間車になってゴトリ／＼とフロアを右に左に転がっている。手足の緊縛が強かつたのか、転ぶ度毎に縄目が手首を押えつけて痛そうだ。

乳房が歪む。肋骨がきしむ。轍の中へはまり込んだ頭は苦しそうだ。

轍の跡がついている、汗だ——。

それでもマキは俺の止めるまでやめはしない。何時までもつゞけているに違いない。

俺は近頃、こんな事でいゝのかとフト思う事がある。幻想も夢想も総て実現し、余りに幸福すぎて、眼に見えぬ破滅の鉄槌が、いつか俺の頭上に降り下されそうな懸念に捉われる。

仲間は愛想をつかして誰一人として近寄らなくなった。辻村隆が昨日忠告めいた手紙をよこして来た。無理もない——。彼は親切な男だ。

物慾のないマキだが、時に好むものがありとすれば、金目をつけず購なつて来た。

親譲りの財産が泡沫の様に消えて行く——何とかしなければと焦りつゝ、マキと二人で居る限りどうにもならない俺だ。

マキと暮して既に半歳、その間俺は何もしていない。だがマキは何も知らない。云わなからだ——。

あのモナリザの微笑みが続く限り、俺はどんな事があつてもマキとは片時たりとも離れられない。

俺は悩む。矢張りゆかねばならない。マキの為にも。

十月 × 日

責めや緊縛の明け暮れ、拷問の様なこうした遊戯を仲間は何と思つてゐるだろう。

これが俺達二人の総てだと云う奴もいると噂だ——。

でも俺はマキを喜ばす為、又教養も身につけて欲しいと、演劇に映画に、音楽会に、そして偶には温泉にも、金と時間の許す限り連れて行くのだが……。

外面の睦まじく愉しげな夫婦は又、内面の二人っきりの時間に、それ以上の愉しがるべき時間を送つてゐる筈だ。当り前じやないか——。

マキも薄々気付いてゐるのか、俺の胸に顔を埋めて、俺の為なら死んでもいゝとまでさえ云つた事がある。

そうだ。マキの為に何もかも蕩尽し終つたら、潔よく心中でもするか——。

俺達の結末として、案外それがふさわしいのかも知れない。

十一月 × × 日

遂に住居が抵当に入つた。アトリエの生命も後幾許ぞ——。

破滅が近づくにつれて、マキへの愛著と恋情は狂おしい迄に燃え上つてくる。

この二人の自由の世界も纏ては他人のものになるに違いない。

俺は未だマキになにも知らせてはいない。

そして消え行く残り少ない財産（もう不動産と云つてもこのアトリエだ——）を守る氣に

もならない。

反比例して、マキとの狂的な遊戯は、休む間もなく続いている。

俺はマキにすっかり、マゾの感情を植えつけてしまった様だ。

それでいゝのだろうか——。

十一月 × × 日

明日は愈々アトリエが他人の手に渡り、俺達は即刻立退かねばならない。とうとう来る処迄辿りついた様だ。俺にはそれでも未だマキと云う得がたい唯一の宝が残されている。

でも、マキは此事実を知つたなら、何と云うだろう。それが怖ろしくて仕方がない。

俺は今にして始めて知つた。激しい拷問以上のあの数々の緊縛や責めも、マキにとつては、快よい陶酔感をもたらすに過ぎなかつた事を——。

不死身のマキが、真底からの苦痛に悶え、呻きをあげ、叫喚する時は、彼女の死を意味する時ではなかつたらうか——。

今迄行つて来た数え切れぬ遊戯にも、彼女は真底からの苦痛を感じてはいなかつたのではなからうか。それは勿論、マキに苦痛を与えるのが目的でないと云う俺の存念から、手加減したせいもある事にもよるが……。

奇クに発表されてゐた鼻障子に穴をあけ、針を刺し、指や皮膚を焼き、灸を据え、乳を

切る等の事をすれば、マキとても苦痛を訴えるだろう。しかし一旦損傷した体が、再びもとの如く痕跡すら止めず美形を保ち得るかどうかが彼等は、その事を考えた上で行ったことがあるのか——。

愛する者を損傷して、取返しのかね傷だらけの身体にして迄、愛し続けて行けるものかどうか——。

愛する者は何処迄も美しく健やかでなければならぬ。美しければこそ激しい身を灼く愛著を感じ、魅了され、嗜虐感情を覚える事も出来るのだ。廃人化した女の醜さ、あわれさ全身加虐の傷に蔽われた時の果敢なさ。それは考えただけでもゾッとする。

愛する女の美しさを損傷する責めに何の意義があるか云うのだろう——。

併し俺とても小説をよみ、マキに屈辱感を与えようとして、アトリエ内に便器を持込んだ事もある。でもこれはマキにとっても嫌悪以外の何ものでもなかったし、俺にして見ても後味の悪さ、不気味さを感じただけであつた。

羽村式にA感覚に責めを加えた時は、流石にマキは羞恥に全身を染めた。

この羞恥こそ、或る程度俺の希むものでもあったが、所詮こうしたA感覚も、アクロに比して如何程秀れているかと対照して見た時やはりアクロに較べると愚劣極りなかった。

第一美がない、幻想がない、夢がない。羞恥の殻を突き破るに過ぎない行為ではないか。マキの様に特異体質でない並の女共に、果されぬ慾望の終結として、彼等はA感覚に没入し、損傷の残酷性を發揮する事によって、辛ううじて、俺がマキに行う超人的責めの、何分の一かを果して、満足しているに過ぎない。と俺は思うのだ。

彼等よ。如何な女を相手にしようとも——逆海老縛りで吊った事があるか？。肉団子にして、雪達磨の様にゴロゴロ転がした事があるか——。小さい箱やナイロン袋へ押し込め得たか——。梢を渡る蛇の如く、体を巻き絡みつかせることが出来たか——。人間タンクが成し得ると思うか——。総てはノウであらう。

想像、空想の産物の、絵空事を實現出来た遊びを、恐らく誰も味わいはすまい。

マキにはそれが出来、俺は又それを行って来た。

それにも況して超人的なマキは体を二つにそって折り曲げ、背中と腰をピッタリ合せて太腿を首へ巻きつける事も、あぐらを組んだ両脚を縛り合せて、その中へ首を押し込み、脚首に両手を縛り合せて、二つ折れの胴に口——を巻きつけて吊り下げること、その他、想像し得る如何に奇怪なポーズも、マキは易々として行えるのだ。

そうだ。俺は何を語ろうとしていたのか。明日人手に渡る筈のこのアトリエで、我等の最良の善夜を迎えるべき筈ではなかったか。雅妻をアトリエに迎え、俺は遂にこれ迄の逼迫した破産状態に至る経過を知らせた。

マキは首垂れて聞いていた。それからポロポロと大粒の涙をこぼして静かに泣き、円らかな眼からは止め度なく涙が溢れた。

突然にマキは俄破と俺に力限り縋りついて来た。

秋風の隙間洩るガラシとしたアトリエで、俺達は抱き合った儘、うつゝの様に、唯死のう死のうとつぶやき合っていた。

だが、死ぬ前に心残りのない様に、俺はマキに最後の嗜虐の言葉を投げかけた。

「マキ、思いきり虐めさせくれ。緊縛のプレイでも、官能の遊びでもない。真底から、虐めて虐めて虐め尽したいのだ。この僕の気持ち分ってくれるだろうか——」

俺はこの時になって、始めて虐めると云う言葉を使ったのだ。

マキは判っきりした声で、涙に濡れた顔を挙げて、淋しく微笑んで云った。

「いゝの、どんなにされても。うんと虐めて——。いっそ幸せな今の儘、貴方に虐め殺されてその儘死ねたら、どんなに嬉しいか知れないわ。どんな非道い事なさってもいゝの、こうなったのも皆んなわたしのせいなんです」

もの。うんと虐められるのが当然ですわ——」
「マキのせいじゃない。又そんな事で虐める
のでもない——」

「云わないで。わかっておりますの、貴方
のお気持の何もかも……」

「嬉しいよマキ——。僕は世界一の幸福者だ
つたよ。喜んで虐められてくれるね。」

「ええ、どんな事でも」

それが俺の最後の切札だった。

嘗ってマキの為大金を投じて作った。あの
金色の絹の縫ぐるみを着せ、見納めになるか
も知れぬ、マキの次々と演じるアクロバット
に魂は奪われ、俺は呆然とフロアに踞まって
眺めていた。

俺はマキを其の場に押転すと、いきなり鞭
を振った。悲しさが一時にどっとこみ上げ、
俺は泣き乍ら、激しく、より激しく、更に激
しく満身の力を籠めて、所嫌わず、マキを叩
きつづけた。

「マキ、笑ってはいけないのだ。声を限りに
呻け、喚け、叫べ。大声を挙げて泣くのだ。
哭き喚くのだ——」

鞭の手をハタと止め、俺はアトリエの隅に
かけよって、黒い小箱に納めてあったありつ
たけの縄を、山と抱えて持ち出して来た。

頭のとっぺんから足の爪先まで、縄の上に
又縄を、更にその上に又縄をかけ、縦に横に
斜めにと、マキの体をギッチリと縄で埋めて

縄達磨にした。鼻は曲り、唇は歪み、頬はね
じれて、縄の中のが辛ううじて喘いでいる顔
脚首がどこに位置するのか、手がどこへ消え
たのか、糸まりそっくりのマキは血管を圧縮
されてしきりに呻き出した。

俺の血は愈々狂暴に燃え上る——。

「泣け——」と喚いて、カンバスも折れる程
に殴りつけ、

「喚け——」と叫んで、ベッドに抛り投げ、
「叫べ、呻け——」と怒鳴り乍ら、手当り次
第のものを、縄達磨になって転がるマキに投
げつけた。

花瓶は壊れ、絵具は散乱し、ライトは粉微
塵に飛び散り、絵具は折れた。

マキは始めて、ヒイヒイと泣き叫び喚き、
苦悶の悲鳴を挙げつづけた。

愛用の「ホワイトホース」を驚愕みにして
残り少ないアルコールをガブガブあふると、
俺は尚も荒れ続け、既に絶叫と化したマキを
虐めに虐めた——。

フト、マキの絶叫が止んだ。

俺はパレットナイフを手にすると、ズタズ
タに縄を小間切れにした。全身を真赤に染め
打撲と縄傷がくまなく蔽うマキの体を縄の山
の中から引曳り出し、気を失ったマキを静か
に抱き上げた。

それから数時間——。

やがて夜が明けるのか、遠くから省線の一
番電車のわたちの音が微かに響いてくる——

俺達の心中が、三面記事を飾るのも、今日
明日の事だろう——。

日記を読んでくれただろうね——。

辻村君、それなのに僕等はやはりこうして
生きていく。どうしても死ねなかつたのだ。

マキは云うの。どんなに貧しくともいいか
ら、二人でひっそりと地の果てでも暮して行
きたいとね。

マキはさめざめと泣いた。何時迄も何時迄
もあの拷問に笑う女が泣きやむ術も知らず、
泣きに泣くのだ。死ぬのを怖れてではない。
二人の歓喜と愉悦が、今日を限りに終るの
が悲しいからだ、泣くのだ。

マキは僕の死の誘惑に対して、あの従順な
女が、血痕のこびりついた体で僕にしがみつ
いて、どうしてもがえんじないのだ——。

世間を知らぬ僕達の、新しい発足は恐ら
く苦しく、荆の道だろう——。

マキはもう一度、フロアシヨウに出ると云
う。僕も遅蒔き乍ら、新規蒔き直した。

もう一度絵を励みたい。自我を捨て、挿画
もかくつもりだ。僕のこの経験を生かして、
親愛なる奇譚クラブの片隅の一頁に、いつか
君の小説の挿絵を発表出来る日もある事だろ
う。

肉体の亡びる日まで、僕等夫婦の愛情——
責めと緊縛の愛情——は永久へに続いて行く
事だろう。

では左様なら、辻村君——。

矢瀬 弘 拜。(完)

〔今月の新版〕 代理部特写真集

□薄手光沢印画紙使用

大きさ(タテ 九センチ
ヨコ 十三センチ)

緊縛女体のフोट

二枚一組	一五〇円
三枚一組	二〇〇円
四枚一組	二五〇円
五枚一組	三〇〇円
六枚一組	三五〇円
十二枚一組	六〇〇円

今月の新しい写真集、十六組を御紹介いたします。前月号発表の分に引続いて、多少に拘らず御注文下さるようお待ちいたします。全部送料共のお値段です。

CS1 美しき惨虐物語

ヤンチャ娘：春日ルミ嬢
内気な娘：伊吹真佐子嬢

(シリーズ) 十二枚一組

こゝは、春の陽がさん／＼と降りそぐ或る公園の一角である。一人のヤンチャ娘がブラジャーに

パンツ一つという勇ましいいでたちで一人の豊満な肉体の娘をいじめていた。後手高手小手、首縄、猿ぐつわと、身動きならず縛られた娘は、尚もヤンチャ娘のあくなき惨虐の手に翻弄されてゆく。実際に、この一コマを撮影する時には見物人が沢山集ってきて弱ったものである。

サド、マゾのいずれも満足させる最新撮影のシリーズ。

CS2 裸身の嬌羞

須川令子嬢 三枚一組

二十才の裸身に春の陽を浴びて肌にきつく喰い込む麻の縄目、痛さに耐えながらも、尚、乙女の羞らいを見せる令子嬢は、柔肌に砂の喰い入るのも知らぬげに流し目をふりまくのであった。

従順で人なつこい彼女は、指定するどんなポーズも、嫌がらずに易々ととってくれた。後手に縛りあげたまゝ、一丁程の山道もハダシで歩いてくれたのだった。

CS3 セーラー服の見世物

雪井久子嬢 六枚一組

変転滑脱、柔軟きわまりない久子嬢の長身を、高手小手に縛りあ

げて鏡の前でポーズをとらした五つのポーズ、猿ぐつわしたものの三ポーズ、しないものの二ポーズ、床柱に後手に括ったもの一態、苦痛にゆがむ顔の表情は、演出したものにあらず、たくましく出てきた嗜虐の表情である。

CS4 豊満への攻撃

伊吹真佐子嬢 三枚一組

余りにも肉づきのよい玲瓏な女体に相遇すると、サディストならずとも、男性である以上、サディスチックな攻撃欲にかられるものだ。シミ一つない豊満な姿態を御意のまゝに、と放り出されたら、彼女の全裸のヌメの肌に、如何なる縄の暴虐がたけり狂うであろうか。グル／＼巻きにガンジガラメに縛りあげるであろうか、そして又、如何なるポーズをとらすだろうか。サディストの見果てぬ夢を實現した「豊満への攻撃」

CS5 素足の色気満点

佐賀美智子嬢 三枚一組

和装の高手小手、猿ぐつわ、足首に掛った紐は、股から胸、首へと通って着物の裾を乱す。紐に引っ張られて、反りかえった足指の

表情は、紐を使わないでは到底出てこないサディスチックなものである。

CS6 排泄の強要

中塚文子嬢 四枚一組

(この分は特に三百円)

新人、中塚文子嬢の再び登場、場所を洋風のトイレに運び、すべて狭い便器の上で、ポーズをとらした稀少な一篇、前回の強烈股間緊縛で好評を博した中塚嬢が、更に新生面を拓いた緊縛マニアも流腸マニアも必見の緊縛フोट。

CS7 悪鬼の仕打ち

杉 美美嬢 二枚一組

(この分は特に二百円)

両手を揃えて吊り上げられた一糸まとわぬ全裸のポーズ、全身をくねらせて身を守ろうとするが、悪鬼のような男の右手にしたムチは情容赦もなく、背中に臀部に、太股にサク裂する。あゝ、いたましい白いけにえのもたえ。

CS8 ガンジガラメ吊り

萩千恵子嬢 二枚一組

全身グル／＼巻きに身動き出来ない迄に固く縛り上げられた千恵

子嬢の足首と胸に、縄が通されて天井から吊り下げられた二つのポーズ。悦虐モデル萩嬢ならではの緊迫した雰囲気、普通のモデル嬢だったら「吊る」といっただけで尻込みしてしまうのだが、萩嬢は自分から進んで、この吊りのポーズを申し出てくれたのであった。

CS 9 芋虫コロコロ

厚狭春江嬢 二枚一組

どたり、とポリラムのある厚狭嬢の全裸の姿態は、むく／＼と固ぶとりに肥って、芋虫のように全身グル／＼巻きに縛りあげても、恰かも縄を弾きかえすような張りを持つている。この白い女身の芋虫は、コロ／＼と転しても、一向にその重量感におとろえを見せなかった。

CS 10 パイプ責め

菅登紀子嬢 四枚一組

髪をリボンで飾った可憐な娘さん菅登紀子嬢、パイプに片足を上げて縛られ、両手を揃えて縛られる。まだ縛られることに馴れきっておらない彼女の、なんとないぎこちなさが、殊更、可憐さを増しているようだった。

CS 11 女悪魔の暴力

女悪魔：春日ルミ嬢

いけにえ：伊吹真佐子嬢

シリーズ 五枚一組

片眼の女サタンが、見事な脚線美を見せて、無力な小羊に向ってその身ぐるみを剥こうとする。はかない抵抗を続ける小羊は、身にもとう最後の肌着さえも裂かれて今や、哀れな縛しめの身となり、悲しい救いの叫び声は、猿ぐつわによって絶たれてしまった。女サタンは微笑んで愈々小羊の最後の料理にとりかゝろうとするのであった。

CS 12 女の禪美

伊吹真佐子嬢 二枚一組

女性の禪美フアンと、禪美の緊縛フアンに比べて、この二枚を捧げる。二枚共、従前の禪姿と違って野外に於けるポーズである。一つは縛りなしの禪美、一枚は緊縛の禪姿のものである。

CS 13 雨の夜のプレイ

萩千恵子嬢 三枚一組

時雨のそぼそぼと降る或る秋の

夜のことであった。突然、編集部を訪れた萩千恵子嬢は、今夜は思いきり、きつく緊縛してほしいというのであった。裸になるのには既に肌寒い雨の夜であったが、彼女は何のためらいもなく、着ていたスーツを手早く脱ぎ捨てるのであった。彼女の持っていたアイデアは、どのようにこのプレイに活用されたであろうか。

CS 14 ショー出演

萩千恵子嬢 三枚一組

萩千恵子嬢の出演によって緊縛マニアの会合が催された時のことであつた。ラストの余興で、愈々今日の会合の呼物、緊縛マニアの方々のお好みの縛り方、ポーズをとってみせるというショーが行われた。萩嬢手製の水玉模様の紐と猿ぐつわ用の布片とが出題者に渡された。萩嬢はお揃いの同じく水玉模様のブラジャーとバタフライだけを着けたまゝで、いさぎよく責めの祭壇に昇るのだった。この日に行われた責めのショーの中で最も卓越した凄じいポーズを三枚ごらんに入れる次第。

CS 15 女体の荷造り

女荷造人：春日ルミ嬢

女体の荷物：伊吹真佐子嬢

股間しぼりなんか全く問題ではない、といわれる、これは又変った女体の荷物、身体をタテからヨコから亀甲型に嚴重な荷造り、そして又、荷造り役のルミ嬢が真剣な顔つきで、この十数貫の大きな荷物をどうしてやろうか、と思案顔、荷物は只、縄目の痛さをこらえるだけで精一杯である。

CS 16 四モデル特選集

萩嬢、高瀬嬢 四枚一組

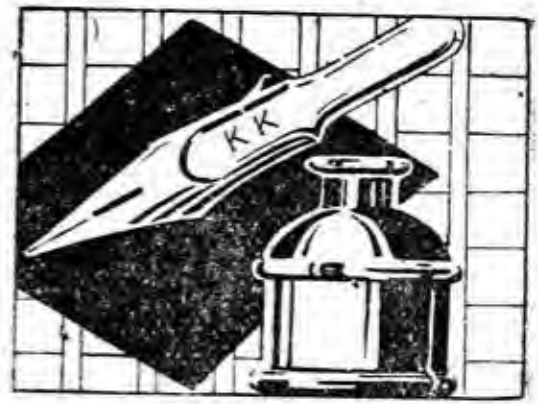
杉嬢、伊吹嬢

本誌の代表的四人のモデル嬢の顔見世ポーズ、いずれも嚴重なる高手小手のまゝ正面を向いて、その顔貌をはっきり皆さんの方へ向けているものばかり。どうか、この緊縛嬢を存分に可愛がってやって下さい。

(以上)

◎御注文は符号だけを書いて下さって結構です。

◎御送金次第、嚴重荷造りの上急送申し上げます。



【読者通信】

貴誌の再復刊を衷心から嬉しく思います。内容については、色々な制約があると思われ、必ずしも満足ではないがこの程度でやむを得ないかと思えます。小生としてはどんなさやかなものでもよいから何とか発刊を続けて折角こゝ迄育つて来た根を絶やさないようにして頂きたいと思えます。又、我々としても是非共に協力し育生して行かねばと思つて居ります。四月号ではサド愛好者から編集部へ大分苦情が述べられていますが、我々男性マゾ側から云えば男性サド的記事なり絵画は何も本誌の専売ではなく、映画でも雑誌でも沢山出ている筈で、我々としてはそんな個所は全く読まず無くもがなと思いつつも編集者の立場

も考えて現在位の所で妥協し我慢しているということを申添えておきます。それにしても四月号には沼正三氏のマゾ手帖がのつていないのは何よりも淋しく思えます。マゾ文献として貴重なもので我々として最も期待し且つ利用しているもので、何は措いても続けて欲しいものです。それから森山美歌様、乗杉貴代子様等輝ける女王様方の玉稿を期待してやみません。長瀬白木、戸破様以来しばらく杜絶えて居りましたのに、この四月号で神戸の原様という新しいサジスチンが出現されました非常に嬉しく存じます。男性マゾは相当沢山居るようですから御遠慮なく御用命下さい。真物のマゾヒストは自分の尊敬する女王様に対して無礼を働いたり女王様の殿を傷つけたりするとは決してごさいません。若しそれでも御懸念でございますれば、予め手足等をしつかり縛つて全く自由を奪つておいて、女王様の思召のまゝに、馬にでも犬にでも奴隷にでも自由に御使役なさつて下さい。私は五十才に近い生れながらのマゾヒスト、身長五尺四寸、十七貫の小肥りで無理はできませんで健康体東大卒で社会的地位もでき金銭的にも不自由はして

居りません。二人きりの場合は別として、世間的な体面や秘密を重んじて頂ける清潔な方ならばどんな様でも又何時でも奉仕させて頂きとうございます。原様は神戸におられますので中々実際にお会いすることは困難かとも存じますが文通でも頂ければ光榮至極に存じます。東京にも沢山のサジスチンの方がおられることゝ拝察致しますので何卒御文通なり御交際願えれば無上の光榮と存じます。マゾフオトも大分入手しましたが春日様の演技は女性に対する場合はそうでもありませんが男性に對する場合物足りなく感じます。もつと手きびしくやつて下さい。マゾフオトに對する注文としては、いじめられる男は顔だけ出して首から下は、犬なり猫なりのぬいぐるみを着ているか、又は女装をして（但し顔だけは男と判るようにして）いるのも面白いと思えます。又、春日様と小沼氏という両方とも男女の別が我々にはつきりしている場合には、女が男の服装で、女装の

○読者通信をお寄せ下さい
読者通信欄は孤独に悩む方々のこよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守りますから、御安心の上、御遠慮なく、ドシドシとお寄せ下さい。

男をいじめるといふ倒錯の場合も面白いと思えますので一度試みて下さい。

（東京、敬愛生）

復刊第二号に就いて一寸希望を述べさせて頂きます。記事、内容は申し分ありませんが、何より小生にとつてもものたりなく存じましたのは、従前の如き豊富な挿絵が少いことでした。丁度食事の時にお茶がなくて主食だけ並べられたようなもので、何んとなく味気ないような感じが致しました。記事は多少削つても、口絵、写真、挿絵を沢山載せて下さい。御誌は私共の夢です。ですから内容も余り固苦しいものは避けて、夢として楽しく読め、又見ることのできるような方針であられるよう心から希望しています。特に私の希望しますのは夢としての空想的な小説、或は挿絵物語の類です。小生自身、種々な構想、イメージ等を持っておりますが、又機会がありましたら発表させて頂きます。

（岡崎市、大畑生）

長らく御無沙汰しました。貴誌の休刊中は半年余りも新刊に接することもなく、全く淋しきかぎりでした。唯既刊誌よりスクラップしたものばかり眺め暮しておりました。やつと長い冬眠から覚めたように再び貴誌に接することが出来て本当に嬉しく思います。色々の制約の多い中で、これだけの雑誌を発刊されるということは中々の御苦労のことと、お察しいたし

ます。小生は雑誌が好きなので毎日のように書店の店頭を廻っています。貴誌のような雑誌はもうすっかり影をひそめて、古本屋でも以前の華やかな頃の雑誌は見ることが出来ない状態です。古本屋といえ、先日、街で見た或る古本店の店頭で貴誌の旧号、定価百円のが百七十円の値がついて出されていたのは驚きました。昔は犯罪科学とか犯罪公論といっ

た雑誌が出ていましたが、現在は検閲のきびしかった昔よりも弾圧がきびしうで、小生のような探書家は物淋しく思います。これから逆コースで益々やりにくいこと、思います。内容はもつと固く、なつても結構ですから、どうか続けて発刊されるよう、心から祈ります。愚案ですが、一般書店にて販売される高踏的なものと、現在程度の直接購読者用のものと、二

本立にされては如何ですか、貴誌のような雑誌は古くなつても価値は下らない性質のもので、せいで重宝感のあるもので、未永く保存し、コレクションしておけるようなものにして頂きたいものです。 (大阪、坂口老生)

奇譚クラブ

復刊第一号 目次

定価二百円 (千16円)

口絵

美しいドアー

(四馬 孝画)

頭立二馬車

(畔亭数久画)

水中の女

(都築峰子画)

緊縛フオート・オンパレード

黒のシユミーズ

(川辺砂登子)

繻帯

(伊吹真佐子)

どういふポーズをとるの?

(萩 千恵子)

ポリウム

(加賀利江子)

ながし目

(須川 令子)

朝日を浴びて

(須川 令子)

うつぶせ

(加賀利江子)

着物

(藤田 節子)

旅の縛られ女優

(藤木 仙治)

きものシリーズ 迎春花

(白金 紅次)

悪軍 日 癖

(榎本 利子)

ボクの責め方

(宝塚二三夫)

女性の下着について

(水上流太郎)

鼻いじめの写真

(北谷 英二)

奈落の欲情

(沢井 和雄)

浣腸器と共に

(久利須照雄)

お臍の型と種類

(土屋 淑人)

自殺娘の死体損壊

(近藤 一)

二個のイチシク浣腸

(花村恵美子)

女性緊縛寸考

(宝塚二三夫)

完全なる隷属

(坂田 信治)

サディズム雑感

(村岡 助浩)

再度の鞭を期待しつゝ

(沼 正三)

(二俣志津子さんに)

(沼 正三)

女工哀史以前

(南洋 一郎)

乗馬ズボンの女腹切

(藤山 秀緒)

女性の揮愛用

(田辺 愛子)

切腹通信

東京 (津島比呂史)

少年刑務所体験記

(三根 耕二)

男性自虐の方法

(岡村 文雄)

玉稿落穂集

(編 集 部)

アブ追求三〇年の回顧

(山田 正実)

幽囚十ヶ月

(春田 一郎)

女性切腹面に憑かれた男

(伊藤 和彦)

素足礼讃

(高原 正夫)

新しいコルセット

(一柳真砂子)

あるマゾヒストの手帖から

(沼 正三)

私の浣腸論

(数 正男)

映画に見た淡いマゾ

(春木 俊野)

アクロバット通信

(九州 傾城)

明治年間の新聞覚え書

(吾妻 新)

残酷なる女性達

(森本 愛造)

「七化け小僧出現」

(緑 猛比古)

◎売切品について◎

本誌で取扱つておりました分譲品や本誌の旧号の中、売切になりましたものについて、自分だけな何とか探して送ってくれ、という御注文が多数参りますが、売切品は、いくら代金を沢山頂きますしても、どうも都合がつかねます故どうかお許し願います。

◎御照会について◎

回答を求められる御照会は必ず返信料の御封入をお願いします。雑誌の中へ返事を入れてくれとの御要求は、郵便法によつて出来かねます故、御承知下さい。

◎文通幹旋について◎

只今本誌では、文通の幹旋はいたしておりません。但し連絡場所を明記の通信は読者交歓室欄へ掲載いたします。

連全頁拾い読みし、挿絵が非常に少くなつたのに一寸不満、しかし読者の希望がいられサディズム的読物に意が用いられた点が見受けられたのは嬉しく、早速別便の通り継続注文を致しました。赤字を押しての出版には感謝の外なく身勝手な希望など言えた義理では

ないので、何時までも愛読していただくので無遠慮な処を申し上げます。卒直に云つて内容、写真絵画等皆後一步の物足りなさを感じます。成るべく早い時期に公刊誌としたいという思惑がこのような微温的になつたと思ひますがこのようなら考えは一応思ひきりよく振りすて、こゝ暫くは判然と直接読者にのみ配本する態度を確立してはどうですか、体裁などとはもつ落してもよい、頁数ももつと減らし、唯、内容と挿絵だけは遠慮のない思ひきつたものを掲載してほしい玉稿落穂集のようなのが、挿画入りで堂々発表されていたらどんなに楽しい雑誌となることか、編集部としては色々御意見もあり、又困難な点もおありのこととお察ししますが、今のような状況を長く続けていたのでは、読者が次第に減つて行くのではないかと心配されます。陰では人一倍淫らな癖に表面聖人ぶつてゐる婦人会やPTAの役員などの見え張つた言などに遠慮してゐるのだつたら何も奇巧の必要などありません。罪を犯した者の中に、この種の雑誌があるかもしれない、しかし読んだ見たりしたからと言うのは間違

いで、総べて之に関係づけようとするのは偏見も甚しい、しかし、社会がこのような傾向にある時、殊更、下手に動いて本も無くしてしまつては馬鹿らしい事なので、十分注意して頂きたいのですが、余りに消極的になるのは避けてほしい。松井籟子氏の新連載は嬉しく拝見、先に予告のありました吾妻新氏のものも待望しています。次号を期待しています。サド傑作小説の単行本の出版を熱望します

(T・M生)

最近女性が多くなつてきた様いという読者が多くなつてきた様に思うが私は非常に嬉しく思ひます。私も女性に心ゆくまでいじめられてみたいのです。人生は何か心のはけ口を見つけないと全くやり切れないものです。こゝで編集者において何かプランを立て、一つやつてもらいたいですね、いじめたい女性といじめられたい男性を集めて新しい催しをやる。会費を發表して参加者をつくる。人間は善と惡との線を守りさえすれば又楽しいものである。決して犯罪に陥らなかつたワイルドにもならぬと信ずる。女性でも男性でも、いじめてみたい人、いじめられてみた

読者交歓室

○栃木の洋子様、おたより本当に嬉しく読みました。貴女の御想像の通りです。然し限られた誌上ではとても書ききれませんから至急御住所御通知下さい。秘密は固く守りますからどうぞ御安心下さい。折角御たより頂いたのに残念ですから、御住所お待ちします。

横浜市神奈川郵便局私書函13号
○流陽及オシメ同好の諸兄姉の方々、文通下さい。花村恵美子様、多摩宏兄、継子いじめの大村光子様、長崎坊生氏の方々、文通下さい。私のアドレス

岐阜市此花町四丁目 荒井繁樹
○私は二十八才の独自の会社員です。数年前或る理由で全裸のまゝ両手を木に吊され鞭を背中に受けたことがあり、それ以来一度縛られた虐められたいという衝動にかられます。読者の中で、もし同好の人がありましたら文通いたしたいと存じます。関西へも時々参ります。又御手数戴ければ写真の交換をもと存じます。御手紙御待ちして居ります。

相模原市橋本四九六 森原方
川上 透一

い人とこの二つの心が心の奥の奥にひそんでいる。これが何かの機会に発見され、発表されるのではないでしようか、全国の読者の皆様、きつとこの私の意見に賛成して下さると信じます。特に女性の方々、女学生、働いていられる娘さん、家庭の主婦、未亡人、どしどし男性をいじめたい人は御便り

下さい。文通をたのしみに、又御写真にお目にかゝるのをたのしみにしてペンをおく。
(静岡 久保田生)

刊第三号に依り、切腹面の企画を皆同意見ではないでしようか、若し代金の追加により立派なものにすれば御通知次第追加金は御送り申し上げます。企画に対する注文としては、予約企画で御座居ます出来ますよう望みます。値段はたとえ高くなっても二十四枚の極彩色女体切腹絵巻にして頂くよう念願します。予約をする程の方々は

奇譚クラブ

復刊第二号
十一月号
目次

定価二百円 (〒16円)

口絵

みのむし	時亭 数久
小さな運動会	四馬 孝
漂う女二題	都築 峰子
賭場の獲物	滝 れい子
小人島の捕われ人	北原 純子
女調教師	杉原 虹児
上げてくる潮	依田 精二
掃除日の出来事	宮崎 昭平
告白	古川 裕子
変態小説論	佐東 増夫
幽囚十ヶ月	春田 一郎
ボクの責め方	宝塚二三夫
切腹通信	羽村 京助
レスボスと浣腸	藤山 秀緒
稽古着姿の女腹切	

命がけの遊び	二俣志津子
あるマゾヒストの手帖から	沼 正三
拷問に笑う女	辻村 隆
敵前上陸"責め"	三根 耕二
賭けられた娘	宮崎昭平画
お灸と腰巻	永 長治
錯乱	山下 真一
私にも貴女の下穿きを	芳野 眉美
輝美礼賛	伊勢 進
炉辺談話	伊志田 治
接客婦	加治 信一
大和撫子の散華	宮崎昭平画
残虐なる女性達	森本愛造訳
被虐より嗜虐へ	沖野恵美子
明治年間の新聞覚え書四	吾妻 新
泉都の夜明け	豊後 忠
完全なる隷属	坂田 信治
浣腸器と共に	久利須照雄
或るソドミアの告白	朝路のぼる
浣腸のお仕置	宮崎昭平画

サディズムへの憧れ	京町柳一郎
掲載候補作品寸評	編集部
玉稿落穂集(二)	編集部
女優の素足	高田 正夫
百合子の記録	渡辺 陽
長瀬昭子さんへ	畑 晃一
映画、雑誌、芝居の緊縛場面	波羅田讓一
吹き溜り	近東規矩也
アクロバットと曲馬団	鍛冶 真三
続・岩瀬祥一のお灸院	岩瀬 祥一
続・映画に観た淡いマゾ	春木 俊野
アルバム第三集のアイデア	鳴海 文雄
セーラー服姿の切腹写真	編集部
女子プロレスリング雑感	鬼山 絢策
密淫	青葉 慎一
同愛の土に告ぐ	天泥 盛英
読者通信(並に読者交歓室)	
最新版アブオト(前月と今月の分譲品)	川上 明
蜂の胸四十五センチ	吉住 信吉
先祖の女腹切	

◎次号(六月号)は、四月廿日発売です

只今、編集部では腕によりをかけて、新しい号の編集に努力中です。予約御申込みの方々へは完成次第急送申し上げます。一冊宛お申込の方は、必ず送料として十六円の御加算をお忘れなきようお願いいたします。

続物も考えて戴きたく、勿論人物は総て美しい女性に願います。

(東京 森生)

四月号拝見しました。口絵が少なくなった事と本文の挿絵が皆無に等しいのはどうした事でしよう。矢張り読者は視覚による満足感が欲しいのではないでしようか、文章だけでは想像してみようより仕様がないうけで何か物足りない感じがします。特に小生など、絵や写真などをスクラップしてコレクションにしているもので、それが殆どないという事は非常に淋しく感じました。何故、春日、伊吹コンビの組写真など掲載しないのでしよう。全く残念に思います。次に本号の口絵では、「戦国夜盗」と「加賀嬢の手首が痛い」が素晴らしいと思いました。「萩嬢のナイロンコート」も猿ぐつわの実感が出てよいのですが、矢張り肌の露出の少ないのは美しさが欠けるよう

加賀嬢のものよりは数段落ちるのではないでしようか、その点「戦国夜盗」などは実に美しいと思いました。小説では松井氏の「赤い花は泣いている」第一回から興味津々たるものがあり次号がたのしみです。次に希望を二、三述べてみたいと思います。先ず前記のよう口絵をもつて豊富にして頂けたらと思います。それに本文にも挿絵を入れて頂けないかと思ひます。それから分譲写真ですが、目錄だけでは内容がよくわからず、出来たら以前本誌口絵で「オンパレード」として全部の縮小写真を掲載した事がありました。あの様なものを作ってみたら如何なものでしようか。勿論申込者は相当あるだろうと思いますが、有料にして申込者に領布し、それにより選抜申込をするというようにした方がかえって注文数がふえるのではないかと思ひます。それから口絵写真など豊富にして増刊号など

大いに希望して居りますが如何なものではないか、本誌は今のまゝでゆかなければならないとすればたまにはよいのではないでしようか。

(札幌、坂口生)

僕は母との二人暮らしで何一つとして不自由のない生活ではありませんが只一つ、禪に強く心をひかれて行く性格をどうしてもおさえる事ができません。その動機というのは、小学校の時分、水泳訓練に黒のサツポーター、黒いパンツをしていた時は何も感じなかったものであります。学校をさがり会社へつとめに出てから二年目、陸上競技に出る事になって、ユニホームを渡された時、パンツの上にサツポーターがのせてあった。それを見ると途端になぜか胸のときめきをおぼえ、早速更衣室に入つてサツポーターを締めシャツとパンツを着用した。サツポーターの身体をきつくしめつける感じはなんと云えない思ひで、それ以来僕はずつとサツポーターを常時愛用しています。

(兵庫、福田 稔)

原 美智子女王様、失礼をもちえりみず御便り致しますことを御

許し下さいませ、奇々四月号の女王様の読者通信を拝見致しまして身内に湧き上る感激を抑えきれずにはハンを取った次第で御さいます。奇々に数少ない女王様の御一人として通信を寄せられました御勇気と御決断は、吾々哀れなる男性マゾヒストにとりまして、いかばかりの喜びでありませうか。私が御近くに居りますれば御住所さえ解つて居りますれば、今直ぐにでも女王様の御脚下に馳せつけて忠誠なる奴隷の誓いを崇敬の念を込めましておたて致しますので御さいます。何分にも私は東京、女王様は神戸、それに御住所さえも解りません。ただこの奇々の御通信を何回となく拝読致しましては身もだえして、まだ見ぬ女王様に忠誠を御誓い致しますでございませう。女王様は男をいじめてやりたいけれど、成就しそふもないとおつしやいます。美智子女王様が許可と御命令になれば、女王様の御脚下にひれ伏す男奴隷は、きつと私の他にも幾人もいることでありませう。この私の差上げます御便りの他にも忠誠を誓う奴隷の願いが女王様の御脚下に山となることとせよう。女王様のお好きなおとせの小説の中の会話でございま

すが、私も受身の側として「下郎お下り」とか「お前は私の道具なんだよ」などという言葉は幻想の女王様がよく使う言葉です。いろいろとりとめのないことを書きましたが、奇クが読者間の文通軒旋を中止しておきますので、この御便りも直接には女王様の御手許に届かない事と思います。若し幸い

にこの拙文が女王様の御目にたまり御心にかないますれば哀れな奴隷に対し、忠誠を御誓いする機会を御与え下さる様伏して御願ひ申し上げます。
東京より神戸の空を伏し拝みつゝ
(直木 昭)

たことを大いに喜びます。今後ともいくら薄い冊子でも定期的に発行せられる様お願いいたします。サド狂氏に対する御誌の健全(アブ性格の少い一般人には健全とは云えないと思います)さを証明するもので結構ですが、恐らく店頭にて普通発行せられることは非常にむづかしいのではないかと思わ

れます。公刊にならなければ経営は困難でしょうが、とに角御苦心の程はよく解ります。ユートピア建設案はすばらしいですが、実行はどうでしょう。(神戸、SK生)

奇譚クラブ

復刊第三号 四月号 目次

定価二百円(千16円)

口 絵

- 痛苦の夢……………四馬 孝・画
第二次会の披露宴……………宮崎昭平・画
戦国夜盗……………畔亭数久・画
ナイロンのレインコート……………萩 千恵子
「こんなボーズでお……………佐賀美智子
氣に召すかしら?」……………
「手首が痛いから……………加賀利江子
早く解いてエ!」……………

- 明治年間の新聞覚え書……………吾妻 新
おしめ放浪記……………畔野 当磨
フアンタジック・ストーリー……………
黒人少女の飼育……………黒岩 巖
或る切腹マニヤ恋文……………笠原孫之介
楽しい正月映画の縛られ女優達……………嵯峨美智子
幽囚十ヶ月……………春田 一郎
山口式ボディビルの御紹介……………山口 幸一

- キヤルマタの美……………榎村 睦彦
魔の味……………高木 伸夫
ドストエフスキイの嗜虐性……………野中 愛三
女性乗馬考……………馬場 喬次
サジスチンの独白……………原 美智子
ボクの責め方……………宝塚二三夫
女剣士の切腹について……………青山 芳樹
ラブレター……………
春日ルミ様へ……………守口 栄吉
少年矯正院体験記……………みせしめ……………嶽 収一
仇討プレイ……………高杉 正二
私は訴える・アブ放譚……………水上流太郎
腰巻佩用許可願……………小暮 道也
完全なる隷属……………坂田 信治
私のイメージ……………北谷 英二
鼻のプレリユード……………緑 猛比古
映画の緊縛断片……………坂野上信彦
マニア誕生……………須藤 律夫
体験告白記……………お臍の研究……………森本愛造
残虐なる女性達……………沢 清克
切腹願望と臍窩……………

- その後の緊縛女優列伝……………升岡 金吉
縛られた女優達……………
映画(近松物語)より……………十字 好介
悲恋栗田口……………小村 二郎
ああこの恍惚境……………永井昇次郎
責めのアイデア……………狩井 麗作
シーソー責め……………佐巻 跋策
浣腸雑記……………
洋画に於ける緊縛場面……………
懸賞入選作品佳作第一席……………
接 客……………加治 信一
蜂の胴四十五センチにこたえて……………蛭間 洋子
倒錯の英雄織田信長……………笠置 俊郎
X の 尻……………川瀬 一美
「女」の随筆「女のお腹談義」……………緒台あふみ
アブノーマル雑談「話の屑籠」……………辻村 隆
玉穂落穂集……………編 集 部
赤い花は泣いている……………松井 頼子
失恋の告白……………城 秀人
読者通信(並に読者交歓室)……………
代理部特選写真集(前月と今月の分譲品)……………

た。揮美愛好家の方々のお便りを
お待ちしております。

（明石市大久保町大窪中之番一
二一九ノ一、池田正治）

私は当年二十四才になり、ある
官庁に勤めていますが、現在アブ
ノーマルな趣味に傾倒しているた
め今まで幾たびか女の方と交際し
たことはありますけれど、誰一人
として私の趣味を理解してくれ
る人がなく一人淋しい思いをして
います。と云つても決してそれが病
的なものであるというのではなく
むしろ遊戯に近いような他愛のな
いものです。例えば私が相手の方
とジャンケンをして負けた方は勝
った方の意志に従わねばならない
のです。即ち、お互いにその時と
場合によつてサジ的立場に立つこ
ともあり亦マソ的立場に立つこと

◎お願い◎

雑誌の購入や分譲品の御申込
みのため、或はその他の用件で
直接発行所を御訪問下さる方が
ありますが、理由の如何を問わ
ず右は固くお断り申し上げます。
必ず郵便にて御申込下さるよう
お願い致します。

もあり得るわけです。年令、職業
容姿等を問わず、私のこの遊戯に
興味を持たれる女性よりのお便り
をお待ちしております。

（大阪市大淀区本庄西通り一ノ
三四、田中春徳）

復刊おめでとうございます。縁
があつて先日、四月号を読みまし
た。このような情勢下にあつて又
これだけのものをだされたと、た
ゞ感じ入るばかりです。誠実で真
剣な貴誌の行き方ならば、必ず再
び以前のような隆盛を誇る日がく
ると思います。久し振りで奇巧を
見た時、古い恋人にでも逢つたよ
うな気が致しました。四月号の表
紙の感じはとてもよいと思いまし
た。本文も復刊3号目としてはバ
ラエティにも富み、かなり充実し
ていると思います。編集後記を読
んで感服致しました。このような
まじめな、熱意のある方針こそ、
今後の奇巧の地位を確保する唯一
の資産だと思ひました。厳しい
制約下に於ける一つのスタイルの
完成こそ、今後の貴誌の目標だ
と感じたわけです。

（千葉、T・I生）

編集後記

○五月号をお届けいたします。本月号は
読みごたえのある創作や小説を主として
編集しました。今後は、各月号何か特徴
を持たしてやつてゆきたいと思ひます。
○赤字、赤字の連続でいささか閉口して
おりましたが、待てば海路の日利とやら
最近では、漸次購読者もうなぎ上りに増
加して、待望の増頁もあながち夢ではな
くなりそうです。
○口絵や挿画についての御希望も、多々
あるようですが、これについては更に十
分研究の上、読者の皆さまの要望に応え
ながら、公刊誌としての体裁に恥じない
ものにしたく思つております。
○従来、発行日の不正確のため大変御迷
惑をおかけして申訳なく思つております
が、只今のところ、毎月の定日発行を先
ず第一眼目に置いて努力してゆく考えで
すから、せいせい御援助下さい。
○発行が軌道に乗りましたら、内容の充
実増頁、並にサディズム特集号、マゾヒ
ズム特集号といったものの発行にまで手
を延してゆきたいものです。
○読者の要望されるものと、社会的な制
約といったものは、必ずしも反比例する
ものばかりとは限らないと信じますので
一般書店の店頭に飾つても、一般の人々

から指弾されないもので、しかも、グル
ープの雑誌としての使命を持つたものに
仕上りたいと念願いたします。

○右に關して、読者の方々有識者からの
卓見をお聞かせ賜れば幸甚です。発行部
数さえ増大すれば、只今の二倍も三倍も
の頁数にして、グラビヤ頁などを多くす
れば、絵画、写真等も最大限に活用出来
る筈です。

○原稿募集に關しては、只今巻末に募集
要項を掲載してありますが、今後の内容
を多彩ならしめるため、何卒、従前の内
容に提られぬ、内外の珍談奇聞、珍
書奇籍の紹介、外国文獻の訳文、怪奇探
偵小説等々、せいせいお寄せ下さるよう
お待ちしております。

○「告白体験手記」に關して、何れ特集
号の発行を企画したいと思ひますので、
今迄投稿してみようかと思ひながら躊躇
していられた方々は、この際勇氣を出し
て御執筆下さるよう、本誌読者の方々と
共に期待いたします。

○復刊以来、多数の方々から苦言や御進
言を頂き厚く御礼申し上げます。今後と
も更に、いろいろの面で御鞭撻を賜りた
く、実現の可能な企画はどしどし実行し
たいものです。

（K・M生）